

茨城県教育財団調査報告第60集

永国地区住宅団地建設予定
地内埋蔵文化財調査報告書

寺家ノ後 A 遺跡

寺家ノ後 B 遺跡

十三塚 A 遺跡

十三塚 B 遺跡

永国十三塚遺跡

旧鎌倉街道

平成 2 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団調査報告第60集

永国地区住宅団地建設予定
地内埋蔵文化財調査報告書

てらいえ うしろ
寺家ノ後 A 遺跡

じゅうさんつか
十三塚 A 遺跡

ながくにじゅうさんつか
永国十三塚遺跡

てらいえ うしろ
寺家ノ後 B 遺跡

じゅうさんつか
十三塚 B 遺跡

きゅう かま くら かい どう
旧鎌倉街道

平成 2 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県住宅供給公社は、良好な居住環境を備えた住宅用地の供給と、一つのまとまった近隣コミュニティーを形成する町づくりを目指し、土浦市永国地区住宅団地建設の計画を進めてまいりましたが、その建設予定地内には、多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、これらの埋蔵文化財を記録保存をするため、茨城県住宅供給公社から委託をうけ、建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。本書は、昭和63年度に発掘調査を実施した土浦市に所在する寺家ノ後A遺跡他5遺跡についての調査結果を収録したものであります。

本書が学術的な資料としては、もとより、郷土の歴史の理解を深め、教育・文化の一助として広く活用されることを希望いたします。

最後に、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である茨城県住宅供給公社をはじめ、茨城県教育委員会、土浦市教育委員会等関係諸機関及び関係各位の御指導、御協力をいただいたことに対し衷心より謝意を表します。

平成2年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 磯 田 勇

例 言

- 1 本書は、茨城県住宅供給公社の委託により、財団法人茨城県教育財団が、昭和63年度から実施した土浦市に所在する寺家ノ後A遺跡他5遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 寺家ノ後A遺跡他5遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	川 又 友三郎 磯 田 勇	～昭和63年 5月 昭和63年 6月～	
副 理 事 長	磯 田 勇 小 林 元	～昭和63年 3月 昭和63年 4月～	
常 務 理 事	滑 川 貞 雄 小 林 洋	～平成元年 3月 平成元年 4月～	
事 務 局 長	坂 場 庸 克 一 木 邦 彦	～平成元年 3月 平成元年 4月～	
調 査 課 長	青 木 義 夫 石 井 毅	～平成元年 3月 平成元年 4月～	
企 画 管 理 班	班 長	水 飼 敏 夫	昭和62年 4月～
	主任調査員	山 本 静 男	～平成元年 3月
	”	小 河 邦 男	平成元年 4月～
	係 長	園 部 昌 俊	昭和63年 4月～
	主 任	山 崎 初 雄	～平成元年 3月
	主 事	大 部 章	昭和61年 4月～
”	吉 井 正 明	平成元年 4月～	
調 査 班	班 長	石 井 毅	昭和63年 4月～昭和63年 9月調査
	主任調査員	柴 正	昭和63年 4月～昭和63年 9月調査
	”	中 根 節 男	昭和63年 4月～昭和63年 9月調査
	班 長	倉 本 富美男	昭和63年10月～平成元年 3月調査
	主任調査員	久 野 俊 度	昭和63年10月～平成元年 3月調査
	調 査 員	小松崎 猛 彦	昭和63年10月～平成元年 3月調査 元平成元年10月～平成 2年 3月整理・執筆
整 理 班 長	加 藤 雅 美	平成元年度	

- 3 本書は、発掘担当者の協力を得て、小松崎猛彦が執筆・編集を行った。

- 4 寺家ノ後A・B遺跡の調査に際しては、国立歴史民俗博物館助教授の杉山晋作氏に御指導をいただいた。整理に際しては、筑波大学教授の岩崎卓也氏や茨城県歴史館の川井正一氏及び土浦市立博物館の塩谷修氏の御指導をいただいた。
- 5 本書で使用了記号については、第3章遺構・遺物の記載方法を参照されたい。

目 次

序	
例 言	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	2
第3節 調査経過	4
第2章 位置と環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	10
第3章 遺構・遺物の記載方法	14
第1節 遺構・遺物の記載方法	14
第4章 遺跡の調査結果	21
第1節 寺家ノ後A遺跡	21
1 遺跡の概要	21
2 遺構と遺物	21
(1) 竪穴住居跡	21
(2) 土坑	39
(3) 墓墳	44
(4) 溝	47
3 まとめ	51
第2節 寺家ノ後B遺跡	53
1 遺跡の概要	53
2 遺構と遺物	53
(1) 竪穴住居跡	53
(2) 古墳	69
(3) 土坑	84
(4) 溝	87

3	まとめ	91
第3節	十三塚A遺跡	95
1	遺跡の概要	95
2	遺構と遺物	95
(1)	塚	95
(2)	土坑	98
(3)	溝	100
3	まとめ	108
第4節	十三塚B遺跡	109
1	遺跡の概要	109
2	遺構と遺物	109
(1)	竪穴住居跡	109
(2)	古墳	114
(3)	塚	118
(4)	土坑	120
3	まとめ	122
第5節	永国十三塚遺跡	123
1	遺跡の概要	123
2	遺構と遺物	123
(1)	A地区	123
(2)	B・C地区	124
3	まとめ	127
第6節	旧鎌倉街道	129
1	試掘結果	129
2	遺物	130
3	まとめ	132
	終章むすび	133

挿 図 目 次

第1図	グリッド概念図	2
第2図	寺家ノ後A・寺家ノ後B・ 十三塚B遺跡土層図	4
第3図	寺家ノ後A遺跡他5遺跡周辺 地形図と遺構配置図	7~8
第4図	寺家ノ後A遺跡他5遺跡周辺 遺跡位置図	12

寺家ノ後A遺跡

第5図	寺家ノ後A遺跡全体図	20
第6図	第1号住居跡実測図・遺物 出土位置図・土器接合関係図	22
第7図	第1号住居跡出土遺物実測図(1)	24
第8図	第1号住居跡出土遺物実測図(2)	25
第9図	第1号住居跡出土遺物実測図(3)	26
第10図	第2号住居跡出土遺物実測図	28
第11図	第2号住居跡実測図	29
第12図	第3号住居跡実測図	31
第13図	第3号住居跡出土遺物実測図	32
第14図	第4号住居跡出土遺物実測図	35
第15図	第4号住居跡実測図	36
第16図	第5号住居跡出土遺物実測図	37
第17図	第5号住居跡実測図	38
第18図	土坑実測図(1)	41
第19図	土坑実測図(2)	42
第20図	土坑・墓壙出土遺物実測図	42
第21図	墓壙実測図	46
第22図	第1号溝実測図	47
第23図	白玉・石器実測図	48
第24図	古銭拓影図	49

寺家ノ後B遺跡

第25図	寺家ノ後B遺跡全体図	54
第26図	第1号住居跡実測図	55
第27図	第1号住居跡遺物出土位置図・ 土器接合関係図	56
第28図	第1号住居跡出土遺物実測図(1)	57
第29図	第1号住居跡出土遺物実測図(2)	58
第30図	第1号住居跡出土遺物実測図・	

	拓影図(3)	59
第31図	第2号住居跡実測図	62
第32図	第2号住居跡出土遺物実測図	63
第33図	第3号住居跡実測図	65
第34図	第3号住居跡出土遺物実測図	66
第35図	第4号住居跡実測図	68
第36図	第4号住居跡出土遺物実測図	69
第37図	第1号墳実測図(1)	71
第38図	第1号墳実測図(2)	72
第39図	第1号墳出土遺物実測図	72
第40図	第1・2号墳墳丘測量図	75
第41図	第2号墳出土遺物実測図	76
第42図	第2号墳実測図	77~78
第43図	第3号墳実測図(1)	81
第44図	第3号墳実測図(2)	82
第45図	第3号墳出土遺物実測図	83
第46図	土坑実測図(1)	86
第47図	土坑実測図(2)	87
第48図	第1号溝実測図	88
第49図	第2・3号溝実測図	89
第50図	古銭拓影図	90

十三塚A遺跡

第51図	十三塚A遺跡全体図	96
第52図	第1号塚実測図	97
第53図	土坑実測図(1)	99
第54図	土坑実測図(2)	100
第55図	第1号溝実測図	102
第56図	第2号溝実測図	103
第57図	第3号溝実測図	104
第58図	第4号溝実測図	105
第59図	第5号溝実測図	106
第60図	第1号溝・グリッド出土遺物 実測図	107

十三塚B遺跡

第61図	十三塚B遺跡全体図	110
第62図	第1号住居跡実測図(1)	111
第63図	第1号住居跡実測図(2)	112

第64図	第1号住居跡・第1号墳・第1号塚出土 遺物実測図	113
第65図	第1号墳実測図(1)	116
第66図	第1号墳実測図(2)	117
第67図	第1・2号塚・第1号墳墳丘測量図	119
第68図	第2号塚土層断面図	120
第69図	土坑実測図	121

永国十三塚遺跡		
第70図	A地区(第1号塚)実測図	125
第71図	B地区・C地区実測図	126
第72図	出土遺物実測図・拓影図	127

旧鎌倉街道		
第73図	旧鎌倉街道試掘実測図	131

表 目 次

表1	遺跡一覧表	13
----	-------	----

寺家ノ後A遺跡

表2	土坑一覧表	43
表3	遺構別出土土器一覧表	52
表4	住居跡一覧表	52

寺家ノ後B遺跡

表5	古墳一覧表	83
表6	土坑一覧表	85
表7	古銭一覧表	90
表8	遺構別出土土器一覧表	92

十三塚A遺跡

表9	土坑一覧表	98
----	-------	----

十三塚B遺跡

表10	土坑一覧表	120
-----	-------	-----

永国十三塚遺跡

表11	塚一覧表	128
-----	------	-----

写真目次

- PL 1 遺跡遠景(航空写真)
- 寺家ノ後A遺跡**
- PL 2 調査前全景, 斜面部試掘終了, 遺構確認状況, 調査後全景
- PL 3 第1・2・3・4号住居跡, 第1・3号住居跡遺物出土状況
- PL 4 第5号住居跡, 第1・2・3・4・5・6号土坑
- PL 5 第8・9・10・11・12・14号土坑
- PL 6 第17・18・19・20・21号土坑, 第1号溝
- PL 7 第1・2・3・4号墓墳, 第2・3号墓墳人骨出土状況
- PL 8 第1号住居跡出土土器(1)
- PL 9 第1号住居跡出土土器(2)
- PL 10 第3号住居跡出土土器, 第4号住居跡出土土器(1)
- PL 11 第4号住居跡出土土器(2), 第5号出土土器, 土坑出土土器
- PL 12 墓墳出土古銭・櫛, 第1・3号住居跡・グリッド・溝出土石器・石製品
- 寺家ノ後B遺跡**
- PL 13 調査前全景, 試掘状況(1), (2), 遺構確認状況
- PL 14 第1・3・4号住居跡, 第1・2号住居跡遺物出土状況, 第1号土坑
- PL 15 第3・4・5・6・7・8号土坑
- PL 16 第9・10・11・12号土坑, 第1・2・3号溝
- PL 17 第1号墳土層セクション, 第1号墳玄室部敷石出土状況, 第1号墳玄室内框石出土状況, 第1号墳玄室部
- PL 18 第2号墳土層セクション, 第2号墳玄室部敷石出土状況, 第2号墳玄室部
- PL 19 第3号墳玄室部, 第1・2・3号墳
- PL 20 第1号住居跡出土土器(1)
- PL 21 第1号住居跡出土土器(2), 第2号住居跡出土土器(1)
- PL 22 第2号住居跡出土土器(2), 第3・4号住居跡出土土器
- PL 23 古墳出土土器, 古銭
- 十三塚A遺跡**
- PL 24 調査前全景, 遺構確認状況, 第1号塚東西トレンチ土層セクション, 第1号塚南北トレンチ土層セクション, 第1号土坑
- PL 25 第2・3・4・5・6・7号土坑
- PL 26 第8・9号土坑, 第1・2・3・4・5号溝
- 十三塚B遺跡**
- PL 27 調査前全景, 遺構確認状況, 第1号墳発掘前全景, 第2号塚発掘前全景, 第1号墳・塚土層セクション
- PL 28 第1号墳玄室部遺物出土状況, 第1号墳玄室部, 第2号塚土層セクション, 調査後全景
- PL 30 調査前全景, 第1号塚土層セクション, B・C地区試掘状況
- 永国十三塚遺跡**
- PL 30 調査前全景, 第1号塚土層セクション, B・C地区土層観察用遺跡トレンチ
- PL 31 十三塚A・十三塚B・永国十三塚出土遺物
- 旧鎌倉街道**
- PL 32 安全設備付設状況, A地点試掘, A地点硬化面検出, B・C・D・E地点試掘, E地点硬化面検出

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

土浦市は、首都東京から60km圏内にあり、筑波研究学園都市と共に将来に向けて大いに発展が期待されている。本市と、筑波研究学園都市は国の推進している人口、産業等の分散化を図るための首都改造計画によって、茨城県南部自立圏の業務核都市に位置づけられ、両地域が相互に機能を分担しつつ、発展できるよう計画されている。住宅政策については、良好な生活環境の20万都市建設を進めることとしており、新たな住宅地の建設が計画されている。この一環として、住宅供給公社は、緑豊かな良好な居住環境を備えた住宅用地の供給とともに、一つのまとまった近隣コミュニティを形成する町づくりを目指し、土浦市永国地区に「永国団地建設」を計画された。

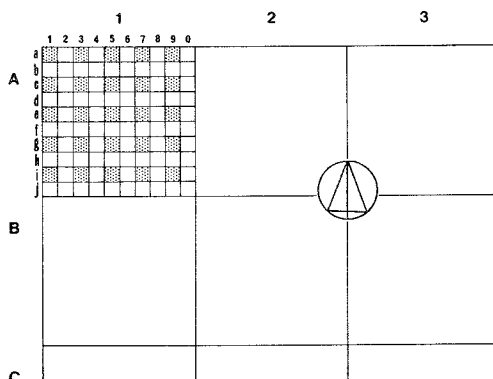
このため、土浦市永国町の台地に永国団地建設が実施されることになり、それに伴って住宅供給公社は、昭和62年9月に茨城県教育委員会に対して建設用地内の埋蔵文化財の有無について照会を求めた。茨城県教育委員会は、ただちに、土浦市教育委員会に対し、同様の照会を求めた。同年11月に土浦市教育委員会は、建設予定地内に寺家ノ後A遺跡(7,500㎡)、寺家ノ後B遺跡(5,600㎡)、十三塚A遺跡(3,100㎡)、十三塚B遺跡(3,100㎡)、永国十三塚遺跡(1,000㎡)、旧鎌倉街道(50㎡)の合計6遺跡(20,350㎡)が所在することを回答し、茨城県教育委員会は、同じ旨を住宅供給公社に回答した。そこで住宅供給公社は、昭和63年2月茨城県教育委員会と建設予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、その結果現状保存が困難であるため、発掘調査による記録保存の措置を講ずる事になった。なお、調査機関として茨城県教育財団が紹介された。

これにより、住宅供給公社は教育財団と調整を行い開発予定地内の寺家ノ後A遺跡・寺家ノ後B遺跡・十三塚B遺跡について、昭和63年4月1日から同年9月30日までの期間で埋蔵文化財発掘調査を実施することで業務委託を締結した。教育財団は、調査体制を整え、同年4月調査に着手した。しかし遺構の密度が薄いため同年7月4日に一部エリアを追加変更(4,120㎡)した。さらに同年9月16日に茨城県教育委員会・住宅供給公社・教育財団で三者協議を行い、永国団地建設計画の促進を図るため、寺家ノ後A遺跡・永国十三塚遺跡の調査面積(6,880㎡)を拡張し、調査期間を、平成元年3月31日まで延長することになった。教育財団は、それに伴い10月1日より調査体制を新たに整え調査を実施したが、2遺跡とも遺構の密度が薄いため、昭和64年1月6日三者協議を行い、十三塚A遺跡・旧鎌倉街道の調査面積の追加変更(3,150㎡)を行うことになった。

第2節 調査方法

1 地区設定

寺家ノ後A遺跡他5遺跡の地区設定は、日本平面直角座標・第IX座標系、X軸（南北）、Y軸（東西）を基準線として、40m四方の大調査区に分割し、さらに大調査区を4m四方の小調査区に細分割した。調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、大調査区においては、北から南へA・B・C、西から東へ



第1図 グリッド概念図

1・2・3・4とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。小調査区の名称は大調査区の名称を冠し、「A1b₂」、「B2e₇」のように呼称した。なお旧鎌倉街道の試掘調査は、これらの遺跡内を南北に縦走するため、各遺跡からそれぞれの試掘箇所基準点を設置したので、全体にわたる地区の設定は行わなかった。

各遺跡における基準点は次のとおりである。

(1) 寺家ノ後A遺跡	X軸（南北）	6,612m	Y軸（東西）	30,880m
(2) 寺家ノ後B遺跡	X軸（南北）	6,680m	Y軸（東西）	30,920m
(3) 十三塚A遺跡	X軸（南北）	6,960m	Y軸（東西）	30,720m
(4) 十三塚B遺跡	X軸（南北）	6,720m	Y軸（東西）	30,800m
(5) 永国十三塚遺跡	X軸（南北）	6,800m	Y軸（東西）	30,760m

2 遺構確認

遺構の確認作業は、寺家ノ後A遺跡（前半部面積1,620m²）・寺家ノ後B遺跡・十三塚B遺跡では、面積の4分の1の割合でトレンチ発掘を実施し、遺構の有無を確認した。遺構の確認状況に応じて、周囲を拡張した。寺家ノ後A遺跡（後半部面積5,880m²）・十三塚A遺跡は、面積の4分の1の割合でグリッド発掘を実施し、永国十三塚遺跡はトレンチ発掘を実施した。旧鎌倉街道は、遺跡内に5か所に試掘場所を設け（縦2m、横5m、深さ1m）試掘調査を実施した。その結果、旧鎌倉街道・永国十三塚遺跡を除く4遺跡から竪穴住居跡・土坑・溝等の遺構が検出されたために、遺構・遺物を破壊しない層まで重機による表土除去を実施し、その後明確な遺構プランの確認を行った。

3 遺構調査

当遺跡における遺構の調査は、次の方法で行った。

住居跡の調査は、長軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトをそれぞれ設け、4区に分けて掘り込む「四分割法」を基本とした。地区の名称は北から時計回りに1～4区とした。土坑の調査は、長軸（径）で二分割して掘り込む「二分割法」で実施した。古墳の調査は、長径方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設け、四分割して掘り込む「四分割法」を原則にした。なお、埋葬施設については、住居跡の調査法に準じた。溝の調査は、規模に応じて適宜数か所にそれらと直交する土層観察用ベルトを設定して、調査を実施した。

土層観察は、色相・含有物・混入物の種類や量、及び粘性・締まり具合等を観察して、分類の基準とした。遺物の取り上げについては、住居跡、古墳、土坑、溝の各区と、遺物番号、出土位置、レベル等を記録して収納した。

遺構・遺物の出土状況等の平面実測は、前述の地区設定に基づき水系法眼地張り測量で行った。

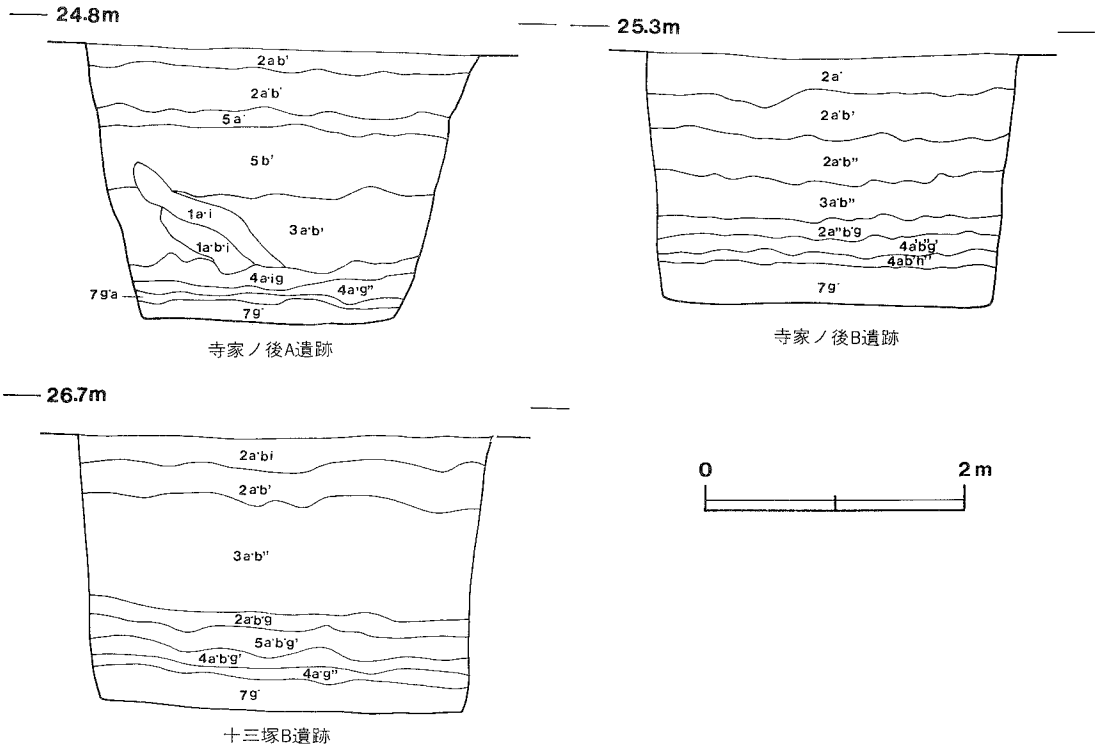
土層断面や遺構断面の実測は、標高をもとに、水平にセットした水系を基準として実測した。縮尺は、20分の1を基本としたが、古墳では50分の1の縮尺、カマドや部分的な微細図については10分の1の縮尺で作成した。

記録の過程は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成を基本とした。図面や写真に記録できない事項に関しては野帳及び調査記録カードに記録し、さらに遺構カードに整理した。

4 基本層序の検討

寺家ノ後A遺跡他5遺跡は同一台地上のため、寺家ノ後A遺跡、寺家ノ後B遺跡、十三塚B遺跡の3遺跡のみ基本層序の検討をするための調査を行った。

3遺跡の層序は、表層が耕作土の残りで、基本的にはソフトローム層、ハードローム層、常総粘土層と3つに大別される。常総粘土層は、白色粘土で一部砂質シルト層が堆積している。寺家ノ後A遺跡は、ソフトローム層が耕作により削平されている。



第2図 寺家ノ後A・寺家ノ後B・十三塚B遺跡土層図

第3節 調査経過

寺家ノ後A遺跡他5遺跡における発掘調査は、昭和63年4月1日から、平成元年3月31日までの1年間に渡って実施したが、調査日程の都合により、前半と後半に分けて調査を行った。これらの遺跡の発掘調査の経過は、以下のとおりである。

<昭和63年度前半>

4月 事務所及び発掘調査に必要な現場倉庫設置，調査器材，器具等の搬入を行う。18日に寺家ノ後A遺跡において作業の安全を願い，鋤入れを挙行了した。22日～24日に寺家ノ後A遺跡，十三塚B遺跡の上物除去を行う。25日に，十三塚B遺跡，寺家ノ後A・B遺跡の発掘調査前全景写真撮影を実施する。26日～28日までは幅1mのトレンチを入れ，十三塚B遺跡の遺構確認調査を実施する。その結果，住居跡と思われる遺構を2軒確認した。

5月 2日～18日は十三塚B遺跡と同様な遺構確認調査を実施する。その結果，寺家ノ後A遺跡からは，古墳時代後期の土師器片と遺構と考えられる落ち込み3か所を確認し，ほかの2遺跡からは，それぞれ竪穴住居跡や土坑等の遺構と思われる落ち込みを確認した。17日～26日まで，寺家ノ後A遺跡，寺家ノ後B遺跡の順に重機による表土除去を行う。その後，遺構確認作業を進める。

6月 1日から引き続き遺構確認作業を行う。13日に寺家ノ後A遺跡の第1号住居跡から発掘調査を開始する。14日～17日までに各遺跡のテストピットを掘り土層を観察する。16日に寺家ノ後B遺跡の第2号墳の掘り込みを始める。23日に寺家ノ後A遺跡の第2号住居跡の掘り込みを開始する。29日第2号墳の土層セクションを実測をする。

7月 1日に寺家ノ後A遺跡の第2号住居跡の調査を始める。寺家ノ後B遺跡では5日から第1号墳の掘り込みを開始する。11日に第1・2号墳の盛土を除去する。第2号墳は、明らかに盛土していることが土層から観察される。15日に第2号墳の土層セクションを実測する。また、第2号墳の周辺に廻っている溝状の落ち込みが確認され、部分的ではあるが方形のような溝であるため、方形周溝墓または、方墳の可能性が考えられる。20日に寺家ノ後B遺跡の第2号住居跡の掘り込みを開始する。29日に第2号墳の周溝の調査を開始する。

8月 寺家ノ後B遺跡の調査を引き続き実施した。3日に十三塚B遺跡の遺構調査を開始した。23日に十三塚B遺跡の第1号墳土層セクション実測を実施し、周溝を掘り込む。寺家ノ後B遺跡については、6日から第1～4号住居跡の調査を行う。26日までに寺家ノ後B遺跡の第2号墳と住居跡2軒などの調査を終了した。

9月 寺家ノ後B遺跡では、竪穴住居跡2軒、古墳1基、土坑13基、溝6条の調査を行った。十三塚B遺跡では、第1号住居跡、第1号墳、土坑5基の調査を実施した。また、16日に国立民俗博物館助教授である杉山晋作氏を招聘し、「古墳の時期と形態及びその特徴についてや県内及び隣接県の古墳との関連について」というテーマで班内研修を実施した。24日に現地説明会を開催し、あいにくの雨天日であったが30名ほどの参加があった。29日に前半の調査が終了した。

<昭和63年度後半>

10月 3日に発掘調査エリアを確認した。11日にまず、寺家ノ後A遺跡の5,880㎡と永国十三塚遺跡の伐開作業を実施した。伐開後、家屋の廃材やコンクリートの残骸等があり、上物除去作業を行った。続いて永国十三塚遺跡のエリア内清掃、焼却を実施した。

11月 寺家ノ後A遺跡のグリッドによる遺構確認作業を実施した。その結果、竪穴住居跡2軒、土坑2基、溝1条を確認した。12日より、永国十三塚遺跡に幅1mのトレンチを南北方向に設定し、遺構確認作業を実施した。寺家ノ後A遺跡の遺構確認調査は、4分の1の割合までが30日に終了した。

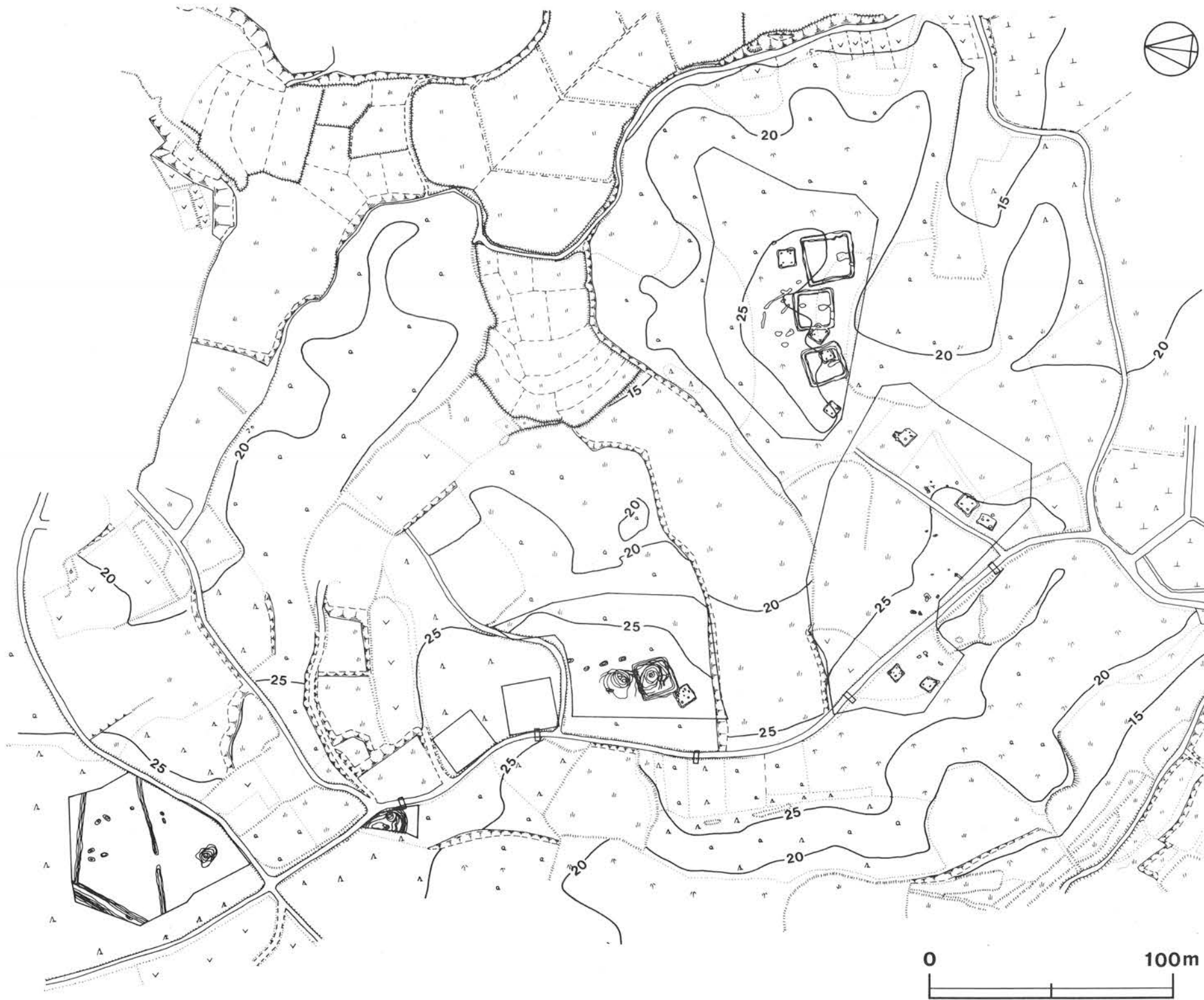
12月 2日に寺家ノ後A遺跡の遺構を確認したC3・B4区に重機を導入し表土除去を実施し、永国十三塚遺跡の第1号塚の土層セクションの写真撮影、実測を行った。7日に重機による表土除去が終了し、竪穴住居跡3軒、土坑18基、溝1条を確認した。9日から第3・5号住居跡と土坑の遺構調査を開始する。22日までに、竪穴住居跡1軒、土坑9基、溝1条の調査

を終了する。23日に遺構が薄いと判断されたので、県文化課、住宅供給公社、県教育財団と三者協議を実施し、新たに十三塚A遺跡の発掘調査、旧鎌倉街道の一部試掘調査を調査面積に加えることになった。26日には、第16号土坑から人骨が出土し、土浦警察署の現場検証後、人骨及びその他の遺物の取り上げを実施した。27日から昭和64年1月4日まで年末年始のため現場を休業する。

1月 5日から現場作業を再開する。6日に第13・15号土坑から人骨が出土し、現場において供養を行った。13日に寺家ノ後A遺跡の調査を終了した。17日から十三塚A遺跡に現場を移動し、エリア内にある上物を除去した。また、調査日程上の都合により、重機による表土除去を行い、遺構確認調査を実施した。30日に遺構確認調査を終了し、その結果、塚1基、土坑8基、溝5条を確認した。31日に第1・2号溝各区掘り込みを開始する。旧鎌倉街道は、試掘調査のため迂回路付設工事を行った。

2月 1日より遺跡内にある旧鎌倉街道の試掘調査を実施する。道路上に5か所の試掘場所を決め、アスファルトの簡易舗装なのでツルハシを使い、縦2m、横5m、深さ1mのトレンチを入れる。7日に土浦市教育委員会及び県文化課による旧鎌倉街道の視察があった。8日～13日に試掘か所の土層を記録にとり、写真撮影をする。20日に第1号塚に土層を観察するために幅1mのトレンチを入れる。23日に第5号溝までの調査を終了する。

3月 1日より土坑の調査を実施し、6日に第8号土坑の調査をもって終了した。10日に航空写真を実施し、さらに図面等の補足と遺物等の搬出諸準備作業を行った。下旬に事務所等を解体し、23日をもって調査はすべて終了した。



第3図 寺家ノ後A遺跡他5遺跡周辺地形図と遺構配置図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

寺家ノ後A遺跡他5遺跡は、土浦市大字永国字高野230ほかに所在している。土浦市は、首都東京から北東へ約60kmにあり、茨城県南部のほぼ中央部に位置している。土浦市の北西19kmほどに関東の名山筑波山がそびえている。市域は、東西約10km・南北12.5km・面積約92km²で、北は新治郡千代田村、東は同郡出島村に接するとともに、霞ヶ浦の土浦入に面し、南は稲敷郡阿見町、牛久市、西はつくば市、新治郡新治村に境を接している。市街地は、桜川が霞ヶ浦に注ぐ河口付近に形成された街で、古くから水陸交通の要衝の地として発達してきた。現在JR常磐線や国道6号、常磐自動車道が市の北北東から南南西にかけてほぼ並行して走っている。

本市は、人口126,250人(平成元年11月1日現在)で、JR土浦駅の西側を中心に発展し、茨城県の中で、人口では第4の都市である。県南部の商・工業や文化の中心地で、近年、筑波研究学園都市と一体となった開発が進められている。

本市の地形は、北部に海拔25～27mの新治台地、南部に海拔24～25mの筑波・稲敷台地があり、両台地の間には西から東に流れる桜川の沖積低地や霞ヶ浦沿岸の低湿地により、3つに区分されている。筑波・稲敷台地は、海成の成田層上に形成され、この上に竜ヶ崎砂礫層、灰白色の常総粘土層、関東ローム層が覆っている。

寺家ノ後A遺跡ほか5遺跡は、JR土浦駅の南西約3.5km、筑波・稲敷台地の一画を占めて、桜川と花室川の間台地上に所在している。この台地は、桜川や花室川の支流により開析された、小支谷が樹枝状に入り込んで複雑な地形を呈している。これらの遺跡は、花室川に向かって北西から南東に張り出す舌状台地の縁部に立地している。この台地に、東から西に入り込む小支谷があり、この小支谷を挟み、北側に十三塚A・B遺跡・永国十三塚遺跡、南側に寺家ノ後A・B遺跡が所在している。またこの遺跡内を南北に縦走している生活道路が旧鎌倉街道である。

台地の標高は、北側で25～28m、南側で20～26mで、現況は、主に山林や畑となっている。花室川にひろがる沖積低地は、水田として利用され、水田との比高は、9～17mである。

第2節 歴史的環境

茨城県南部、とりわけ霞ヶ浦沿岸を中心とした地域は、古くから人々の絶好の居住地で数多くの遺跡が所在している。県内で発見された縄文時代の貝塚は350か所ほどであるが、なかでも霞ヶ浦周辺から集中して発見され、明治12年に飯島魁、佐々木忠次郎博士によって調査された陸平貝塚⁽¹⁾(美浦村)を初め、上高津貝塚⁽²⁾<1>、椎塚貝塚⁽³⁾(江戸崎町)等は早くから知られた著名

な遺跡である。とりわけ国指定史跡の上高津貝塚は、古くは明治39年に江見水蔭により調査されたのを初めとし、近年の調査の成果から縄文時代の中・後・晩期にわたって馬蹄形状に形成された、ヤマトシジミを主とする貝塚遺跡であることが判明している。このように霞ヶ浦周辺は、縄文時代の遺跡の宝庫である。

先土器時代の遺跡は、県内において90遺跡ほど⁽⁴⁾報じられている。土浦市内においては、昭和61年度に調査された向原遺跡⁽⁵⁾があり、ナイフ形石器・石核・磨石等が報告されている。また、「土浦の遺跡」の中では、宮脇遺跡⁽⁶⁾<45>・いさろ遺跡⁽⁷⁾<27>からポイントやスクレーパーが表採されている。

縄文時代になると、146か所の遺跡が確認され、早期では、当教育財団が昭和62年度に手野町で実施した、ゴリン山⁽⁸⁾・原ノ内遺跡⁽⁹⁾・真木ノ内遺跡⁽¹⁰⁾があり、原ノ内遺跡からは早期の屋外炉2基と田戸下層式期の土器片が出土している。当遺跡の周辺では、木の宮南遺跡B⁽¹¹⁾<79>・ビヤ首遺跡⁽¹²⁾<16>等がある。前期では、前述の向原遺跡があり黒浜式期の住居跡1軒が検出されている。当遺跡の周辺では、宮前遺跡⁽¹³⁾<84>・右粃貝塚東遺跡⁽¹⁴⁾<76>・神出遺跡⁽¹⁵⁾<30>等があり、中期の遺跡としては、国分遺跡⁽¹⁶⁾<15>・内根B遺跡⁽¹⁷⁾<35>等がある。後・晩期では、前述の上高津貝塚の他、昭和54年度土浦市教育委員会により一部調査された池の台遺跡⁽¹⁸⁾<14>があり、この遺跡は、縄文時代～古墳時代にかけての複合遺跡であることが明らかにされた。

弥生時代になると遺跡は少なくなり、昭和49年に当遺跡から東へ0.9kmほどの永国遺跡⁽¹⁹⁾で調査が実施され、弥生時代後期の住居跡2軒が検出されている。その他、笹崎遺跡⁽²⁰⁾<85>・石橋台遺跡⁽²¹⁾等に弥生式土器が散布している。昭和43年に調査された穴塚古墳群⁽²²⁾の第1号墳の墳丘下より、数軒の住居跡が確認されている。また、木田余台の宝積寺遺跡⁽²³⁾からは、弥生時代の住居跡が検出されている。

古墳時代の遺跡としては、市指定の王塚古墳⁽²⁴⁾・后塚古墳⁽²⁵⁾という県内でも最大規模の前方後円墳が神立地区に所在し、当遺跡の周辺では、花室川を挟んで対岸の台地上に大日古墳⁽²⁶⁾<49>・浅間古墳⁽²⁷⁾<50>があり、大日古墳は、前述の分布調査によると、円墳と思われるが、方墳の可能性もあると報告されている。昭和49年度に調査された烏山遺跡群⁽²⁸⁾<70>は、貝塚・古墳・住居跡という多数の遺構が検出された縄文時代～平安時代までの複合遺跡で、古墳は9基調査され、当遺跡とも関連が考えられる方墳も検出されている。

奈良・平安時代になると、土浦市は、筑波郡・信太郡・茨城郡・河内郡の四郡に跨り、永国地区は、信太郡の中家郷（岩田、小松、高津、永国、穴塚）に所属していたようである。この時代の遺跡として、宮久保遺跡⁽²⁹⁾<24>・亀井遺跡⁽³⁰⁾<22>・出シ山遺跡⁽³¹⁾<3>・下高津小学校遺跡⁽³²⁾<9>等がある。

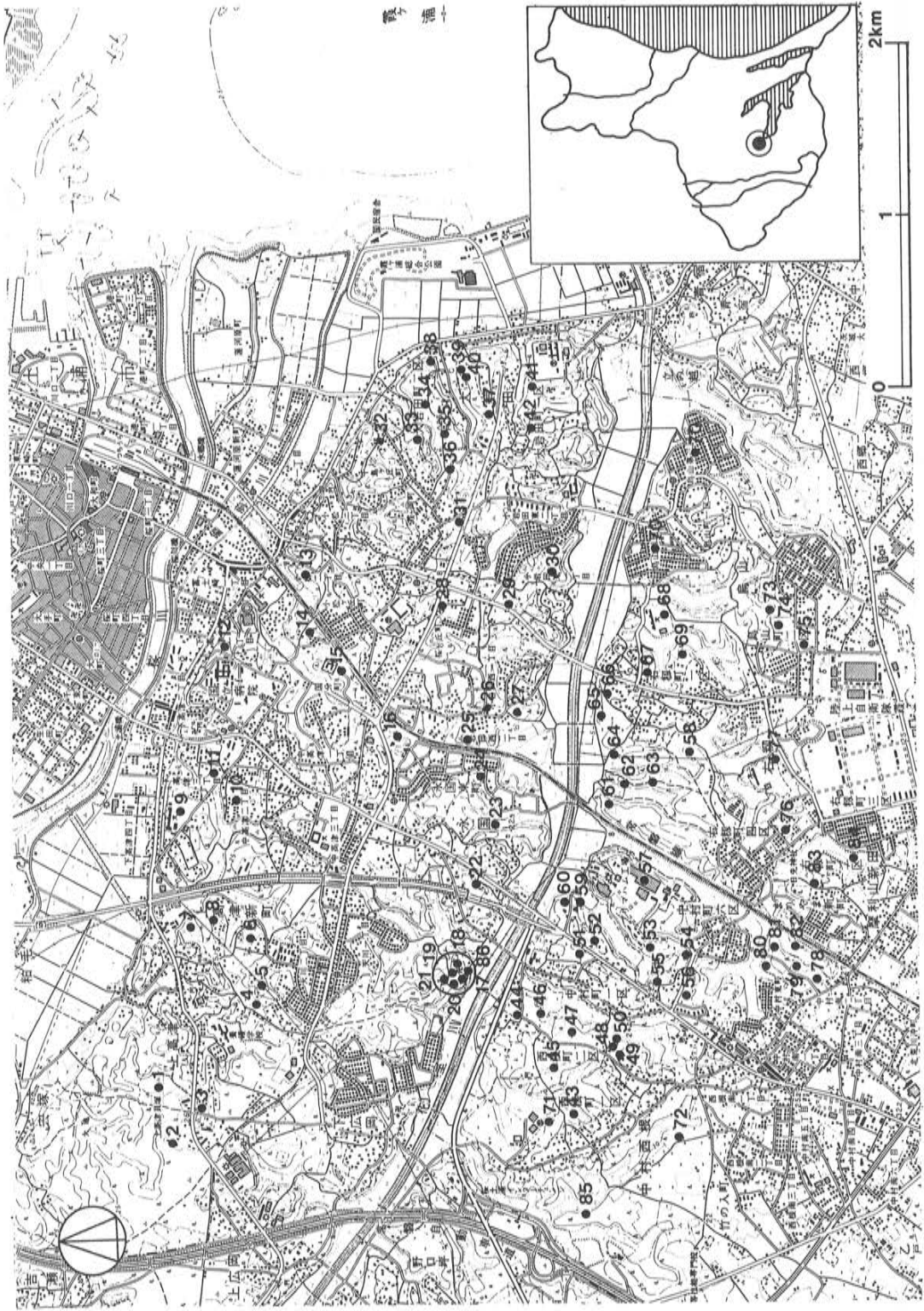
中世の城館跡としては、永享年間に若泉三郎が築造したと伝承される土浦城⁽³³⁾があり、戦国時

代は、小田氏の支城として、江戸時代になると松平氏、西尾氏、朽木氏、土屋氏の居城となり、現存する太鼓櫓・鐘楼は、江戸時代初頭に建造され、県の文化財に指定されている。他に、木田余城⁽³⁴⁾、手野城⁽³⁵⁾、今泉城⁽³⁶⁾、岩田館⁽³⁷⁾、右籾館⁽³⁸⁾等が所在している。

以上のように、土浦市内の洪積台地及び沖積低地には、原始古代から中世の各時代にわたり多くの遺跡があり、古代からこの地に人々の生活の痕跡が推察される。

※ 引用・参考文献

- (1) I. IJIM, AND, C. SASAKI「OKADAIRA SHELL MOUNDS AT HITACHI」(『TŌKYŌ DAIGAKU SCIENCE DEPARTMENT』MEMOIR VOL.1.PART1) TŌKYŌ DAIGAKU 1883
- (2)・(3) 茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』1977
- (4) 茨城県 茨城県史料「考古資料編 先土器・縄文時代」1979
- (5) 土浦市教育委員会 「向原遺跡」 1987
- (6) 土浦市教育委員会 「土浦の遺跡」 1975
- (7)は(6)と同じ
- (8)・(9)・(10) 茨城県教育財団文化財調査報告第43集「霞ヶ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」 1987
- (11)～(17)は(6)と同じ
- (18) 土浦市教育委員会 「池の台遺跡調査報告」 1981
- (19) 土浦市教育委員会 「永国遺跡」 1983
- (20)・(21)は(6)と同じ
- (22) 国学院大学穴塚調査団 「常陸穴塚」 1970
- (23) 土浦市教育委員会 「木田余台」茨城県土浦市木田余土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査概報 1988
- (24)～(27)は(6)と同じ
- (28) 茨城県住宅供給公社 「土浦市烏山遺跡群」 1975
- (29)～(32)は(6)と同じ
- (33)～(38) 土浦市史編纂委員会 「土浦市史」 1975



第4図 寺家ノ後A遺跡他5遺跡周辺遺跡位置図

表1 遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	遺跡の時代					番号	遺跡名	種類	遺跡の時代				
			先土器	縄文	弥生	古墳	その他				先土器	縄文	弥生	古墳	その他
1	上高津貝塚	貝塚	○	○				44	平遺跡	包蔵				○	○
2	栗崎遺跡	包蔵		○		○		45	宮脇遺跡	〃	○			○	○
3	出シ山遺跡	〃					○	46	諏訪遺跡	〃				○	○
4	宮脇B遺跡	〃		○		○		47	平代地遺跡	〃		○		○	○
5	宮脇A遺跡	〃				○		48	白樂所在塚	塚				○	
6	新町遺跡	〃				○		49	大日古墳	古墳				○	
7	寄居遺跡	〃				○		50	浅間古墳	〃				○	
8	うぐいす平遺跡	〃				○		51	諏訪遺跡B	包蔵				○	
9	下高津小学校遺跡	〃					○	52	南達中遺跡A	古墳跡				○	○
10	西原遺跡	〃					○	53	谷原門遺跡C	包蔵		○	○	○	○
11	弁天社東遺跡	〃					○	54	谷原門遺跡A	〃		○		○	○
12	高津天神古墳群	古墳群				○		55	谷原門遺跡B	〃				○	○
13	小松遺跡	包蔵				○		56	天神遺跡	〃				○	○
14	池の台遺跡	〃		○		○		57	向原遺跡	集落	○	○		○	
15	国分遺跡	〃		○				58	右糶三区庚申塚	塚群					○
16	ビヤ首遺跡	〃		○				59	馬道古墳群	古墳群				○	
17	寺家ノ後A遺跡	集落				○		60	馬道遺跡	包蔵				○	○
18	寺家ノ後B遺跡	集落古墳		○		○		61	右糶十三塚	塚				○	○
19	十三塚B遺跡	〃				○	○	62	牧の内遺跡	包蔵				○	○
20	永国十三塚	塚					○	63	内路地台遺跡	〃		○			
21	十三塚A遺跡	〃					○	64	念代遺跡	〃				○	○
22	亀井遺跡	包蔵				○		65	平坪遺跡	〃		○		○	○
23	永国遺跡	集落		○				66	沖ノ台遺跡	〃				○	
24	宮久保遺跡	包蔵				○		67	堂地塚遺跡	〃		○		○	○
25	阿ら地遺跡	〃				○		68	永峰遺跡	集落跡				○	
26	油麦田遺跡	〃				○		69	松原遺跡	包蔵		○		○	○
27	いさろ遺跡	〃				○		70	烏山遺跡群	集落		○		○	
28	桜ヶ丘古墳	古墳跡				○		71	中新台遺跡	包蔵				○	○
29	内出後遺跡	包蔵		○		○		72	竹ノ入遺跡	〃		○			
30	神出遺跡	〃		○		○		73	小西遺跡	〃		○		○	
31	霞ヶ岡遺跡	〃				○		74	烏山A遺跡	〃				○	○
32	東谷遺跡	〃				○		75	烏山B遺跡	〃				○	○
33	霞ヶ岡古墳	古墳				○		76	右糶貝塚東遺跡	〃		○			○
34	内根A遺跡	包蔵				○		77	宮塚遺跡	〃		○			
35	内根B遺跡	〃		○				78	木の宮南遺跡A	〃		○	○		
36	内根C遺跡	〃				○		79	木の宮南遺跡B	〃		○		○	
37	木層遺跡	〃				○		80	烏山A遺跡	〃				○	
38	ひさご塚古墳	古墳				○		81	木の宮南遺跡C	〃		○			
39	大岩田貝塚	貝塚		○				82	峰崎遺跡C	〃		○		○	○
40	木層北遺跡	包蔵		○		○		83	権現前遺跡	〃		○		○	○
41	五蔵遺跡	〃				○		84	宮前遺跡	〃		○			
42	中内山古墳群	古墳群				○		85	笹崎遺跡	〃		○			
43	堂場台遺跡	包蔵				○		86	鎌倉街道	〃					○

第3章 遺構・遺物の記載方法

第1節 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は、下記の要領で統一した。

1 使用記号

竪穴住居跡—S I 土坑—SK 溝—SD 古墳—TM ピット—P 土器—P
石器—Q 土製品—DP

2 遺構・遺物の表示方法

焼土  炉  カマド  炭化材  粘土 
釉  須恵器  石(片岩)  硬化面  土器片 ●

3 土層の分類

各遺構に於ける堆積土の土層については、調査時に、含有物・色調・粘性・締まり具合などを観点として線引きし観察記録を行ったが、整理の段階で色調と含有物について下記のように整理し記号化した。なお、色調については「新版標準土色帳」(小山正忠・竹原委雄編著・日本色研事業株式会社発行)を使用し分類したが、旧鎌倉街道の土層については、文章で記述した。

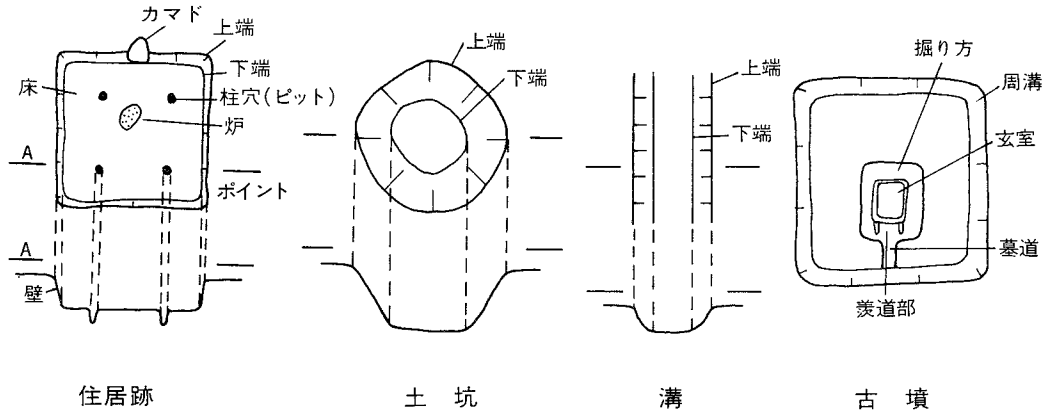
°多量 °中量 °少量 °極少量

番号	土色名	色	相	明度/彩度	含有物
1	黒褐色	Hue	7.5YR	3/12/23/23/3	a° ローム粒子多量
2	褐色	Hue	7.5YR	3/44/44/34/6	a'' ローム粒子中量
3	暗褐色	Hue	7.5YR	4/44/34/6	a' ローム粒子少量
4	にぶい褐色	Hue	7.5YR	5/45/65/3	a ローム粒子極少量
5	明褐色	Hue	7.5YR	5/6 5/8	b° ロームブロック多量
6	極暗褐色	Hue	7.5YR	2/3	b'' ロームブロック中量
7	灰褐色	Hue	7.5YR	4/2	b' ロームブロック少量
8	黒	Hue	7.5YR	2/1	b ロームブロック極少量
9	浅黄橙色	Hue	7.5YR	8/3	c° 焼土粒子多量
10	黒褐色	Hue	10YR	2/3	c'' 焼土粒子中量
11	褐色	Hue	10YR	4/4	c' 焼土粒子少量
12	明黄褐色	Hue	10YR	7/6	c 焼土粒子極少量
13	暗褐色	Hue	10YR	3/4	d° 焼土ブロック多量
14	黄褐色	Hue	10YR	5/6 5/8	d'' 焼土ブロック中量
15	にぶい黄橙色	Hue	10YR	7/3	d' 焼土ブロック少量
16	灰白色	Hue	10YR	8/2	d 焼土ブロック極少量
17	黒褐色	Hue	5 YR	2/1 3/1	e° 炭化粒子多量

番号	土色名	色	相	明度/彩度	含有物
18	暗赤褐色	Hue	5 YR	3/3 3/4 3/6	e'' 炭化粒子中量
19	赤褐色	Hue	5 YR	4/8 4/6	e' 炭化粒子少量
20	極暗赤褐色	Hue	5 YR	2/3	e 炭化粒子極少量
21	明赤褐色	Hue	5 YR	5/8	f° 炭化物多量
22	にぶい赤褐色	Hue	5 YR	4/3	f'' 炭化物中量
23	暗赤褐色	Hue	2.5YR	3/6 3/4 3/3	f' 炭化物少量
24	赤褐色	Hue	2.5YR	4/8 4/6	f 炭化物極少量
25	にぶい赤褐色	Hue	2.5YR	4/4	g° 粘土粒子多量
26	浅黄色	Hue	2.5YR	7/4	g'' 粘土粒子中量
27	明黄褐色	Hue	2.5Y	7/6	g' 粘土粒子少量
28	黄褐色	Hue	2.5Y	5/6	g 粘土粒子極少量
					h'' 粘土ブロック中量
					h' 粘土ブロック少量
					h 粘土ブロック極少量
					i° 砂多量
					i'' 砂中量
					i' 砂少量
					i 砂極少量
					j 腐葉土
					k 攪乱
					l 木根
					m 碎石
					n° 黒色土混入多量
					n'' 黒色土混入中量
					n' 黒色土混入少量
					n 黒色土混入極少量
					o° 黒褐色土混入多量
					o'' 黒褐色土混入中量
					o' 黒褐色土混入少量

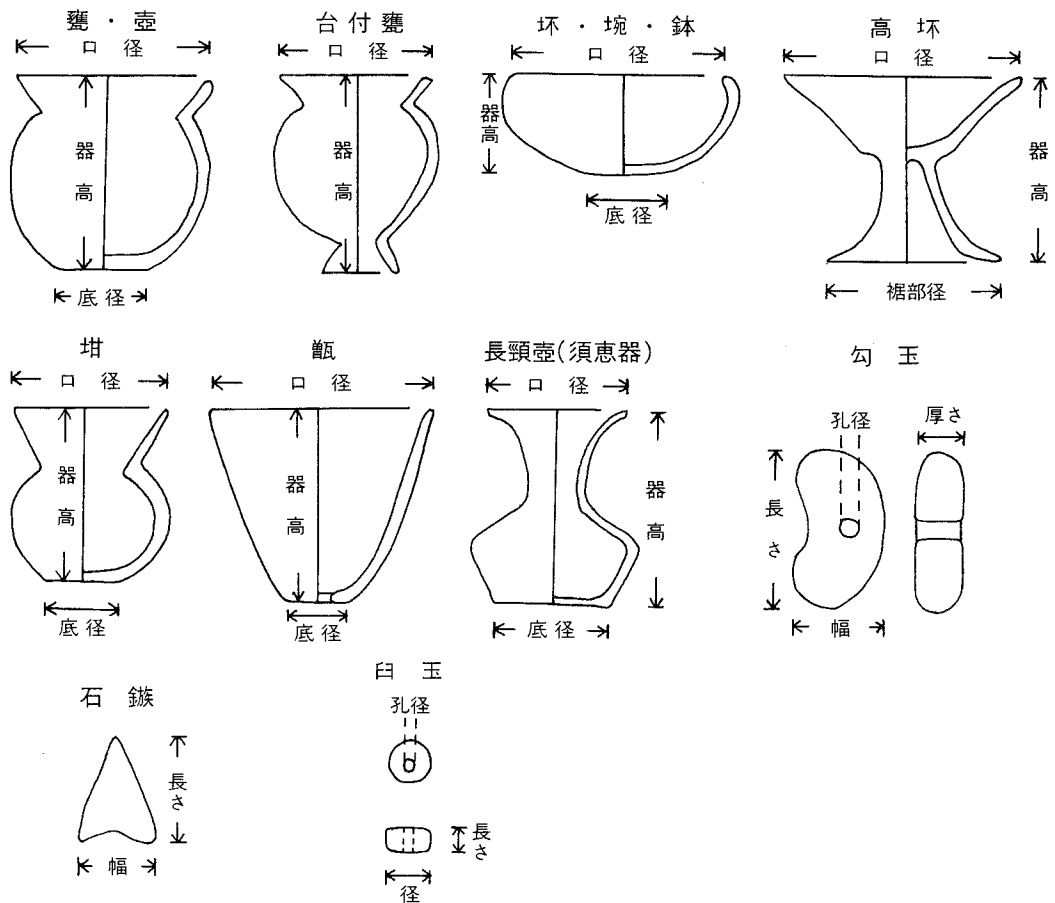
4 遺構実測図の作成方法と掲載方法

- 各遺構の実測図は、縮尺10分の1・20分の1・50分の1の原図をトレースして判組し、それらをさらに3分の1・4分の1に縮小して掲載することを基準とした。
- カマドは、縮尺10分の1の原図をトレースして判組し、さらに3分の1に縮小して掲載した。
- 実測図中のレベルは標高であり、m単位で表示した。また、同一図中で同一標高の場合に限り一つの記載で表し、標高が異なる場合は、各々表示した。
- 遺構からの出土遺物は、第1節1で示した記号を用い、出土位置を遺構平面図及び断面図中にドットで表示した。また、接合できた土器片は、実線で結んだ。なお、出土遺物に付した数字は、遺物実測図の番号と一致する。



5 遺物実測図の作成方法

○ 土器の実測は、四分分割法を用い、中心線の左側に外面、右側に内面と断面を図示した。石器及び石製品は、展開図法を基本とした。なお、遺物の法量については、次のように計測した。



6 掲載方法

- 実測図掲載については、縮尺2分の1、3分の1を基本としたが、遺物の大きさによって原寸で掲載した。

7 一覧表の見方について

<住居跡一覧表>

遺跡名	住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	柱穴数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
					長軸×短軸(m)	壁高(cm)							

- 位置は、遺構の占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。
- 主軸方向は、主軸が座標北からどの方向にどれだけ傾いているかを、「N-26°-W」（座標北から西へ26°傾く）のように角度で表示する。
- 平面形は、掘り込み上端面の形状を記した。
- 規模の欄の長軸・短軸は、平面上端面の計測値であり、壁高は、残存壁高の計測値である。
- 床面は、「平坦」、「凹凸」、「皿状」、「緩い起伏」に分類して表記した。
- 柱穴数の欄は、平面図中に表示されたピットの中から、その住居跡に伴うと思われる柱穴の本数を表示した。
- 炉・カマドは、その種類を表した。
- 覆土は、自然堆積のものは「自然」、人為堆積のものは「人為」と表記し、不明のものは空欄とした。
- 出土遺物は、遺物の種類とその出土数を記した。
- 時期は、住居跡の所属時期を出土遺物から推定可能な範囲で表記した。なお、不明のものについては空欄とした。
- 備考は、重複関係等について記した。
- 表記事項のうち（ ）で記したものは、推定値である。

<古墳一覧表>

遺跡名	古墳名	位置	墳形	墳丘規模		埋葬施設			周溝			備考
				長径×短径(m)	主体部	主軸方向	遺物	平面形	断面形	遺物		

- 古墳番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま付した。
- 位置は、遺構の占める大調査区名で表示した。
- 規模は、長径と短径を表示した。
- 埋葬施設の項は、主体部の主軸方向とその遺物について記した。

- 周溝の項は、周溝の主な出土遺物と平面形について記した。
- 備考は、重複関係等について記した。

<土坑一覧表>

土坑番号	位置	長軸方向 (長径方向)	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆土状態	出土遺物	備考
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(m)					

- 土坑番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。なお墓墳として性格がわかるものは、備考欄に記した。
- 平面形は、掘り込み上面の形状を記した。
- 壁面は、坑底からの立ち上がりの状態を簡潔に記した。
- その他の項目については、住居跡一覧表の記載方法に準じた。

<塚一覧表>

遺跡名	名 称	位 置	規 模		塚高(m)	遺 物	備 考
			長径 × 短径(m)				

<出土土器観察表>

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考

- 図版番号は、実測図中の番号である。
- 法量は、A—口径，B—器高，C—底径，D—裾部，単位はcmである。なお，()は推定値で，[]は残存高である。
- 胎土・色調・焼成の欄は，上から胎土，色調，焼成の順で記した。色調については，前節の土層の分類と同じ土色帖を使用した。焼成については，良好，普通，不良に3分類し，焼き締まって硬いものは良好，焼成があまく手でこすると器面が剝落するものを不良とし，その中間のものを普通とした。
- 備考の欄は，土器の残存率，P番号，出土位置，その他必要と思われる事項を記した。
- なお，この表で解説できない遺物については，効果的と思われる表を作成した。

<土製品解説表>

図版番号	名 称	台帳番号	法 量				出土地点	備 考
			長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		

<石器・石製品解説表>

図版番号	器 種	法 量				石 質	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			

<勾玉計測表>

図版番号	長さ(cm)	幅 (cm)	腹部幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(mm)	出土地点

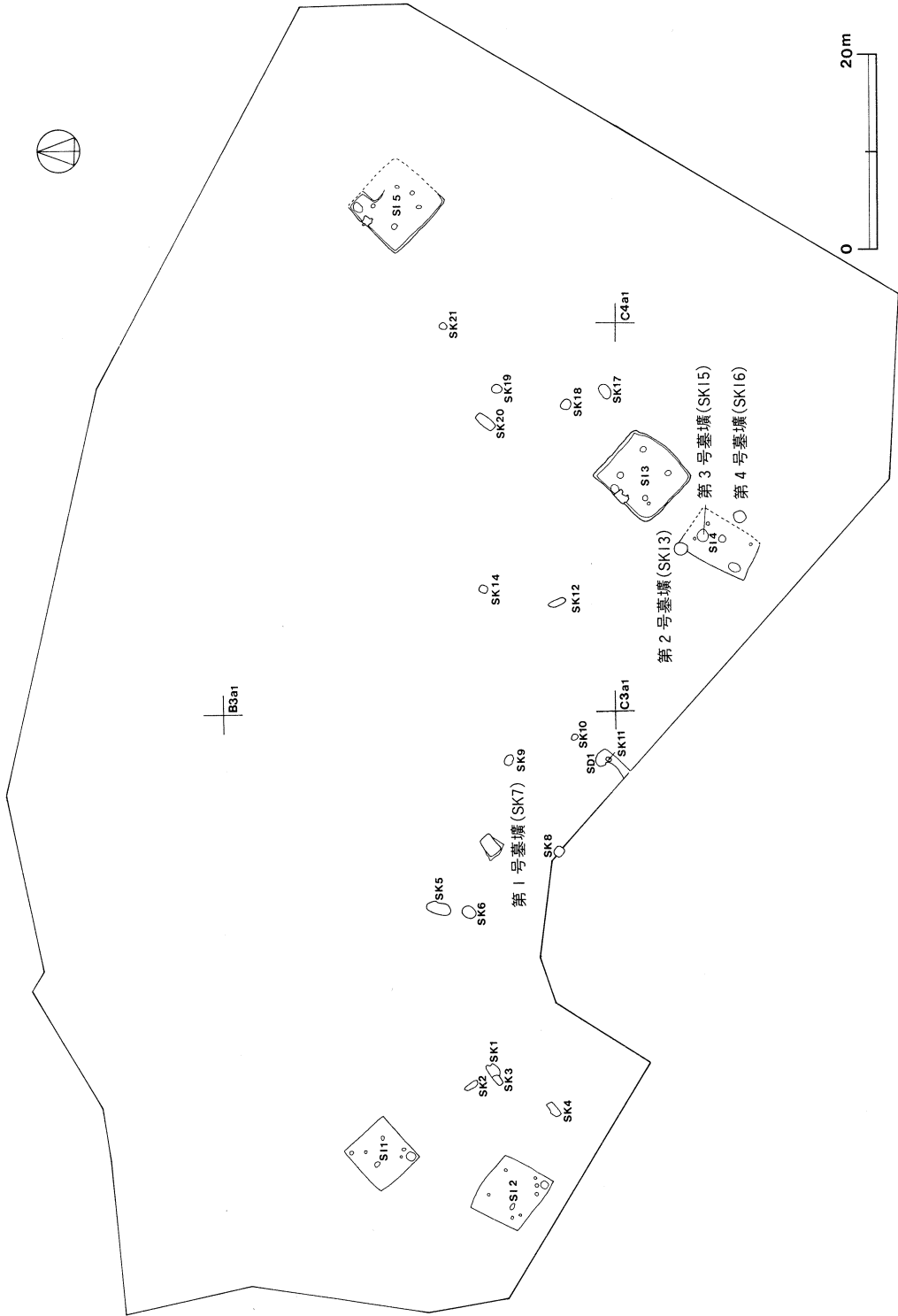
<白玉計測表>

図版番号	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	出土地点

<古銭一覧表>

図版番号	銭 名	初 鑄 年(西暦)	鑄造地名	出土地点	備 考





第5図 寺家ノ後A遺跡全体図

第4章 遺跡の調査結果

第1節 寺家ノ後A遺跡

1 遺跡の概要

当遺跡は、土浦市永国字高野230ほかに所在し、JR常磐線土浦駅から南西約3.5km、土浦市役所から南西約1.7kmの台地縁辺部に位置している。調査面積は7,500㎡で、現況は畑である。当遺跡の位置する台地には、南西側の花室川から続いている谷津が東側から巡って、北東側に入り込んでいる。台地の南東側は緩斜面となっている。花室川はほぼ東流し、流域に広がる沖積低地は水田として利用されている。当遺跡の平坦面と水田との比高は約15～16mである。

遺構は、古墳時代に位置づけられる竪穴住居跡5軒ほか、土坑17基、近世の墓壇4基、溝1条が検出されている。住居跡は遺跡の西側と東側から検出され、東側の住居跡は緩斜面に位置するため壁が一部流失して失われている。

竪穴住居跡から出土した遺物は、土師器が主で、甕形土器、埴形土器、甑形土器、坏形土器、高坏形土器、鉢形土器、支脚等が出土している。土坑からは、少量の土師器や土師器片が出土し、近世の墓壇からは、人骨に伴って古銭や櫛が出土している。溝からは、白玉が8個出土している。

2 遺構と遺物

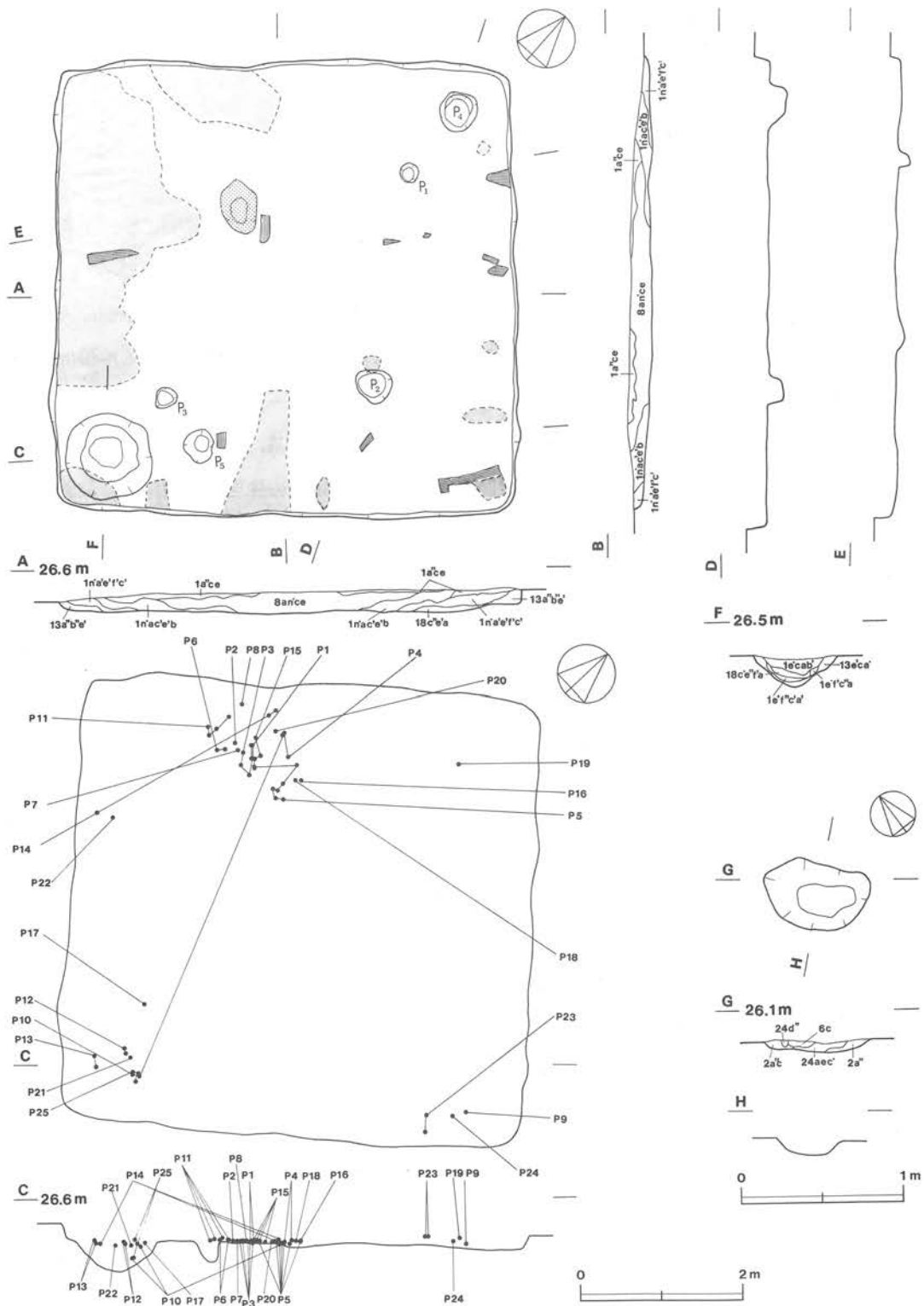
(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第6図）

本跡は、調査区のB1a9区を中心に確認され、第2号住居跡の北7mほどに位置している。平面形は長軸5.71m、短軸5.65mの方形を呈し、主軸方向はN-48°-Eを指している。床面積は、31.19㎡である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は11～29cmである。床面は、ほぼ平坦で、炉の周辺がよく踏み固められている。ピットは5か所検出され、P₁～P₅は、上端直径23～50cm、深さ17～30cmである。P₁～P₃が配置等から支柱穴と判断され、P₄・P₅はP₁・P₃の支柱穴と思われる。貯蔵穴は、南コーナー部に位置し、平面形は、隅丸方形を呈し、規模は、直径110cm、深さ42cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

炉は、床中央部の西側に確認され、床面を10cmほど掘り下げた地床炉である。平面形は、長径70cm、短径45cmの不整楕円形を呈している。炉内には少～多量の焼土を含む赤褐色土や明褐色土が硬くブロック化している。

覆土は、締まりのある土層で、上層に中量のローム粒子や極少量の焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土、下層に多量の黒色土と極少量のローム粒子・焼土粒子・炭化粒子、及びロームブロック



第 6 図 第 1 号住居跡実測図・遺物出土位置・土器接合関係図

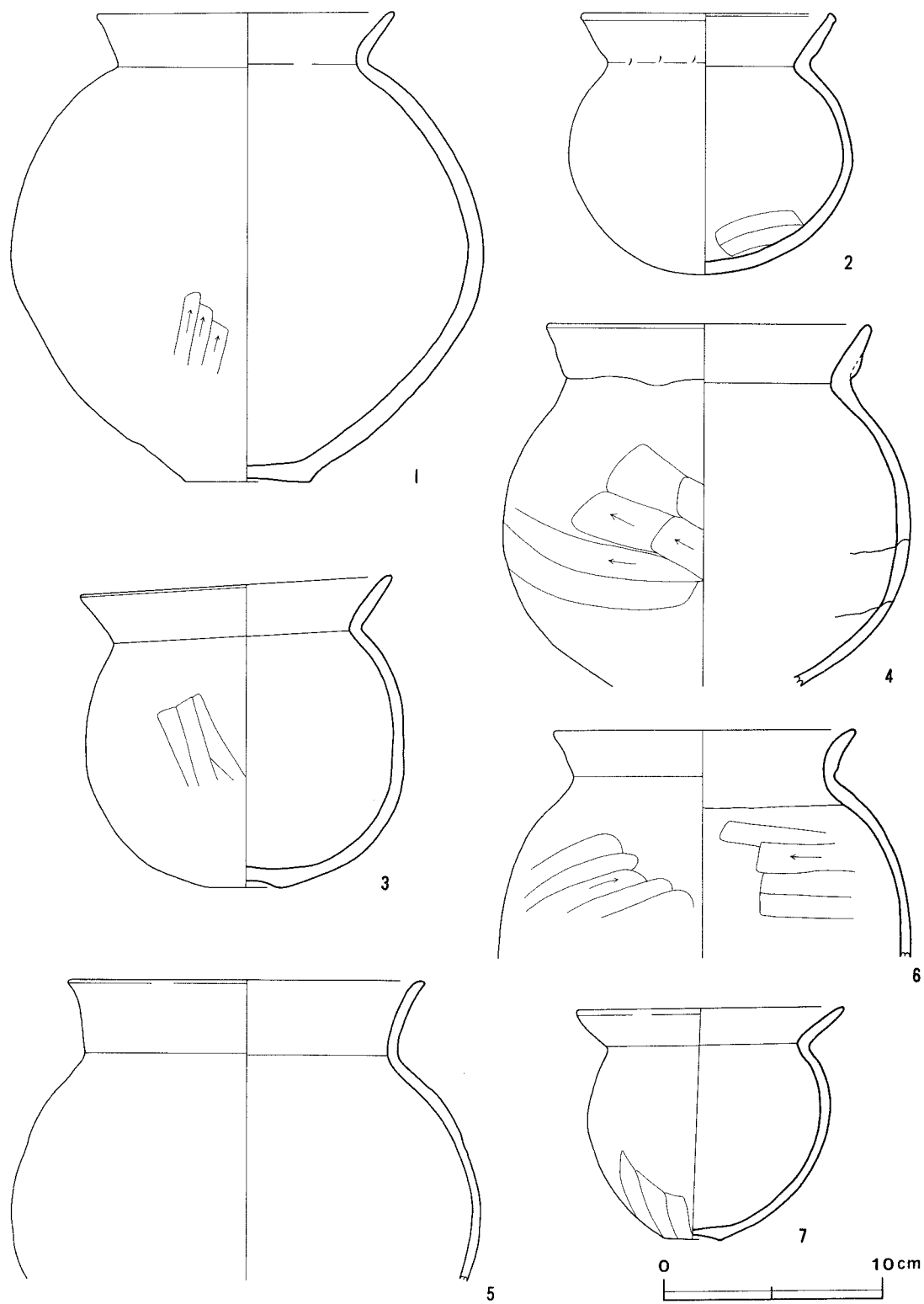
を含む黒色土、壁際に中量のローム粒子・ロームブロックと少量の炭化粒子や極少量の焼土粒子を含む暗褐色土が自然堆積している。貯蔵穴の覆土及び住居跡の床面から、焼土や炭化材が多量に検出されていることから、焼失家屋と考えられる。

遺物は、住居跡の覆土から縄文土器片4片、土師器片716片、陶器片5片、自然礫18点が出土している。土師器は、炉跡から北西壁にかけての床面から壺形土器(第7図1)、甕形土器7点(第7図2~7, 第8図8), 高坏形土器5点(第8図10・13, 第9図14・15・17), 鉢形土器(第9図19)が出土し、南コーナー一部貯蔵穴の底面付近から、高坏形土器4点(第8図9・11・12, 第9図16), 甕形土器(第9図24)や鉢形土器(第9図20)が完形に近い状態で出土している。北コーナー付近からは、埴形土器(第9図18)と白玉1個が出土し、また、南西壁際や東コーナーから鉢形土器3点(第9図21~23)が出土している。

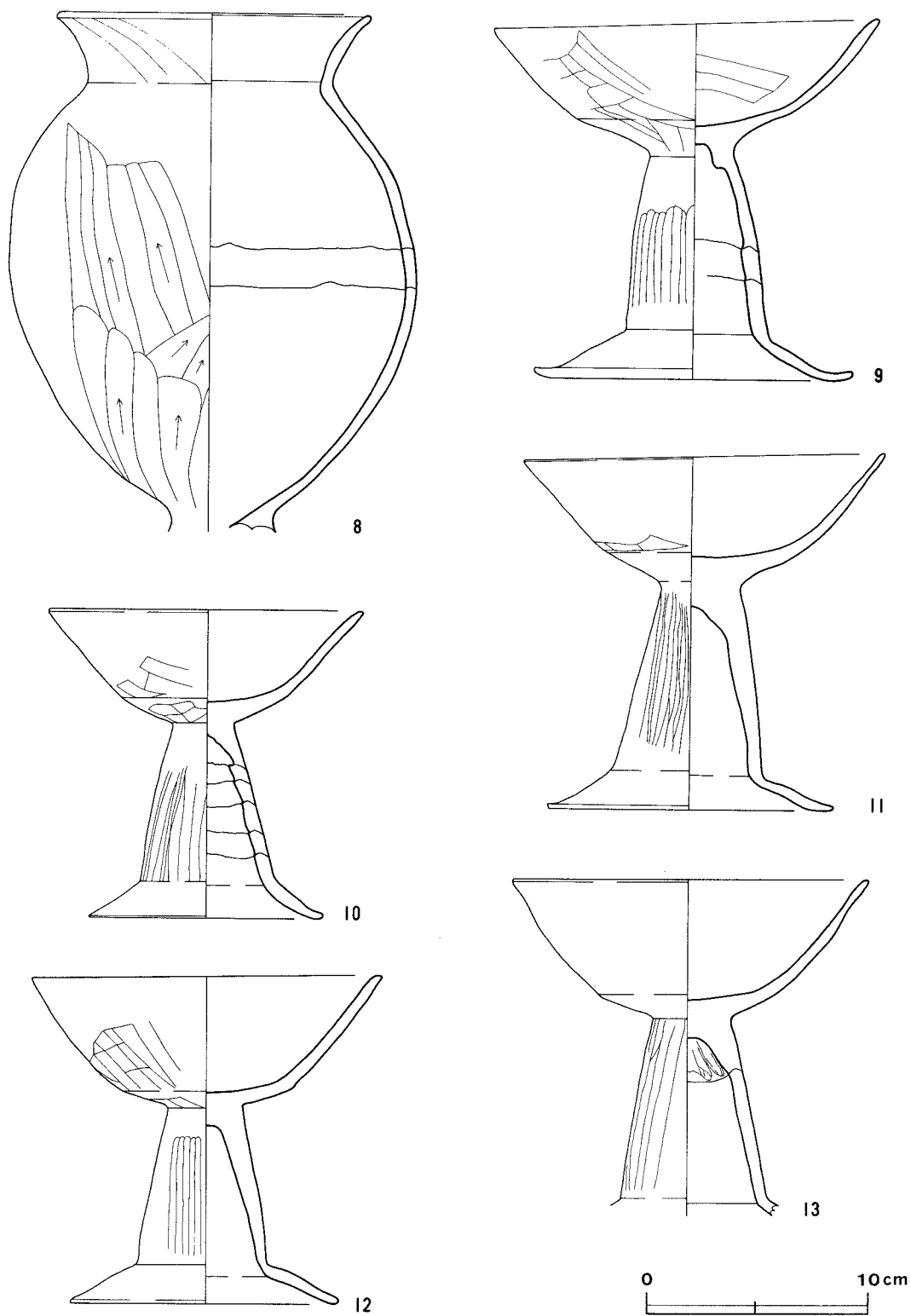
本跡は遺構や遺物等から、古墳時代和泉期に比定される住居跡と思われる。

第1号住居跡出土土器観察表

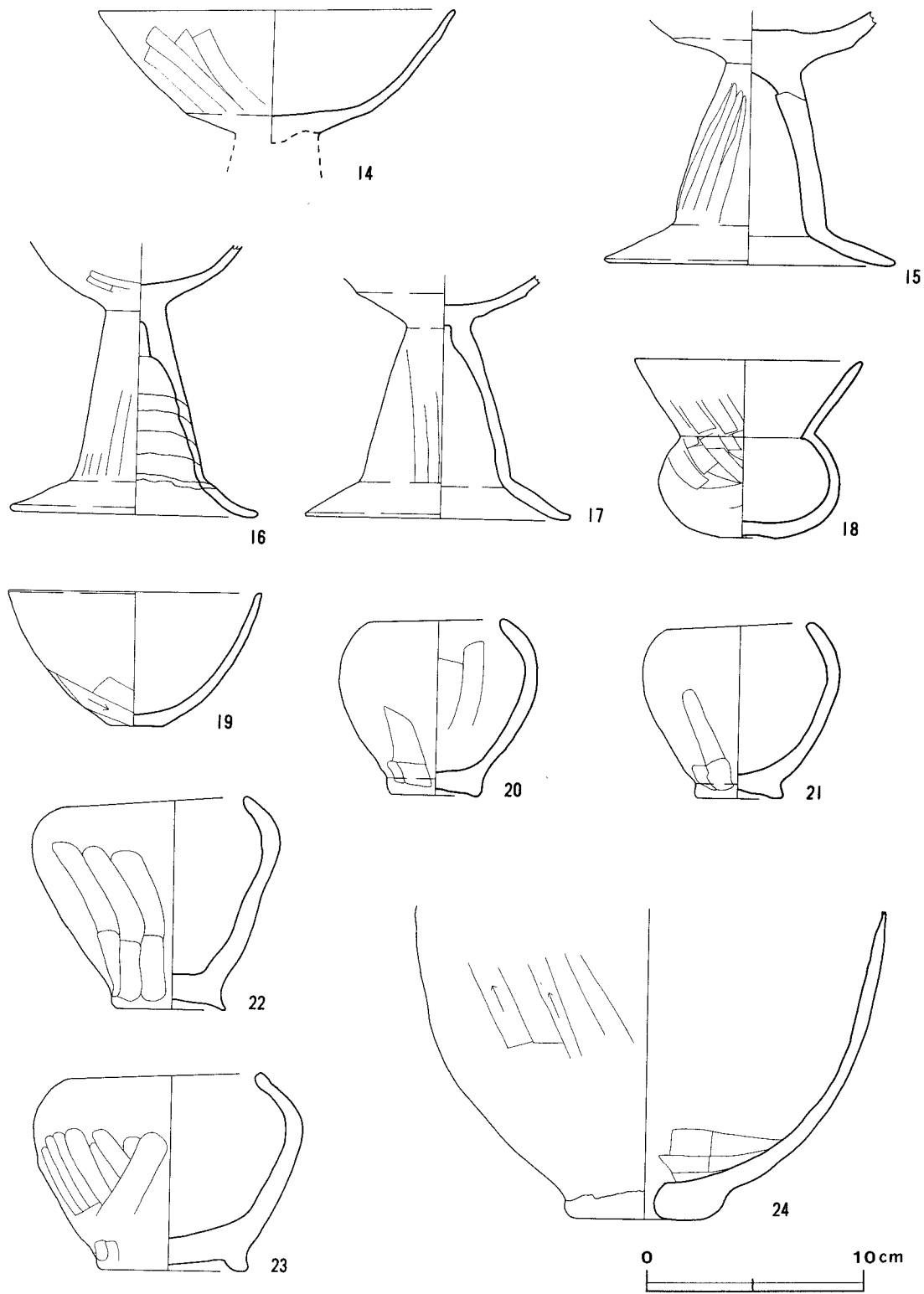
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	壺 土師器	A 13.6 B 22.0 C 5.7	平底。胴部はほぼ球形を呈し、頸部はくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部横位のナデ。	砂粒・雲母・細礫 赤褐色 普通	P-1 95% 北西壁際
2	小形甕 土師器	A 11.4 B 12.2	丸底。胴部はほぼ球形を呈し、頸部はくびれ、口縁部は外傾する。口縁端部を面とりする。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部外面へラ削り、内面ナデ。 頸部のくびれ部に刺突を巡らす。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	P-2 100% 北西壁際
3	小形甕 土師器	A 14.2 B 14.5 C 3.3	平底。胴部はやや内彎気味に立ち上がり、頸部はくびれ口縁部は外傾する。底部中央に窪み。	口縁部内・外面横ナデ。 胴上半部にハケ目整形後、中央下半部にかけてへラ削り。	砂粒・雲母・細礫 明赤褐色 普通	P-3 90% 北西壁際
4	小形甕 土師器	A 14.7 B [16.9]	底部欠損。胴部はやや内彎気味に立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は複合口縁で、外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部にハケ目整形後へラ削り、内面へラナデ。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-4 50% 北西壁際
5	甕 土師器	A 16.2 B [14.0]	胴下半欠損。胴部は球形を呈し、口縁部は直立しながら立ち上がり、上位で外反する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内・外面剝離が著しく調整不明。	砂粒・細礫・長石 にぶい赤褐色 不良	P-5 30% 北西壁際
6	甕 土師器	A 13.7 B [10.7]	胴下半欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部にゆるいくびれを持ち、口縁部は短く外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴上半部にへラ削り、内面へラナデ。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-6 30% 北西壁際
7	小形甕 土師器	A 12.2 B 11.0 C 2.6	平底。胴部は内彎気味に立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外傾する。底部中央に窪み。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部外面へラ削り後ナデ、内面剝離しているが、赤彩痕。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-7 80% 北西壁際
第8図 8	台付甕 土師器	A 14.0 B [24.0]	脚部欠損。胴部はやや内彎しながら立ち上がり、口縁部は、外傾し上位で外反する。	口縁部内・外面へラ削り後へラナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ、内面ナデ。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-8 70% 北西壁際
9	高坏 土師器	A 17.4 B 16.7 D 13.5	脚部は中空で膨らみ、裾部は中膨れに開き端部でぞる。坏部は底部に稜を有し、外傾する。	口縁部外面横ナデ。坏部へラ削り後へラナデ、脚部外面へラ磨き、脚部内面に輪積痕が残る。	砂粒・細礫・雲母 明褐色 普通	P-10 90% 南コーナー貯蔵穴



第7图 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第 8 图 第 1 号住居跡出土遺物実測図(2)



第9图 第1号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第8図 10	高 坏 土師器	A 14.2	脚部は中空で膨らみ、裾部はハの字状に開き。坏部は底部に稜を有し、外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部ヘラ削り後ナデ。脚部外面ヘラ磨き、内面に輪積痕が残る。	砂粒・細礫・雲母 にぶい橙色 普通	P-11 95% 北西壁際
		B 14.2				
		D 10.6				
11	高 坏 土師器	A 16.3	脚部は中空で膨らみ、裾部は中膨れに開き、端部ほぼ直線。坏部は底部に稜を有し、外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。脚部外面ヘラ磨き。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-12 85% 南コーナー貯蔵穴
		B 16.5				
		D 12.5				
12	高 坏 土師器	A 15.8	脚部は中空で膨らみ、裾部は、中膨れに開き、坏部は底部に稜を有し、外傾する。	口縁部外面横ナデ。坏部ヘラ削り後ナデ。脚部外面ヘラ磨き。脚部・坏部に赤彩痕。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-13 90% 南コーナー貯蔵穴
		B 15.2				
		D 12.1				
13	高 坏 土師器	A 16.2	裾部欠損。脚部は中空で膨らみ、坏部は底部ににぶい稜を有し、外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部ナデ。脚部ヘラ磨き。坏底部内面剝離している。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-14 70% 北西壁際
		B [15.5]				
第9図 14	高 坏 土師器	A 16.5	脚部欠損。坏底部と体部の間ににぶい稜を有し、外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部ヘラ削り。	砂粒・細礫・雲母 明褐色 普通	P-15 40% 北西壁際
		B [6.0]				
15	高 坏 土師器	B [12.0]	坏部欠損。脚部は、中空で膨らみ、裾部は下端に弱い稜を有し直線的に開く。	脚部外面磨き。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-16 60% 北西壁際
		D 12.9				
16	高 坏 土師器	B [12.7]	坏部上半欠損。脚部は中空で膨らみ、裾部は、下端に弱い稜を有し、端部ややそる。	脚部外面磨き。内面に輪積痕が残る。	砂粒・細礫 にぶい黄褐色 普通	P-17 50% 南コーナー貯蔵穴
		D 11.2				
17	高 坏 土師器	B [11.4]	坏部上半欠損。脚部は、中空で膨らみ、裾部はやや中膨れに開く。下端に弱い稜を有する。	脚部外面磨き。裾部外面ナデ。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-18 50% 北西壁際
		D 12.0				
18	埴 土師器	A 10.5	平底。底部中央に窪み、胴部は内彎して立ち上がり、頸部は強くくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ 胴上半部から頸部にかけてヘラ削り。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-19 100% 北コーナー
		B 8.4				
		C 2.4				
19	小形鉢 土師器	A 11.7	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は、ほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ 体部ヘラ削り。	砂粒・細礫 明褐色 普通	P-20 99% 北西壁際
		B 6.3				
		C 2.3				
20	小形鉢 土師器	A 6.1	底部を突出させた平底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。	底部・体部下半部ヘラ削り。 体部内面、口縁部内・外面赤彩痕。粗い作りである。	砂粒・細礫 にぶい赤褐色 普通	P-21 100% 南コーナー貯蔵穴
		B 8.4				
		C 3.9				
21	小形鉢 土師器	A 6.9	粘土を貼り付けて、底部を突出させた平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	底部ヘラナデ。体部内面ナデ 体部内・外面に赤彩痕。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-22 98% 南西壁際
		B 8.3				
		C 3.9				
22	鉢 土師器	A 8.4	粘土を貼り付けて、底部を突出させた平底。体部は外傾気味に立ち上がり、口縁部内傾する。	底部から体部下半部にかけてヘラナデ。体部内・外面に赤彩痕。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-23 95% 東コーナー
		B 10.1				
		C 5.0				
23	鉢 土師器	A 8.9	粘土を貼り付けて、底部を突出させた平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部内傾する。	底部ヘラナデ。体部ヘラ削り。 体部内・外面に赤彩痕。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-24 90% 東コーナー
		B 9.3				
		C 6.6				
24	瓶 土師器	B [14.6]	胴部上半欠損。単孔式。胴部は、内彎気味に立ち上がる。	胴部中央外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-25 40% 南コーナー貯蔵穴
		C 5.7				

第2号住居跡（第11図）

本跡は、調査区のB1h8区を中心に確認され、第1号住居跡の南7mほどに位置している。平面形は長軸6.28m、短軸5.95mの方形を呈し、主軸方向はN-60°-Wを指している。壁はロームで、壁高は3~29cmである。南西側は、緩斜面のため流失し、南、西壁の一部が不明である。床面積は推定で36.45㎡である。床面はほぼ平坦で、中央部付近が硬く踏み固められている。ピットは7か所検出され、P₁~P₇は、上端直径29~46cm、深さ11~41cmである。P₁~P₄は、形状や規模及び方形に配置されていることから、支柱穴と判断され、P₅~P₇は支柱穴と思われる。貯蔵穴は南コーナー部に位置し、長径100cm、短径80cmの不整楕円形を呈している。深さ32cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

炉は、床中央部の西側に確認され、床面を8cmほど掘り下げた地床炉である。平面形は長径70cm、短径46cmの楕円形で、ややスリパチ状を呈している。炉内に、少~多量の焼土を含む赤褐色土や明褐色土が堆積しているが、炉床はそれほど焼き締まっていない。

覆土は浅く、中量のローム粒子や極少量のロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・炭化材を含む暗褐色土が堆積している。貯蔵穴の覆土から焼土や炭化粒子、住居跡の床面からも焼土や炭化材及び炭化粒子が検出されていることから焼失家屋と考えられる。

遺物は、少なく、主に覆土から縄文土器片1片、土師器片38片、陶器片1片が出土している。土師器は北西壁際床面から、高坏形土器（第10図1）の脚部が出土している。

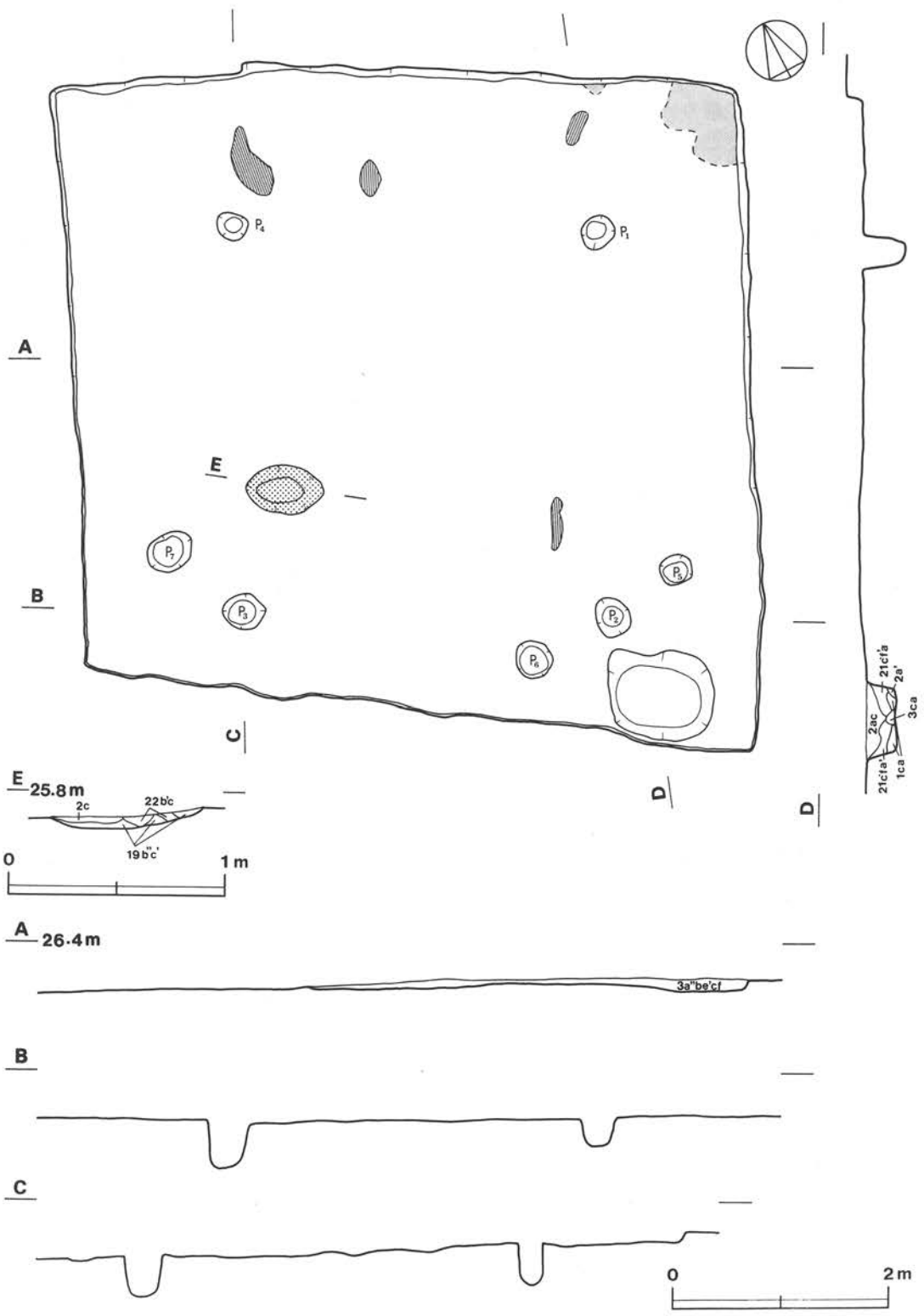
本跡は遺構や遺物等から、古墳時代和泉期に比定される住居跡と思われる。



第10図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図 1	高坏 土師器	B〔5.3〕	脚部上部の破片。	脚部内面に輪積痕が残る。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-51 5% 北西壁際



第11图 第2号住居跡実測図

第3号住居跡（第12図）

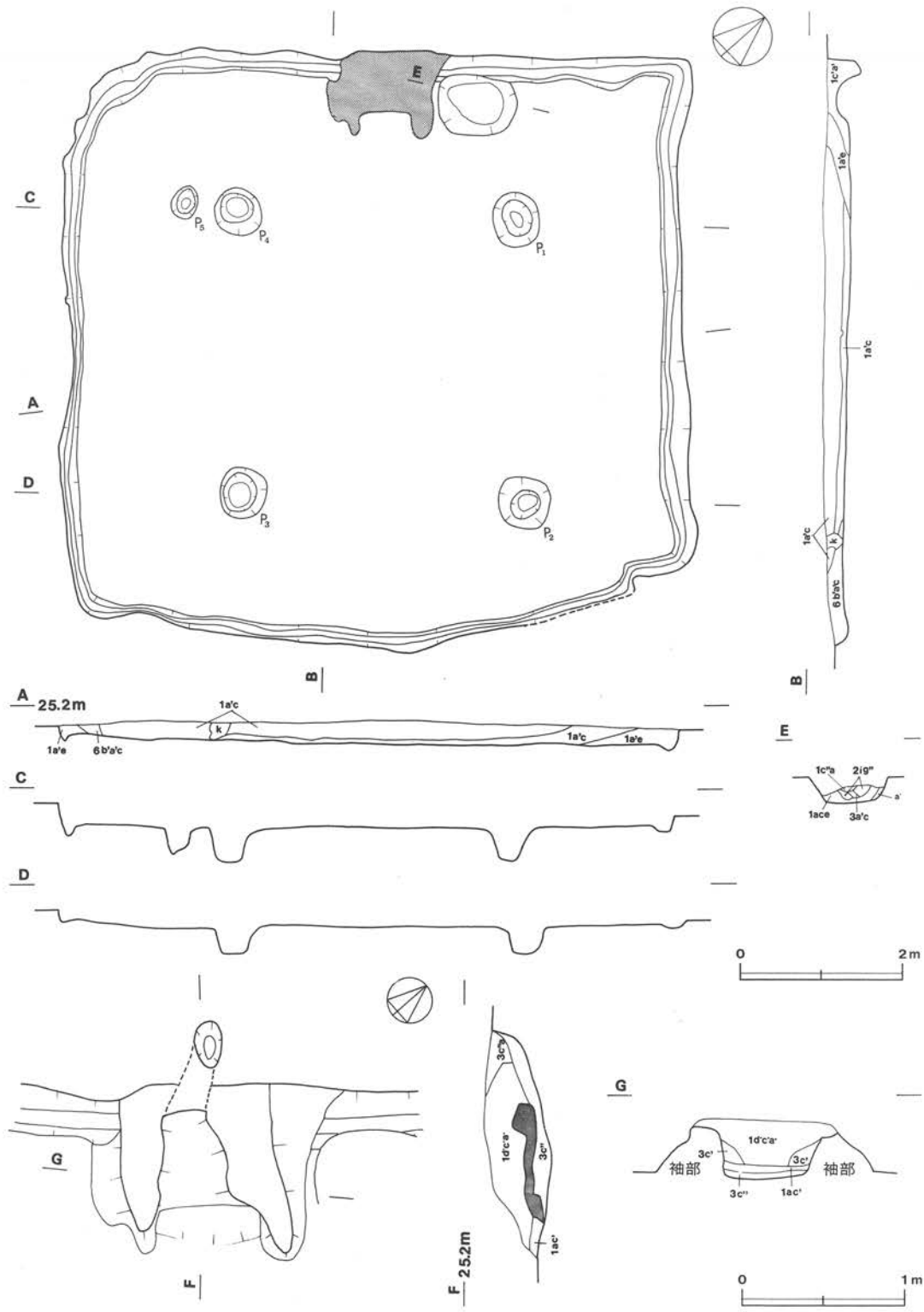
本跡は、調査区の東側C3a7区を中心に確認され、第4号住居跡の北東側3mほどに位置している。本跡の形状は、南東壁の一部が、傾斜地のため流失して不明であるが、壁溝が残るため遺構プランは明瞭にとらえることができた。平面形は長軸7.51m、短軸7.43mのほぼ隅丸方形を呈し、主軸方向はN-48°-Wを指している。床面積は48.84㎡で、第1・2号住居跡と比べやや大形である。壁はロームで硬く、壁高は8~52cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁直下に壁溝を有し、規模は上幅10~45cm、下幅3~22cm、深さ5~15cmほどで、壁溝には小ピットを伴っており、規模は、径3~5cm、深さ5~10cmほどである。床面は、全体的に硬く締まっている。ピットは5か所検出され、P₁~P₅は上端直径32~68cm、深さ32~42cmである。P₁~P₄は、形状や規模及び方形に配置されていることから、支柱穴と判断される。P₅は、支柱穴と思われる。貯蔵穴はカマドの東側に位置し、平面形は、隅丸方形を呈している。規模は、長軸95cm、短軸73cm、深さ34cmである。底面はほぼ平坦で、壁は北西側でほぼ垂直、他は緩やかに外傾して立ち上がっている。

カマドは、北西壁のほぼ中央部に付設され、白色粘土に山砂とローム土を加え構築され遺存度は良好である。規模は、長さ138cm、幅130cm、焚口幅56cmほどである。焚口の天井部は崩壊している。火床部は床面が5cmほど掘り込められ、焼けて硬くブロック化している。煙道部は壁を95cmほどの幅で、屋外へ45cmほど掘り込んで構築しており、煙道が明瞭に確認され、規模は長径30cm、短径16cmである。

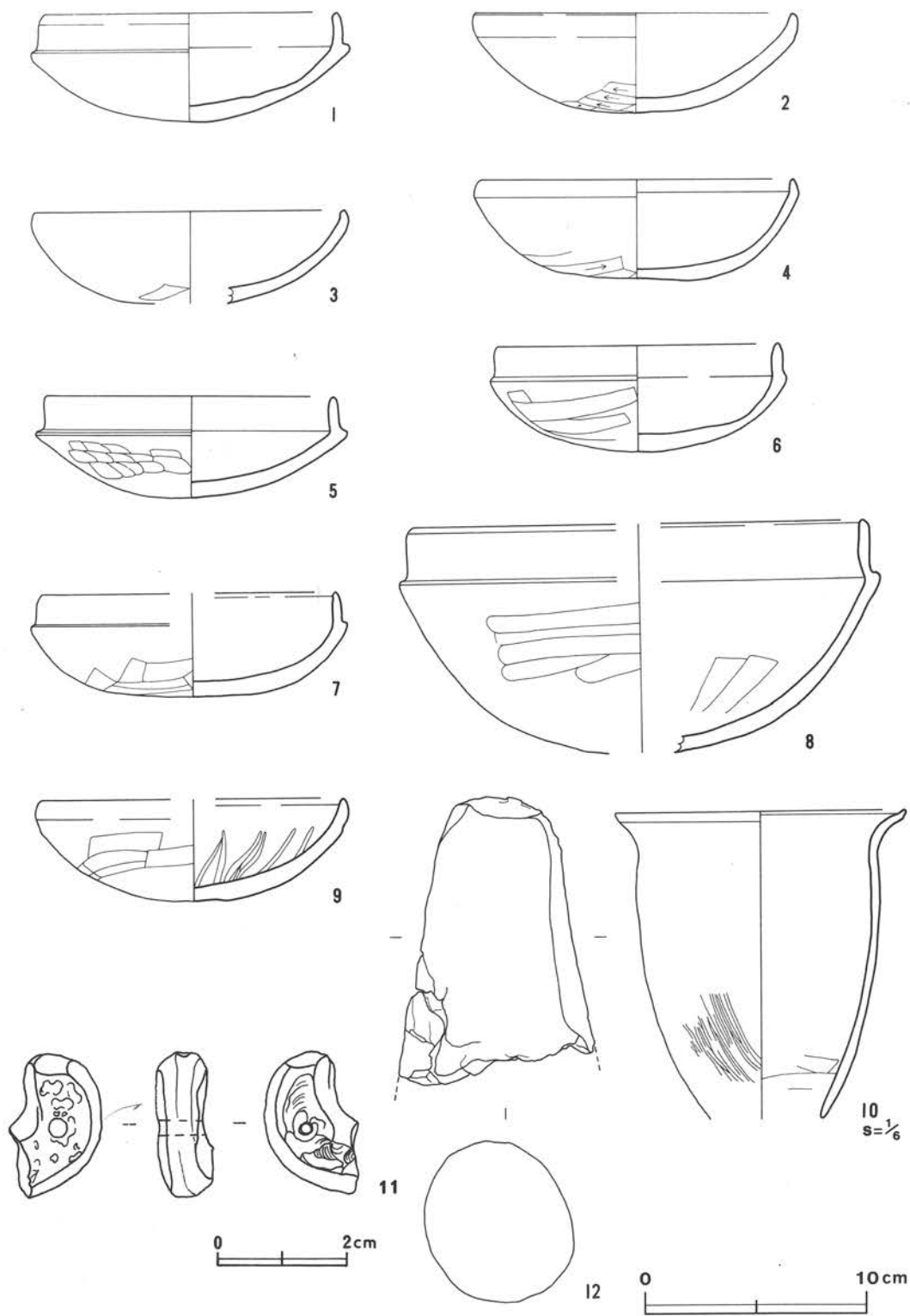
覆土は、上層に少量のローム粒子や極少量の焼土粒子を含む黒褐色土、下層に少量のローム粒子・ロームブロックや極少量の焼土粒子を含む黒褐色土、壁際に少量のローム粒子・ロームブロックや極少量の焼土粒子を含む暗褐色土、中量のローム粒子や極少量の炭化粒子を含む黒褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層で自然堆積している。

遺物は、覆土から土師器片535片、剥片1点、自然礫15点が出土し、北西壁中央部の床面からメノウ製の勾玉（第13図11）や坏形土器（第13図5）、東コーナー部から、甑形土器（第13図10）や坏形土器（第13図4）が出土している。カマドの南側床面から支脚（第13図12）や坏形土器2点（第13図1・3）が出土し、カマド東側から坏形土器3点（第13図2・8・9）、カマド西側より坏形土器2点（第13図6・7）が出土している。

本跡は遺構や遺物等から、古墳時代鬼高期に比定される住居跡と思われる。



第12图 第3号住居跡実測图



第13图 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第13図 1	坏 土師器	A 13.2 B 5.0	丸底。体部は内彎し、口縁部との境に丸味のある稜をもつ。口縁部はやや直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 内面・体部外面ヘラナデ。	砂粒・細礫・雲母 にぶい黄褐色 普通	P-26 98% カマド南側
2	坏 土師器	A 14.2 B 4.6	丸底。体部は内彎し、口縁部との境に丸味のある稜をもつ。口縁部は内彎して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。 内面ヘラナデ、体部外面ヘラ 削り。	砂粒・細礫・雲母 にぶい橙色 良好	P-27 95% カマド東側
3	坏 土師器	A 14.0 B [4.3]	底部欠損。体部は内彎し、口縁部はやや内傾する。	内面は剝離のため調整不明。 体部外面ヘラナデ。	砂粒・細礫 にぶい褐色 普通	P-28 90% カマド南側
4	坏 土師器	A 14.1 B 4.6 C 4.2	平底。体部は内彎し、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。 内面ヘラナデ、体部外面ヘラ ナデ、底部ヘラ削り。	砂粒・細礫・雲母 にぶい褐色 良好	P-29 90% 東コーナー
5	坏 土師器	A 12.9 B 4.9	丸底。体部は内彎し、口縁部との境に丸味のある稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 内面ヘラナデ、体部外面ヘラ 削り後ヘラナデ。	砂粒・細礫 浅黄褐色 良好	P-30 97% 北西壁中央
6	坏 土師器	A 12.6 B 4.7	丸底。体部は内彎し、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はほぼ直立して、口縁部尖る。	口縁部内・外面横ナデ。 内面ナデ、体部外面ヘラ削り。	砂粒・細礫 にぶい橙色 普通	P-31 50% カマド西側
7	坏 土師器	A (13.2) B 4.7 C 2.0	平底。体部は内彎し、口縁部との境に丸味のある稜をもつ。口縁部は直立し、口縁部尖る。	口縁部内・外面横ナデ。 内面ナデ、体部外面ヘラ削り 後ヘラナデ。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-32 50% カマド西側
8	大形坏 土師器	A (20.2) B [10.4]	底部欠損。体部は内彎し、口縁部との境に丸味のある稜を有し、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内面 ヘラナデ、体部外面ヘラ削り。 ヘラナデ。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-33 40% カマド東側
9	坏 土師器	A (13.6) B 4.6	丸底。体部は内彎し、口縁部との境に不明瞭な稜を有し、口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。内面 暗文状のヘラ磨き、体・底部 外面ヘラ削り。	砂粒・細礫・雲母 黒色 普通	P-34 55% カマド東側
10	甗 土師器	A 26.0 B 28.0	無底式。胴部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口縁部をつまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。頸部 外面横ナデ、内面ヘラナデ。 胴部中央から下半部ヘラ削り。	砂粒・細礫・雲母 にぶい橙色 普通	P-35 80% 東コーナー

土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	法量				出土地点	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第13図 12	支脚	DPI	(13.2)	8.8	—	(499.0)	SI-3	橙 色

勾玉計測表

図版番号	長さ(cm)	幅(cm)	腹部幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(mm)	出土地点
第13図 11	2.2	1.4	1.2	0.9	3.1	3.0	SI-3

第4号住居跡（第15図）

本跡は、調査区のC3c5区を中心に確認され、第3号住居跡の南西3mほどに位置している。住居跡の北コーナー部で第2号墓墳、北壁中央部付近に第3号墓墳が重複している。新旧関係は本跡を第1・2号墓墳が切っているため、本跡が古いと考えられる。平面形は推定で長軸7.25m、短軸4.75mの不整長方形を呈し、長軸方向はN-27°-Eを指している。壁は、北西壁と南西壁が存在し、緩斜面にあるため北東壁の大半と南東壁の立ち上がりが流失し不明である。残存する壁高は4~18cmほどで、緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、中央部付近は踏み固められている。床面積は、推定で32.98㎡である。ピットは4か所検出され、P₁~P₄は上端直径24~73cm、深さ14~78cmである。P₁~P₃は、規模・配置等から支柱穴の可能性があると判断される。P₄は、用途不明のピットである。貯蔵穴は南西コーナー部に位置し、平面形は不整楕円形を呈し、規模は、長径126cm、短径91cm、深さ60cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

炉は検出されていない。

覆土は、南西側を中心に浅く堆積していて、少量のローム粒子や極少量の焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土及び明褐色土が堆積している。貯蔵穴の覆土や住居跡の北西壁際床面より焼土・炭化材が検出されていることから、焼失家屋と考えられる。

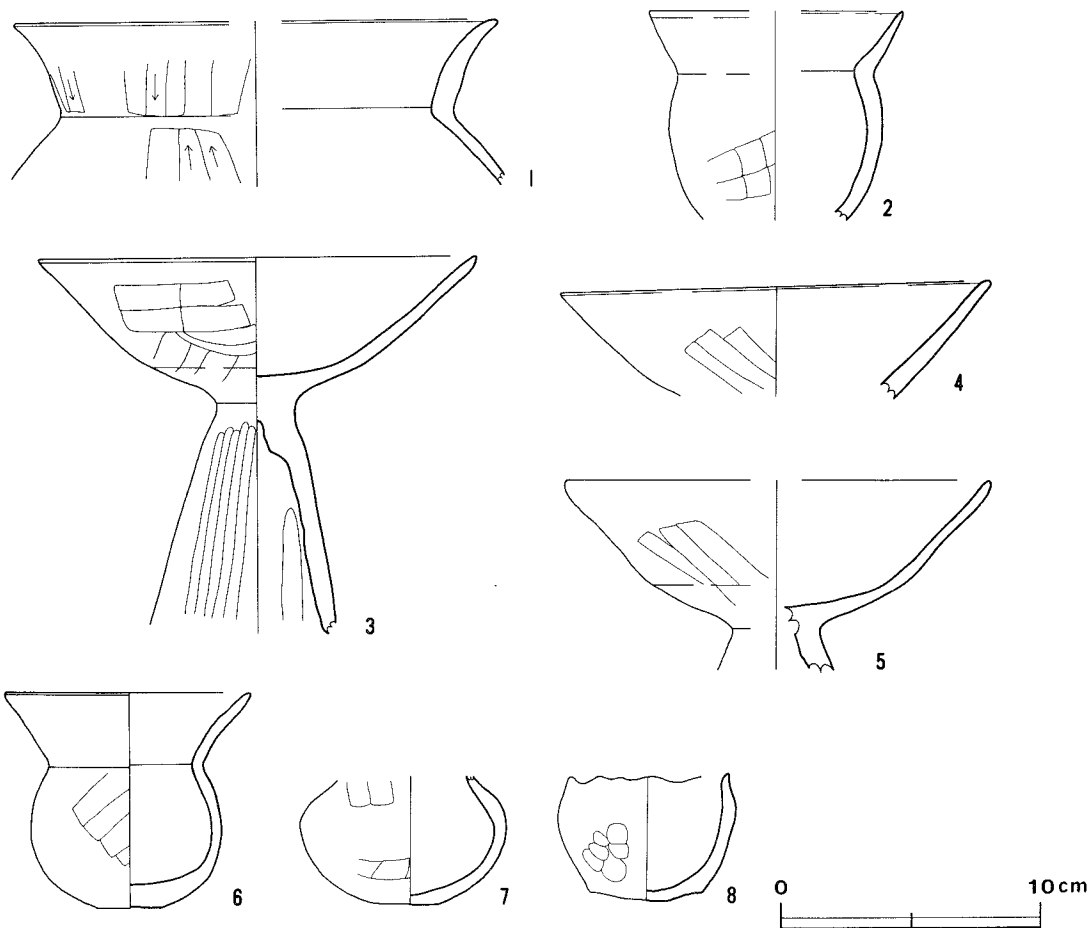
遺物は、覆土から土師器片218片が出土している。床面中央から甕形土器（第14図1）が出土し、北西壁際の床面からは埴形土器（第14図6）が出土している。南西コーナー床面から小形甕形土器（第14図2）や高環形土器3点（第14図3~5）と小形鉢形土器（第14図8）が出土し、北コーナー床面から埴形土器（第14図7）が出土している。

本跡は遺構や遺物等から、古墳時代和泉期に比定される住居跡と思われる。

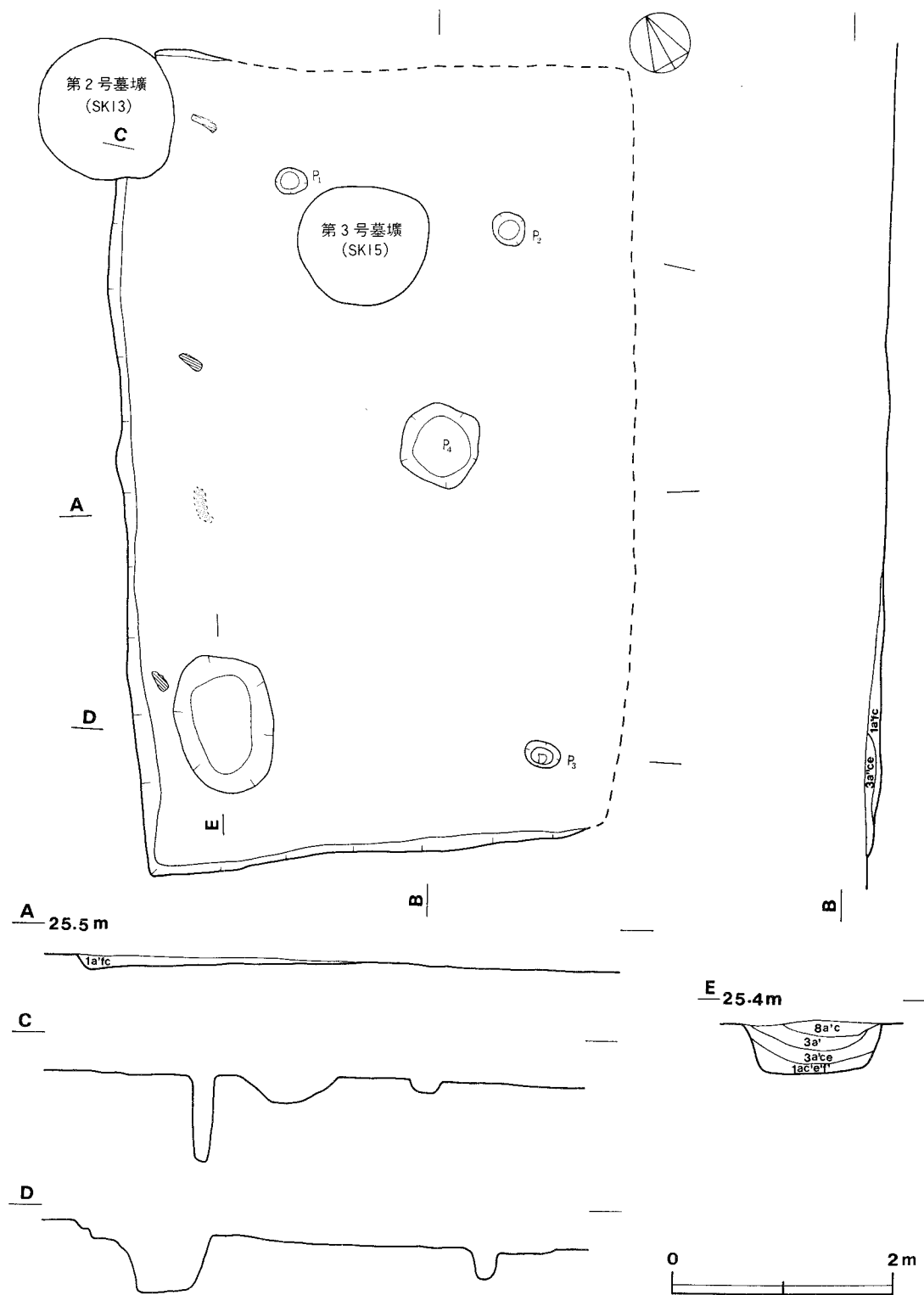
第4号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第14図 1	甕 土師器	A (18.5) B (6.5)	胴下部欠損。頸部はくびれ、口縁部は外反して、口縁端部でさらにそる。	口縁部内・外面ヘラナデ後横ナデ。頸部ヘラ削り。	砂粒・細礫・雲母 赤褐色 普通	P-36 10% 床面中央
2	小形甕 土師器	A (9.8) B (8.2)	胴部下半欠損。胴部は内彎し、頸部はゆるいくびれを有し、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部ヘラナデ。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-37 25% 南西コーナー
3	高環 土師器	A 16.9 B (14.7)	裾部欠損。脚部は中空で膨らみ坏部は、底部にふい稜を有し外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部ヘラナデ。脚部ヘラ磨き。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-38 80% 南西コーナー
4	高環 土師器	A 16.6 B (4.6)	脚部欠損。坏部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。内面剝離のため調整不明。体部ヘラ削り。	砂粒・細礫・雲母 ふい赤褐色 不良	P-39 40% 南西コーナー

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第14図 5	高坏 土師器	A (16.4) B [7.4]	脚部欠損。坏部は底部に稜を有し、体部はやや内彎気味で、口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ、内面剥離のため調整不明。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-40 20% 南西コーナー
6	埴 土師器	A 9.6 B 8.4 C 2.4	平底。胴部は内彎し、頸部はゆるいくびれを有し、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。内面ナデ。胴部ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-41 90% 北西壁際
7	埴 土師器	B [5.0] C 2.4	上半部欠損。平底。胴部は内彎して立ち上がる。	胴部はヘラケズリ後ヘラナデ。内面ナデ。	砂粒・細礫・雲母 にぶい黄褐色 普通	P-42 70% 北コーナー
8	小形鉢 土師器	A 6.2 B 5.0 C 4.4	平底。底部中央はやや突出し、胴部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや内傾し、波状を呈する。	胴部外面は軽いヘラナデ。内面ナデ。	砂粒・細礫・雲母 にぶい黄褐色 不良	P-43 95% 南西コーナー



第14図 第4号住居跡出土遺物実測図



第15图 第4号住居迹实测图

第5号住居跡（第17図）

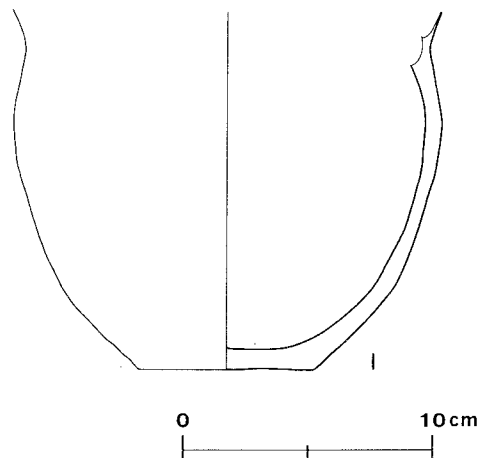
本跡は、調査区のB4e3区を中心に確認され、西側12.0mほどに第21号土坑が位置している。平面形は、推定で長軸7.63m、短軸7.12mの隅丸方形を呈している。主軸方向はN-45°-Wを指している。壁はロームで硬く、緩斜面にあるため南東壁と北東壁の大半の立ち上がりが流失し不明であるが、他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。残存する壁高は、4~18cmである。壁溝は壁際に沿って巡っているが、北東壁では溝が貯蔵穴を囲み「?」ようにのびて途切れているため、間仕切の溝と思われる。溝の規模は、上幅9~27cm、下幅3~11cm、深さ4~11cmほどである。床面はほぼ平坦で、全体的に硬く締まっており、床面積は、41.71m²である。ピットは5か所検出され、上端直径35~62cm、深さ14~44cmである。P₁~P₄は、形状や規模及び方形に配置されることから本跡の支柱穴と判断され、P₅は、P₂とP₃の間にあるため出入りに伴うものと思われる。貯蔵穴は北コーナー部に位置し、平面形は、楕円形を呈し、規模は、長径110cm、短径92cm、深さ20cmである。底部は凹凸していて、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

カマドは北西壁の中央部から北コーナーよりに付設され、遺存度は良好である。規模は、長さ130cm、幅91cm、焚口幅40cmほどである。カマドは、山砂や白色粘土にロームブロックを加えて構築されている。焚口部の天井部は崩落しているが、径30cmの甑等の掛口と思われる窪みが確認されている。火床部は、床面を5cmほど掘り込みが構築され、焼き締まって硬くブロック化している。煙道部は、壁を95cmの幅で、屋外へ32cmほど掘り込んで構築されている。

覆土は、中量のローム粒子や少量の焼土粒子を含む黒褐色土が主体で、壁際に小~中量のローム粒子や極少量の焼土粒子を含む暗褐色土が堆積している。

遺物は少なく、覆土から土師器片76片と自然石1点が出土している。南西壁際中央付近の床面から甕形土器（第16図1）が出土している。

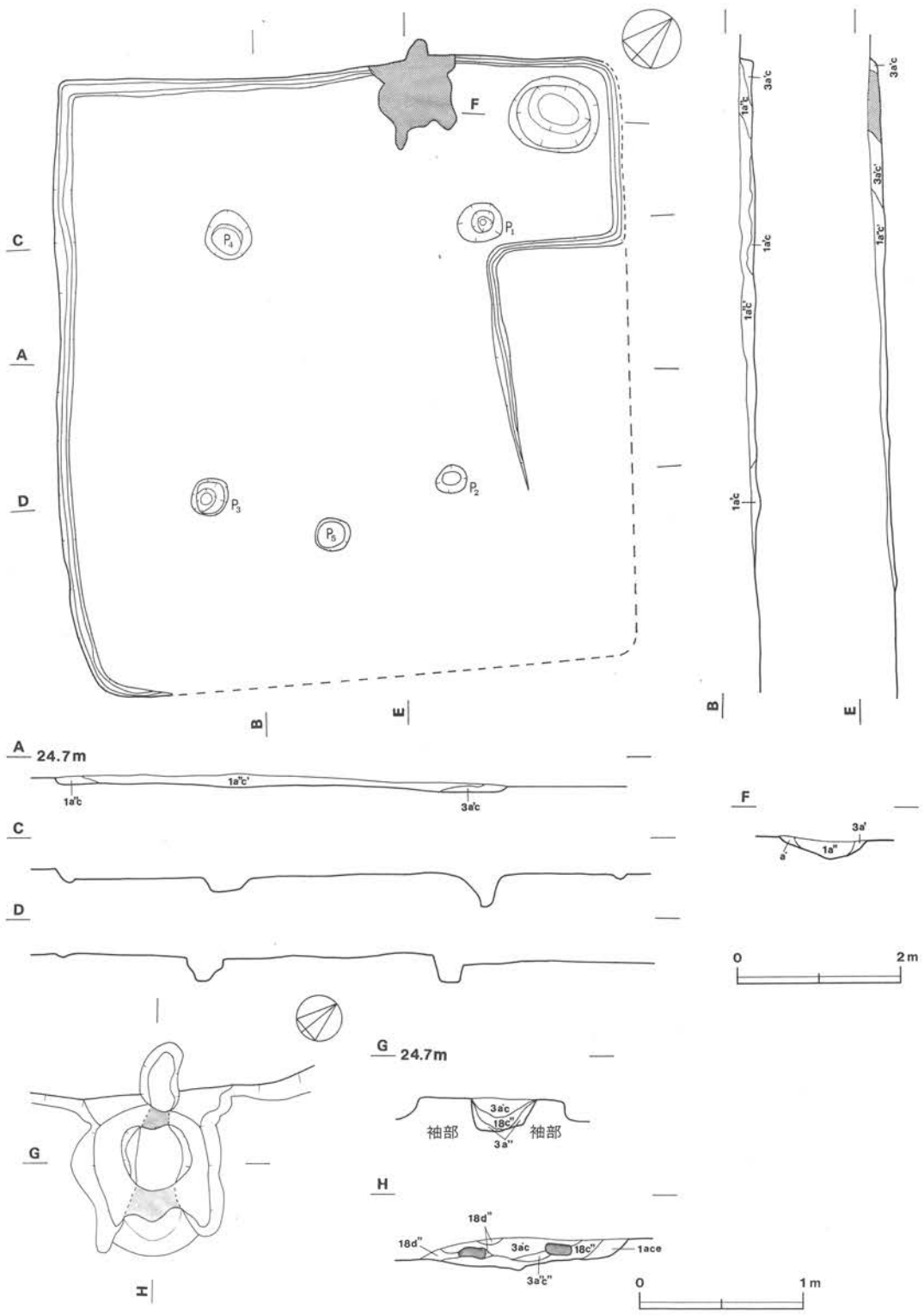
本跡は遺構や遺物等から、古墳時代鬼高期に比定される住居跡と思われる。



第16図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 1	甕 土師器	B (14.4) C 7.0	胴部上半欠損。平底。胴部は内彎し、やや外反する。	内面ナデ。胴部外面は剥離のため調整不明。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-44 50% 南西壁際中央



第17图 第5号住居跡実測図

(2) 土坑

土坑として調査した遺構は21基であるが、本項ではその内17基の土坑について主なものを記述し、第7号・13号・15号・16号土坑は墓墳と判断できたので、それぞれ第1（SK-7）・2（SK-13）・3（SK-15）・4（SK-16）号墓墳として別項で扱い、他は遺構一覧表の中で掲載した。

第1号土坑（第18図）

本跡は、調査区の西側B2g1区に確認され、第1号住居跡の南東側11mほどに位置している。本跡の南西部は第3号土坑と重複している。新旧関係は不明であるが、平面形は不整長方形を呈し、規模は長軸1.45m、短軸1.04m、深さ0.58mである。壁はロームで硬く、外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦で、硬く締まっている。

覆土は、少量のローム粒子を含む褐色土が堆積している。

遺物は、縄文土器片数片が覆土上層から出土しているが、流れ込みと思われる。

第11号土坑（第18図）

本跡は、調査区の南側B2j9区に確認され、第1号溝と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は、不整楕円形を呈し、規模は、長径0.68m、短径0.54m、深さ0.50mである。壁はロームで硬く、ほぼ垂直に立ち上がっており、底面は凹凸している。

覆土は、上層に少～多量のローム粒子や極少量の焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土、中層に多量の焼土粒子・焼土ブロックを含む赤褐色土、下層に極少量のローム粒子・焼土粒子を含む褐色土、また、東壁際には少量の焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を含む暗赤褐色土が自然堆積している。

遺物は覆土から、土師器片が1片出土している。

第14号土坑（第18図）

本跡は、調査区の中央やや東よりのB3g4区に確認され、第3号住居跡の北西16mほどに位置している。

平面形は、不整円形を呈し、規模は、長径0.93m、短径0.83m、深さ0.38～0.53mである。壁はロームで硬く、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦で硬く締まっている。

覆土は、少～多量のローム粒子・極少量の焼土粒子を含む褐色土、暗褐色土が堆積している。

遺物は、底面付近から、甕形土器（第20図1）、小形鉢形土器2点（第20図2・3）が出土している。本跡は、古墳時代和泉期に比定される土坑と思われる。

第19号土坑（第19図）

本跡は、調査区の東側B3g9区に確認され、第3号住居跡の北東側13mほどに位置している。

平面形は、不整円形を呈し、規模は、長径1.07m、短径0.96m、深さ0.21～0.25mである。壁は、ロームで硬く外傾して立ち上がっている。底面は、踏み固められているが、南から北にかけて緩やかに傾斜している。

覆土は、7層からなり、少～多量のローム粒子と中～極少量の焼土粒子・極少量の炭化粒子、炭化物を含む暗褐色土・明褐色土・灰褐色土・明赤褐色土が堆積している。

遺物は、土師器片9片が出土し、底面から壺形土器（第20図4）が出土している。

本跡は、古墳時代に比定される土坑と思われる。

第21号土坑（第19図）

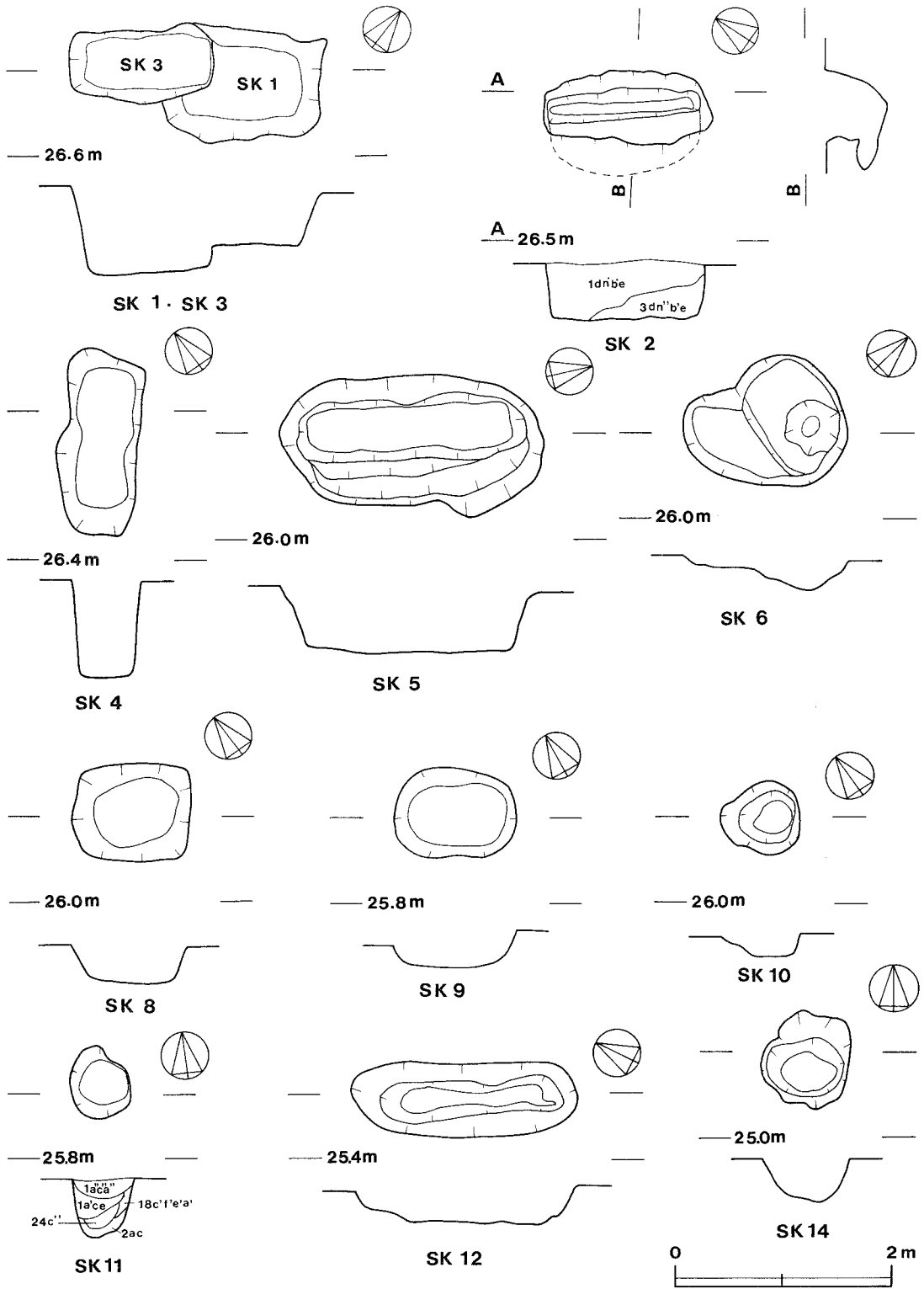
本跡は、調査区のB3f0区を中心に確認され、第5号住居跡の南西9mほどに位置している。

平面形はほぼ円形を呈し、規模は、長径0.78m、短径0.74m、深さ0.28mである。壁はロームで硬く、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は凹凸があるが、硬く踏み固められている。

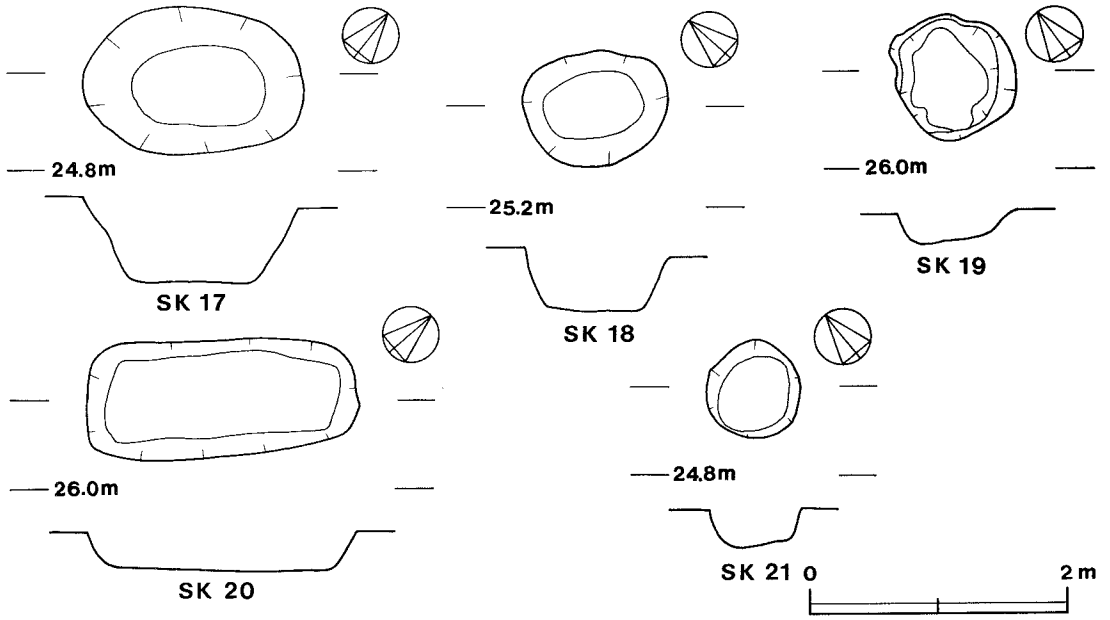
覆土は、少～多量のローム粒子や極少量の焼土粒子・炭化粒子を含むにぶい褐色土が堆積している。

遺物は、覆土から土師器片42片が出土し、覆土下層から土師器の埴形土器（第20図5）、高環形土器の脚部（第20図6）が出土している。

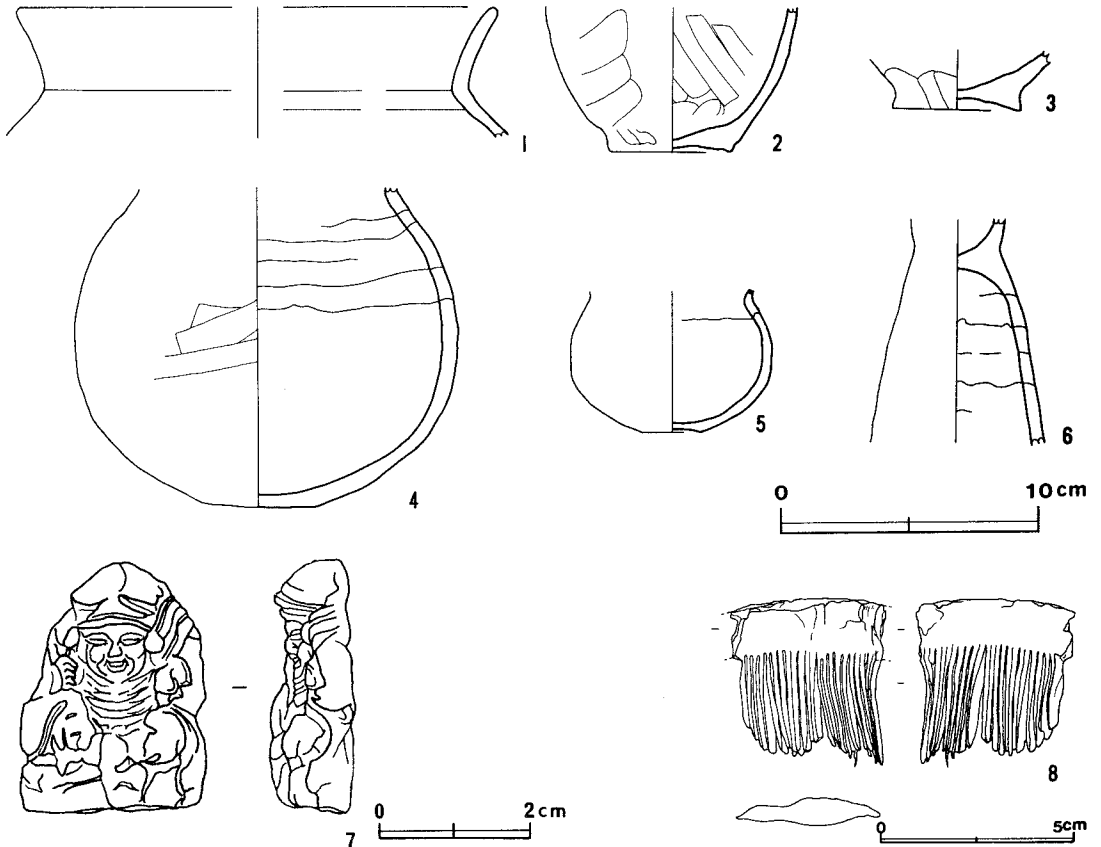
本跡は、古墳時代和泉期に比定される土坑と思われる。



第18图 土坑实测图(1)



第19図 土坑実測図(2)



第20図 土坑・墓壙出土遺物実測図

土坑出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 1	甕 土師器	A (18.4) B (5.1)	胴部欠損。頸部はくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部外面横ナデ。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	SK-14 P-53 10%
2	小形鉢 土師器	B (5.7) C 4.7	上半部欠損。粘土を貼り付けて、底部を突出させた平底。胴部は内彎している。	底部ヘラナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・細礫 明褐色 普通	SK-14 P-45 10%
3	小形鉢 土師器	B (2.4) C 5.0	底部片。粘土を貼り付けて、底部を突出させた平底。	底部ヘラナデ。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	SK-14 P-46 10%
4	壺 土師器	B (12.0) C 4.4	口縁部欠損。平底。胴部はほぼ球形を呈する。	胴部外面ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・細礫・雲母 にぶい赤褐色 普通	SK-19 P-47 70%
5	埴 土師器	B (5.6) C 2.4	胴部上半欠損。平底。胴部は内彎して立ち上がる。底面中央窪み。	剝離のため調整不明、内面に輪積痕が残る。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	SK-21 P-48 30%
6	高 坏 土師器	B (8.7)	坏部、裾部欠損。脚部は中空で膨らむ。	剝離のため調整不明、脚部内面に輪積痕が残る。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	SK-21 P-52 30%

表2 土坑一覧表

土坑番号	位置	長軸方向 (長径方向)	平面形	規 模		壁 面	底面	覆土 状態	出土遺物	備 考
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(m)					
1	B2g1	N-51°-E	不整長方形	1.45×1.04	0.58	外 傾	平 坦	自 然		SK-3と重複
2	B2g1	N-35.5°-W	隅丸長方形	1.54×0.69	0.57	垂 直	〃	〃		
3	B2g1	N-52°-E	〃	1.34×0.69	0.84	外 傾	〃	〃		SK-1と重複
4	B1i0	N-47°-E	〃	1.69×0.73	0.92	垂 直	〃	〃	土師器片1片	
5	B2f5	N-16°-E	楕 円 形	2.43×1.22	0.63	外 傾	〃	〃		
6	B2g5	N-31°-E	不整楕円形	1.50×1.17	0.11~0.29	〃	凹 凸	〃		
7	B2g7	N-52.5°-E	不整長方形	2.40×1.67	0.95~0.97	オーバ ーハ ン グ	平 坦	〃		第1号墓墳
8	B2i7	N-54°-W	隅丸長方形	1.09×0.93	0.35~0.47	外 傾	〃	〃		
9	B2h9	N-63.5°-W	楕 円 形	1.14×0.82	0.23~0.28	〃	〃	〃		
10	B2i0	—	不 整 円 形	0.74×0.67	0.21	〃	〃	〃		
11	B2j9	N-12°-E	不整楕円形	0.68×0.54	0.50	垂 直	凹 凸	〃		SD-1と重複
12	B3i3	N-26°-W	楕 円 形	2.08×0.69	0.30~0.33	外 傾	平 坦	〃	土師器片4片	
13	C3b5	—	不 整 円 形	1.33×1.26	0.95	垂 直	〃	〃	人骨出土 櫛	第2号墓墳
14	B3g4	—	〃	0.93×0.83	0.38~0.53	〃	〃	〃	土師器片37片	
15	C3c5	—	〃	1.17×1.05	0.61	〃	〃	人 為	人骨出土 寛永通寶	第3号墓墳

土坑 番号	位置	長軸方向 (長径方向)	平面形	規 模		壁 面	底面	覆土 状態	出土遺物	備 考
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(m)					
16	C3a6	—	円 形	1.25×1.25	0.80~0.83	垂 直	凹 凸	人 為	人骨出土 寛永通寶	第4号墓墳
17	B3j9	N-57°-E	楕 円 形	1.74×1.15	0.62	外 傾	平 坦	自 然	土師器片 9片	
18	B3i8	N-60°-W	〃	1.11×0.89	0.48	〃	〃	〃		
19	B3g9	—	不 整 円 形	1.07×0.96	0.21~0.25	〃	〃	〃		
20	B3g8	N-42.5°-E	隅丸長方形	2.10×0.91	0.32	〃	〃	〃	土面子 1 土師器片 6片	
21	B3f0	—	円 形	0.78×0.74	0.28	垂 直	凹 凸	〃		

(3) 墓墳

第1号墓墳 (第21図)

本跡は、調査区のほぼ中央部の西側に確認され、第6号土坑の南東側5mほどに確認されている。確認面の一部に攪乱が見られるが、平面形は不整長方形を呈し、規模は長軸2.40m、短軸1.67m、深さ0.95~0.97mである。長軸方向はN-52.5°-Eを指している。壁はロームで硬く、ほぼ垂直に立ち上がっているが、北西壁の下位には径10cmほどの掘り込みが確認されている。壁際直下には幅2~10cmほどの溝が全周し、南西から北西にかけての溝に雲母片岩が粉状になって残っており、南西壁直下の一部の溝には粘土が棒状に張り付けられている。底面はほぼ平坦で、硬く締まっている。

覆土上層は、少量のローム粒子や極少量の焼土粒子を含む黒褐色土、中層は極少量のローム粒子を含む黒褐色土と、その下位にロームブロックの層がある。下層は、多量のローム粒子・ロームブロックを含む褐色土が堆積している。

遺物は少なく、覆土より土師器片15片、須恵器片10片、陶器片5片、雲母片岩60点が出土している。

遺構の性格については、形状や裏込めに使われたと思われる粘土と雲母片岩の痕跡等から推定すると、墓墳と考えられるが、時期は明確にとらえることはできない。

第2号墓墳 (第21図)

本跡は、調査区の東側C3b5区に確認され、第4号住居跡と重複している。新旧関係は、本跡が第4号住居跡の北西壁を切っているため、本跡が新しいと考えられる。

平面形は不整円形を呈し、規模は長径1.33m、短径1.26m、深さ0.95mである。壁はロームで硬く、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、硬く締まっている。

覆土は、少~多量のローム粒子、極少量の焼土粒子・炭化物を含むにぶい褐色土、褐色土が堆

積している。

底面からは、人の頭骨が崩れた状態で、また背椎骨が直立して出土している。漆塗りの櫛（第20図8）が半分朽ち果てた状態で出土している。

本跡は、江戸時代の墓塚と思われ、人骨については、櫛が伴うことから女性と思われる。

第3号墓塚（第21図）

本跡は、調査区の東側C3c5区に確認され、第4号住居跡と重複している。新旧関係は、本跡が第4号住居跡の床面を切っているため、本跡が新しいと考えられる。

平面形は、不整形円形を呈し、規模は、長径1.17m、短径1.05m、深さ0.61mである。壁はロームで硬く、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦で、硬く締まっている。

覆土は、少～中量のローム粒子や極少量の炭化物を含む暗褐色土、褐色土が人為堆積している。

底面からは、頭を東に向けた人骨1体分が検出されている。頭骨・上腕骨・大腿骨は、しっかりした状態で出土しているが、頭骨の一部が欠損し、足の骨は折れている状態で出土している。

遺物は頭骨の下から寛永通寶が5枚出土している。これらの出土状態から江戸時代の墓塚と思われる。

第4号墓塚（第21図）

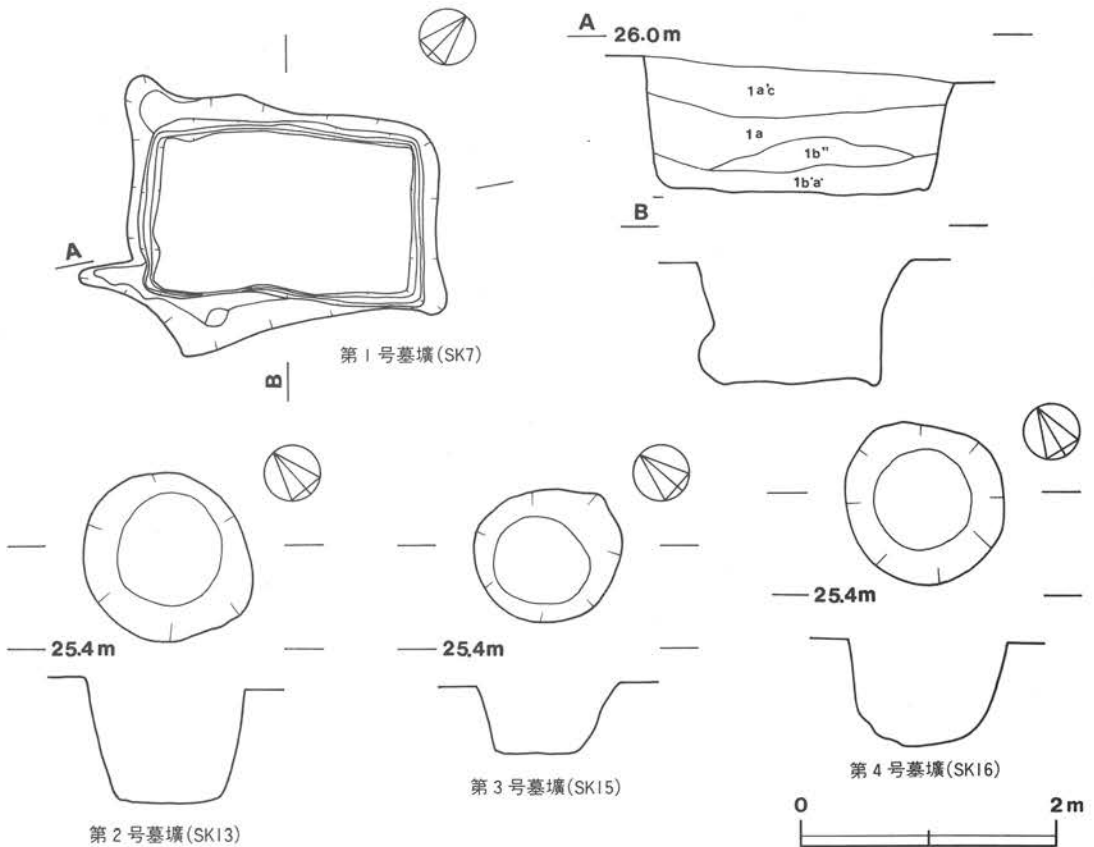
本跡は、調査区の東側C3d6区に確認され、第4号住居跡の南東壁に隣接している。

平面形は円形を呈し、規模は、径1.25m、深さ0.80～0.83mである。壁はロームで硬く、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は粘土層で、やや凹凸である。

覆土は一部に攪乱があるが、少～中量のローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土・黒褐色土・極暗褐色土・褐色土が人為堆積している。

遺物は、人骨が形を成さない状態で出土し、人骨の付近から寛永通寶5枚が出土している。

本跡は、人骨と古銭の出土から、江戸時代の墓塚と考えられる。



第21図 墓墳実測図



(4) 溝

第1号溝 (第22図)

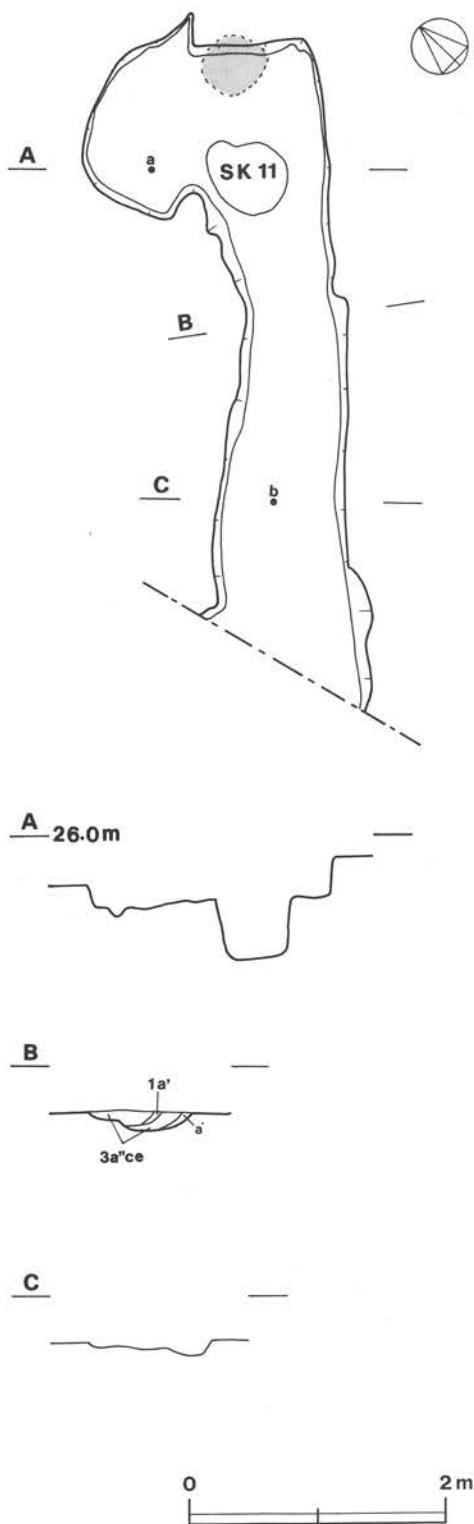
本溝は、調査区のB2j9区を中心に確認された。溝はほぼ南西から北東方向に延びている。溝の北東端は途切れて、南西端は、調査区域外に延びている。溝の北東部で第11号土坑と重複しているが、本溝が切られているため、本溝の方が古いと考えられる。

溝の規模は、全長4.8m、上幅0.68~1.91m、下幅0.59~1.85m、深さ0.06~0.22mである。断面形は「〜」を呈しており、壁は北西壁が緩やかに立ち上がるほかは、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は北西部で凹凸しているほかは、ほぼ平坦である。溝底面のレベルは北西部のa点で25.45m、南西部のb点で25.59mである。

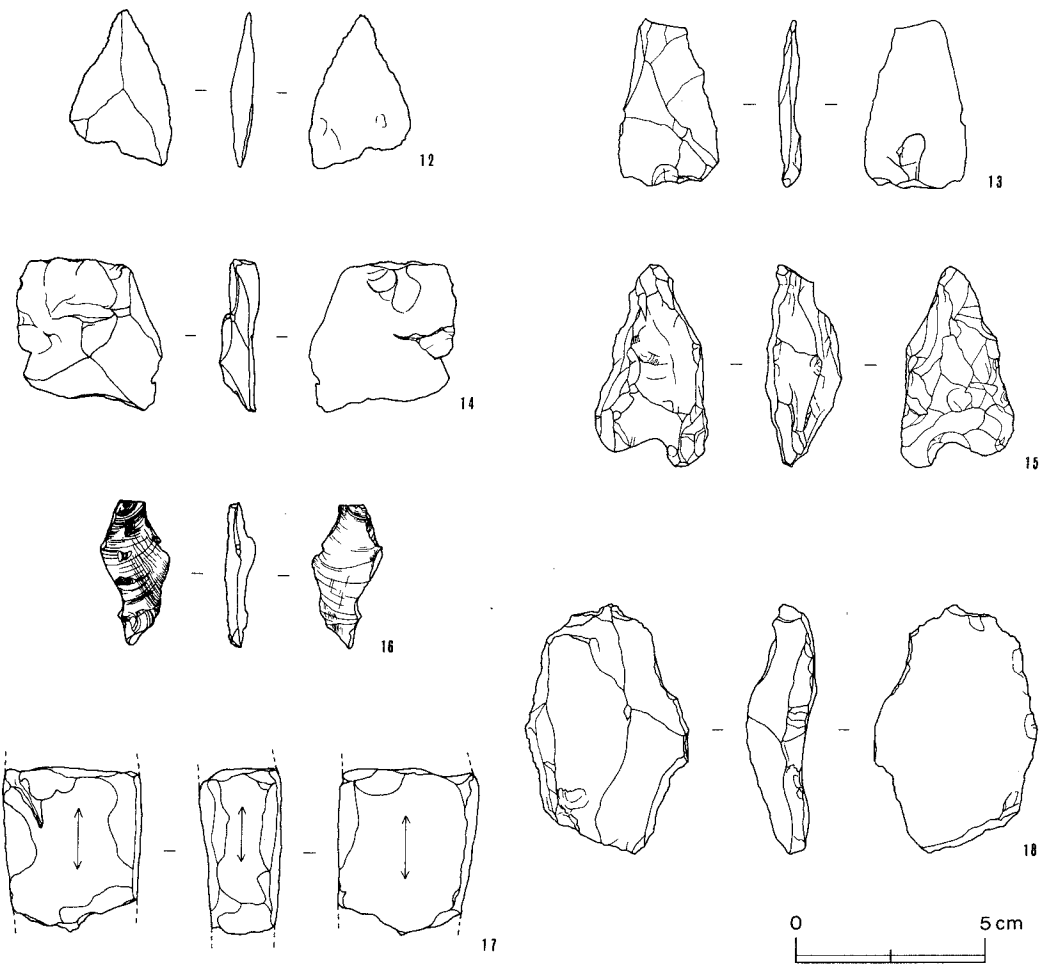
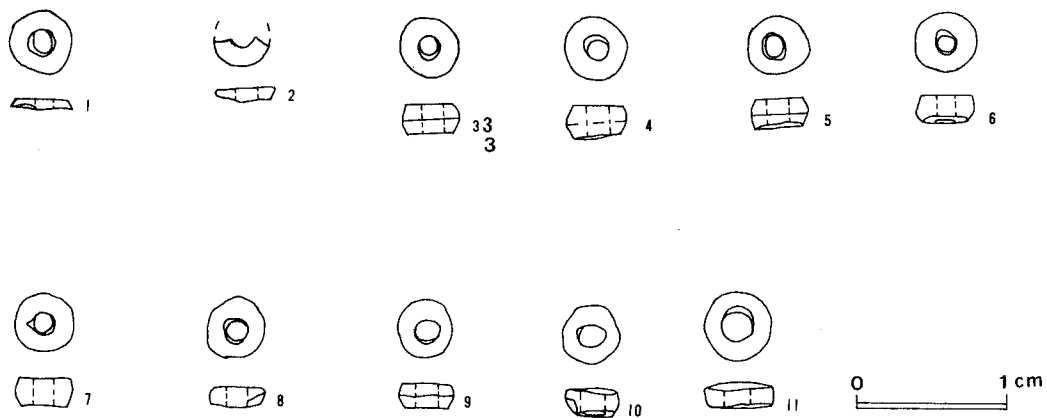
覆土は、少~中量のローム粒子を含む暗褐色土が主体で、南西側に少量のローム粒子を含む黒褐色土が一部堆積している。北東壁際から円形(径48cm)の焼土を出土しているが、壁のロームが焼けていないことから、本溝よりも新しい焼土と思われる。

遺物は、中央部の覆土から白玉が8個出土しており、溝の周囲のローム面からも白玉2個が出土しているが、それらの白玉は同一時期のものと考えられる。

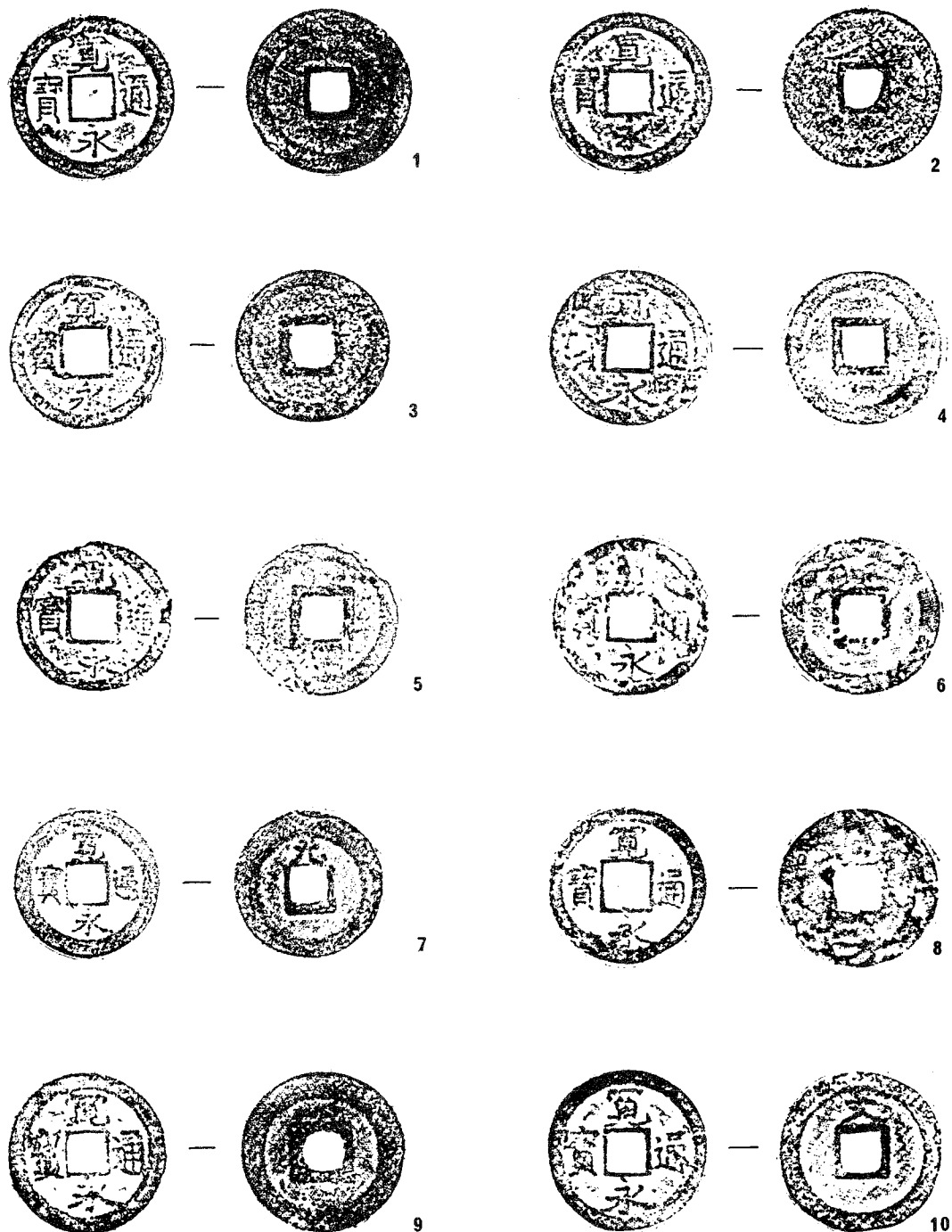
本溝は、時期や性格は不明である。



第22図 第1号溝実測図



第23图 白玉・石器实测图



第24圖 古錢拓影圖

白玉計測表

図版番号	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	出土地点	図版番号	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	出土地点
第23図 1	4.0	0.8	1.3	グリッド	7	4.0	2.0	1.3	SD-1
2	4.0	1.0	1.6	〃	8	3.8	1.5	1.5	〃
3	4.0	2.0	1.5	SD-1	9	3.8	1.8	1.5	〃
4	4.0	2.1	1.3	〃	10	3.8	1.8	1.5	〃
5	4.0	2.0	1.3	〃	11	4.5	1.5	2.0	SI-1
6	4.0	1.8	1.3	〃					

石器観察表

図版番号	器 種	法 量				石 質	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第 23 図 12	剝 片	4.1	2.7	0.6	4.1	砂 岩	SI-1	
13	剝 片	4.4	2.7	0.6	5.3	頁 岩	SI-3	
14	剝 片	4.0	3.8	0.8	11.3	〃	B3g3	
15	剝 片	5.4	3.0	2.0	26.3	黒曜石	B3e5	
16	剝 片	3.8	1.8	0.8	2.6	〃	B2j0	
17	砥 石	(4.5)	4.0	2.1	48.3	砂 岩	B2c7	
18	彫 器	6.6	4.3	1.9	43.7	頁 岩	SK-18	

古銭一覧表

図版番号	銭 名	初 鑄 年(西暦)	鑄造地名	出土地点	備 考
第24図 1	寛永通寶	寛文 8 年 (1668)	日本	第 3 号墓墳	大様 (1765) M 1
2	〃	〃	〃	〃	〃 M 2
3	〃	〃	〃	〃	小様 (1765) M 3
4	〃	〃	〃	〃	〃 M 4
5	〃	〃	〃	〃	〃 M 5
6	〃	〃	〃	第 4 号墓墳	〃 M 6
7	〃	〃	〃	〃	小頭通背元 (1741) M 7
8	〃	〃	〃	〃	小様 (1765) M 8
9	〃	〃	〃	〃	〃 M 9
10	〃	〃	〃	〃	鳥屋文 (1668) ? M10

3 まとめ

今回の調査で検出された5軒の住居跡の時期は、出土遺物、遺構の形態から和泉期と鬼高期に比定することができる。

ここでは古墳時代の和泉期及び鬼高期の住居跡と土坑及び出土遺物について概観し、まとめたい。

(1) 和泉期

和泉期のものと考えられる住居跡は3軒で、遺跡の西端に第1・2号住居跡、南側に第4号住居跡が検出されている。3軒の住居跡は、鬼高期の住居跡と比較すると規模はやや小さい。床面積は、壁の一部が不明の住居跡もあるので推定値も含めるが、最も広いものが第2号住居跡の36.45㎡であり、他の住居跡は、概ね30㎡である。支柱穴4か所をもつ第2号住居跡が基本と考えられるが、第4号住居跡は遺存状態が悪く支柱穴が不明である。また、貯蔵穴は各住居跡の南コーナ一部及び南西コーナ一部から1か所ずつ検出されている。

炉は、地床炉であり第4号住居跡からは検出されていない。第1・2号住居跡の地床炉は、0.7×0.45mと0.7×0.46mでほぼ同規模である。位置は中央からやや西に偏り検出されている。

土坑は、第14・21号土坑の2基である。これらの土坑は、出土遺物から和泉期とらえられるが、この時期のもので近接する住居跡は第4号住居跡であるが、第14号土坑からは20mほど、第21号土坑からは32mほどに離れており住居跡との直接の関連性はないと思われる。性格等は不明である。

出土遺物は、すべて土師器である。極少量の出土である。器種としては、甕・壺・甑・鉢・高坏・坏・柑の7種が出土している。甕は、大形甕と小形甕や台付甕の3種類が認められ、口縁部はいずれも単純口縁である。胴部の調整は、縦方向のヘラ磨きやヘラ削りが主である。高坏はいずれの住居跡からも出土し、脚部は中空で膨らむタイプが主で、坏部の口径と器高がほぼ等しいことが特徴として上げられる。裾部は「ハ」の字状に開くものと、裾が長く延びるものがある。脚部外面の調整はヘラ磨きが施されている。

(2) 鬼高期

鬼高期のものと考えられる住居跡は2軒で、第3号住居跡が遺跡の南東側で、第5号住居跡が東端から検出されている。2軒とも和泉期の住居跡よりも大形で、一辺が概ね7～7.5mである。床面積は41～48㎡ほどである。主軸方向は、いずれも西にほぼ45°～48°に傾いている。ピットは、支柱穴4か所を基本とするが、第5号住居跡は、出入口と関連する柱穴を1か所もっている。カマドは北壁に山砂・粘土で構築されている。貯蔵穴は、カマドの右隣に位置しているが、第5号住居跡はやや北コーナ一部近くに位置している。

出土遺物は少なく土師器で須恵器は出土していない。器種は第3号住居跡から坏が9個体出土し、底部は丸底と平底があり、口縁部と底部の境に稜を有していることが特徴である。調整は、口縁部内・外面に横ナデ、底部はヘラ削り、内面はナデ調整である。甗は、無底式のもの1個体出土している。

当遺跡における和泉期や鬼高期の集落は、住居跡が数軒で、出土遺物が少ないため多くのことは明らかにすることはできないが、少なくとも花室川に面する当遺跡の台地上に人々が定住し、和泉期から鬼高期にかけて、数軒を単位とする小集落が形成されたものと思われる。また、各期の住居跡の時期差については、出土遺物が極少量の出土で不明確であるが、各住居跡とも切り合いや住居跡間が近接して存在していないことから、時期差を考えなくてもよいものと思われる。

表3 遺構別出土土器一覧表

住居跡	土 師 器									合 計	時 期
	甗	甗	坏	鉢	高 坏	壺	台付甗	埴	その他		
1	6	1		5	9	1	1	1		24	和泉期
2					1					1	〃
3		1	9							10	鬼高期
4	2			1	3			2		8	和泉期
5	1									1	鬼高期
合計	9	2	9	6	13	1	1	3		44	

表4 住居跡一覧表

遺跡名	住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規 模		床面	柱穴数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時 期	備 考
					長軸×短軸(m)	壁高(cm)							
寺家ノ後A	SI-1	B1d9	N-48°-E	方 形	5.71 × 5.65	11~29	平坦	5	炉	自然	縄文土器片4片, 土師器片716片, 陶器片5片	和泉期	
〃	SI-2	B1h8	N-60°-W	〃	6.28 × 5.95	3~29	〃	7	炉		縄文土器片1片, 土師器片38片, 陶器片1片	〃	
〃	SI-3	C3a7	N-48°-W	隅丸方形	7.51 × 7.43	8~52	〃	5	カマド	自然	土師器片535片	鬼高期	
〃	SI-4	C3c5	N-27°-E	不整長方形	(7.25) × (4.75)	4~18	〃	4			土師器片218片	和泉期	第2,3号基壇重複(SK-13-15)
〃	SI-5	B4e3	N-45°-W	隅丸方形	(7.63) × 7.12	4~18	〃	5	カマド		土師器片76片	鬼高期	
寺家ノ後B	SI-1	B3b1	N-78°-E	長 方 形	7.62 × 6.80	24~37	〃	9	炉	自然	土師器片530片, 須恵器片16片, 縄文土器片67片, 内耳土器片1片	和泉期	
〃	SI-2	B2f4	N-63°-W	方 形	6.76 × 6.58	32~41	〃	4	カマド	自然	土師器片151片, 須恵器片1片	鬼高期	第2号墳重複
〃	SI-3	B1g6	N-59°-W	〃	5.61 × 5.34	2~30	〃	4	炉		土師器片163片	和泉期	
〃	SI-4	B2g1	N-63°-E	〃	5.14 × 4.70	10~52	〃	4	炉	自然	土師器片129片	〃	第3号墳重複
十三塚B	SI-1	C1c7	N-30°-W	〃	7.52 × 7.44	20~57	〃	9	カマド	自然	土師器片88片	鬼高期	

第2節 寺家ノ後B遺跡

1 遺跡の概要

当遺跡は、土浦市永国字寺ノ後413-1ほかに所在し、寺家ノ後A遺跡と隣接し、東へ張り出した舌状台地に位置している。調査面積は5,600㎡で、現況は山林である。当遺跡の南側は大聖寺の墓地に面し、北西側に小支谷を挟んで十三塚B遺跡が所在している。

遺構は、古墳時代に比定される竪穴住居跡4軒ほか、古墳3基(方墳)、土坑13基、溝3条がほぼ遺跡の中央部から南側にかけて検出されている。

遺物は、土師器が主で埴形土器、甕形土器、甑形土器、坏形土器、高坏形土器等が出土している。須恵器は、古墳の周溝から長頸壺等が出土している。土坑・溝から少量の縄文土器・土師器が出土し、そのほか遺構外から、古銭・陶器片が出土している。

2 遺構と遺物

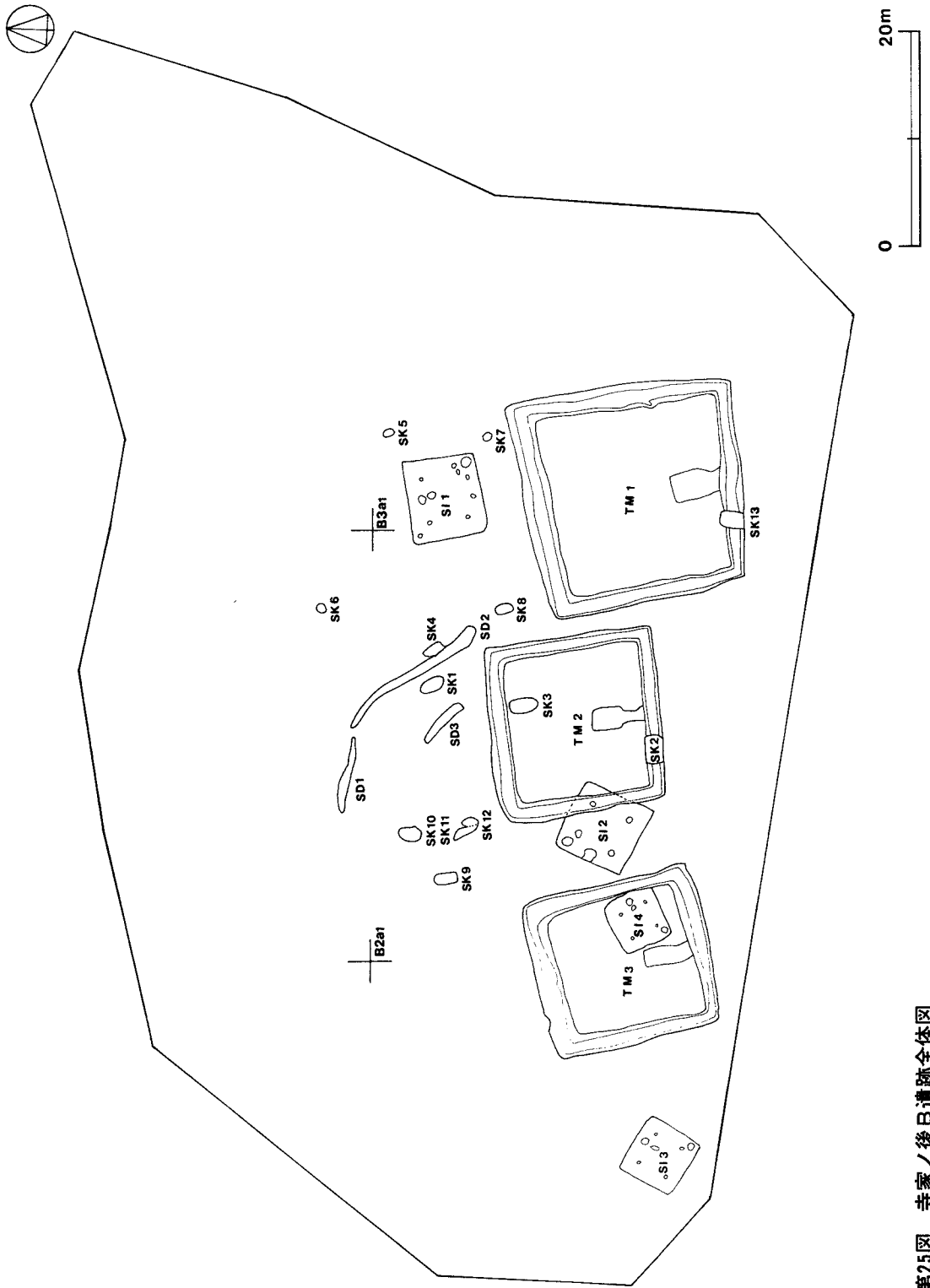
(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡(第26図)

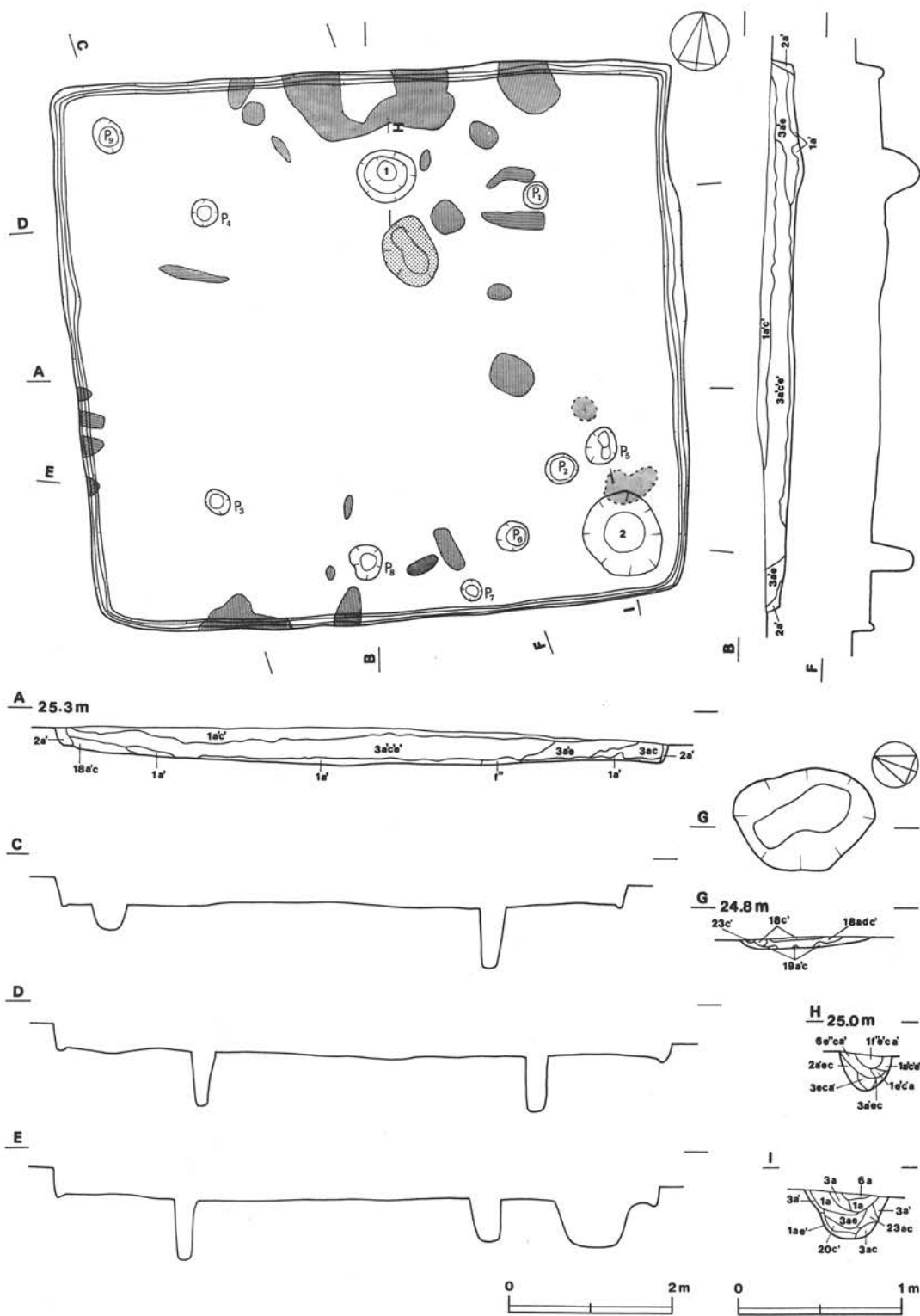
本跡は、調査区のB3b1区を中心に確認され、本跡の南側4mのところ、第1号墳北側の周溝が存在している。平面形は、長方形を呈し、規模は、長軸7.62m、短軸6.80mである。主軸方向はN-78°-Eを指している。床面積は、51.81㎡である。壁はロームで硬く、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は24~37cmである。床面はほぼ平坦で、特に炉の周辺が硬く踏み固められている。ピットは9か所検出され、上端直径24~48cm、深さ22~83cmである。形状や規模及び方形に配置されていることから、P₁~P₄が本跡に伴う支柱穴と判断され、P₅~P₉は、支柱穴と思われる。貯蔵穴は、2か所検出されている。1は炉の北側25cmほどに、2は南東コーナー部に位置している。平面形は1が円形を呈し、規模は長径72cm、短径65cm、深さ47cmである。底面は凹凸していて、壁は外傾して立ち上がっている。2は楕円形を呈し、規模は長径105cm、短径90cm、深さ47cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

炉は床面中央部からやや北に確認され、床面を10cmほど掘り下げた地床炉である。平面形は長径87cm、短径63cmの不整楕円形を呈している。炉内には、極少~多量の焼土を含む赤褐色土・暗赤褐色土が堆積しているが、炉床はあまり焼き締まっていない。

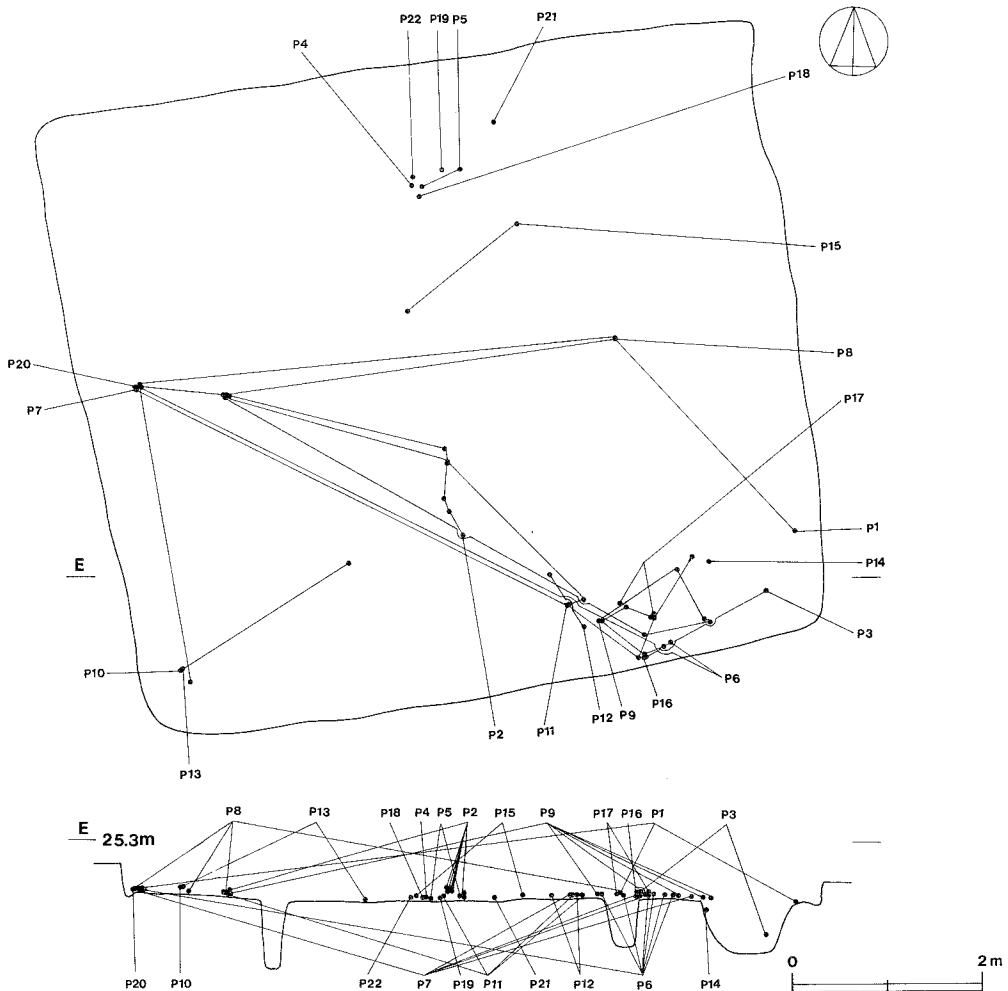
覆土は、上層に極少量のローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土、下層に少量のローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土、壁際に少量のローム粒子を含む褐色土、極少量のローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層で、自然堆積と思われる。本跡は、貯蔵穴1と2の覆土や住居跡の床面から多量の焼土や炭化材が検



第25図 寺家ノ後B遺跡全体図



第26图 第1号住居跡実測図

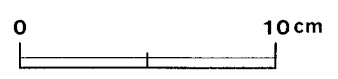
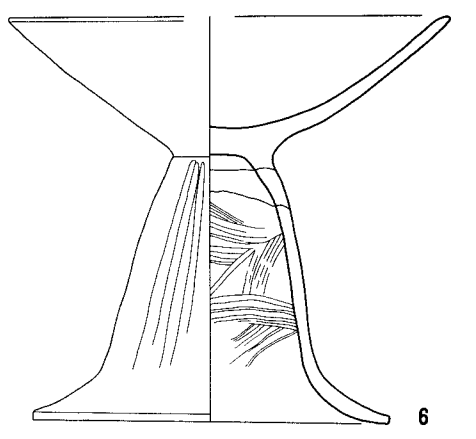
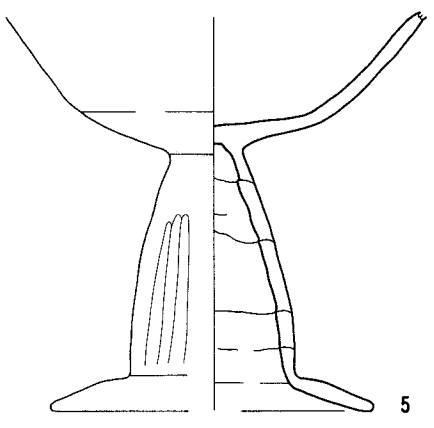
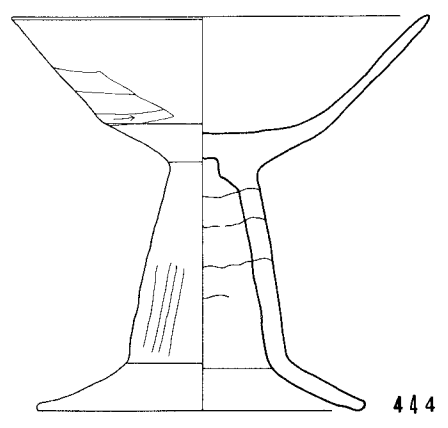
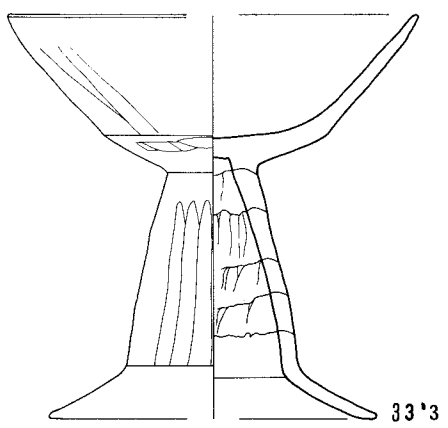
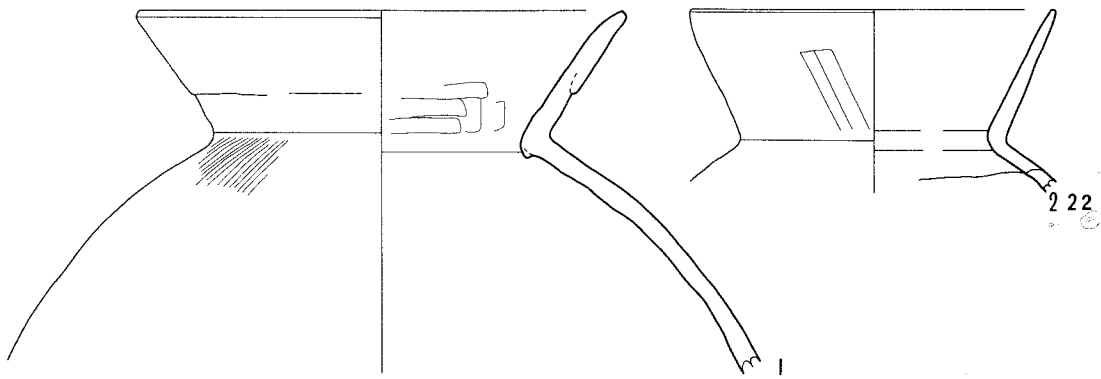


第27図 第1号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

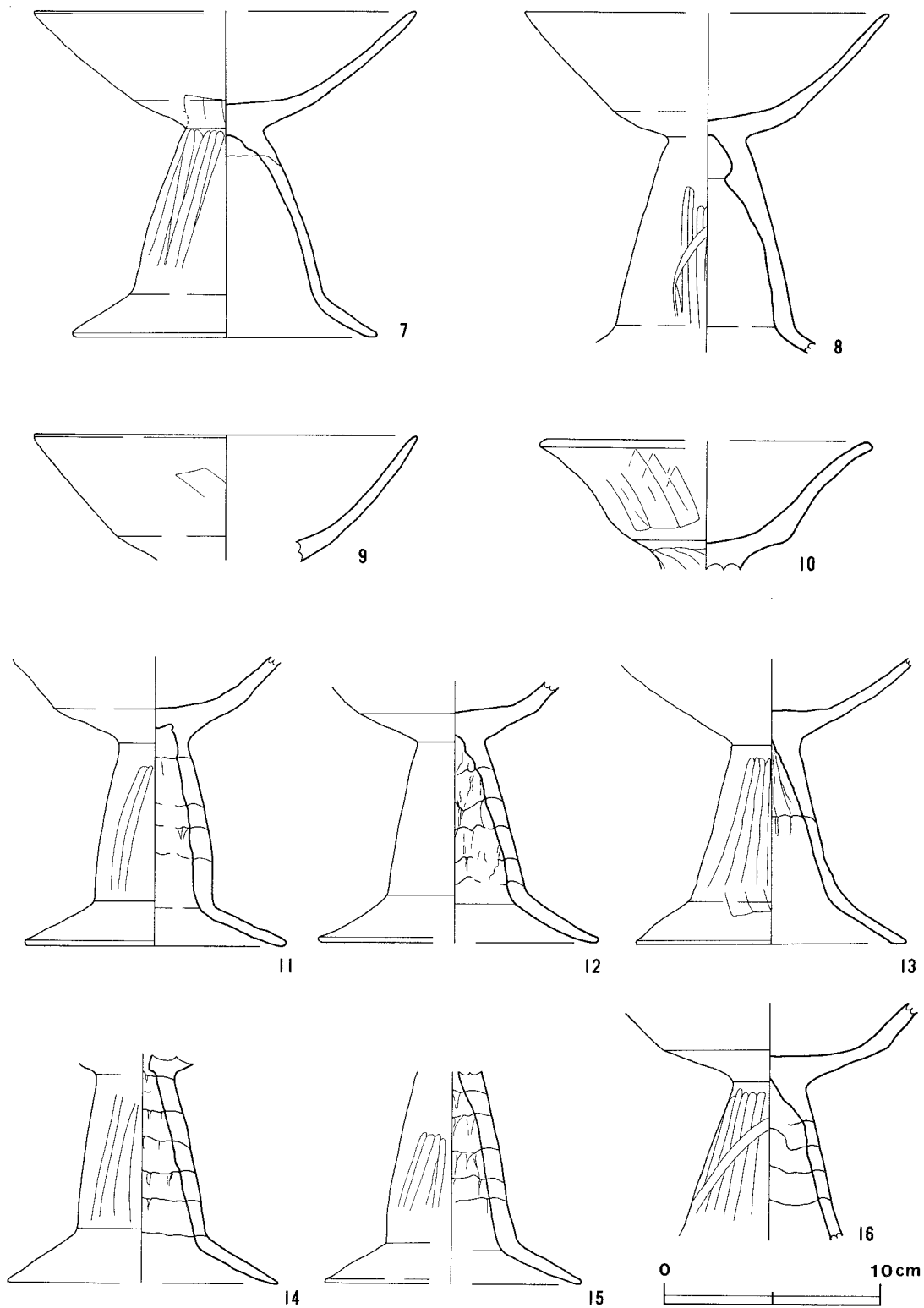
出されていることなどから、焼失家屋と思われる。

遺物は、覆土から土師器片530片が出土し、その他覆土上層から須恵器片16片、縄文土器片67片、内耳土器1片、古銭、剥片(第30図23)各1点、自然礫14点が出土している。土師器は炉の周辺から高环形土器(第29図15)、貯蔵穴1の覆土下層から高环形土器が2点(第28図4・5)、埴形土器(第30図18)、鉢形土器が2点(第30図19・22)出土し、貯蔵穴2から高环形土器(第28図3)、南壁際中央付近から高环形土器が7点(第28図6、第29図7・9・11・12・16、第30図17)、甕形土器(第28図2)が出土している。西壁中央部付近からは高环形土器(第29図8)、埴形土器が1点(第30図20)が出土し、北壁際より埴形土器(第30図21)が出土し、南東コーナー付近から壺形土器(第28図1)、高环形土器(第29図14)、南西コーナー付近からは高环形土器2点(第29図10・13)が出土している。

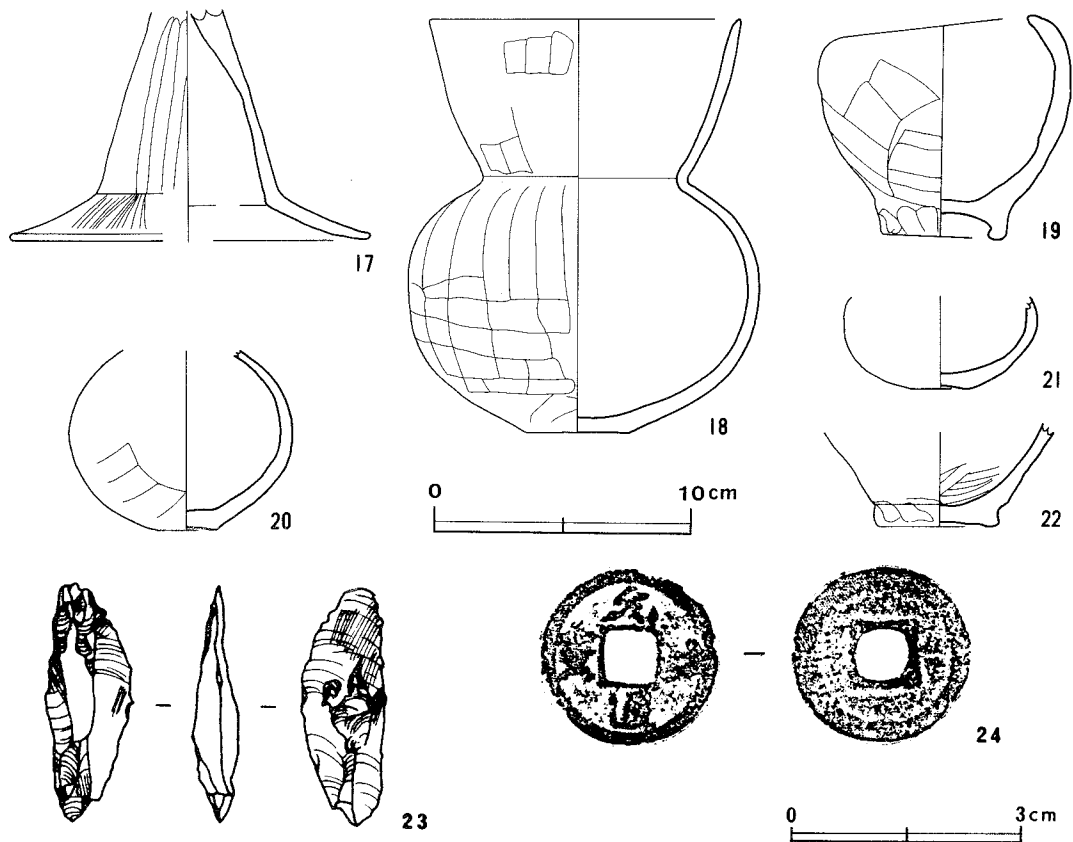
本跡は遺構や遺物等から、古墳時代和泉期に比定される住居跡と思われる。



第28図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第29图 第1号住居跡出土遺物実測図(2)



第30図 第1号住居跡出土遺物実測図・拓影図(3)

第1号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28図 1	壺 土師器	A 18.8 B (14.2)	胴部下半欠損。口縁部は複合口縁で、外傾する。頸部はくびれ、胴部上半は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部にハケ目整形痕。	砂粒・細礫 橙色 普通	P-1 20% 南東コーナー
2	甕 土師器	A 14.0 B (7.2)	胴部欠損。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部内面に輪積痕が残る。	砂粒・細礫 赤褐色 良好	P-2 20% 中央部
3	高 坏 土師器	A (15.8) B 15.8 D 12.6	脚部は中空で膨らみ、裾部はハの字状に開き、坏部は底部に強い稜を有し、外傾する。	口縁部内・外面横ナデ、坏部外面へラ削り、坏底部へラナデ、脚部へラ磨き、内面に輪積痕。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-3 85% 貯蔵穴2
4	高 坏 土師器	A 16.3 B 15.6 D (12.5)	脚部は中空で膨らみ、裾部はハの字状に開き、坏部は底部に稜を有し、外傾する。	口縁部外面横ナデ、内面は剥離がひどく調整不明。脚部へラ磨き。内面に輪積痕が残る。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-4 80% 貯蔵穴1
5	高 坏 土師器	B (15.7) D (12.4)	脚部は中空で膨らみ、裾部は中膨らみに開き、坏部は底部に弱い稜を有し、外傾する。	坏部摩擦が激しく、調整不明。脚部へラ磨き。内面に輪積痕が残る。	砂粒・細礫・雲母 橙色 不良	P-5 70% 貯蔵穴1
6	高 坏 土師器	A (17.1) B 16.0 D 13.9	脚部は中空で円柱状に膨らみ、裾部は直線的に開き、下端に稜を有する。口縁部は、外傾する。	坏部外面へラ削り、脚部外面へラ磨き、内面に輪積痕が残る。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-6 70% 南壁際

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 7	高坏 土師器	A (17.5) B 15.6 D 13.8	脚部は中空で円柱状に膨らみ、裾部は直線的に開き、坏部は底部に弱い稜を有し、外傾する。	坏部外面ヘラナデ。脚部外面ヘラ磨き、内面に輪積痕が残る。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-7 75% 南壁際
8	高坏 土師器	A (16.7) B (15.8)	裾部、坏部欠損。脚部は中空でやや膨らみ、坏部は底部に弱い稜を有し、外傾する。	坏部外面ヘラナデ、内面剥離がひどく調整不明。脚部ヘラ磨き。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-8 40% 西壁際
9	高坏 土師器	A 17.5 B (5.9)	脚部欠損。坏底部に稜を有し、外傾する。	坏部外面ヘラナデ、内面剥離がひどく調整不明。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-9 25% 南壁際
10	高坏 土師器	A (14.8) B (6.0)	脚部欠損。坏底部に稜を有し、口縁部は外傾し、端部で大きくそる。	口縁部内面横ナデ。坏部外面ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・細礫・雲母 にぶい橙色 普通	P-10 25% 南西コーナー
11	高坏 土師器	B (13.4) D 11.8	坏上半部欠損。脚部は中空で膨らみ、裾部は直線的に開き、坏底部に稜を有する。	外面は剥離がひどいため調整不明。脚部内面は輪積痕が残る。	砂粒・細礫・雲母 明褐色 普通	P-11 60% 南壁際
12	高坏 土師器	B (12.1) D (12.6)	坏部欠損。脚部は中空で膨らみ、裾部は直線的に開き、坏底部に稜を有する。	坏底部外面ヘラナデ、内面は剥離がひどく調整不明。脚部ヘラ磨き。内面は輪積痕が残る。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-12 40% 南壁際
13	高坏 土師器	B (13.2) D 12.4	坏上半部欠損。脚部は中空で膨らんで、裾部は直線的に開き、下端に稜を有する。	脚部ヘラ磨き、内面は輪積痕が残る。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-13 60% 南西コーナー
14	高坏 土師器	B (10.6) D (12.4)	坏部欠損。脚部は中空で膨らみ裾部は直線的に開いている。	脚部ヘラ磨き、内面は輪積痕が残る。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-14 45% 南東コーナー
15	高坏 土師器	D (11.8)	坏部欠損。脚部は中空で膨らみ、裾部は直線的に開く。	脚部ヘラ磨き、内面は輪積痕が残る。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-15 25% 炉周辺
16	高坏 土師器	B (11.0)	坏部上半、脚部下半欠損。坏底部に稜を有し、脚部は中空で膨らむ。	坏底部内面ヘラナデ。脚部外面ヘラ磨き、内面は輪積痕が残る。	砂粒・細礫 明褐色 普通	P-16 45% 南壁際
第30図 17	高坏 土師器	D (13.8)	坏部欠損。脚部は中空で膨らみ、裾部は直線的に開く。	脚部外面ヘラ磨き、内面は輪積痕が残る。裾部外面ヘラナデ。	砂粒・細礫 明赤褐色 普通	P-17 20% 南壁際
18	埴 土師器	A 12.1 B 16.2 C 4.0	平底。胴部は球形を呈し、頸部でくびれ、口縁部はやや内彎しながら立ち上がり、端部尖る。	口縁部内面横ナデ、外面ヘラナデ。胴部外面ヘラ削り。内面は剥離で調整不明。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-18 95% 貯蔵穴1
19	小形鉢 土師器	A 6.7 B 8.8 C 4.4	粘土を貼り付けて、底部を突出させた平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部内傾する。	底部ヘラナデ。体部外面ヘラ削り。口縁部外面雑なナデ。体部内・外面赤彩痕。	砂粒・細礫・雲母 浅黄褐色 普通	P-19 95% 貯蔵穴1
20	小形埴 土師器	B (7.0) C 2.2	口辺部欠損。平底。胴部はほぼ球形を呈して立ち上がる。底面中央窪む。	胴部ヘラ削り後ヘラナデ、胴部中央外面に赤彩痕跡。	砂粒・細礫・雲母 にぶい黄褐色 普通	P-20 65% 西壁際
21	小形埴 土師器	B (3.6) C 2.2	口辺部欠損。平底。胴部は内彎して立ち上がる。底面中央窪む。	剥離がひどいため調整不明。	砂粒・細礫・雲母 灰黄褐色 普通	P-21 50% 北壁際
22	小形鉢 土師器	B (4.0) C 4.6	粘土を貼り付けて、底部を突出させた平底。体部はやや外傾して立ち上がる。	底部内・外面ヘラナデ、内面に赤彩痕。	砂粒・細礫・雲母 にぶい褐色 普通	P-22 25% 貯蔵穴1

第2号住居跡（第31図）

本跡は、調査区のB2f4区を中心に確認され、第2号墳の西側の周溝と重複している。新旧関係は本跡が古墳に切られているので、本跡の方が古いと考えられる。

平面形は、方形を呈し、規模は、長軸6.76m、短軸6.58mである。主軸方向はN-63°-Wを指している。床面積は、41.14㎡である。壁はロームで硬く、ほぼ垂直に立ち上がり、北東壁と南東壁の一部が第2号墳の周溝に切られているので立ち上がりが不明である。残存する壁高は32~41cmである。床面はほぼ平坦で、全体的に硬く締まっている。ピットは4か所検出され、P₁~P₄は、上端直径45~79cm、深さ12~54cmである。形状や規模及び方形に配置されていることから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断される。貯蔵穴は北コーナー部に位置し、平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸113cm、短軸87cm、深さ43cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

カマドは、北西壁のほぼ中央部に付設され、山砂や白色粘土にローム土を混入して構築している。規模は、長さ125cm、幅127cm、焚口部幅52cmである。カマド中央部には径30cmほどの掛口が確認できる。火床部はほぼ床面と同じレベルで検出され、少~中量の焼土粒子・焼土ブロックを含む赤褐色土が堆積しているが、火床はそれほど焼き締まっていない。

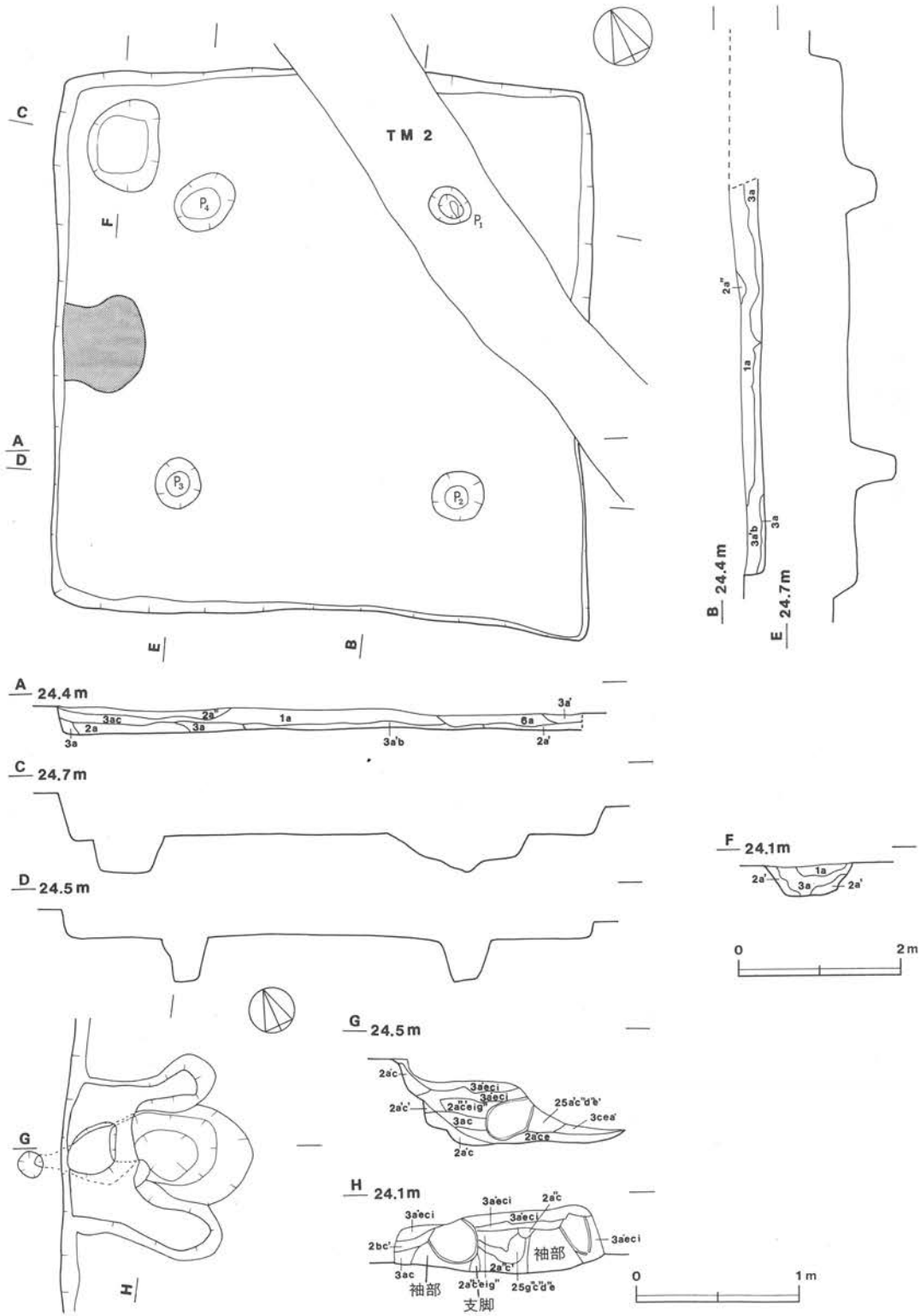
覆土は、上層に極少量のローム粒子を含む黒褐色土、下層に少量のローム粒子・極少量のロームブロックを含む暗褐色土、また壁際に極少量のローム粒子を含む黒褐色土や褐色土が自然堆積している。

遺物は、土師器片151片、須恵器片1片、自然礫2点が出土している。土師器は、カマド内中央部から甕形土器(第32図1)、支脚が出土しているが、支脚は、くずれた状態であるので実測ができなかった。西側袖部から大形の甕形土器(第32図2)、カマド東側床面から甕形土器(第32図3)、カマド西側から坏形土器(第32図4)が出土している。北コーナー付近から坏形土器(第32図5)、南西コーナーからはミニチュア土器(第32図6)が出土している。いずれも本跡に伴うものと考えられる。

本跡は遺構や遺物等から、古墳時代鬼高期に比定される住居跡と思われる。

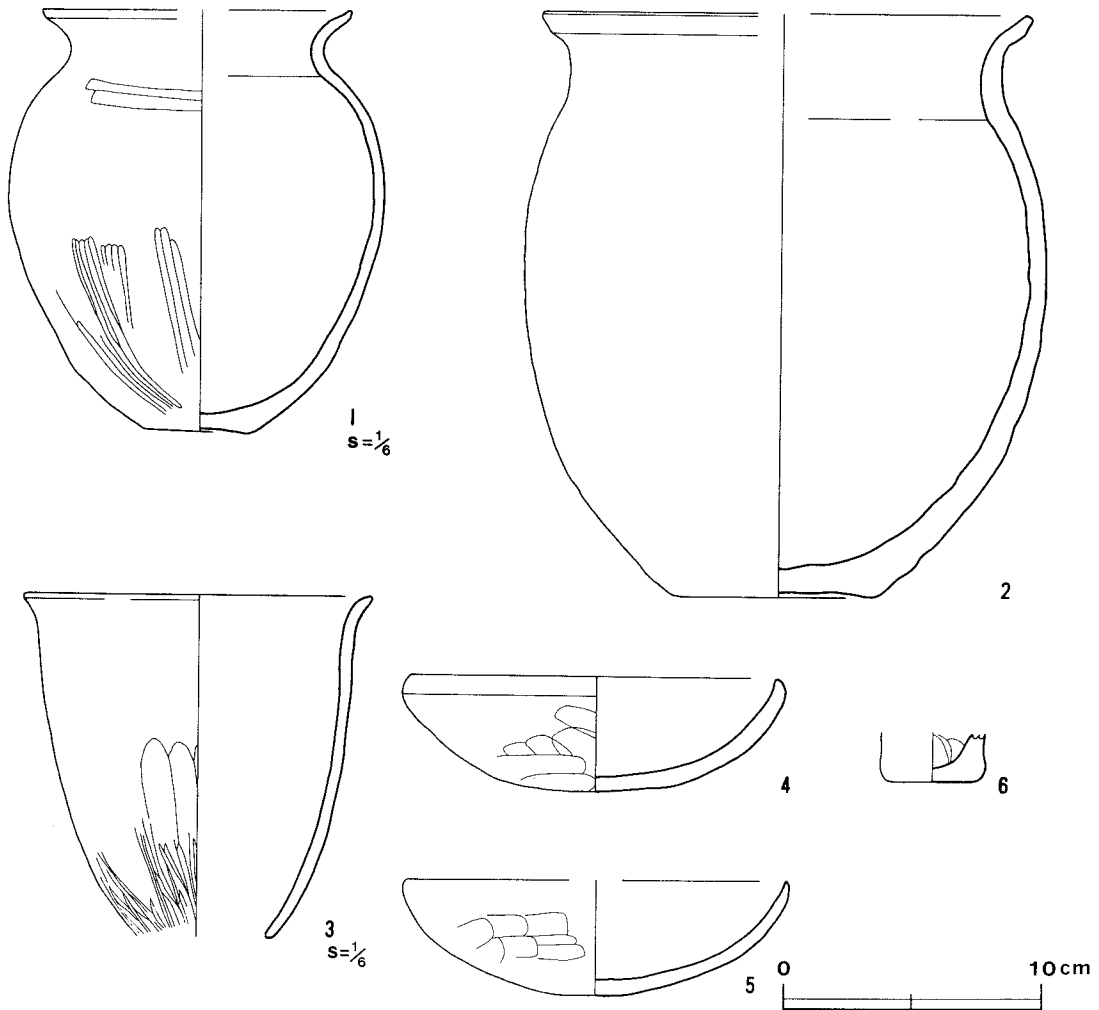
第2号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32図 1	甕 土師器	A (23.9)	平底。胴部は内彎し、頸部はコの字状にくびれ、口縁部は外反し、端部は外上方につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部上半へラナデ、下半部へラ磨き、内面ナデ。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-23 60% カマド内中央
		B 33.0				
		C 8.3				
2	甕 土師器	A (18.6)	平底。胴部は内彎し、頸部はややくびれ、口縁部は短く外反して立ち上がる。	摩滅、剝離がひどく調整不明。胴部中央から下半にかけてへラ磨き。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-24 60% カマド西側
		B 22.9				
		C (7.4)				



第31图 第2号住居跡実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32図 3	甗 土師器	A 26.8 B 26.8 C 10.3	無底式。胴部は直立気味に立ち上がり、頸部はゆるやかにくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。内面ヘラナデ。胴部内面ヘラ削り後ヘラ磨き。	砂粒・細礫・雲母 橙色 良好	P-27 95% カマド東側
4	坏 土師器	A [14.8] B 4.5	丸底。胴部は内彎し、口縁部は、ほぼ直立し、端部尖る。	口縁部内・外面横ナデ。内面丁寧なナデ、体部外面ヘラナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・細礫・雲母 にぶい黄橙色 良好	P-26 30% カマド西側
5	坏 土師器	A (14.2) B 4.5	丸底。体部は内彎し、口縁部との境に稜を有する。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内面ナデ、体部から底部にかけてヘラ削り。	砂粒・細礫・雲母 黒褐色 普通	P-25 70% 北コーナー
6	ミニチュア土器 土師器	B [1.9] C 3.3	平底でほぼ直立する。	底部内面に指頭圧痕。	砂粒・細礫 橙色 普通	P-28 70% 南西コーナー



第32図 第2号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡（第33図）

本跡は、調査区の西南端B1g6区を中心にして確認され、本跡の東側7.5mほどのところに第3号墳西側の周溝が存在している。平面形は、方形を呈し、規模は、長軸5.61m、短軸5.34mである。主軸方向はN-59°-Wを指している。床面積は、29.48㎡である。壁はロームで硬く、南東壁と南西壁の一部の立ち上がりが不明であるが、他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。残存する壁高は2~30cmである。壁溝は、南東壁直下を除き全周する。床面はほぼ平坦で、炉を中心にして中央部が硬く踏み固められている。ピットは4か所検出され、上端直径27~36cm、深さ72~87cmである。形状や規模及び方形に配置されていることから、4本とも主柱穴と判断される。

貯蔵穴は2か所検出され、1は炉の北側約40cmほどに、2は南コーナー部に位置している。平面形は1がほぼ円形を呈し、規模は長径70cm、短径69cm、深さ48cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。2は楕円形を呈し、規模は長径68cm、短径64cm、深さ72cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

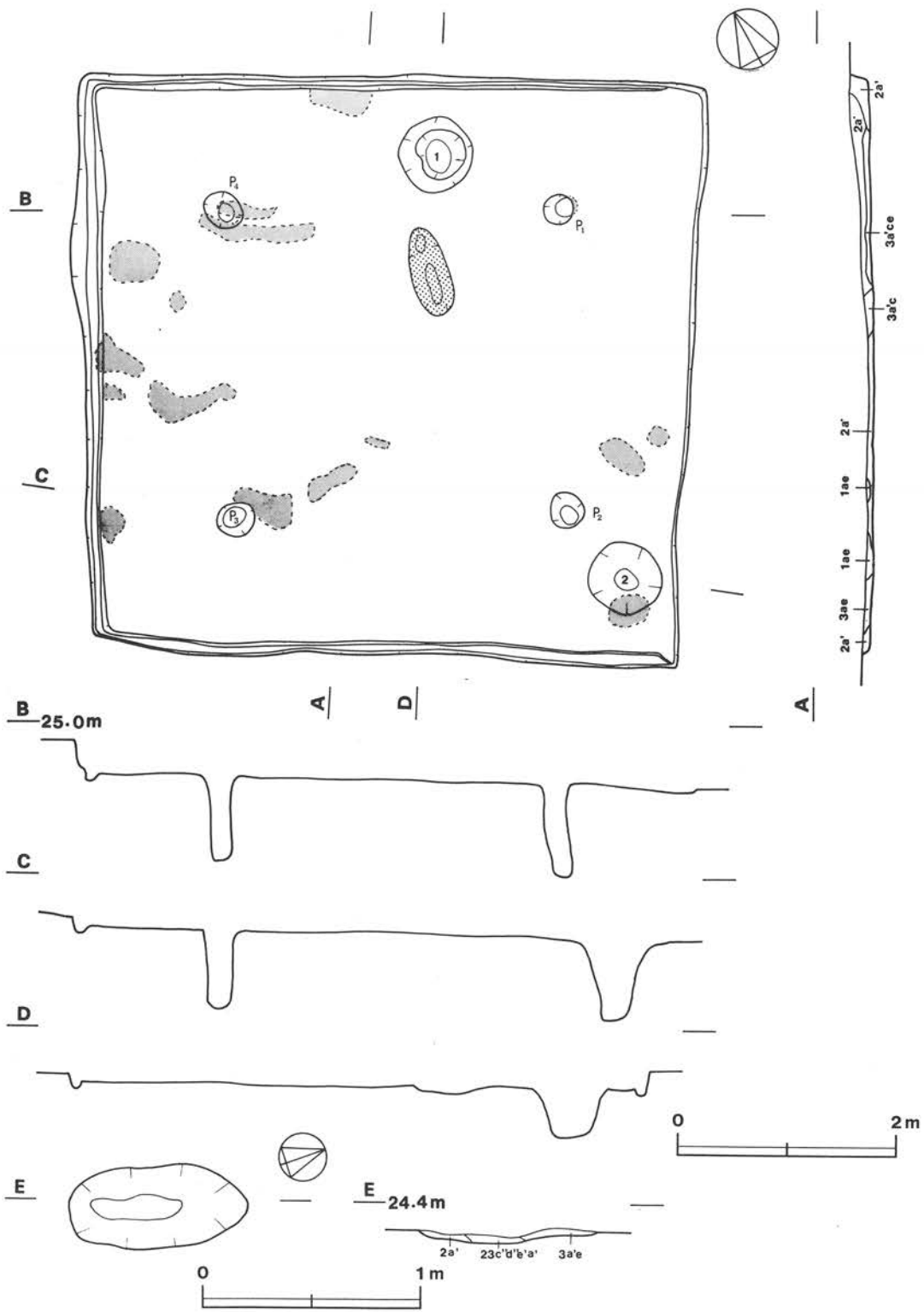
炉は中央からやや北側に検出され、床面を8cmほど掘り下げた地床炉である。平面形は、長楕円形を呈し、規模は長径86cm、短径35cmである。炉内には、少~中量の焼土を含む暗褐色土・褐色土が堆積している。炉床は焼土がこびりつき、硬くブロック化してよく焼き締まっている。覆土は浅く、上層に極少~少量のローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む褐色土や黒褐色土、下層に多量のローム粒子を含む褐色土や少量のローム粒子と極少量の焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土、また壁際に少量のローム粒子を含む褐色土が堆積している。

遺物は、土師器片163片、球状土錘1個（第34図8）、自然石2点が出土している。土師器は、貯蔵穴1の底面から甕の口縁部（第34図1）、高環形土器（第34図6）、炉周辺から甕形土器（第34図2）が出土している。南西コーナー付近からは鉢形土器（第34図4）、高環形土器（第34図5）が出土し、西コーナーから台付甕形土器（第34図3）が出土している。

本跡は遺構や遺物等から、古墳時代和泉期に比定される住居跡と思われる。

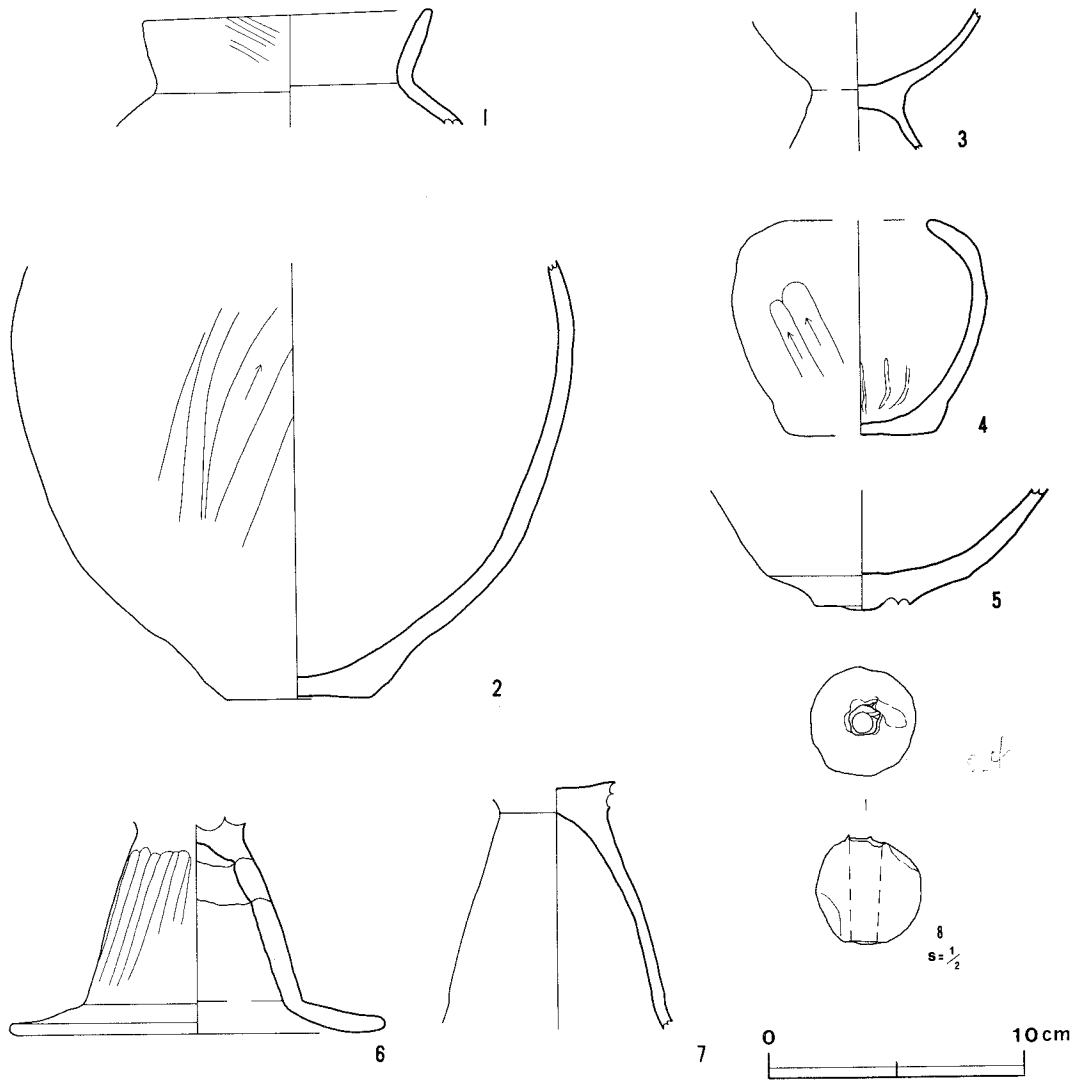
第3号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 1	甕 土師器	A (11.4) B (4.6)	胴部欠損。頸部はくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ、口縁部外面部分的に刷毛目痕が見られる。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-30 20% 貯蔵穴1
2	甕 土師器	B (17.0) C (5.6)	胴部上半欠損。平底。体部は内彎して立ち上がる。	内面ナデ、胴部外面ヘラ削り。	砂粒・細礫・雲母 にぶい黄橙色 普通	P-29 30% 炉周辺
3	台付甕 土師器	B (5.5)	脚台部から底部片。脚台部はくびれ、底部は内彎する。	内面ナデ、外面ヘラナデ。	砂粒・細礫・雲母 にぶい褐色 普通	P-47 10% 西コーナー



第33图 第3号住居跡実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 4	小形鉢 土師器	A (5.6) B 8.4 C (4.8)	平底。体部は内彎し、口縁部でさらに内傾する。	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・細礫 明褐色 普通	P-32 40% 南西コーナー
5	高 坏 土師器	B [4.7]	脚部欠損。坏底部に稜有し、口縁部は外傾する。	坏底部外面ヘラナデ。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-48 15% 南西コーナー
6	高 坏 土師器	B [8.5] D 14.4	坏部欠損。脚部は中空で太い円柱状で、裾部はほぼ直線的に開く。下端に稜を有する。	脚部外面ヘラ磨き、内面に輪積痕が残る。	砂粒・細礫・雲母 にぶい橙色 良好	P-31 50% 貯蔵穴 1
7	高 坏 土師器	B [9.6]	坏部、裾部欠損。脚部は中空で太い円柱状である。	脚部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-49 30% 覆土



第34図 第3号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡（第35図）

本跡は、調査区のB2g1区を中心にして確認され、第3号墳内に位置し、古墳の南東コーナ一部付近の周溝と重複している。新旧関係は本跡が第3号墳に切られているので、本跡の方が古いと考えられる。

平面形は、方形を呈し、規模は、長軸5.14m、短軸4.70mである。主軸方向はN-63°-Eを指している。床面積は21.36㎡である。壁はロームで硬く、ほぼ垂直に立ち上がっているが、北東壁と南東壁の一部は第3号墳の周溝に切られているため不明である。残存する壁高は、10～52cmである。

ピットは、4か所検出されている。P₁～P₄は、上端直径23～29cm、深さ42～55cmである。形状や規模及び方形に配置されていることから本跡に伴う主柱穴と判断される。

貯蔵穴は2か所検出され、1は炉の東側に隣接し、2は南コーナ一部に位置している。平面形は1が不整楕円形を呈し、規模は長径67cm、短径57cm、深さ26cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。2は楕円形を呈し、規模は長径72cm、短径59cm、深さ70cmである。底面は凹凸で、壁は段状になっている。

炉は床面中央からやや東よりに確認され、床面を7cmほど掘り下げた地床炉である。平面形は不整楕円形を呈し、規模は、長径63cm・短径42cmである。炉内には、多量の焼土を含む暗赤褐色土が堆積しているが、炉床は余り焼き締まっていない。

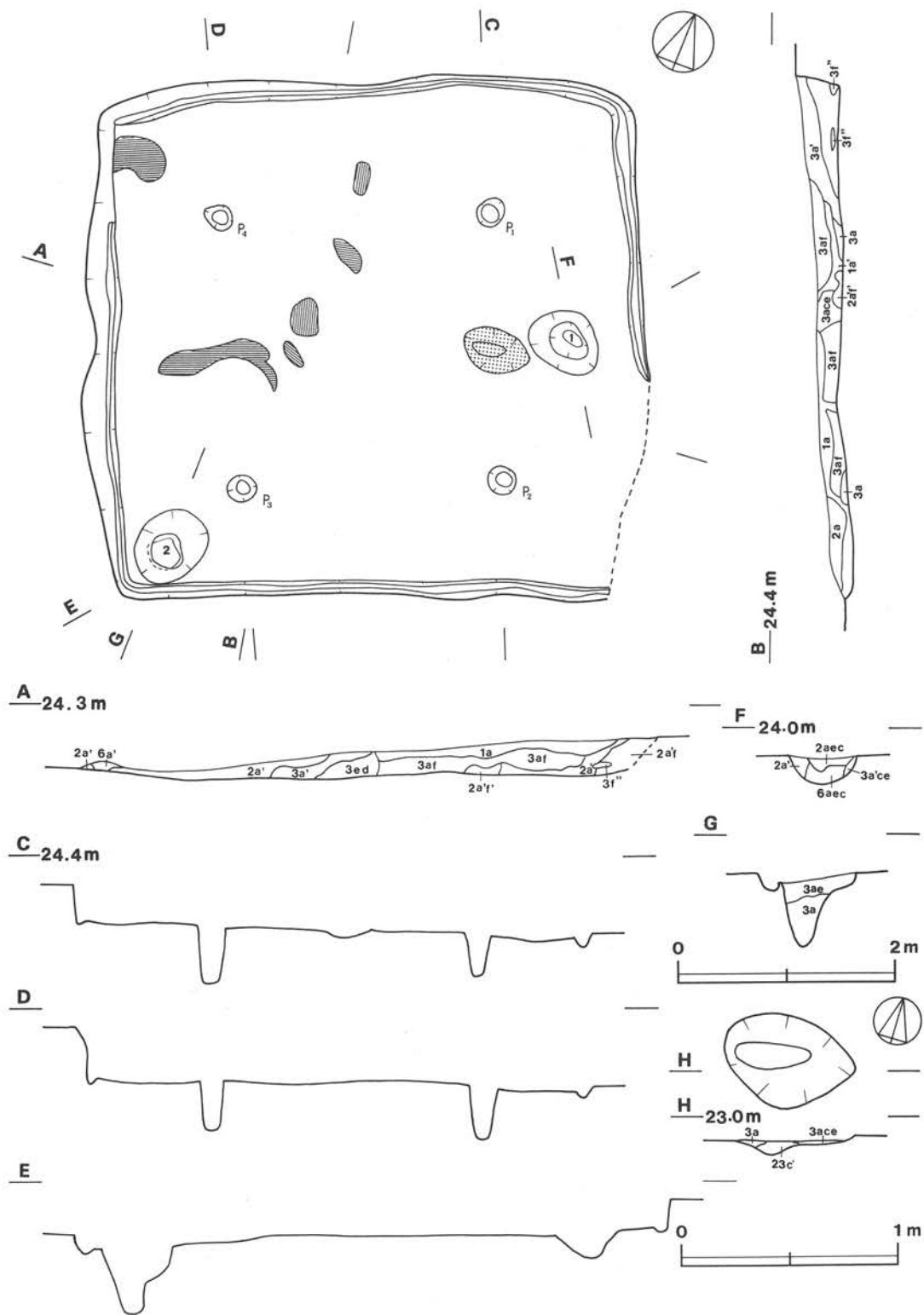
覆土は、上層に極少量のローム粒子を含む黒褐色土、極少量のローム粒子・炭化粒子を含む暗褐色土、下層は、極少量のローム粒子・炭化粒子を含む暗褐色土、壁際には、少量のローム粒子・炭化粒子を含む褐色土が自然堆積している。床面の南西部及び北西コーナ一部からは焼土及び炭化材が検出されていることから焼失家屋と思われる。

遺物は少なく、土師器片129片が出土し、床面中央付近から高坏形土器（第36図2）、北西コーナ一部付近から甕形土器（第36図1）、北東壁際からはミニチュア土器（第36図3）が出土している。

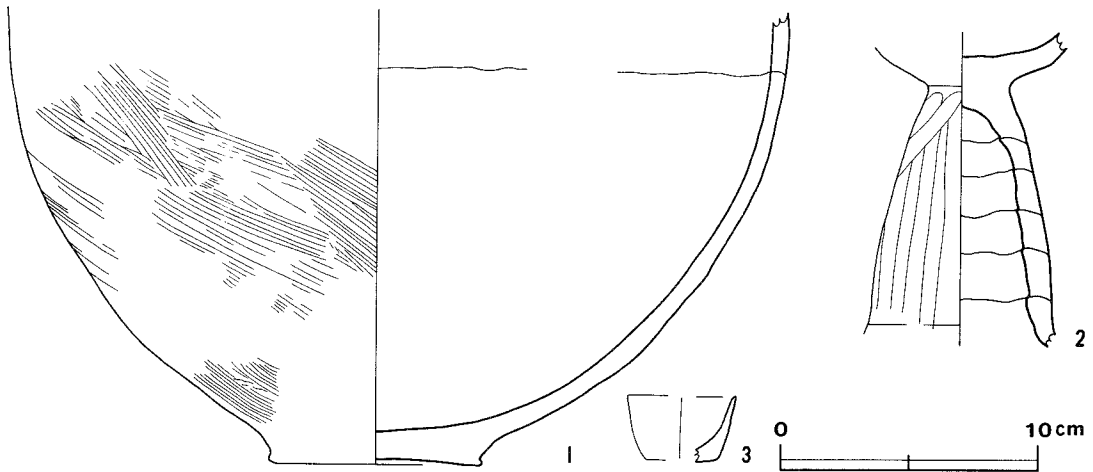
本跡は遺構や遺物等から、古墳時代和泉期に比定される住居跡と思われる。

第4号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 1	甕 土師器	B [17.8] C 7.9	底部から胴部の破片。平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	底部から胴部外面刷毛目整形後ナデ。	砂粒・細礫・雲母 赤褐色 普通	P-33 30% 北西コーナ
2	高坏 土師器	B [12.3]	坏部と裾部欠損。脚部は中空で膨らむ。	脚部ヘラ磨き。内面に輪積痕が残る。	砂粒・細礫・雲母 明赤褐色 普通	P-45 50% 中央部
3	ミニチュア 土器 土師器	A (4.2) B 2.5 C (3.0)	底部欠損。体部はほぼ垂直に立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・細礫 明赤褐色 普通	P-34 80% 北東壁際



第35图 第4号住居迹实测图



第36図 第4号住居跡出土遺物実測図

(2) 古墳

第1号墳 (第37・38図)

① 古墳の位置

本墳は、調査区の南東部のB2・B3区を中心に確認され、本墳の占地している台地は、北側が平坦で南側は谷に向かって傾斜している。本墳は、第1号住居跡の南側3.5mほどに位置し、西側1.5mには第2号墳が位置している。

② 古墳の構造

本墳は、ほぼ南北に主軸をもつ方墳で、一辺が外法20mほどの周溝を有している。埋葬施設は中央部南側に位置し、埋葬施設から周溝に通じる墓道が存在している。

〈墳丘〉

調査前は、低い雑木と篠に覆われており、伐開後墳丘測量を実施した。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は、長径17.2m、短径16.1m、高さ1.0mほどである。墳丘の最頂部の標高は25.5mである。北側に墳丘が流れている状況を示し、現状の墳丘は、かなり変容しているものと思われる。

封土は、褐色のローム層の上に黒褐色土が不整合に堆積しており、この黒褐色土は旧表土の一部と思われる。その上層には、暗褐色土、褐色土が30cmほどに盛土され、さらにその上に腐葉土混じりの現表土が10cmほど堆積している。

〈周溝〉

周溝は方形に廻り、一辺が外法20mほどである。規模は上幅1.25~2.60m、下幅0.70~1.60m、深さ0.45~0.82mで、壁高は北側が高く57.5~87.5cm、南側で30.0~77.5cmである。断面形は、逆台形を呈し、底面はほぼ平坦で、よく締まっている。壁面はロームで硬く、墳丘内・外側ともほ

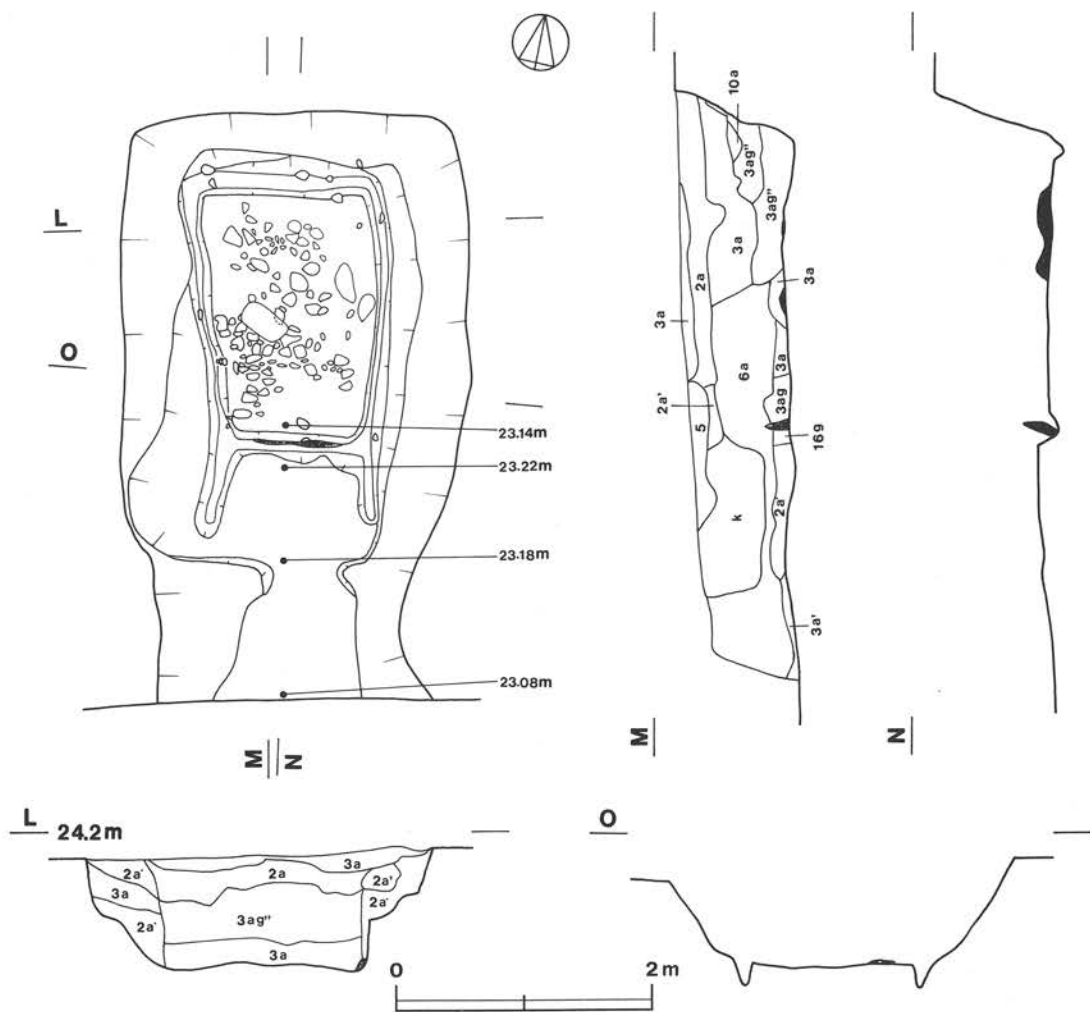
ほぼ同じ角度で溝底から直線的に外傾して立ち上がっている。覆土は、極少量のローム粒子を含む黒褐色土が上・中層にあって大部分をしめ、溝底付近の下層には少量及び多量のローム粒子を含む褐色土・暗褐色土、また壁際に少量及び多量のローム粒子を含む褐色土がよく締まって自然堆積している。本溝は、南側周溝のやや北西コーナーよりで第13号土坑と重複しているが、その新旧関係は不明である。

〈埋葬施設〉

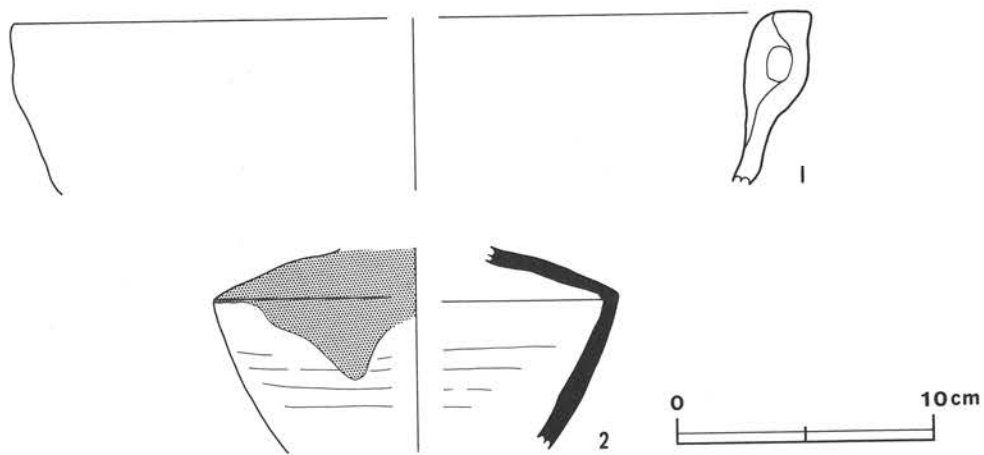
埋葬施設の主軸方向は、N-9.5°-Wを指している。埋葬施設の掘り方は、上端で長さ3.5m、幅2.7mほどである。墓道は、周溝の南側中央部から埋葬施設まで1.1mである。覆土は、上層に一部攪乱層がみられるが、極少量のローム粒子を含む褐色土、暗褐色土、中層に極少量のローム粒子を含む暗褐色土、極暗褐色土が下層に粘土、雲母片岩が混じって堆積している。壁際には、少～多量のローム粒子を含む褐色土が堆積している。埋葬施設内の覆土を除去すると、使用されていたと思われる石材が、框石を除いてすべて抜き取られている。側壁・奥壁際には、裏込めに使われたと思われる粘土の一部と、断面形がU字状の板石の据え方の痕跡が溝として残っている。この痕跡から推定すると玄室は奥石1枚、側石3枚ずつで構築され、框石を境に羨道部の側壁が1枚ずつややハの字状に開いているため無袖式と思われる。埋葬施設の高さは、天井部や側石等の石材が遺存しないため実際の高さは確認できないが、確認面から底面までの高さは1.0mほどである。底面は、平坦で、バラス状の雲母片岩が薄く敷き詰められており、敷石の下側から粘土が検出されている。これは敷石を固定する為のものと考えられる。本墳は、墓道を有することやU字状に残る板石の痕跡や框石、敷石などから形態的には、地下式の横穴式石室と考えられる。石室の規模は、内法長さ2.20m、幅は1.20～1.60mの長方形を呈し、現存する框石は長さ84cm、幅24～32cmであり、底面を10cmほど掘り込んで周囲には粘土を張っている。羨道部の左側の側石の長さは推定で66cm、右側は40cmほどである。底面のレベルは玄室内で23.14m、羨道部で23.22mであり、玄室は羨道部より8cmほど低くなっている。

③ 出土遺物

遺物は少なく、埋葬施設覆土から石室の構築材の一部や敷石と考えられる雲母片岩250片、土師器片5片、流れ込みと思われる縄文土器片23片、内耳土器の口縁部（第39図1）などが出土し、周溝の覆土から長頸壺の胴部片（第39図2）、雲母片岩37片、自然礫11点、土師器片99片、須恵器片10片、流れ込みと思われる縄文土器片79片が出土している。



第38图 第1号墳実測図(2)



第39图 第1号墳出土遺物実測図

第1号墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39図 1	内耳土器	A (31.0) B (6.7)	底部欠損。体部は内彎し、口縁部は内傾する。	口唇部ナデ、内・外面横ナデ。耳接合。	砂粒・細礫・雲母にぶい褐色普通	P-50 10% 埋葬施設覆土内
2	長頸壺 須恵器	B (8.0)	胴部片。胴部上半部で鋭く屈曲する。	胴部内・外面ナデ、胴部外面に自然釉施釉。	砂粒・細礫 灰黄色、(釉)灰オリーブ、良好	P-46 20% 周溝内

第2号墳 (第42図)

① 古墳の位置

本墳は、調査区の中央部の南側B2区を中心に確認され、本跡の占地している部分は、北側の平坦面から南側の谷に至る斜面となっている。本墳は、西側の周溝で第2号住居跡の一部と重複している。新旧関係は本墳が第2号住居跡を切っているもので、本墳の方が新しい。本墳の東側1.5mに第1号墳が位置し、西側7mに第3号墳が位置している。

② 古墳の構造

本墳は、ほぼ南北に主軸をもつ方墳で、外法東西16.8m、南北15.4mほどの周溝を有し、埋葬施設は南側中央部に位置し、埋葬施設から周溝に通じる墓道が存在している。

〈墳丘〉

調査前は、低い雑木と篠に覆われていた。伐開後、墳丘測量を実施したところ平面形は縦長の隅丸長方形を呈し、現状の規模は、長径12.6m、短径11.0m、高さ1.0mほどである。墳丘の最頂部の標高は25.58mである。北側に墳丘が流れている状況を示し、現状の墳丘は、かなり変容していると思われる。

封土は、褐色土のローム層と厚さ10cmほどのローム漸移層があり、その上に厚さ16~20cmの旧表土が堆積している。旧表土の上層は、暗褐色土・黒褐色土・褐色土が盛土され、さらに腐葉土混じりの現表土が15cmほど堆積している。

また、第3号土坑が墳丘内北側の北東コーナーよりに重複しているが、新旧関係は不明である。

〈周溝〉

周溝は方形に廻り、規模は東西16.8m、南北15.4mほどである。上幅1.10~2.15m、下幅0.58~1.15m、深さ0.45~0.90mで、壁高は北側で50~75cm、南側で40~70cmである。断面形は、明瞭な逆台形を呈しており、底面は、ほぼ平坦で硬く締まっている。壁はロームで硬く、墳丘内・外側ともほぼ同じ角度で溝底面から直線的に外傾して立ち上がっている。

覆土は、極少量のローム粒子を含む黒褐色土・暗褐色土が上・中層にあり、底面付近の下層に

は少～多量のローム粒子を含む褐色土・暗褐色土，壁際には少～多量のローム粒子を含む褐色土・暗褐色土がよく締まって自然堆積している。本溝は南側周溝のやや北西コーナーよりで第2号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

〈埋葬施設〉

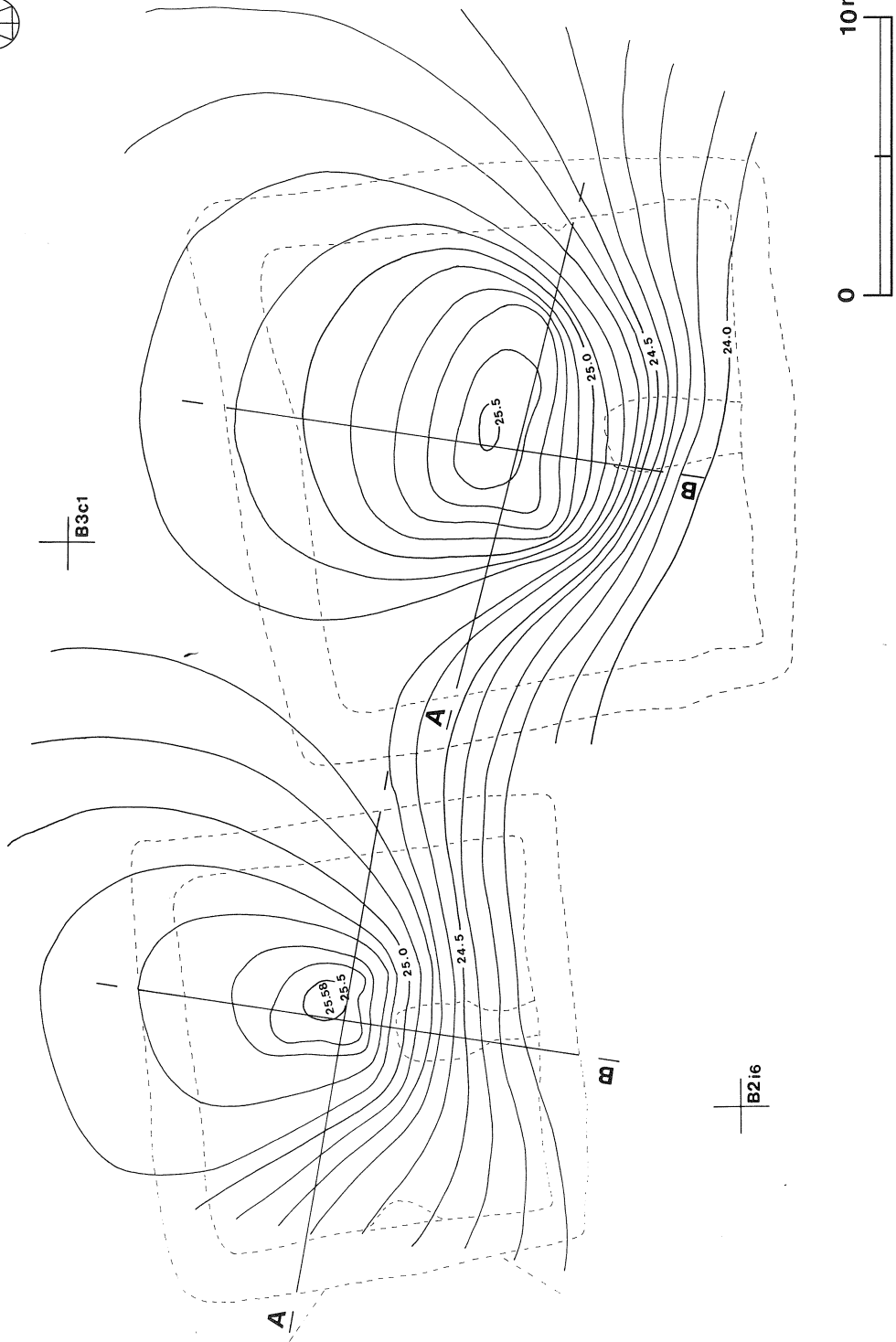
埋葬施設の主軸方向は，N -7° -Wを指している。掘り方は，上端で長さ2.8m，幅2.15mほどである。墓道は，周溝の南側中央部から，埋葬施設までの長さは2.12mほどである。

覆土は，上層に極少量のローム粒子を含む褐色土・暗褐色土・黒褐色土，下層に極少量のローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土と粘土が混じって堆積している。覆土を除去すると，石室を構築していたと思われる側壁・奥壁の石材はすべて抜き取られていた。第1号墳に見られるような羨道部の痕跡がないので，石室は，単室の可能性が考えられる。部分的ではあるが断面U字形の溝の上に裏込めに使用されたと思われる粘土が残っている。天井部及び側石の石材が遺存しないために実際の高さは確認できないが，確認面から底面までの高さは0.8mほどである。底面は平坦であり，部分的にバラス状の雲母片岩の小片が薄く敷かれており，敷石の下側から粘土が検出されている。粘土は，敷石を固定するものと考えられる。

埋葬施設は，墓道を有すること，粘土ブロックやU字形の溝の痕跡と敷石から推定すると形態的には，地下式の横穴式石室と思われる。規模は，玄室は内法長辺2.16m，短辺0.92mで，平面形は長方形を呈している。玄室部の幅は入り口部で85cm，奥壁部で98cmで，玄室の奥壁が広がっている。玄室内・外の底面のレベルは内側で23.6m，外側で23.64mである。玄室内が4cmほど低くなっている。

③ 出土遺物

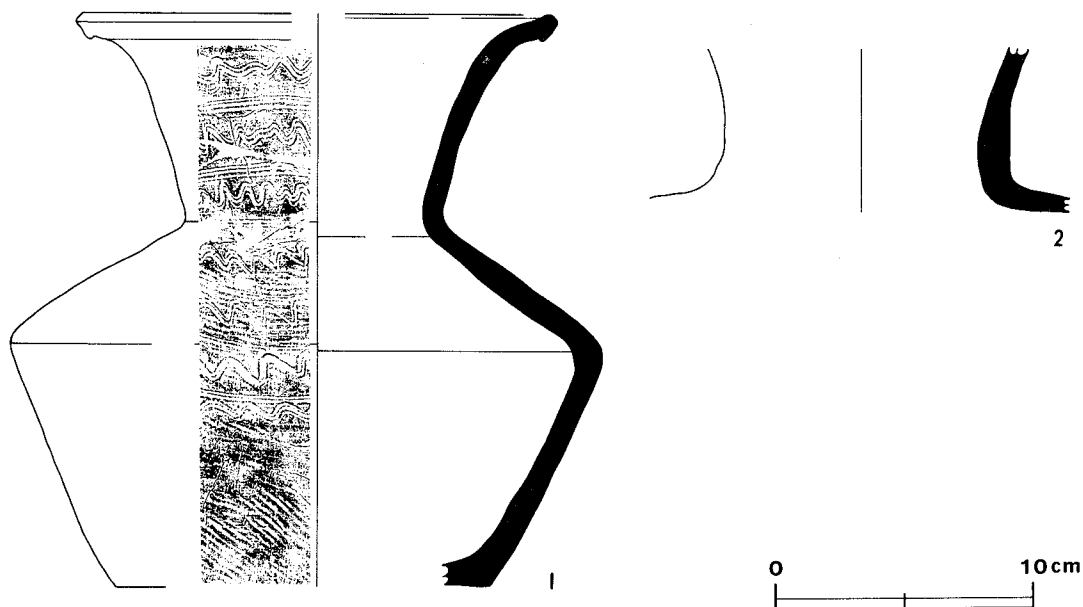
遺物は少なく，埋葬施設の覆土から石室構築材の一部や敷石と考えられる雲母片岩118片が出土し，周溝覆土から雲母片岩70片，自然礫30点，土師器片224片，須恵器片8片，流れ込みと思われる縄文土器片74片が出土している。北側周溝の北東コーナーよりの底面から長頸壺（第41図1），西側周溝のほぼ中央底面から長頸壺の頸部片（第41図2）が出土している。



第40图 第1・2号墳墳丘測量図

第2号墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 1	長頸壺 須恵器	A (18.2) B (22.3) C (14.5)	底部欠損。胴部上半部で屈曲する。頸部はくびれ外反し、口縁部でさらに大きく外反している。口縁端部を面とり。	口縁部から胴部上半にかけて、5本櫛歯による沈線文で横に7区画し中に3本櫛歯で波状文を充填している。胴部縦位タタキ目。	砂粒・細礫・雲母 灰白色 普通	P-35 65% 北側周溝
2	長頸壺 須恵器	B (6.4)	頸部片。頸部はくびれてから、やや外反する。	頸部外面ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・細礫・雲母 褐灰色 普通	P-36 5% 西側周溝



第41図 第2号墳出土遺物実測図

第3号墳（第43・44図）

① 古墳の位置

本墳は、調査区の南西端B1・B2区を中心に確認されている。東側7mに第2号墳が位置している。墳丘は第1・2号墳のような盛土が認められなかったため、墳丘調査を実施しなかった。本墳の占地している部分は、北側の平坦部から南側の谷に至る斜面になっている。本墳の東側の周溝で第4号住居跡と重複している。新旧関係は、本墳が第4号住居跡を切っているの、本墳のほうが新しいと考えられる。

② 古墳の構造

本墳は、ほぼ南北に主軸をもつ方墳で、外法東西16.1m、南北15.3mほどの周溝を有し、埋葬施設は中央南側に位置し、周溝から埋葬施設に通じる墓道が存在している。

〈墳丘〉

調査前は、低い雑木と篠に覆われており、伐開後の調査では北側の平坦面と南側の傾斜面の差が20cmほどで、北側がやや高いという程度であった。現状の墳丘は、かなり変容しているものと思われる。

封土は、北側の周溝の内側より4～15cmの厚さで、黒褐色土が堆積しており、旧表土と思われ、その上には2～15cmの暗褐色土が堆積している。南側は褐色土のローム層になり、全体的に現表土が覆っている。

〈周溝〉

周溝は方形に廻り、規模は外法で長辺16.1m、短辺15.3mであり、第2号墳とほぼ同じ規模である。上幅1.00～2.50m、下幅0.36～1.76m、深さ0.54～1.00mで、壁高は北側で60～100cm、南側で45～100cmである。断面形は、明瞭な逆台形を呈しており、底面は、ほぼ平坦で硬く締まっている。壁面はロームで硬く、墳丘内・外側ともほぼ同じ角度で溝底面から直線的に外傾して立ち上がっている。覆土は極少量のローム粒子を含む黒褐色土や暗褐色土が上～中層に堆積し、下層や壁際に少・多量のローム粒子を含む褐色土や暗褐色土がいずれもよく締まって堆積している。

〈埋葬施設〉

埋葬施設の主軸方向は、N-11°-Wを指している。掘り方は、南側にピット状の攪乱を受けているため推定であるが、上端で長さ2.60m、幅1.72mほどである。埋葬施設は第1号・第2号墳とほぼ同様の南側中央部の位置にある。墓道は、攪乱をうけているが、中央部がやや盛り上がっているため墓道の痕跡と考えられ、他の古墳と同じように南側の周溝に連結していたと思われる。

覆土は、上層に極少量のローム粒子を含む暗褐色土、中・下層に極少量のローム粒子・粘土を含む黒褐色土、下層中央に極少量のローム粒子・粘土ブロックを含む暗黄褐色土が堆積している。覆土を除去すると、側壁・奥壁の石材はすでに抜き取られていて、側壁の西・東側の一部には裏

込めに使用したと思われる粘土の一部と、その下から断面U字状の板石を据えた痕跡が溝として残っている。しかし第1号墳に見られるような羨道部の痕跡がないため単室の可能性が考えられる。天井部及び側石の石材が遺存しないため実際の高さは確認できないが、確認面から底面までの高さは0.8mほどである。底面は平坦で、敷石は極めて少なく第1号・第2号墳の敷石の状況とは異なり、造りが貧弱である。

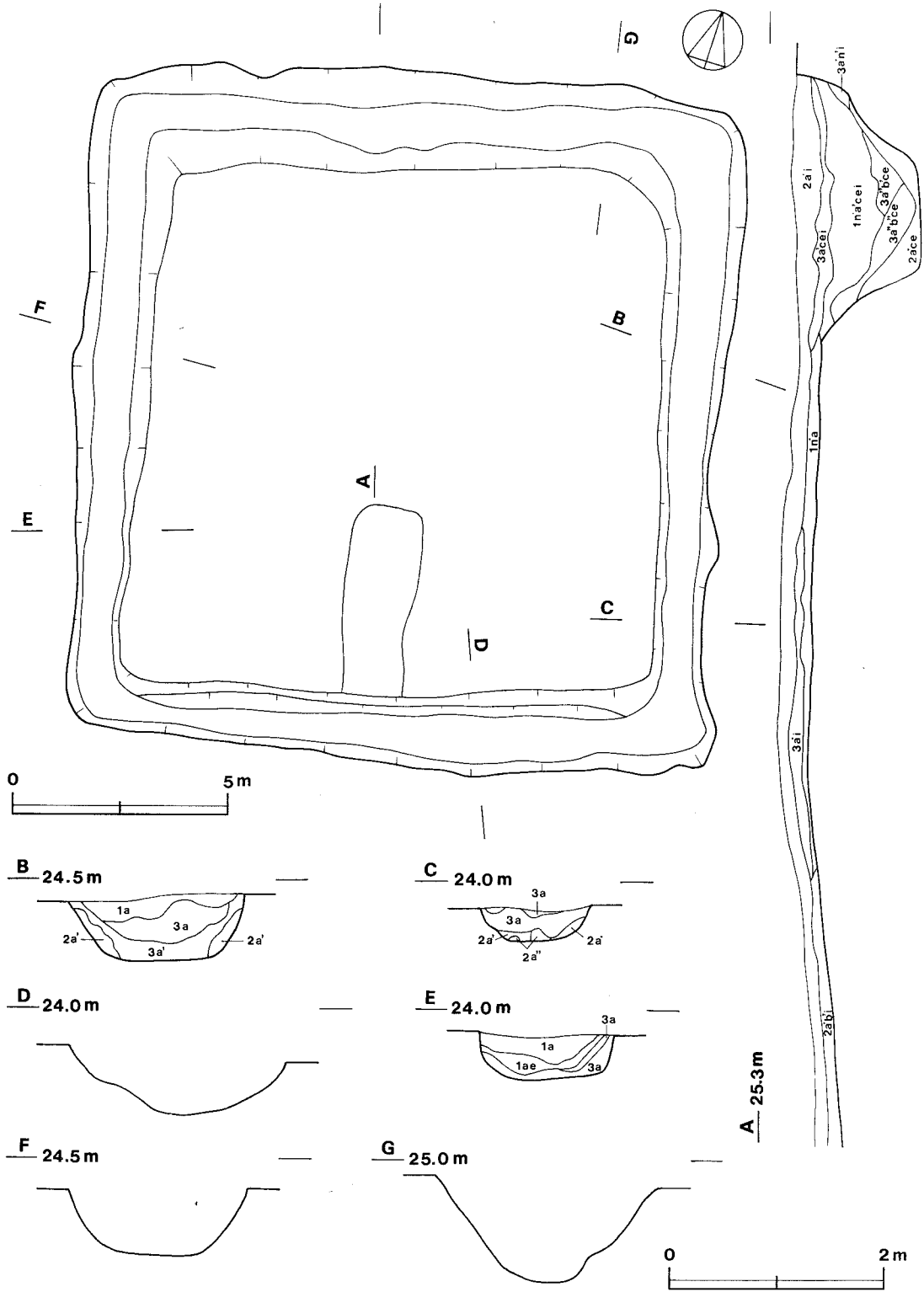
埋葬施設は、墓道を有していたと思われることや粘土ブロックが出土したこと、また板石の痕跡と敷石から推定すると形態的には、地下式の横穴式石室と思われる。石室の規模は内法長辺2.15m、短辺0.8mの長方形を呈している。玄室の幅は入り口部で88cm、奥壁部で76cmである。墓道の長さは、周溝と連結していると仮定すると1.95mである。低面のレベルは玄室内で23.40m、墓道の痕跡部で23.22m、周溝側で23.13mである。

③ 出土遺物

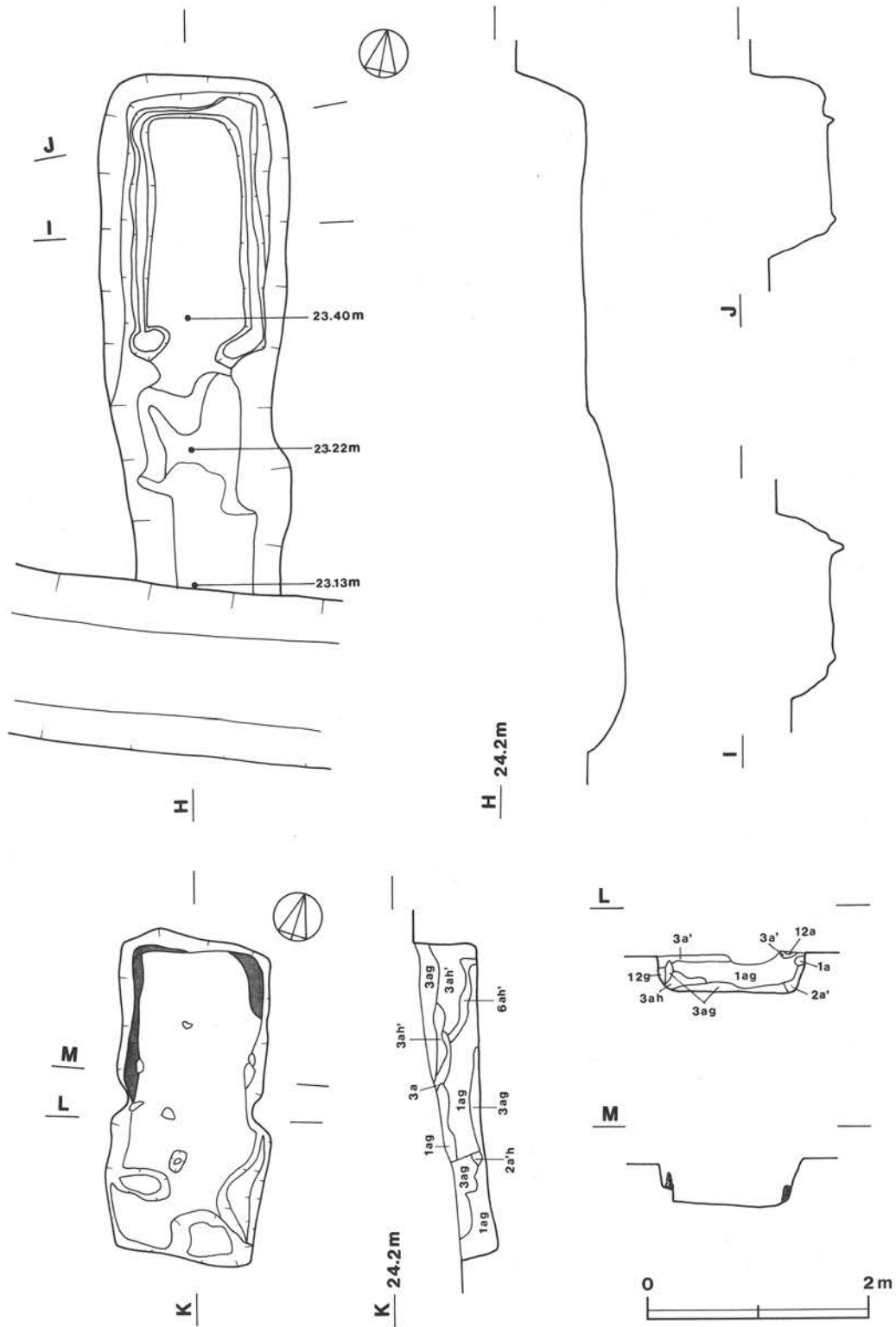
遺物は、埋葬施設の覆土中から石室の構築材の一部や敷石と考えられる雲母片岩18片、土師器片28片、須恵器片27片、流れ込みと思われる縄文土器1片が出土し、周溝内から土師器片10片、須恵器の長頸壺の口頸部片（第45図3）、長頸壺の体部片（第45図4）、流れ込みと思われる縄文土器片1片が出土している。東側周溝北東コーナーよりのほぼ底面から長頸壺（第45図1）が出土し、北西コーナー周溝の覆土から埴形土器（第45図5）、西側の周溝中央やや南よりの底面から長頸壺の口頸部（第45図2）が出土している。

第3号墳出土土器観察表

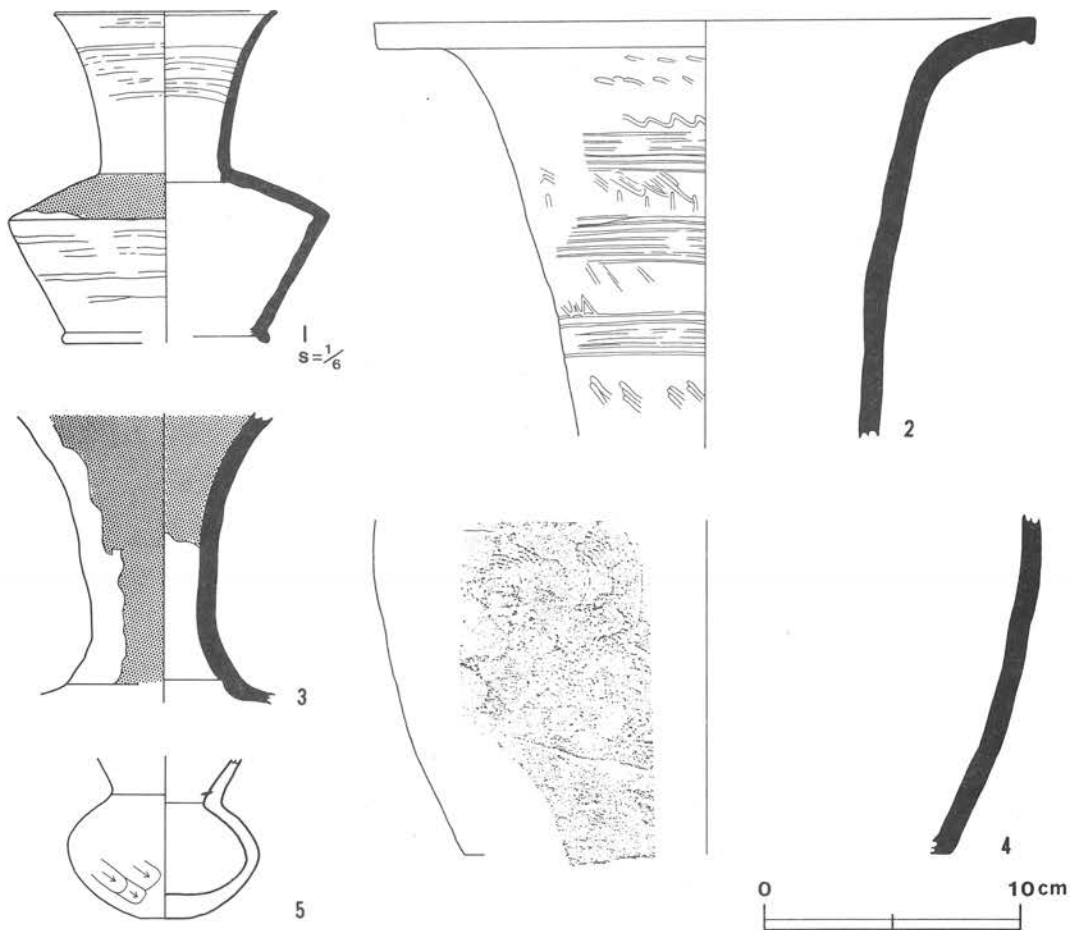
図版番号	器種	量目(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図1	長頸壺 須恵器	A (17.1) B 25.9 C (15.6)	底部欠損。底部はややふんばった高台を付ける。胴部は上半部で鋭く屈曲し、口頸部はくびれ、外反気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部下半部ヘラケズリ、胴部上半部から頸部・内面横ナデ、頸部から胴部上半部外面にかけて自然釉がかかる。	砂粒・細礫 灰白色、(釉)オリ ブ黄 良好	P-37 70% 東側周溝北東 コーナー
2	長頸壺 須恵器	A (25.8) B [16.3]	口辺部片。口頸部は外反し、口縁部でさらに大きく外反する。口縁端部を面とりする。	口縁部内面横ナデ。口辺部は4本櫛歯による沈線文を2回重ねて横に4区画し、区画内を2本、3本の櫛歯で波状文を施している。	砂粒・細礫・雲母 灰白色(釉)暗褐色 普通	P-38 30% 西側周溝
3	長頸壺 須恵器	B [11.3]	口辺部片。口頸部は外反し、口縁部付近で大きく外反する。内面下端に段をもつ。	内・外面ナデ。口頸部内・外面自然釉がかかる。	砂粒・細礫・雲母 灰白色 普通	P-40 30% 周溝内
4	長頸壺 須恵器	B [13.2] C (19.0)	胴部下半から底部片。胴部はやや内彎する。	胴部外面タタキ目、内面ナデ。	砂粒・細礫・雲母 灰白色 普通	P-41 10% 周溝内
5	埴 土師器	B [6.1] C 2.0	平底。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくの字状にくびれて口縁部は、外傾する。	胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-42 80% 北西コーナー



第43図 第3号墳実測図(1)



第44图 第3号墳実測図(2)



第45図 第3号墳出土遺物実測図

表5 古墳一覽表



遺跡名	古墳名	位置	墳形	墳丘規模		埋葬施設			周溝		備考
				長径×短径(m)	主体部	主軸方向	遺物	平面形	断面形	遺物	
寺家ノ後B	第1号墳	B2・B3	方墳	17.2×16.1	横穴式石室	N-9.5°-W	土師器片5片 縄文土器片23片 内耳土器(口縁部)	方形		長頸壺 須惠器片10片 土師器片99片 縄文土器片79片	
〃	第2号墳	B2	〃	12.6×11.0	〃	N-7°-W		〃		土師器片224片 長頸壺 須惠器片8片 縄文土器片74片	SI-2と重複
〃	第3号墳	B1・B2	〃		〃	N-11°-W	土師器片28片 須惠器片27片 縄文土器片1片	〃		土師器片10片 長頸壺 須惠器片8片 縄文土器片1片	SI-4と重複
十三塚B	第1号墳	B1・C1	〃	6.6×5.9	〃	N-17°-W	土師器片6片 須惠器片8片	〃			SI-1と重複

(3) 土坑

当遺跡からは土坑13基が確認され、これらの土坑は、遺跡のほぼ中央部から南側に検出されている。主な土坑は以下のとおり記載し、他は一覧表の中で掲載した。

第2号土坑（第46図）

本跡は、調査区の中央南端のB2g6区を中心に確認され、第2号墳の南側周溝の南西コーナーよりに位置し第2号墳の周溝を調査中に検出された土坑である。

平面形は不整楕円形を呈し、規模は、長径1.40m、短径1.23m、深さ0.15～0.82mである。壁はロームで硬く、北東側で一段を有し、他はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

遺物は出土していないが、第2号墳の周溝内にあるため、第2号墳と何らかの関係がある可能性も考えられるが、土層の状況や遺物が不明のため時期、性格は明確にできない。

第3号土坑（第46図）

本跡は、調査区の中央部のB2d6区に確認され、第2号墳の墳丘内北側に位置している。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は長径2.63m、短径1.44m、深さ0.78mである。壁はロームで硬く、ほぼ外傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

覆土は少～多量のローム粒子、極少～少量のロームブロックを含んだ褐色土・黒褐色土・暗褐色土が堆積している。第2号墳の墳丘の土層を、本跡が切っていると観察されるので本跡の方が新しい遺構と考えられる。

遺物は出土していないが、第2号墳の墳丘内にあるため、第2号墳と何らかの関係がある可能性も考えられるが、本跡が古墳よりも新しいと判断されること以外は、明確にできない。

第13号土坑（第47図）

本跡は、調査区のB3ii区に確認され、第1号墳の南側周溝の南西コーナーよりに位置している。周溝と本跡との新旧関係は不明である。

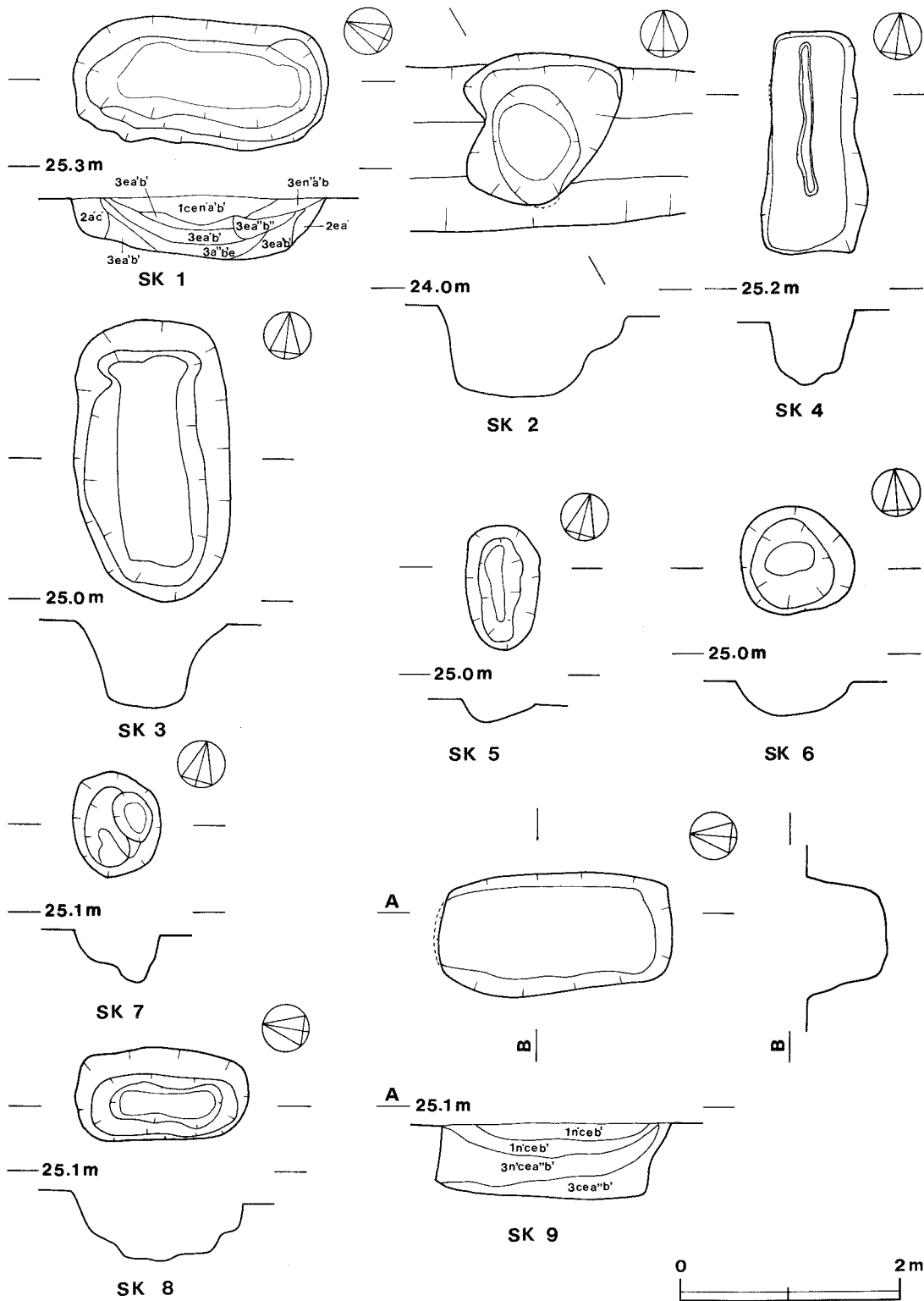
平面形は、不整楕円形を呈しているが西側と東側の一部が第1号墳の周溝に切られている。規模は推定で、長径2.51m、短径1.72m、深さ0.40～0.66mである。壁はロームで硬く、西壁が周溝と重複しているため不明で、東壁側の底面は周溝の底面より深いため、壁は10cmほどの立ち上がりが確認されている。北壁はほぼ垂直で、南壁は外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦であるが、3か所にピットがあり、北側のピットは、一辺が40cmほどの正方形を呈し、深さは10cmほどである。他のピットは、不定形を呈している。

覆土については、周溝の調査中に本跡を検出し、その土層を観察した。上層は40cmの厚さで、極少量のローム粒子を含む黒褐色土、中層は、15～40cmの厚さで極少量のローム粒子を含む暗褐色土、下層には、極少量の粘土粒子を含む暗褐色土、壁際には、少～中量のローム粒子を含む褐色土が堆積している。

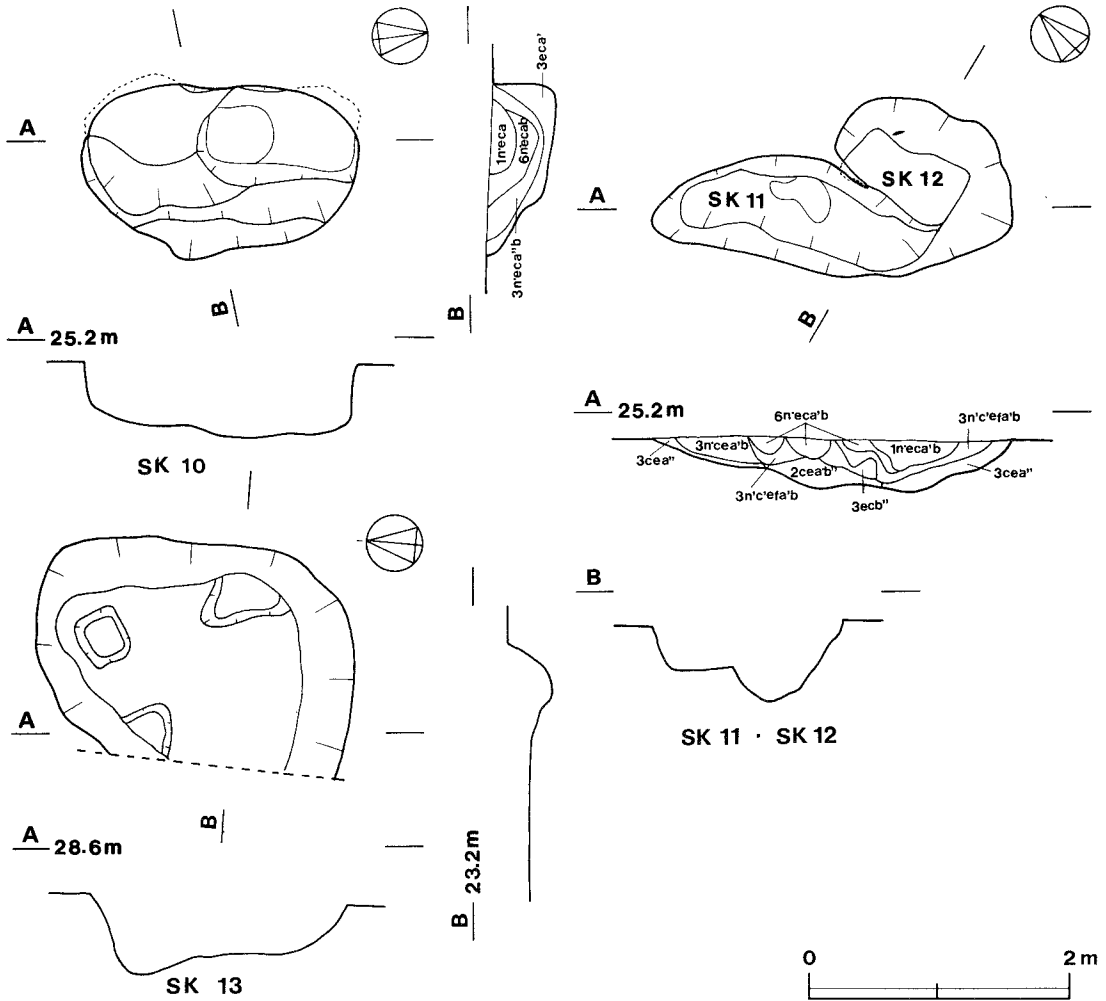
遺物は出土していないが、第1号墳の周溝内にあるため、第1号墳と何らかの関係がある可能性も考えられるが、時期や性格は不明である。

表6 土坑一覧表

土坑番号	位置	長軸方向 (長径方向)	平面形	規 模		壁 面	底面	覆土 状態	出土遺物	備 考
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(m)					
1	B2b7	N-23°-W	楕円形	2.37×1.14	0.55~0.60	外 傾	緩い起伏	自然		
2	B2g6	N-0°-W	不整楕円形	1.40×1.23	0.15~0.82	垂 直	平坦	〃		第2号墳と重複
3	B2d6	N-9°-W	隅丸方形	2.63×1.44	0.78	外 傾	〃	〃		
4	B2b8	N-6°-W	隅丸長方形	2.05×0.80	0.55~0.64	〃	緩い起伏	〃	土師器片10片, 縄文式土器片6片	SD-2と重複
5	B3a3	N-18.5°-W	楕円形	1.18×0.70	0.19	〃	皿状			
6	A2i9	—	不整円形	1.11×1.03	0.32	〃	〃	自然		
7	B3c3	N-18.5°-W	楕円形	0.99×0.81	0.28~0.44	〃	凹凸	〃		
8	B2c9	N-9.5°-W	隅丸長方形	1.60×0.85	0.26~0.58	〃	〃	〃	土師器片1片	
9	B2b2	N-4°-W	〃	2.15×1.13	0.71	〃	平坦	〃		
10	B2a3	N-5.5°-E	楕円形	2.15×1.23	0.48~0.58	オーバーハング	緩い起伏	〃		
11	B2c3	N-32°-W	〃	2.26×0.86	0.36	垂 直	平坦		土師器片4片, 縄文式土器片4片	
12	B2e4	N-8°-W	〃	1.53×(0.92)	0.63	外 傾	皿状	自然		
13	B3i1	N-2°-E	不整楕円形	2.51×(1.72)	0.40~0.66	〃	平坦			第1号墳と重複



第46图 土坑实测图(1)



第47図 土坑実測図(2)

(4) 溝

第1号溝 (第48図)

本溝は、遺跡の中央部のA2j5区を中心に確認されている。ほぼ東西方向に延びて、両端とも自然に消えている。南東1.0mほどに第2号溝が位置している。

溝の規模は、全長7.0m、上幅0.25~0.91m、下幅0.13~0.66m、深さ0.05~0.19mである。断面形状は「U」を呈している。壁はロームで硬く、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

溝底面のレベルは東から西へ順にa点で25.09m、b点で25.03mである。

覆土は、多量のローム粒子、極少量の焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土や褐色土が堆積している。

遺物は、出土していない。

第2号溝 (第49図)

本溝は、調査区の中央部のB2a7区を中心に確認されている。ほぼ北西から南東方向に延び、両端とも自然に消えている。溝の南東部で第4号土坑と重複している。新旧関係は、溝を土坑が切っているため溝の方が古いと考えられる。

溝の規模は、全長15.92m、上幅0.49~1.35m、下幅0.33~0.94m、深さ0.15~0.40mである。断面形は、「〜」を呈している。壁はロームで硬く、北側はほぼ垂直で、南側は外傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。底面のレベルは北から南へ順にa点で25.03m、b点で24.64m、c点で24.62mである。

覆土は、上・中層が多量のローム粒子や極少量の焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土、下層が多量のローム粒子や極少量の焼土粒子・炭化粒子を含む褐色土が堆積している。

遺物は、南側覆土中から土師器片・須恵器片が1片ずつ出土している。

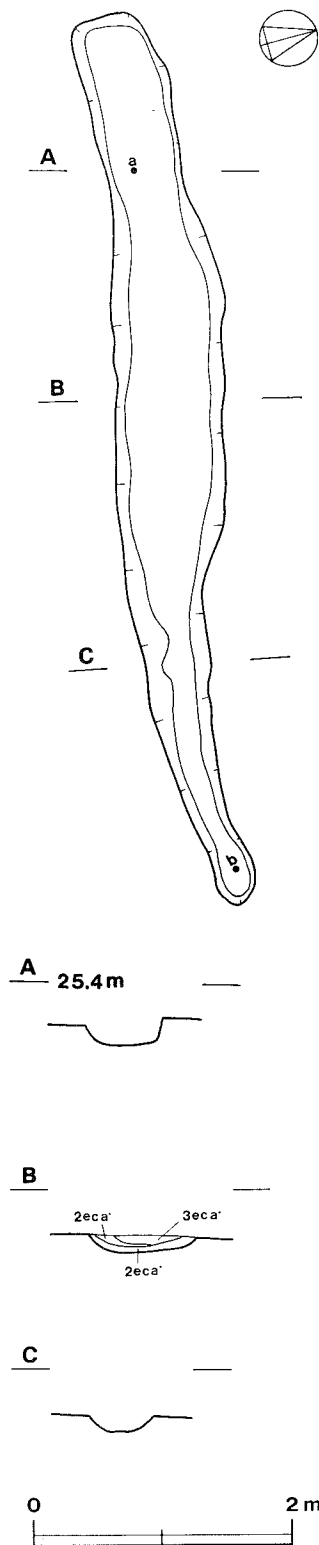
第3号溝 (第49図)

本溝は、調査区の中央部B2b6区を中心に確認されている。溝は、南側2mほどに第2号墳が位置し、北西から南東方向に延びて両端とも自然に消えている。

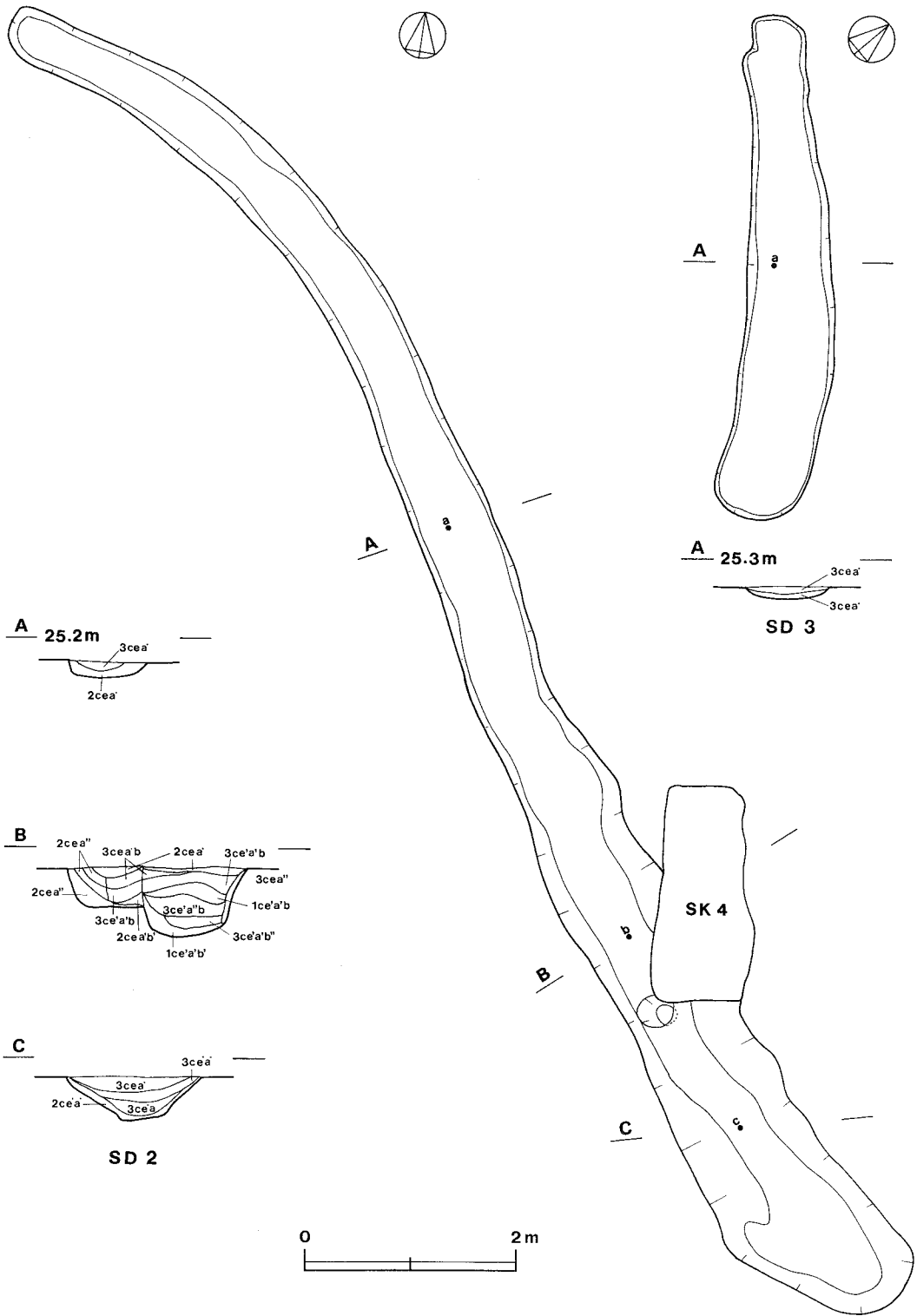
溝の規模は、全長4.82mと短く、上幅0.51~0.90m、下幅0.41~0.79m、深さ0.11mほどである。断面形は「〜」を呈している。壁はロームで硬く、緩やかに立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。溝底面のレベルは、a点で24.95mである。

覆土は、多量のローム粒子や極少量の焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土、同じく褐色土が堆積している。

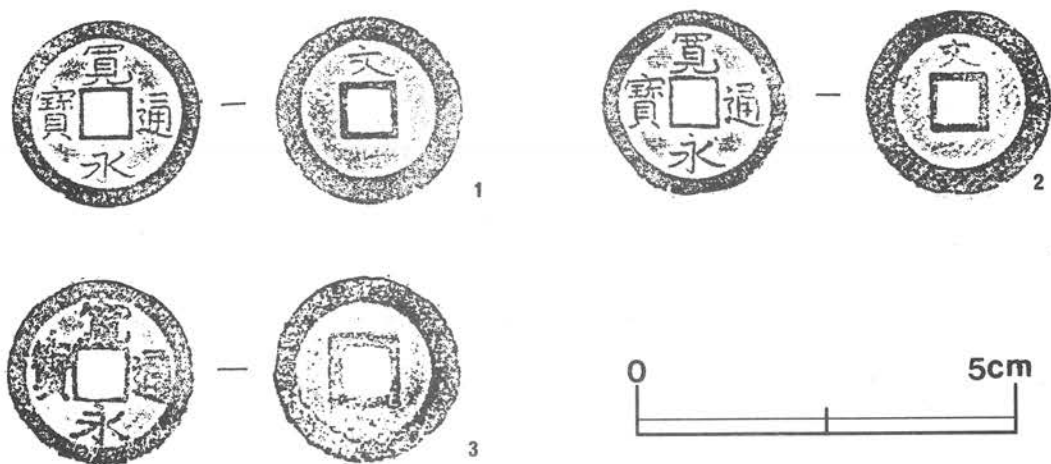
遺物は、出土していない。



第48図 第1号溝実測図



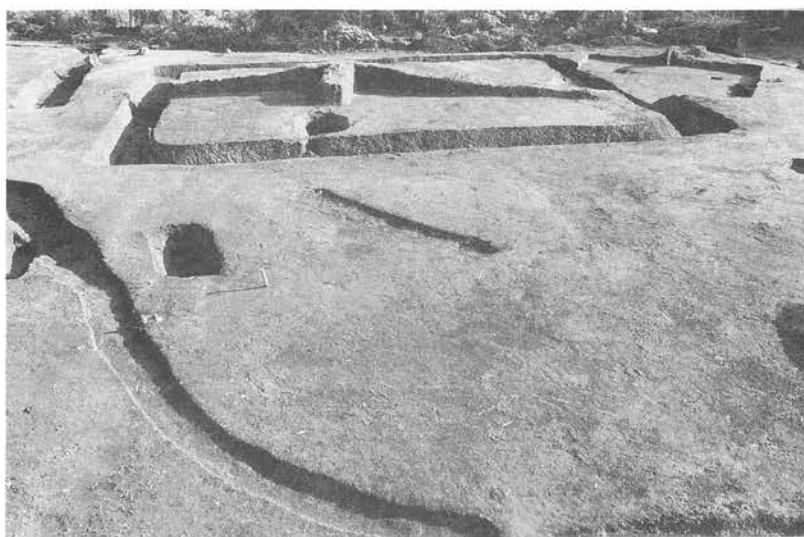
第49图 第2·3号沟渠测图



第50図 古銭拓影図

表7 古銭一覧表

図番号	銭名	初鑄年(西暦)	鑄造地名	出土地点	備考
第50図 1	寛永通寶	寛文8年(1668)	日本	表採	細字背文(1668) M1
2	〃	〃	〃	トレンチ	正字背勁文(1668) M2
3	〃	〃	〃	〃	丸屋銭(1714) M3
第30図 24	元祐通寶?	元祐元年(1076)	北宋	S I - 1	M4



3 まとめ

(1) 住居跡及び出土遺物について

今回の調査で検出された4軒の住居跡は、古墳時代和泉期と鬼高期に比定される。遺構については、特に和泉期の貯蔵穴の位置に注目し考察した。なお出土遺物については寺家ノ後A遺跡の項で述べたことと著しく差異はないので特徴的なものだけを記述した。

和泉期

和泉期と考えられる住居跡は3軒で、遺跡の中央部から南側にかけて検出されている。3軒の住居跡は、第1号住居跡の規模が他の住居跡と比較すると大きく一辺が7m前後あり、他の住居跡は一辺が5m前後である。

3軒の住居跡の支柱穴は、いずれも4か所あり、貯蔵穴は、炉の周辺（北と東側）と南及び南西コーナー部の2か所から検出されている。当遺跡と同一台地上に立地する寺家ノ後A遺跡における和泉期の住居跡には、3軒とも貯蔵穴がコーナー部にあるだけで炉の周辺に検出されていない。また当遺跡の炉と貯蔵穴の間隔は第4号住居跡が最も狭く10cmほどで、第1号住居跡は30cmほど、第3号住居跡は40cmほどである。第4号住居跡の炉と貯蔵穴の位置関係は近接しているが、炉と貯蔵穴の現存する上端が狭いだけで、実際の間隔は25cmほどである。本期の炉と貯蔵穴との関係については、茨城県教育財団年報4の中で「当教育財団調査の和泉期における住居形態の一般的特徴について」⁽¹⁾において14遺跡125軒の住居跡（昭和52～58年度までの調査例）の形態について統計的にまとめている。この中では、和泉期における貯蔵穴の位置について、共通する特徴として「①東方向及び南方向に配する例が多く、炉の位置と逆の方向に配される例が多いこと。②コーナー部に配される例が多く、その他の位置は少ないこと。③形状別・規模別において、一般的特徴をもたないこと」の3点をあげられ、貯蔵穴は炉より割合に遠いところに付設されている。そして、貯蔵穴と炉の関係は、「貯蔵物を煮炊きすることによって食するとするならば、炉と貯蔵穴の位置関係は、距離的に近い位置にあってもよさそうである」と記載されている。この点から、本期の3軒の住居跡の炉の周辺（北と東側）の貯蔵穴は、炉と関連して煮炊きするためのものを貯蔵する意味合いが濃いのではないだろうか。この観点から、類例を求めてみると、はなはだ類例が少ないが、当教育財団の調査例としては竜ヶ崎市平台遺跡の第37号住居跡⁽²⁾をあげることができる。この住居跡は、炉の北西側60cmに貯蔵穴があり、炉との関連性が考えられる。しかし、炉周辺の貯蔵穴は、短期的な食物を貯え、炉よりも遠いコーナー部に付設されている貯蔵穴は、長期の食物等を貯蔵していたとも考えられる。

出土遺物は、土師器が極少量出土している。須恵器は器形不明の小片が1点だけ第2号住居跡から出土している。器種としては甕・壺・甑・鉢・高坏・坏・埴の7種類が出土している。

鬼高期

鬼高期と考えられる住居跡は1軒で、遺跡の南側から検出されている。一辺の長さは7mほどで、床面積は40㎡ほどである。住居跡は1軒のため同一台地上にある寺家ノ後A遺跡の2軒の住居跡や十三塚B遺跡の1軒の住居跡と比較すると、ほぼ同規模である。

主柱穴は、4か所で、貯蔵穴はカマドの北側のコーナー部に位置している。

カマドは、北西壁中央に山砂・粘土で構築されている。カマド内より出土した支脚は、直立して使用されていた状態と考えられる。

出土遺物は少なく、特徴的なこととして「常総型甕」の初源と思われる甕が2個体出土したことがあげられる。十三塚B遺跡の住居跡のカマド内からも同様の甕が出土している。また、口縁部と底部の境に稜を有する坏が2個体出土している。出土した坏が、寺家ノ後A遺跡や十三塚B遺跡から出土した坏とほぼ同一の器形と観察されることからほぼ同一時期と考えられる。

表8 遺構別出土土器一覧表

住居跡 古墳	土 師 器										合 計	時 期	
	甕	甌	坏	鉢	高 坏	壺	台付甕	埴	その他	須恵器 長頸壺			
SI-1	1			2	15	1		3				22	和泉期
2	2	1	2							1		6	鬼高期
3	2			1	3		1					7	和泉期
4	1				1					1		3	〃
TM1											1	1	
2											2	2	
3								1			4	5	
合計	6	1	2	3	19	1	1	4	2	7	46		

(2) 古墳について

今回調査された4基の古墳は、断面が逆台形を呈する周溝を有する「方墳」である。本稿では、十三塚B遺跡の古墳も同一タイプのもと考えられるためこの古墳をもふくめて検討し、まとめとしたい。寺家ノ後B遺跡の3基の古墳は、小規模で、墳丘は低墳丘なものと思われるが、台地先端部に築造され低地を見下ろすような位置に築造されており、遠望した時の効果を考慮して構築しているものと考えられる。

4基の古墳についての共通する事項をまとめてみる。

- ① 各古墳の墳丘は、いずれも低墳丘であると思われる。
- ② 周溝は、明瞭な逆台形を呈し、一辺の長さは、第1号墳が20mほどで、第2・3号墳はほぼ同

規模で16mほどである。十三塚B遺跡の第1号墳は15mほどである。

- ③ 埋葬施設は、ほぼ南北を主軸とする地下式の横穴式石室と思われ、4基とも埋葬施設と周溝の間に墓道をもち周溝と連結するタイプである。
- ④ 玄室の底面は、雲母片岩の礫が敷かれている。また、雲母片岩が石室を構築した石材と思われるが、第1号墳の框石を除いてすべて抜き取られていた。
- ⑤ 遺物は、埋葬施設からは時期を推定しうるものは出土していない、周溝からわずかに須恵器の長頸壺等が出土している。

このような古墳の被葬者については、古墳の形態や規模等から付近の「ムラ」の有力家父長や同族集団の族長クラスが考えられる。

つぎに、埋葬施設の問題点と年代について触れておきたい。

〈埋葬施設〉

当遺跡の4基の古墳は、第1号墳の例から墓道を有することや框石の存在と奥・側壁の石材の痕跡から形態的には地下式の横穴式石室と考えられるが機能的には箱式石棺と何ら変わり無いと思われる。このような古墳の類似例としては当遺跡からほぼ東の花室川の右岸に所在していた土浦市石倉山古墳群の第1・2号墳^④や当教育財団が調査したつくば市高山古墳群の第1号墳^④が上げられる。石倉山古墳群の第1・2号墳の埋葬施設は、箱式石棺、高山古墳群の第1号墳では横穴式石室とそれぞれ報告されている。埋葬施設については、方墳ではないが類似の埋葬施設をもつ古墳として、筑波大が調査した新治村武者塚古墳^⑤があり、その報告書において構造上の4つの特色とし次のように述べられている。その特色についてまとめてみると、特色1は、地下式の埋葬施設は、関東地方では、横穴式石室と、箱式石棺があり、茨城県南を中心とすると箱式石棺の使用が顕著である。箱式石棺の編年では、茂木雅博氏^⑥のものをとりあげて箱式石棺が完全に地下に埋納される第Ⅲ期は、墓道が伴わないことや埋葬施設の主軸を南北位にあわせようとの意図もないということが述べられている。また、方墳で墓道をもっており、埋葬施設に箱式石棺が存在している土浦市石倉山第1号墳の例が紹介され、埋葬施設は石材が搬出され、真性な箱式石棺とするには不明瞭なところがあるが、これを箱式石棺とするならば、主軸を南北にもつことと合わせて、横穴式石室との関係が強いものと考えられるとしている。特色2は雲母片岩の板石を利用するのは、筑波山塊の周辺つまり「変則的古墳」分布域には多いことをあげている。特色3は、副室と主室のあいだに明瞭な段差があり、主室の床が低い点をあげている。特色4は石室南端が壁で仕切られ開口しない点をあげている。そして結論として武者塚古墳の埋葬施設を、あえて箱式石棺の制をもつた横穴式石室と想定しておきたいと述べている。本項では、この見解に基づき当遺跡の古墳は、ほぼ南北に主軸をもつこと、羨道部や框石の存在及び墓道を有することから横穴式石室を想定した。また、埋葬施設については、市毛勲氏の指摘している「変則的古墳」^⑦

との関係にも十分留意しながら今後調査事例の増加を待ち、構造を含めて改めて検討していかなければならない問題であると考えている。

〈古墳の年代観〉

本墳は、時期を決定する遺物が埋葬施設から検出されておらず、わずかに古墳の周溝から須恵器の長頸壺等が検出されているにすぎないため時期についてははっきりしたことは述べられない。しかし古墳時代終末期と報告される土浦市石倉山古墳群第1・2号墳とほぼ同一タイプと考えられることや寺家ノ後B遺跡の第2号墳が鬼高期の住居跡を切っていること、また4基の古墳の周溝の断面が明瞭な逆台形であり、深さも45～100cmと深いという特徴をもっている。周溝の特徴については、千葉県公津原の報告書⁽⁸⁾のまとめの中で「周溝のタイプに、大別して2種類あることを把握した。すなわち、後期古墳でも古手のものは浅く、皿状を呈して溝底からの立ち上がりは明瞭に認められなかったのに対し、新しい時期の溝は、逆台形に深くうがたれていた。」と述べている。これらのことから古墳の時期は、鬼高期以降で、周溝の底面から出土した須恵器の長頸壺をてがかりにし、周溝の断面形が明瞭であることや住居跡が埋没していく時間差を考慮にいと、4基の古墳の年代は、一般的に言われている古墳時代終末期で、その中でも新しい時期ではないかと思われる。実年代については、はなはだ不明確であるが、7世紀代中葉以降と考えられる。

当遺跡は台地上に古墳時代和泉期、鬼高期において住居が数軒を単位とする小集落が存在し、その後古墳時代終末期に墓域となり古墳がつくられるようになったものと考えられる。

※引用・参考文献

- (1) 茨城県教育財団「年報4」1984
- (2) 茨城県教育財団文化財調査報告第19集「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書8 平台遺跡」1983
- (3) 茨城県住宅供給公社「土浦市烏山遺跡群」1975
- (4) 茨城県教育財団文化財調査報告第22集「科学博関連道路谷田部明野線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 ツバタ遺跡高山古墳群」1983
- (5) 茨城県新治村教育委員会「武者塚古墳」1986
- (6) 茂木雅博「箱式石棺の編年に関する一試論—霞ヶ浦沿岸を中心として—」上代文化36 1966
- (7) 市毛勲「東国における墳丘裾に内部施設を有する古墳について」古代41 1963
- (8) 千葉県企業庁「公津原」1975

第3節 十三塚A遺跡

1 遺跡の概要

当遺跡は、土浦市天川1-692ほかに所在し、JR常磐線土浦駅から南西約3.6kmにあり、永国団地建設予定地内の北西端で、標高27m前後の台地平坦部に立地している。当遺跡の南西350mには永国十三塚遺跡、南には隣接して十三塚B遺跡が位置している。調査面積は3,100㎡で、現況は山林である。本跡の南方約200mには花室川が東流し、流域に広がる水田との比高は約15～17mである。

本跡からは、塚1基、土坑9基、溝5条が検出されている。

出土遺物は少なく、溝からは縄文土器片、土師器片、須恵器片、石鏃等が出土し、表土からは黒曜石の剝片が出土している。土坑及び塚からは、遺物は出土していない。

2 遺構と遺物

(1) 塚

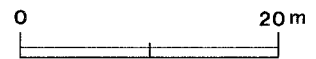
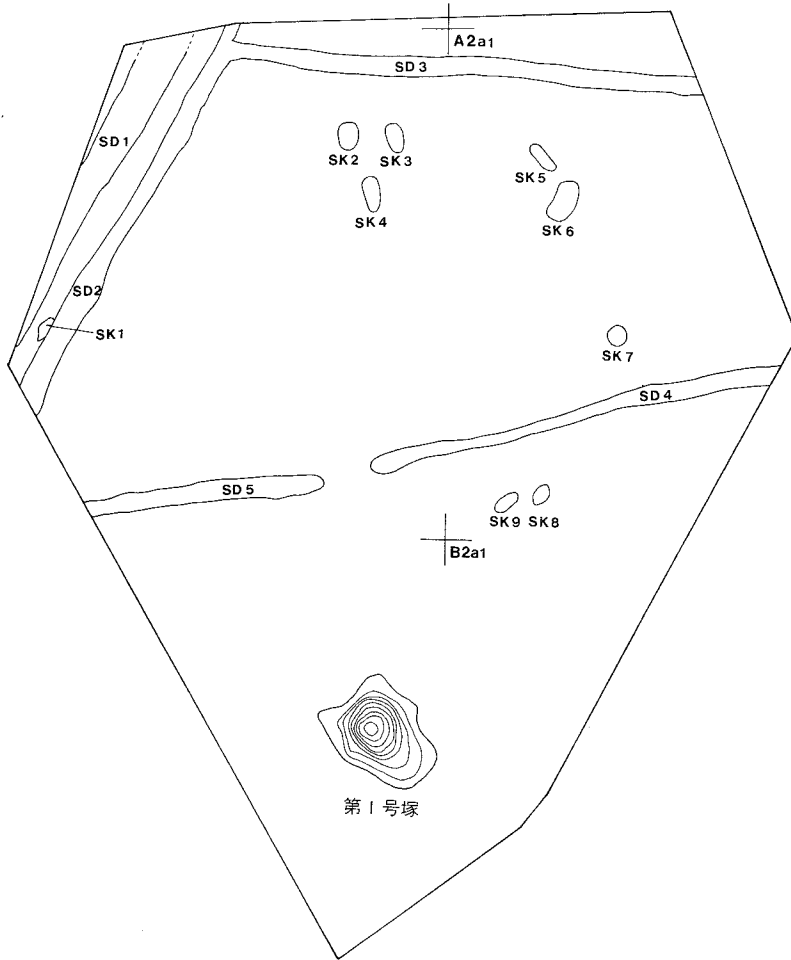
第1号塚（第52図）

本跡は、調査区の南側中央部B1・B2区に位置する。塚の平面形は不整楕円形を呈し、規模は、長径8.5m、短径6.8m、高さ1.3mである。最頂部は、標高28.8mで、長径方向はN-45.5°-Wを指している。裾部は、南東方向にやや流れた様相を示している。塚は、周辺を含め13層からなり、塚裾部に木根による攪乱が見られる。

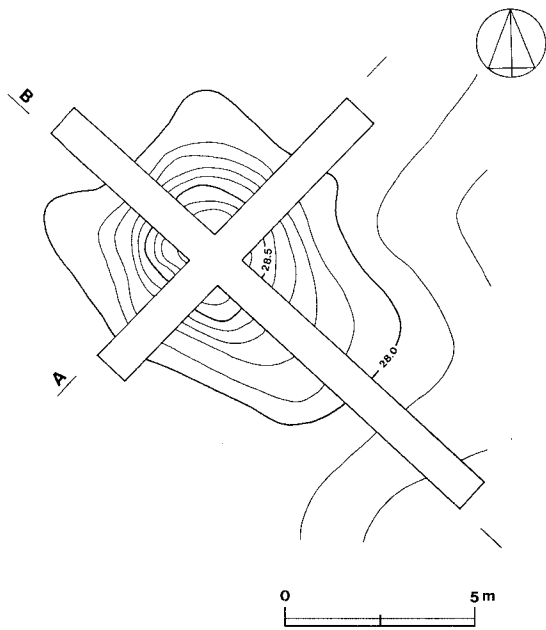
封土の構成は、6層からなり、最下層は、少量のローム粒子を含む黒褐色土が堆積しており、本跡の築造前の旧表土と考えられる。3～5層は含有物の量に違いが見られるが厚さ60cmほどの黒褐色土が盛土されている。さらに1・2層は腐葉土混じりの暗褐色土、黒褐色土の現表土が塚全体を覆っている。

塚の構築過程は、旧表土から3層まで土を積んで一度水平状態とし、塚の高度をますために2層以上の層を積み上げたものと考えられる。

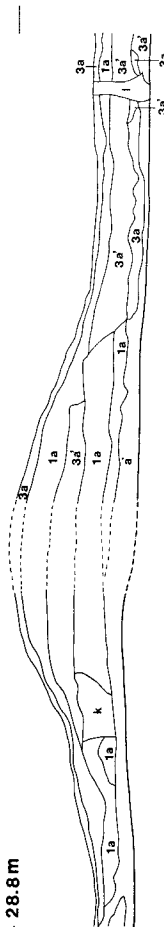
本跡は、当初古墳として発掘調査を進めてきたが、古墳に伴う周溝や埋葬施設である主体部が検出されず、また盛土等を検討した結果、塚であると判断した。本跡からの出土遺物はなく、時期を明確にする事はできないが、盛土の状態を総合的に判断すると中・近世に築造された塚と推定される。



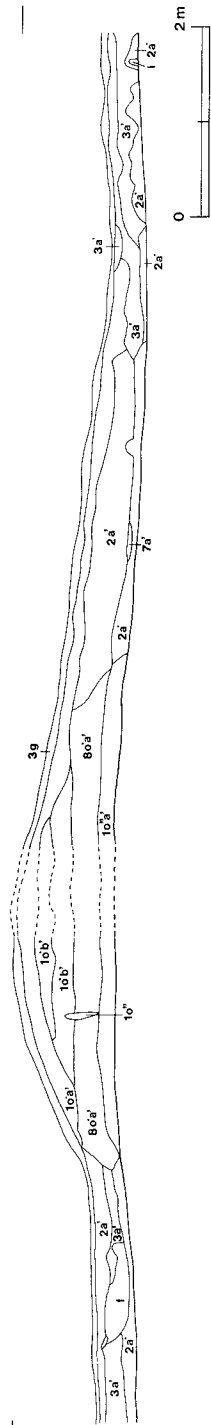
第51图 十三塚A遺跡全体図



A 28.8 m



B



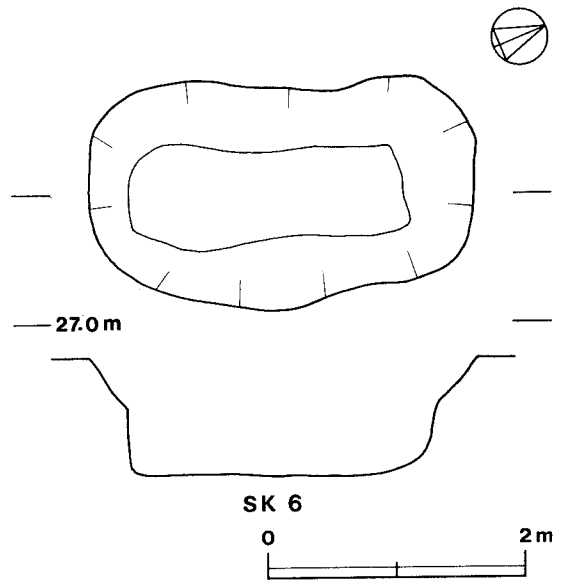
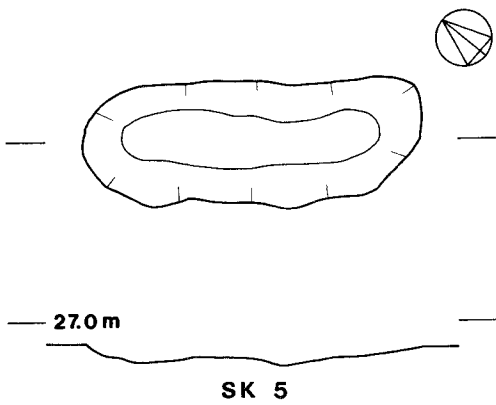
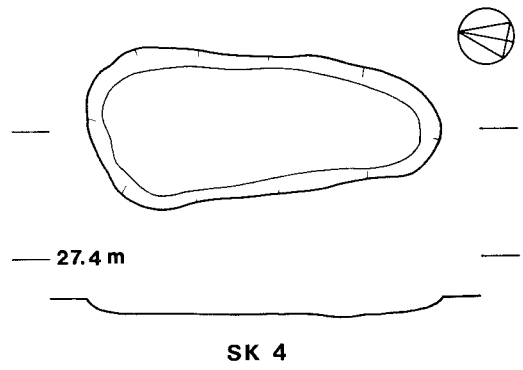
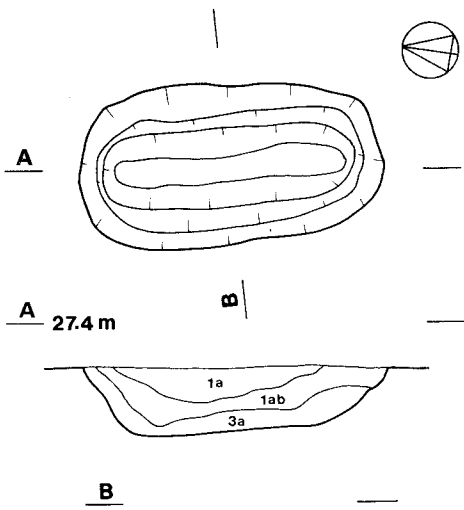
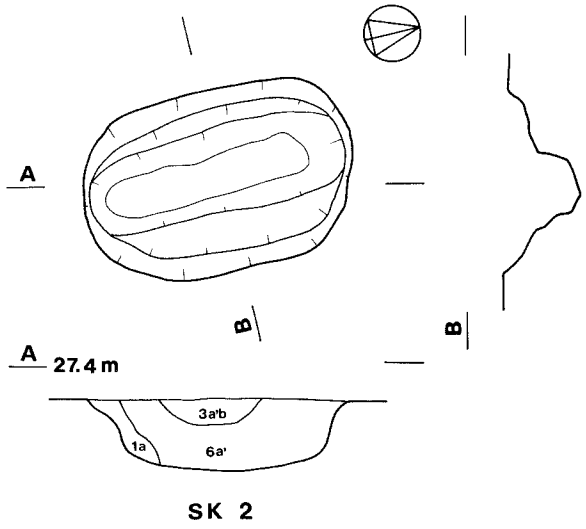
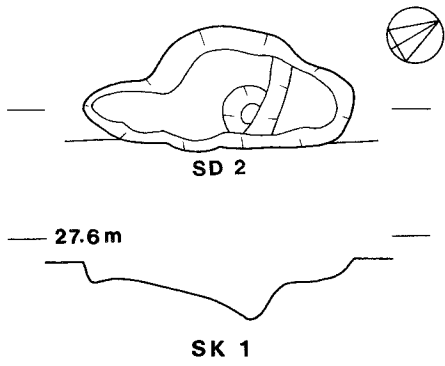
第52図 第1号塚実測図

(2) 土坑 (第53・54図)

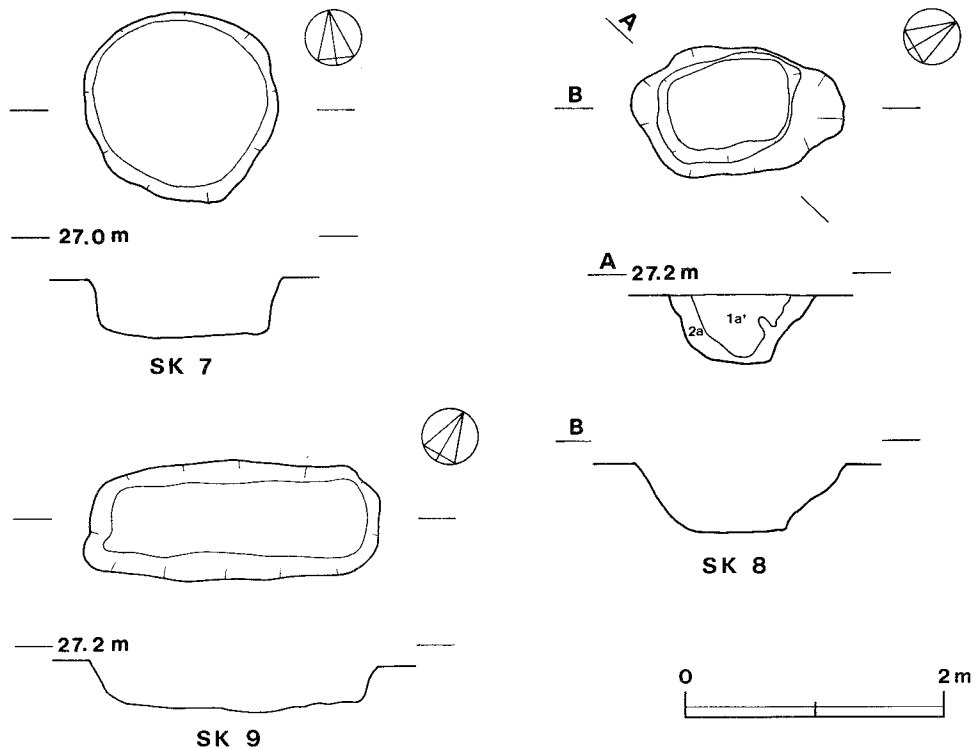
土坑は、調査区の北側に5基、中央東側に3基、西端に1基の計9基が検出されている。平面形は円形、長楕円形、不整楕円形、隅丸長方形、不定形を呈している。第2・3・6号土坑は2段状の掘り込みが認められるが、遺物が検出されないため時期や性格が不明である。土坑は一覧表で掲載した。

表9 土坑一覧表

土坑 番号	位置	長軸方向 (長径方向)	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆土 状態	出土遺物	備 考
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(m)					
1	A1f3	N-29.5°-E	不 定 形	2.08×0.97	0.31~0.47	外 傾	凹 凸	自 然	なし	SD-2と重複
2	A1c8	N - 4° - W	隅丸長方形	2.14×1.44	0.58	段 状	平 坦	〃	〃	
3	A1c9	N -15°- W	〃	2.34×1.24	0.57~0.59	〃	〃	〃	〃	
4	A1d9	N-11.5°-W	〃	2.79×1.11	0.16	外 傾	〃		〃	
5	A2c2	N -43°- W	長 楕 円 形	2.63×0.97	0.09~0.16	〃	緩 い 起 状		〃	
6	A2d3	N -21°- E	隅丸長方形	3.00×1.75	0.93~0.96	段 状	平 坦	自 然	〃	
7	A2f4	————	円 形	1.56×1.44	0.48	垂 直	〃	〃	〃	
8	A2j2	N-28.5°-E	不整楕円形	1.65×0.99	0.54	外 傾	〃	攪 乱	〃	
9	A2j2	N-60.5°-E	隅丸長方形	2.22×0.95	0.30~0.38	〃	〃	自 然	〃	



第53图 土坑实测图(1)



第54図 土坑実測図(2)

(3) 溝

第1号溝 (第55図)

本溝は、遺跡の西端A1c4区に確認されている。本跡の東側約3mのところ、第2号溝が位置し、第2号溝と平行してほぼ南北方向に伸びており、両端とも調査区域外に延びている。

溝の規模は、全長26.5m、上幅2.30~3.30m、下幅0.20~0.48m、深さ0.72~0.77mである。断面形は、「ㄩ」を呈している。壁はロームで硬く、やや外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦であり、溝底面のレベルは、北から南へ順にa点26.26m、b点26.28mである。

覆土は、ローム粒子やロームブロックを含む黒褐色土、暗褐色土、灰褐色土、褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は、覆土上層から縄文土器片18片、土師器片10片、石鏃2点(第60図1, 2)、剥片1点(第60図3)が出土している。石鏃は、基部の一部や両端が欠損し、石質は、黒曜石と頁岩である。ともに無茎石鏃で、抉りの浅いものは1点である。これらの遺物は、出土状況から流れ込みと思われる。

第2号溝（第56図）

本溝は、遺跡の西端A1c5区に確認されている。第1号溝の東側約3mに位置し、第1号溝と平行して南北方向に延びていて両端とも調査区域外に続いている。

溝の規模は、全長33.08m、上幅1.09～2.30m、下幅0.29～0.88m、深さ0.45～0.75mである。断面形は、「ㄩ」を呈している。壁はロームで硬く、やや外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦であり、溝底面のレベルは、北から南へ順にa点で26.55m、b点で26.91m、c点で26.77mである。

覆土は、ローム粒子・ロームブロックを含む黒褐色土、暗褐色土、灰褐色土、褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は、出土していない。

第3号溝（第57図）

本溝は、遺跡の北側A1a9区に確認され、ほぼ東西方向に延びている。西端は調査区の境で、第2号溝と交差している。新旧関係は第2号溝が本溝を切っているので、本溝の方が古いと考えられる。

溝の規模は、全長36.5m、上幅1.04～1.84m、下幅0.32～0.68m、深さ0.27～0.36mである。断面形は「ㄩ」を呈している。壁はロームで硬く、ほぼ緩やかに立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦であり、溝底面のレベルは、西から東へ順にa点で26.72m、b点で26.60m、c点で26.42mである。覆土は、少量のローム粒子・ロームブロックを含む黒褐色土や褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は、出土していない。

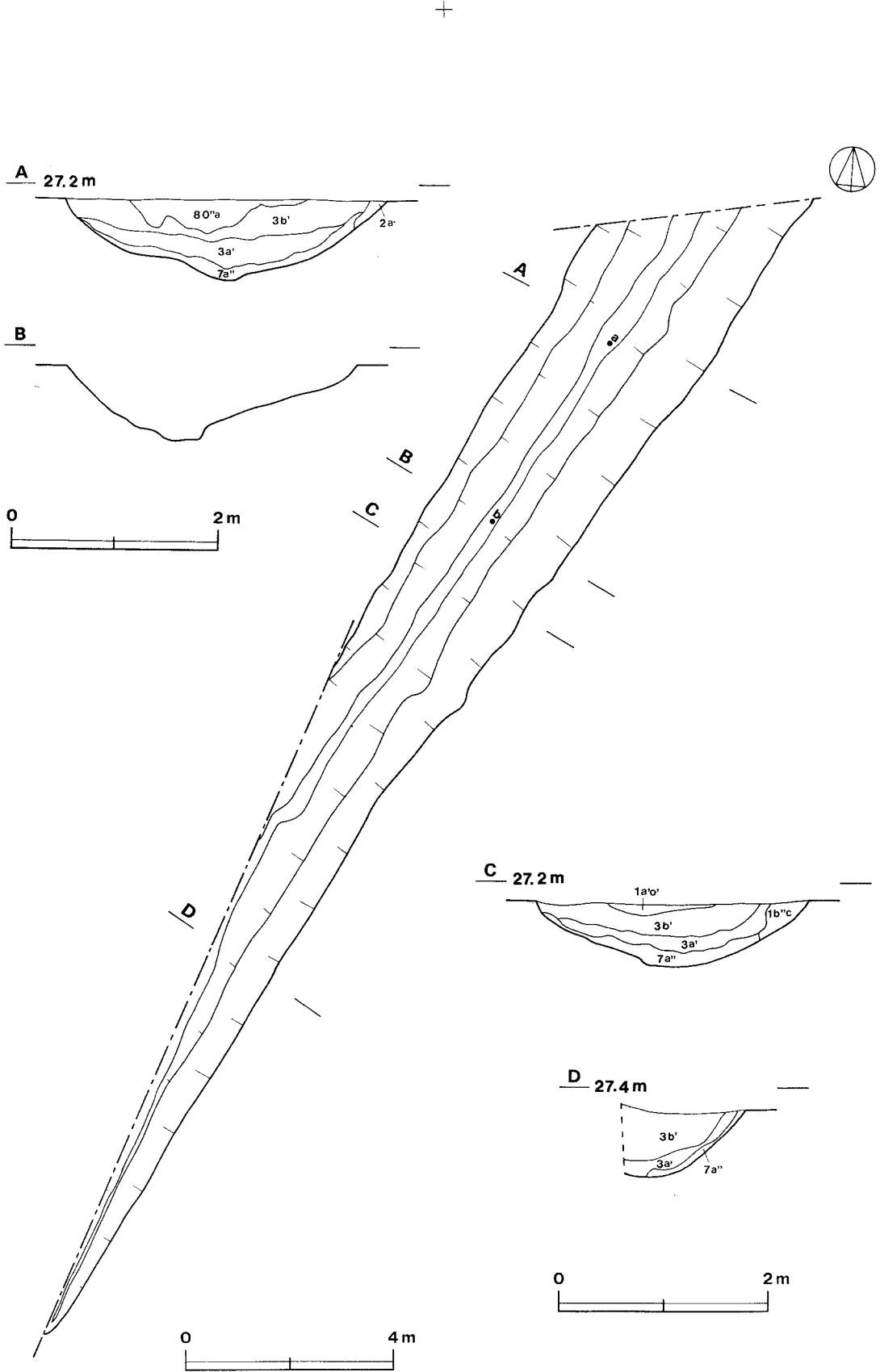
第4号溝（第58図）

本溝は、遺跡のほぼ中央部A1h4区に確認され、ほぼ東西方向に延びている。溝の東端はA2g7区から調査区域外に延び、西端はA1i9区で、自然に途切れている。溝の西端から約4m先に第5号溝が位置している。

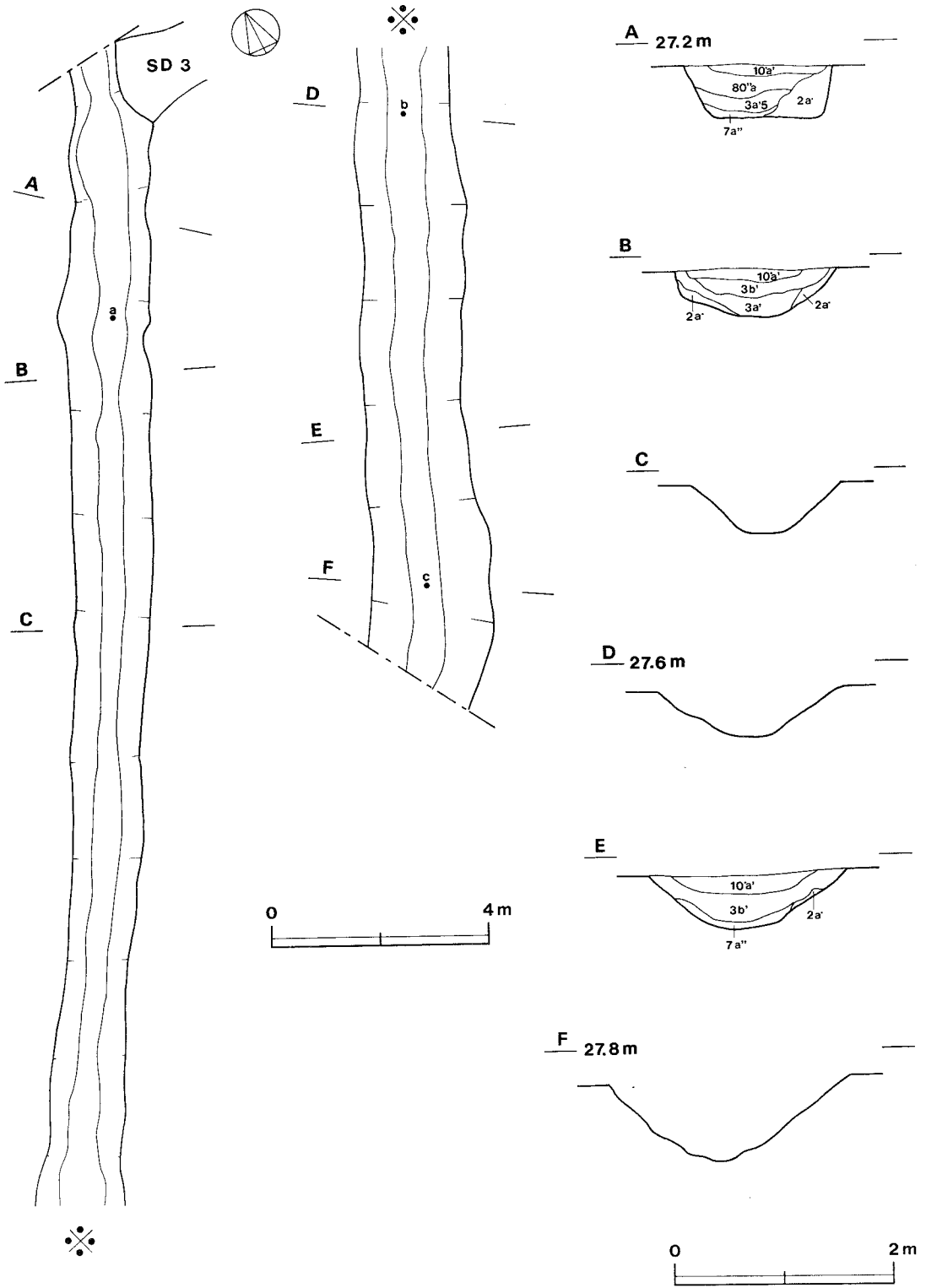
溝の規模は、全長32.5m、上幅0.67～1.52m、下幅0.08～0.42m、深さ0.43～0.86mである。断面形は、「ㄩ」を呈している。壁はロームで硬く、やや外傾して立ち上がる。底面は、ほぼ平坦であり、標高は、西から東へ順にa点で26.44m、b点で26.48m、c点で25.54mである。

覆土は、少量のローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土や黒褐色土が自然堆積の状況を示している。

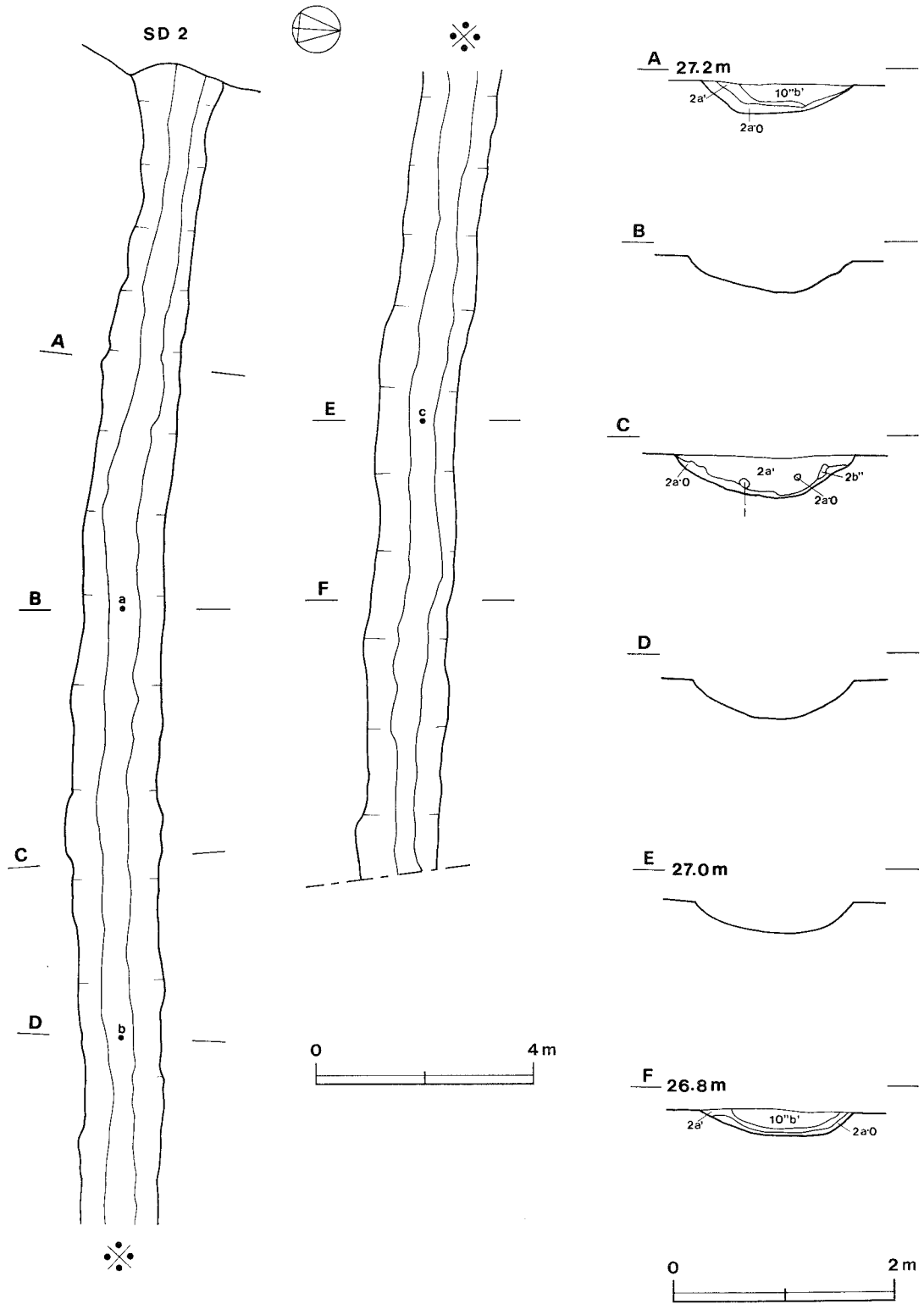
遺物は、出土していない。



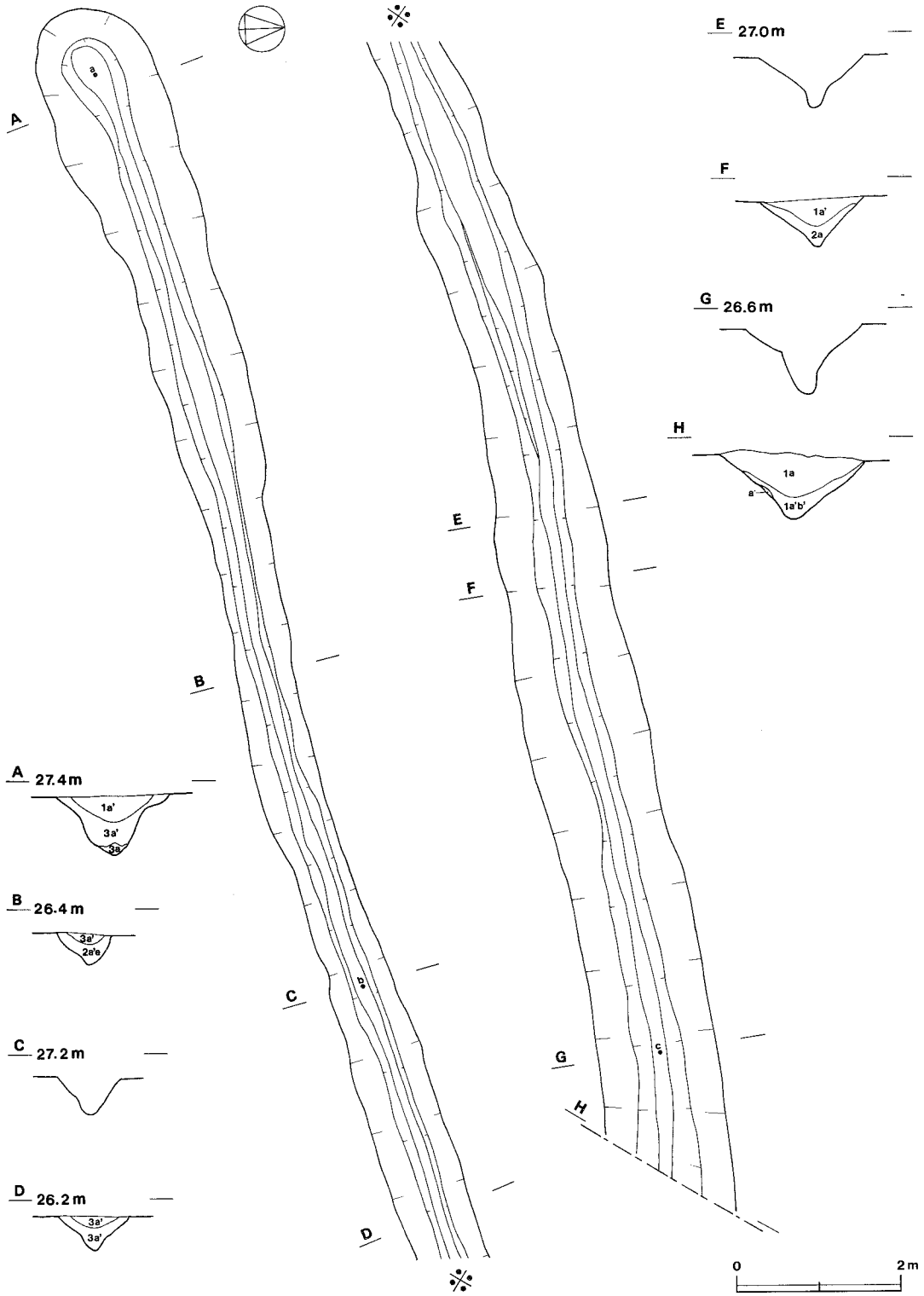
第55图 第1号沟渠测图



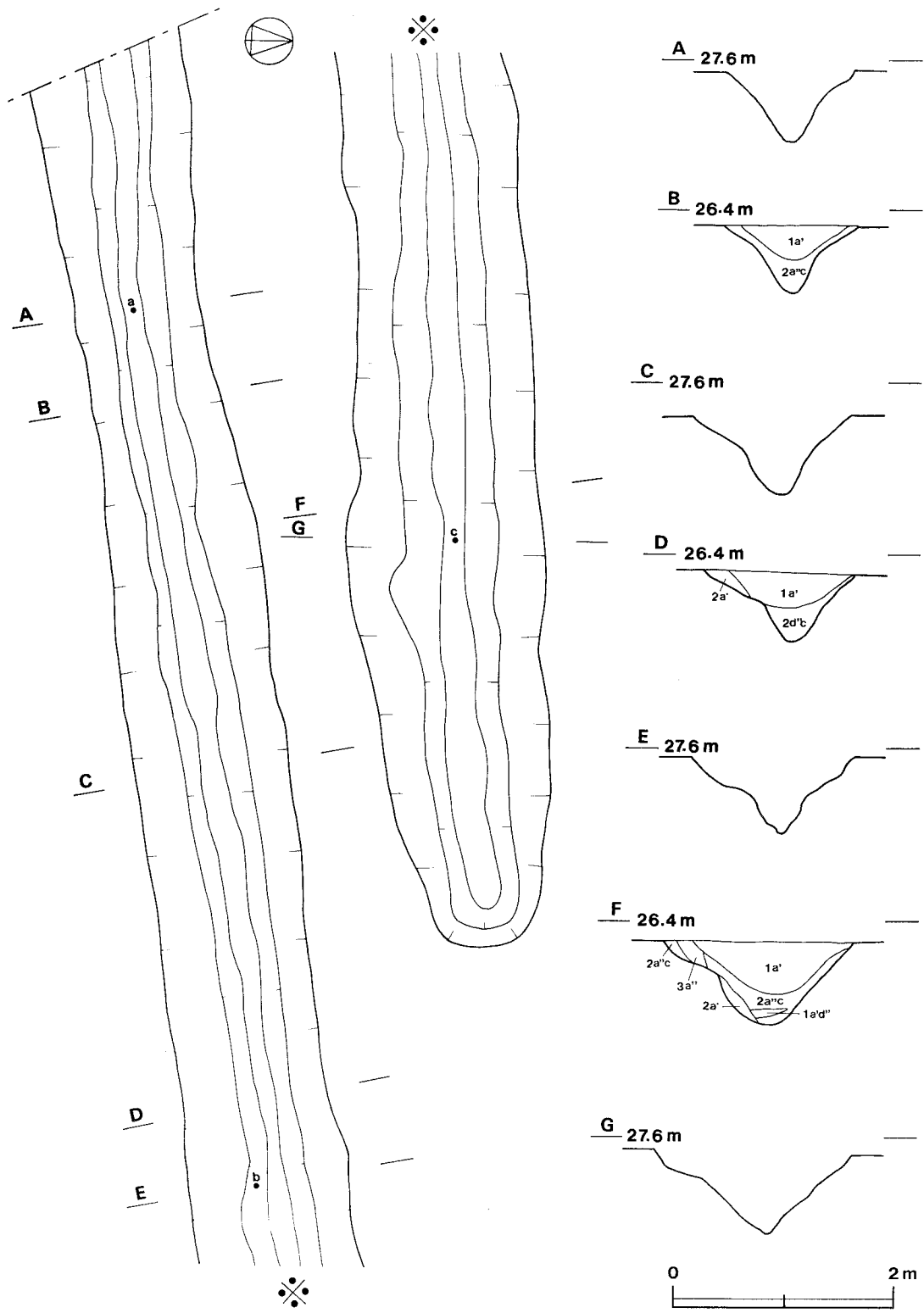
第56图 第2号沟实测图



第57图 第3号沟实测图



第58图 第4号沟渠实测图



第59图 第5号沟实测图

第5号溝 (第59図)

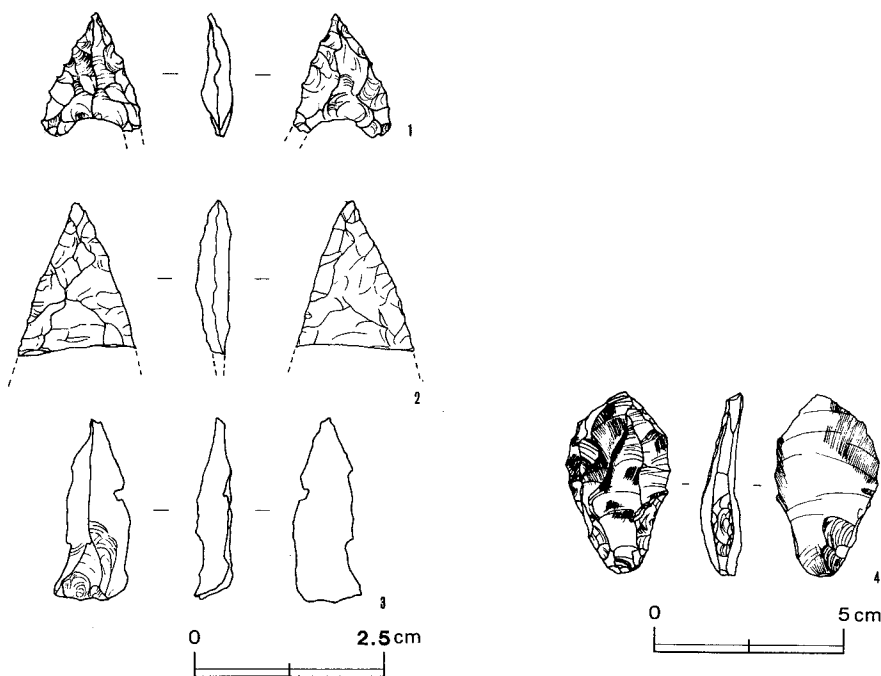
本溝は、遺跡のほぼ中央部A1j5区に確認され、本溝のほぼ延長線上の東側約4m先に第4号溝が位置しており、第4号溝と同様、ほぼ東西方向に延びている。東側はA1i8区で途切れ、西側はA1j4区から、調査区域外に続いている。

溝の規模は、全長19.60m、上幅1.15~1.80m、下幅0.12~0.35m、深さ0.21~0.75mである。断面形は、「V」を呈している。壁は、ロームで硬く、やや外傾して立ち上がる。底面は、ほぼ平坦であり、溝底面のレベルは、西から東へ順にa点で26.84m、b点で26.80m、c点で26.50mである。覆土は、ローム粒子を含む黒褐色土、暗褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は、覆土上層から須恵器片1片が出土している。

石器観察表

図版番号	器種	法 量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第60図 1	石鏃	1.6	1.3	0.4	0.5	黒曜石	SD-1	Q 1
2	石鏃	2.0	1.6	0.5	0.9	頁岩	SD-1	Q 2
3	剝片	2.4	1.0	0.5	0.7	黒曜石	SD-1	Q 3
4	剝片	4.8	2.8	1.1	9.3	黒曜石	A1b8	Q 4



第60図 第1号溝・グリッド出土遺物実測図

3 まとめ

塚は、永国十三塚遺跡のまとめの中で十三基を構成する塚の一部と考えられる。(永国十三塚遺跡のまとめを参照)

溝は、すべて調査区外に一端もしくは両端が延びているため、推測の域に留まるが、用途及び性格については、第1・2号溝が第3号溝と交差し、東側の低地に傾斜していることから、排水溝としての用途が考えられ、第4・5号溝は、耕作者の分筆と一致することから、地境溝や根切り溝の可能性が推定される。

出土した遺物は、グリッドから縄文式土器片1片、土師器片4片、黒曜石の剥片1点が出土し、溝5条の内2条の覆土上層からは縄文式土器片26片、土師器片16片、須恵器片4片、石鏃2点、黒曜石の剥片1点が出土し、第1号塚からの出土遺物はなかった。



第4節 十三塚B遺跡

1 遺跡の概要

当遺跡は、土浦市字十三塚428-1ほかに所在し、花室川左岸に面する台地縁辺部に位置している。調査面積は3,100㎡で、現況は畑である。遺跡は北側から南側にかけて傾斜しており、小支谷を挟み、南側に寺家ノ後A遺跡、南東側に寺家ノ後B遺跡が位置しており、北側には同一台地上に、永国十三塚遺跡が隣接している。本跡と花室川流域の水田との比高は、11～16mである。

遺構は、古墳時代に比定される竪穴式住居跡1軒ほか、古墳1基、塚2基、土坑5基が検出されている。住居跡は、古墳の南西コーナー部と重複している。古墳は、第1号塚南側と重複している。土坑は、すべて中央部から北側に検出され、2段状に掘り込まれている。

遺物は少なく、土師器が主で、甕形土器・坏形土器・支脚などが住居跡から出土している。古墳からの遺物は、主体部から須恵器の蓋の破片、第1号塚墳丘の覆土下層から五輪塔の一部が出土している。土坑からの遺物は、出土していない。

2 遺構と遺物

(1) 竪穴式住居跡

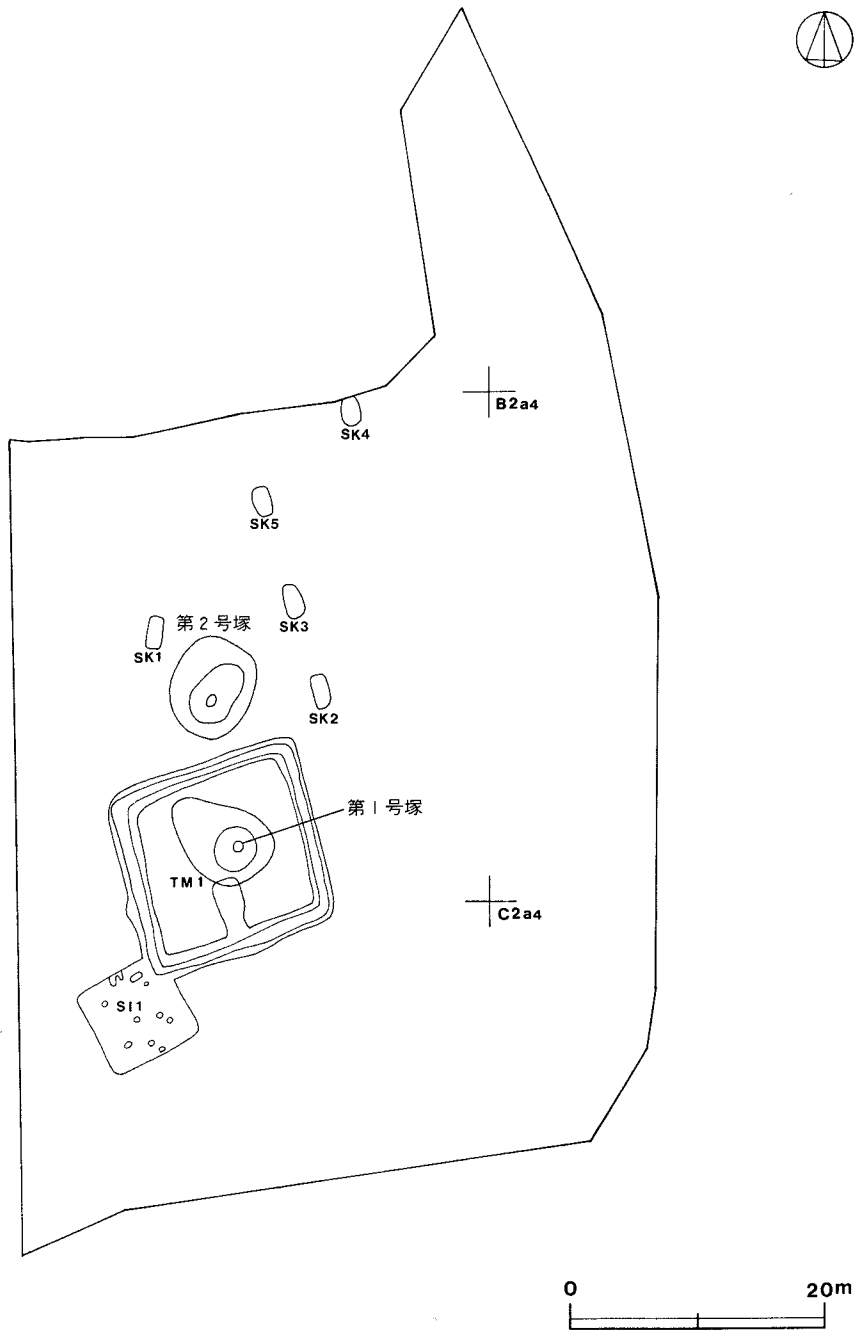
第1号住居跡（第62・63図）

本跡は、調査区の南西端C1c7区を中心にして確認され、第1号墳と重複している。新旧関係は本跡の北東コーナー付近を古墳が切っているので、本跡のほうが古いと考えられる。

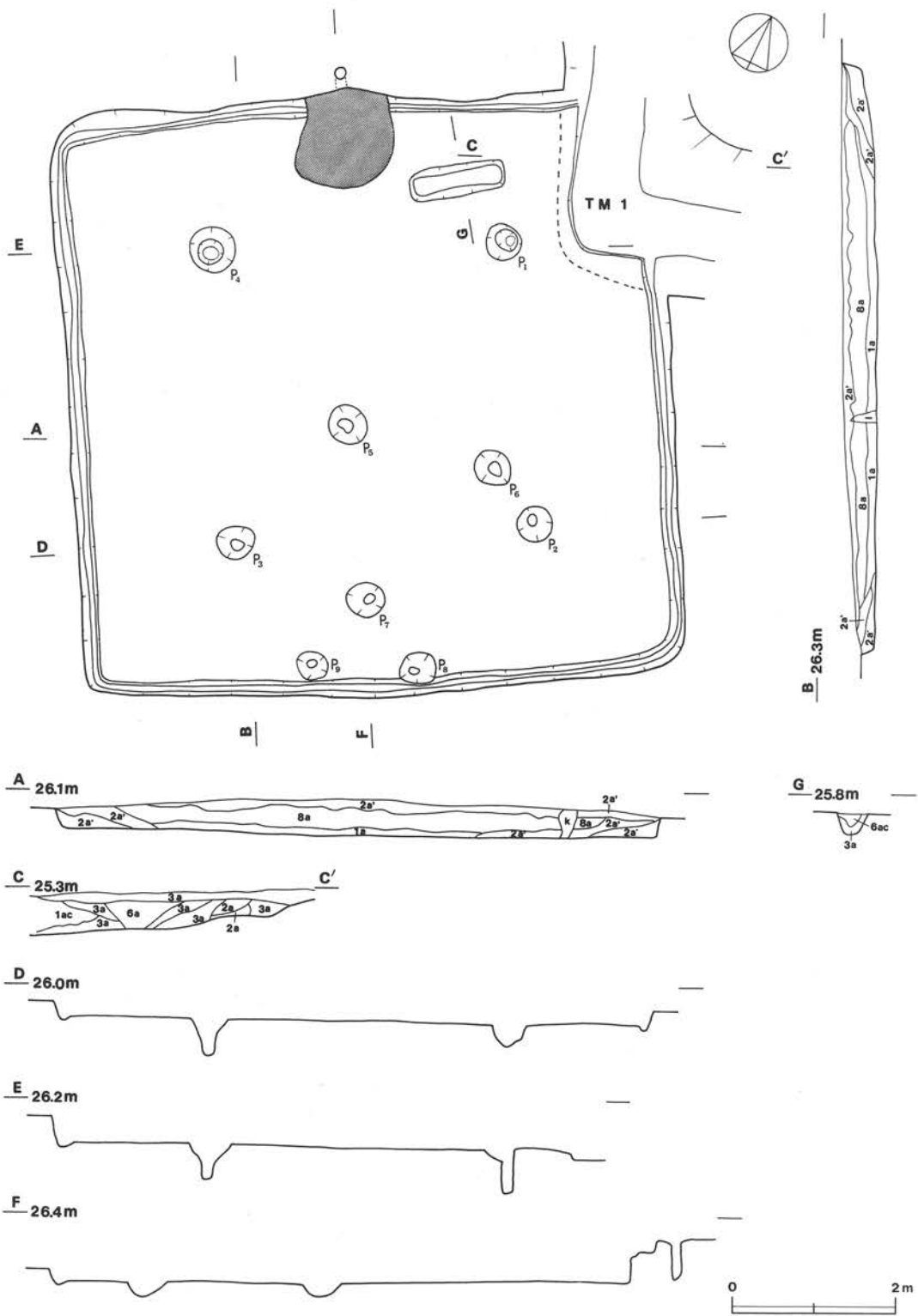
平面形は方形を呈し、規模は長軸7.52m、短軸7.44mである。主軸方向はN-30°-Wを指している。床面積は48.93㎡ほどである。壁はロームで硬く、東コーナー壁の一部が第1号墳の周溝に切られているため立ち上がり不明であるが、ほかの壁はほぼ垂直に立ち上がる。残存する壁高は、20～57cmである。壁直下に壁溝を有しているので遺構プランは明確に捉えられる。壁溝の規模は、上幅14～35cm、下幅2～10cm、深さ4～7cmほどである。床面はほぼ平坦で、中央部が硬く踏み固められている。ピットは9か所検出され、上端直径33～58cm、深さ16～57cmである。P₁～P₄は形状や規模及び方形に配置されていることから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断される。また位置や規模等から、P₅・P₆は支柱穴、P₇～P₉は出入り口部に属するものと考えられる。

貯蔵穴はカマド東側に位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、長軸119cm、短軸38cm、深さ25cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

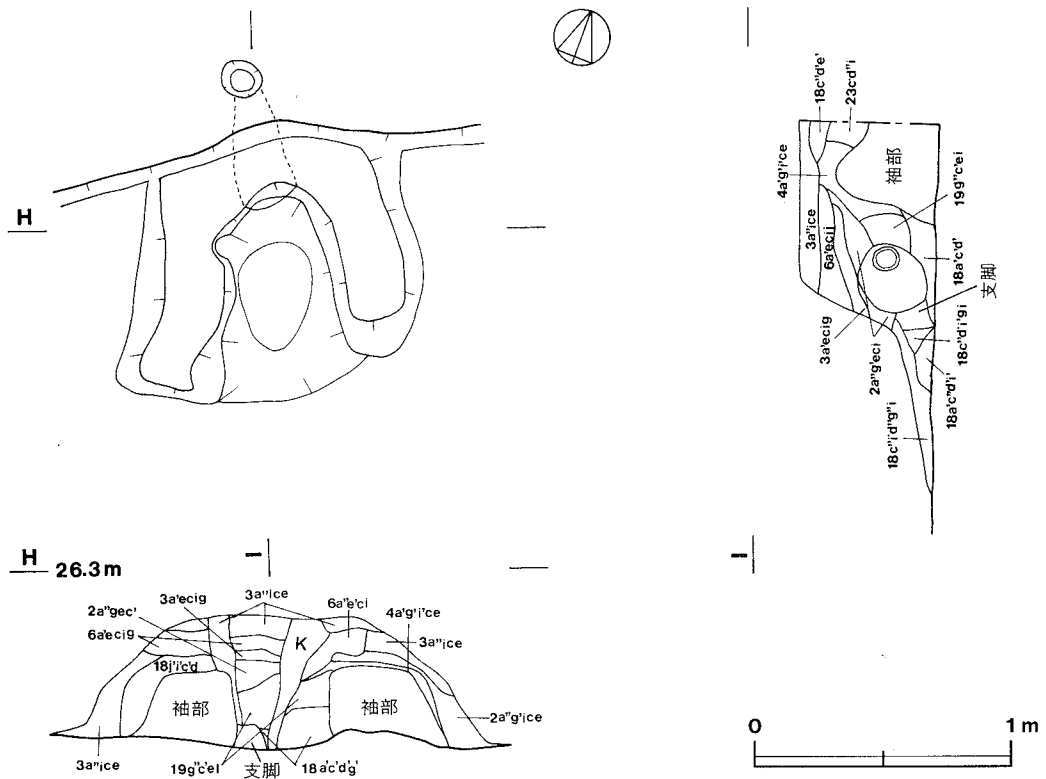
カマドは、北西壁のほぼ中央部に付設され、山砂や白色粘土で構築されている。規模は、長さ125cm、幅110cm、焚口部幅50cmほどである。火床部は長径42cmの楕円形を呈し、床面を7cmほど掘り込んで炉床とし、少量のローム粒子・焼土ブロック、中量の焼土粒子を含む暗赤褐色土が焼



第61図 十三塚B遺跡全体図



第62図 第1号住居跡実測図(1)



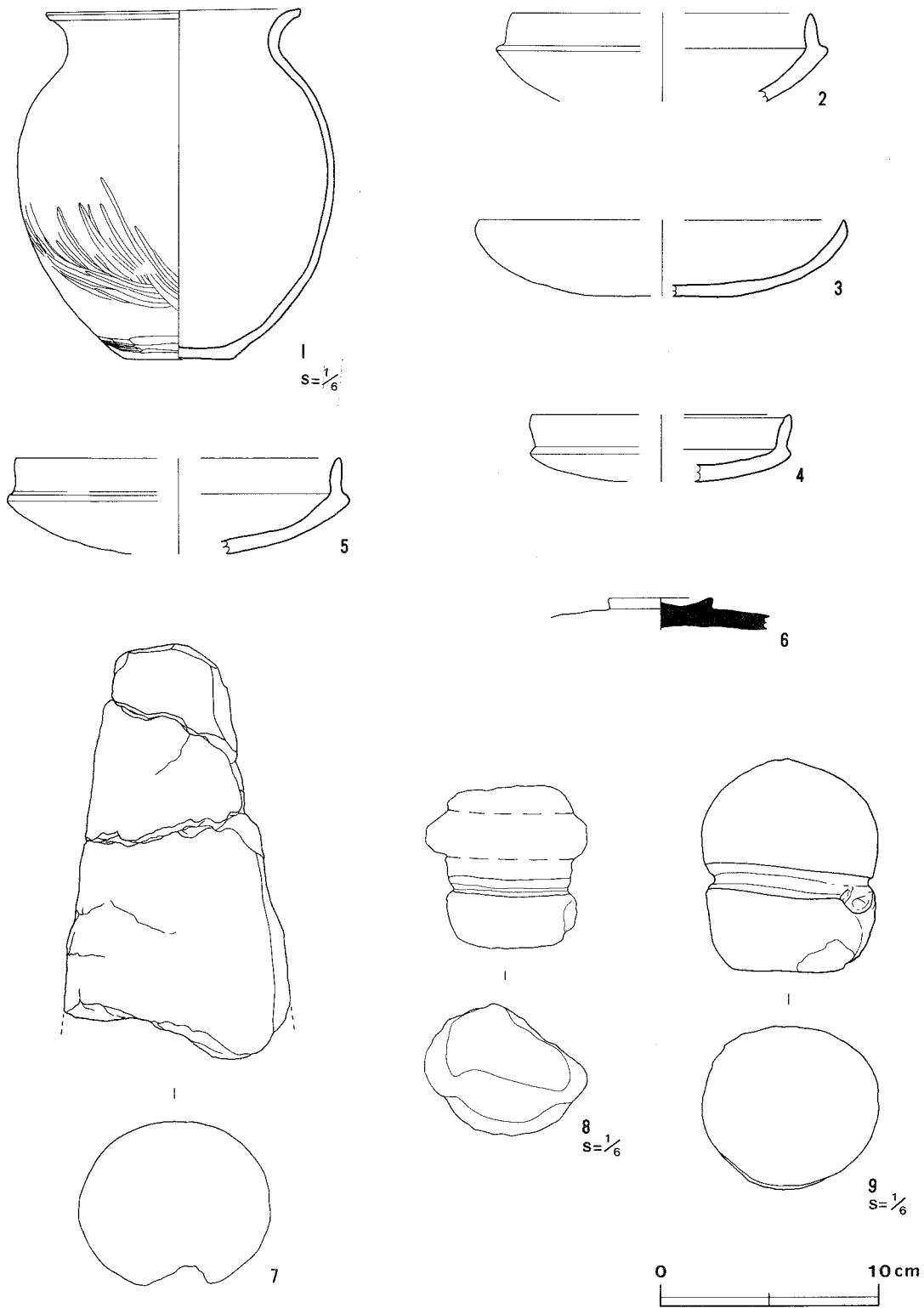
第63図 第1号住居跡実測図(2)

き締まって堆積している。煙道部は北西壁を幅140cm, 屋外へ30cmほど掘り込んで構築され, 煙道口は径15cmを測る。

覆土は, 上層に極少量のローム粒子を含む暗褐色土, 中・下層に極少量のローム粒子を含む極暗褐色土や暗褐色土が自然堆積している。

遺物は, 土師器片88片, 自然礫3点が出土し, カマド内中央より甕形土器(第64図1), 支脚(第64図7), 环形土器(第64図2)が使用されていたと思われる状態で出土し, 貯蔵穴周辺の床面から环形土器3点(第64図3~5)が出土している。これらの遺物は, 本跡に伴うものと考えられる。

本跡は, 遺構や遺物等から古墳時代鬼高期に比定されるものと思われる。



第64図 第1号住居跡・第1号墳・第1号塚出土遺物実測図

第1号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64図 1	甕 土師器	A 23.1 B 32.5 C 9.8	平底。胴部は内彎し、頸部はゆるやかにくびれ、口縁部は外反し、端部を面とりする。	口縁部内・外面横ナデ、頸部外面ナデ、胴部中央から下半部にかけてヘラ磨き。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-1 80% カマド内中央
2	坏 土師器	A (13.8) B [4.1]	体部下半以下欠損。体部は内彎し、口縁部との境に稜を有し、口縁端部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・細礫・雲母 橙色 普通	P-2 25% カマド内中央
3	坏 土師器	A (16.8) B [4.8]	体部上半欠損。平底。体部は内彎し、口縁部はやや内傾する。口縁部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。底部ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・細礫 にぶい橙色 良好	P-3 15% 貯蔵穴
4	坏 土師器	A (11.9) B [3.1]	体部下半欠損。体部は内彎し、口縁部との境に稜を有し、口縁部は、ほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・細礫 (外)黒褐色(内) 褐灰色 普通	P-4 15% 貯蔵穴
5	坏 土師器	A (14.9) B [4.4]	体部上半欠損。体部は内彎し、口縁部との境に稜を有する。口縁部は、ほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・細礫 灰黄褐色 良好	P-5 15% 貯蔵穴

第1号墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64図 6	蓋 須恵器	B [1.5] C 4.7	蓋のつまみの破片。つまみ上部は凹み、外周部が接合部よりも大きい。中央が高まる。	天井部は回転台を使い調整。	砂粒・細礫・雲母 にぶい黄褐色 不良	P-6 60% 埋葬施設

土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	法量				出土地点	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第64図 7	支脚	DP1	(19.1)	10.4	—	(919.6)	S I - 1	明褐色

石製品観察表

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第64図 8	空・風輪	15.2	14.8	12.1	2,124	花崗岩	第1号塚	
9	空・風輪	19.8	16.3	15.1	5,997	花崗岩	第1号塚	

(2)古墳

第1号墳(第56・66図)

①古墳の位置

本墳は、調査区の南西部のB1・C1区を中心に確認され、本墳の占地している部分は、寺家ノ後A遺跡と十三塚B遺跡の間に入り込む小支谷に面している台地の傾斜部に位置している。南西コ

ーナーの周溝は第1号住居跡と重複している。

②古墳の構造

本墳は、主軸がN-17°-Wの方墳で、一辺が外法15mの規模を有し、埋葬施設の南側に周溝に通じる墓道が存在している。

〈墳丘〉

調査前は、低い雑木と高い杉の木に覆われており、伐開後、墳丘測量を実施した。平面形は隅丸方形を呈し、墳丘の現状の規模は、東西6.6m、南北5.9m、高さ1.7mほどである。墳丘の最頂部は、27.98mである。北西側に墳丘が流れている状況を示している。

封土は、褐色土のローム層の上に黒褐色土10~16cmが堆積しており、この黒褐色土は、旧表土と思われる。その上層には、50cmほどの暗褐色土が盛土され、またその上層には黒褐色土があり、第1号塚の旧表土と考えられる。さらにその上層に腐葉土混じりの現表土が12~19cm堆積している。本来古墳の墳丘は低墳丘と思われ、その上に盛土し塚に転用されていると判断される。

〈周溝〉

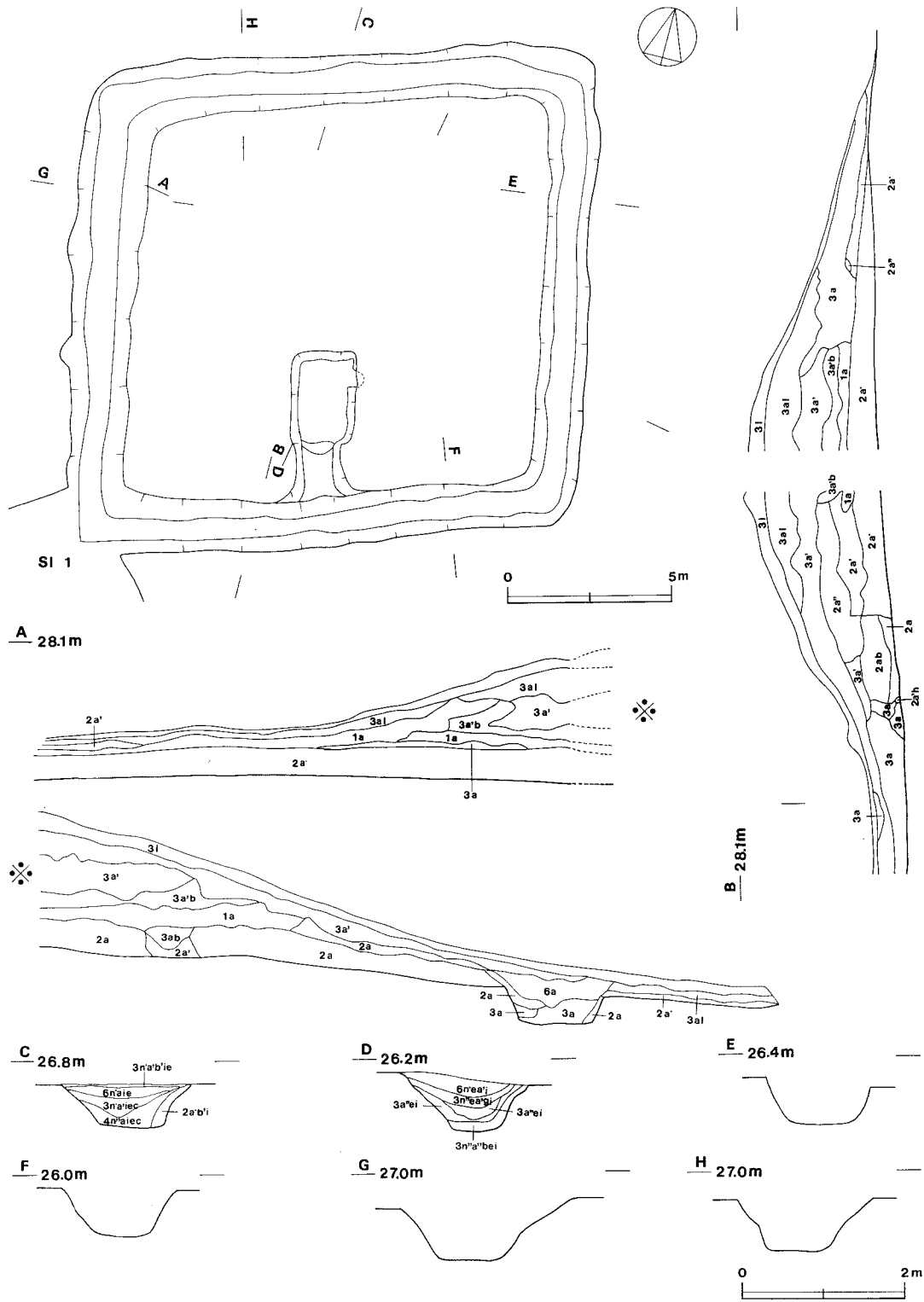
周溝は方形に廻り、一辺が外法15mほどである。周溝の規模は上幅1.14~2.28m、下幅0.44~1.20m、深さ0.44~0.70mで、壁高は北側がやや高く45~77.5cm、南側で40~60cmである。断面形は、明瞭な逆台形を呈していて、壁面は、ロームで硬く、墳丘内・外側ともほぼ同じ角度で溝底から直線的に外傾して立ち上がっている。

覆土は、上・中層に少量のローム粒子や極少量の焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土が堆積しており、底面付近の下層には、中~多量のローム粒子を含む褐色土がよく締まって堆積している。

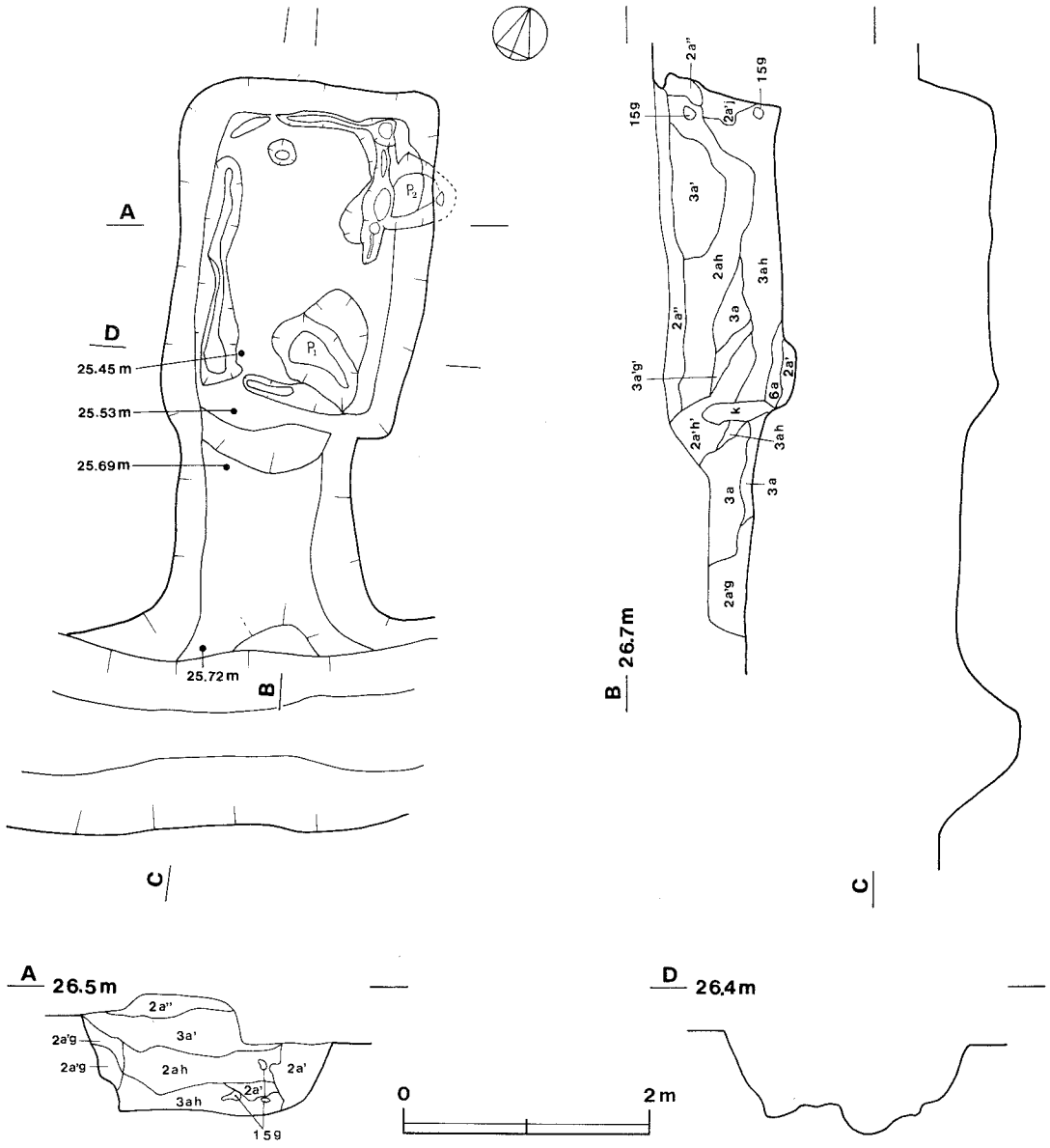
〈埋葬施設〉

埋葬施設の主軸方向は、N-17°-Wを指している。掘り方は、上端で長さ2.80m、幅2.07mである。墓道は埋葬施設から南側の周溝まで1.45mほど伸びている。

覆土は、上層に中量のローム粒子を含む褐色土、中層に極少量のローム粒子や粘土小ブロックを含む暗褐色土、下層に極少量のローム粒子や粘土小ブロックを含む暗褐色土、及び粘土ブロック等がよく締まって堆積している。覆土を除去すると、底面は、使用されていたと思われる石材がすべて抜き取られて、側壁・奥壁に使用されていた石材の痕跡と思われる断面U字状の溝の一部を検出した。天井部及び側壁の石材が遺存しないため実際の高さは確認できないが、確認面から底面までの高さ0.8mほどである。玄室内の奥壁付近には、バラス状の石が敷いてあり、玄室内には小ピットが2か所検出されている。玄室底面の南側にピット1があり、長径90cm、短径80cm、深さ12cmの楕円形を呈している。玄室奥壁の東よりの壁際から内側に30cmほど、ピット2が検出され、長径88cm・短径60cm・深さ20cmの不整楕円形を呈している。ピット1は、木の根が覆土中にあることから、攪乱と考えられる。ピット2は、上面の床面が硬いことや雲母片岩が敷かれてい



第65图 第1号墳実測図(1)



第66図 第1号墳実測図(2)

ることから、ピットが先に作られそのピットを埋めて埋葬施設が構築されたのではないかと考えられる。本墳は墓道を有することや埋葬施設内の溝状の痕跡から寺家ノ後B遺跡の古墳と同じタイプと考えられ、形態的には、地下式の横穴式石室と考えられる。玄室の規模は溝の痕跡と敷石の状況から推定すると、内法長さ2.10m、幅1.33mの長方形を呈している。底面のレベルは、玄室内で25.45m、墓道の石室側で25.69m、周溝側で25.72mで、玄室は墓道より24cmほど低くなって

いる。

③出土遺物

遺物は、埋葬施設覆土中から石室の構築材の一部や敷石と考えられる雲母片岩71片、土師器片6片、須恵器片8片が出土し、須恵器は、蓋（第64図6）が出土している。周溝覆土中から自然礫5点が出土している。

(3) 塚

第1号塚

本跡は、第1号墳と第1号塚の土層を観察すると第1号墳の墳丘の上に盛土をし、その上層に第1号塚の旧表土と考えられる層が存在していることから、第1号墳の墳丘を利用し、塚に転用していたと思われる。墳丘の東側から五輪塔の石材が出土しているので、本跡は、中世以降に築造されていることが推測される。

〈遺物〉

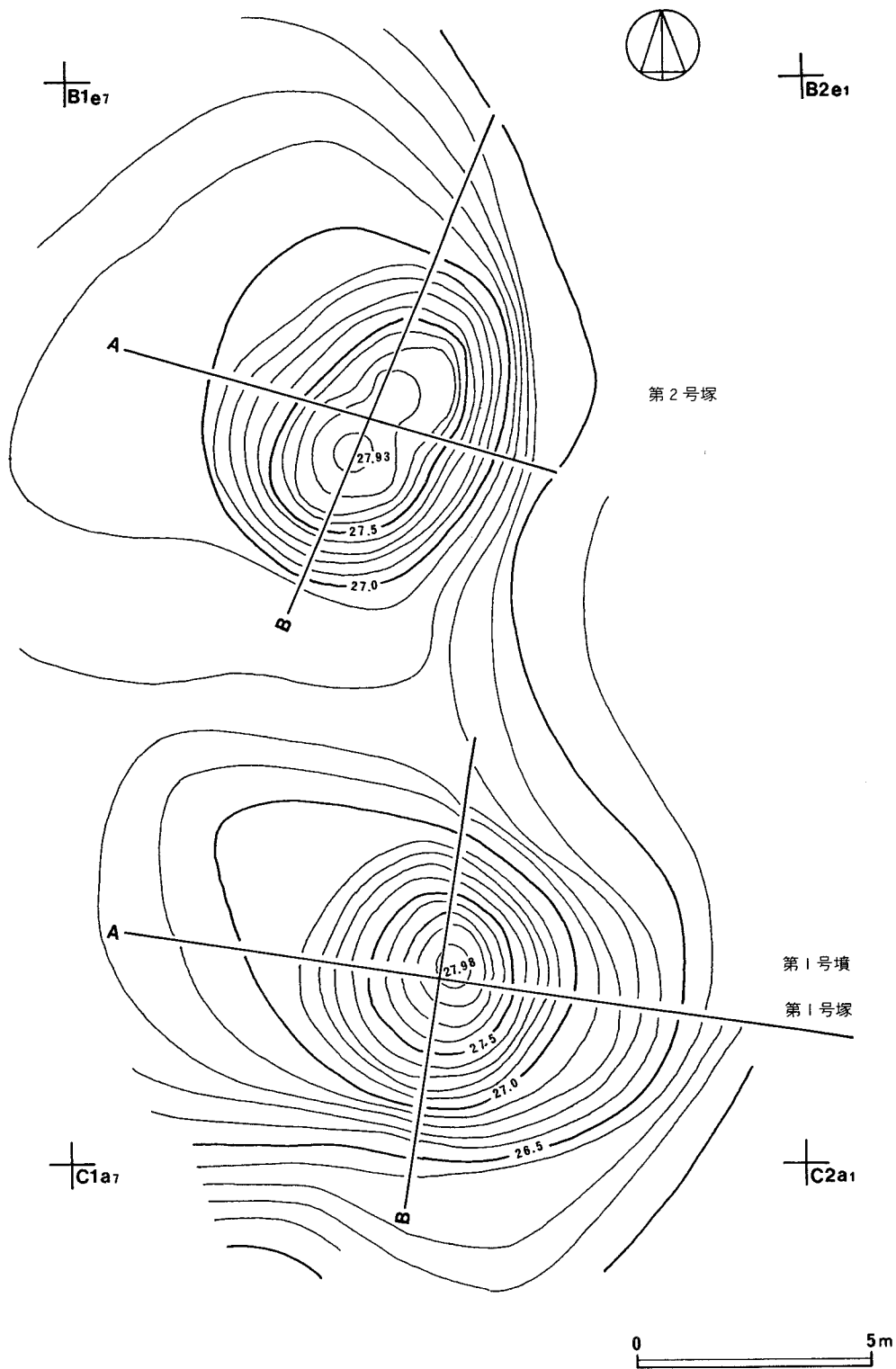
第1号墳の墳丘東側の最下層のローム面から五輪塔の空・風輪の部分と思われる石材（第64図8、9）が出土している。これらの石材は、出土した土層が部分的に攪乱されているので、古墳構築後に埋め込まれたことが考えられる。

第2号塚（第67図）

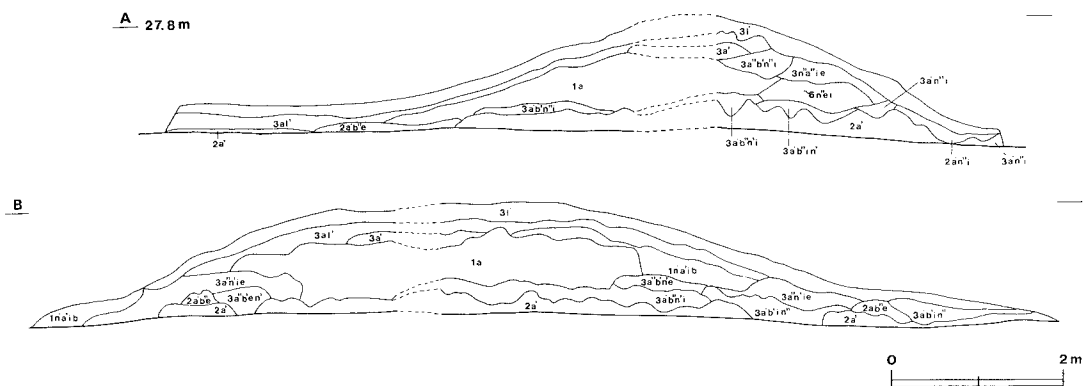
本跡は、遺跡のほぼ中央部やや北よりB1区に確認され、規模は、長径7.9m、短径7.3m、高さ1.3mほどである。平面形は楕円形を呈し、断面形は半球状である。長径方向はN-23°-Eを指している。最頂部は標高27.93mで、北西側はやや流れた状況を示している。

封土の構成は、周辺を含め18層からなり、褐色土のローム層の上に暗褐色土があり、この暗褐色土は、旧表土の一部と考えられる。さらにその上に60~70cmほどの暗褐色土を一気に積んで一度水平状態とし、塚の高度をますために2層以上の上位の現表土を積み上げたものと考えられる。

本墳は当初古墳として調査を進めてきたが、古墳に伴う周溝や埋葬施設である主体部、及び埴輪等の遺物が検出されないので検討の結果、塚と判断した。本跡からの出土遺物はなく、時期を明確にする事はできないが、第1号塚より出土した五輪塔の石材等から中世以降に構築されたものと考えられる。



第67图 第1・2号塚・第1号墳丘測量図



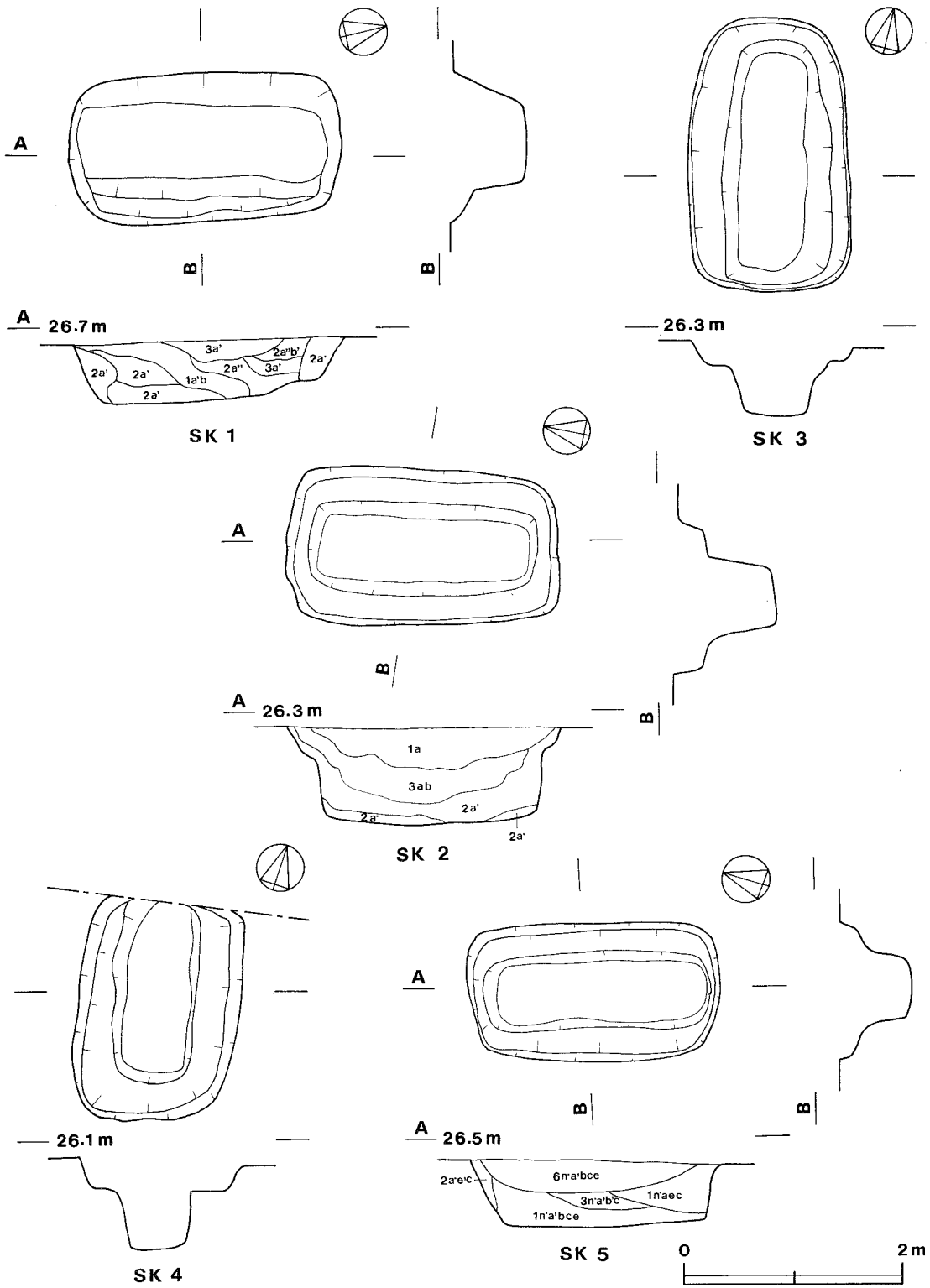
第68図 第2号塚土層断面図

(4) 土坑

土坑は、5基検出されている。これらの土坑の平面形は、ほぼ隅丸長方形である。第1号土坑を除いて2段状の掘り込みを呈し、規模は、長軸2.04~2.57m、短軸1.29~1.51m、深さ0.67~0.93mである。壁は確認面から20cmほど掘り込み、10~40cmの幅でテラス状の平坦部を巡らし、さらに40~60cmほど掘り込んでいる。底面は平坦であり、遺物は出土していない。これらの土坑の中で、第2号土坑から第5号土坑は、第2号塚の東側に位置し、ほぼ等間隔に検出されている。第4号土坑は、一部エリア外のため完掘していない。なお各坑の形状、規模は以下のとおりである。

表10 土坑一覧表

土坑番号	位置	長軸方向 (長径方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土状態	出土遺物	備考
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(m)					
1	B1e ₇	N-9°-E	隅丸長方形	2.53 × 1.39	0.70	段状	平坦	人為	なし	
2	B1f ₀	N-11.5°-W	"	2.51 × 1.44	0.93	"	"	"	"	
3	B1e ₀	N-18°-W	"	2.57 × 1.47	0.67	"	"	"	"	
4	B2a ₁	N-13.5°-W	"	(2.04) × 1.51	0.82	"	"	"	"	
5	B1c ₉	N-16.5°-W	"	2.34 × 1.29	0.68	"	"	"	"	



第69图 土坑实测图

3 まとめ

当遺跡からは、竪穴住居跡1軒、古墳1基、土坑5基が検出され、遺物は、土師器、須恵器、石製品、古銭などが出土している。土師器は住居跡から坏や甕などが出土し、鬼高期の様相を示している。須恵器は第1号墳の埋葬施設の底面から蓋の破片が出土している。しかし、この覆土は攪乱されているため古墳に伴うものとは思われない。土坑から遺物は出土しなかった。本稿では、土坑の性格についてまとめ、古墳及び住居跡については寺家ノ後B遺跡で触れているので割愛した。

本調査区からは土坑が5基検出され、平面形は隅丸長方形を呈し、2段に掘り込みがされている。規模等は一覧表に示した通りで、これらの土坑について規模や長軸方向及び位置について述べてみたい。

規模については、第5号土坑が長軸2.34m、短軸1.29mとやや小さいことを除いて、他の土坑は、長軸2.5m、短軸1.4m前後のほぼ同規模の土坑である。

長軸方向は、第1号土坑が東に傾く以外は11.5～18°西に傾いている。特に2・3・5号土坑は、長軸方向を大きくとらえてみるとN-16°-Wを示している。推定ではあるが第4号土坑もほぼ同じ方向を示していると思われる。これらの土坑は、第1号墳の主軸とほぼ同じ方向を示していると考えられる。

位置については、第2号土坑と第3号土坑との間隔は、4.8mほどであり、第3号土坑と第5号土坑との間隔は5.6mほどである。3基の土坑は、一定した間隔をとっていることが推察される。

覆土は、ローム小ブロック混じりの褐色土や暗褐色土及び黒褐色土が人為堆積していると考えられる。

これらの土坑は、形態や規格及び位置などから墓墳と考えられる。しかし土坑と古墳との関係は、実証する出土遺物もないためはっきりしないが、古墳の主軸方向と土坑の長軸方向との関係や土坑の形状や規格及び位置等からみると何らかの関係があったものと考えられる。現在においてはこれらのことについての手掛かりはなく、今後の類例を待ち検討課題としたい。

当遺跡は、この台地上に古墳時代鬼高期において周辺を含め小集落を形成し、古墳時代終末期に墓域として位置づけられていたものと考えられる。

第5節 永国十三塚遺跡

1 遺跡の概要

当遺跡は、土浦市永国432ほかに所在し、南北に縦断する旧鎌倉街道を挟んで3か所に立地している。調査の便宜上A地区、B地区、C地区と仮称した。北側に向かって、旧鎌倉街道の左側にA地区があり、面積260m²、右側にB・C地区がありB地区の面積340m²、C地区の面積400m²の合計1,000m²である。当初、各地区に古墳が1基ずつ存在していると想定して調査に入ったが、現状では、A地区に土盛りされている小円墳状の墳丘があるだけで、B・C地区には地膨れの痕跡もなく、平坦面であった。現況は山林で、十三塚A・B遺跡と同一台地上にあり、C地区の南側に十三塚B遺跡が隣接している。

遺構は、塚1基である。

遺物はA地区の塚から、陶器の灯芯皿と皿が出土し、B地区のトレンチ覆土から古銭、剥片が出土し、C地区のトレンチ覆土から、土師器片、管状土錘、陶器片が極少量出土している。

2 遺構と遺物

(1) A地区

第1号塚（第70図）

本跡は、A地区の東側の旧鎌倉街道の道際に検出されている。規模は、長径4.8m、短径4.5m、高さ1.3mほどである。平面形は楕円形を呈し、長径方向はN-10°-Wを指している。最頂部は標高28.3mで、南西側に流れた様相を示している。

封土の構成は、9層からなり、褐色土のローム層の上に黒褐色土層があり、厚さ40～50cmほど堆積している。本跡の築造前の旧表土と思われる。さらにその上層には黒褐色土が厚さ10～50cmほど盛土され、その上には暗褐色土の表土層が塚全体を覆っている。表土層を除き、一気に盛土されていると考えられる。

本跡は、当初古墳として発掘調査を進めてきたが古墳に伴う周溝や埋葬施設である主体部及び埴輪等の遺物も検出されなかったため、塚と思われる。塚からの遺物は少なく、南側の覆土中から、陶器の灯芯皿（第72図1）や皿（第72図2）が破片の状態で検出されている。時期や性格を明確にすることはできないが、盛土の状態や遺物を総合的に判断すると、中・近世に築造されたものと推定される。

(2) B・C地区

B・C地区に、当初、古墳を想定してトレンチによる遺構確認を慎重にすすめたが、周溝や埋葬施設等もなく、墳丘も確認されなかった。また、土層からは塚としての盛土の状態も判断でき

なかった。遺物としては、B地区から寛永通寶1枚、メノウの剝片（第72図4）が覆土より出土している。C地区からは土師器片12片、陶器片4片、管状土錘（第72図3）が出土している。

土層はB地区では、多量のローム粒子を含む褐色土の上に、少量のローム粒子を含む暗褐色土が堆積し、腐葉土混じりの黒褐色土の表土層が覆っている。C地区では、多量のローム粒子を含む褐色土の上に、少量のローム粒子を含む腐葉土混じりの灰褐色土の表土層が覆っている。

これらの調査結果から、B・C地区には古墳に伴う周溝や埋葬施設である主体部及び埴輪等の遺物も検出されていないし、塚としての墳丘の痕跡も認めることはできなかった。古墳あるいは塚であるとの判断はできなかった。遺物は少なく、B地区から、石器1点と古銭が出土している。石器はメノウの剝片で、側縁に打撃による調整が認められる。下端が刃部と考えられるが、調整の痕跡は認められない。古銭は、新寛永通寶で享保期に製造されたと思われる。

第1号塚出土土器観察表

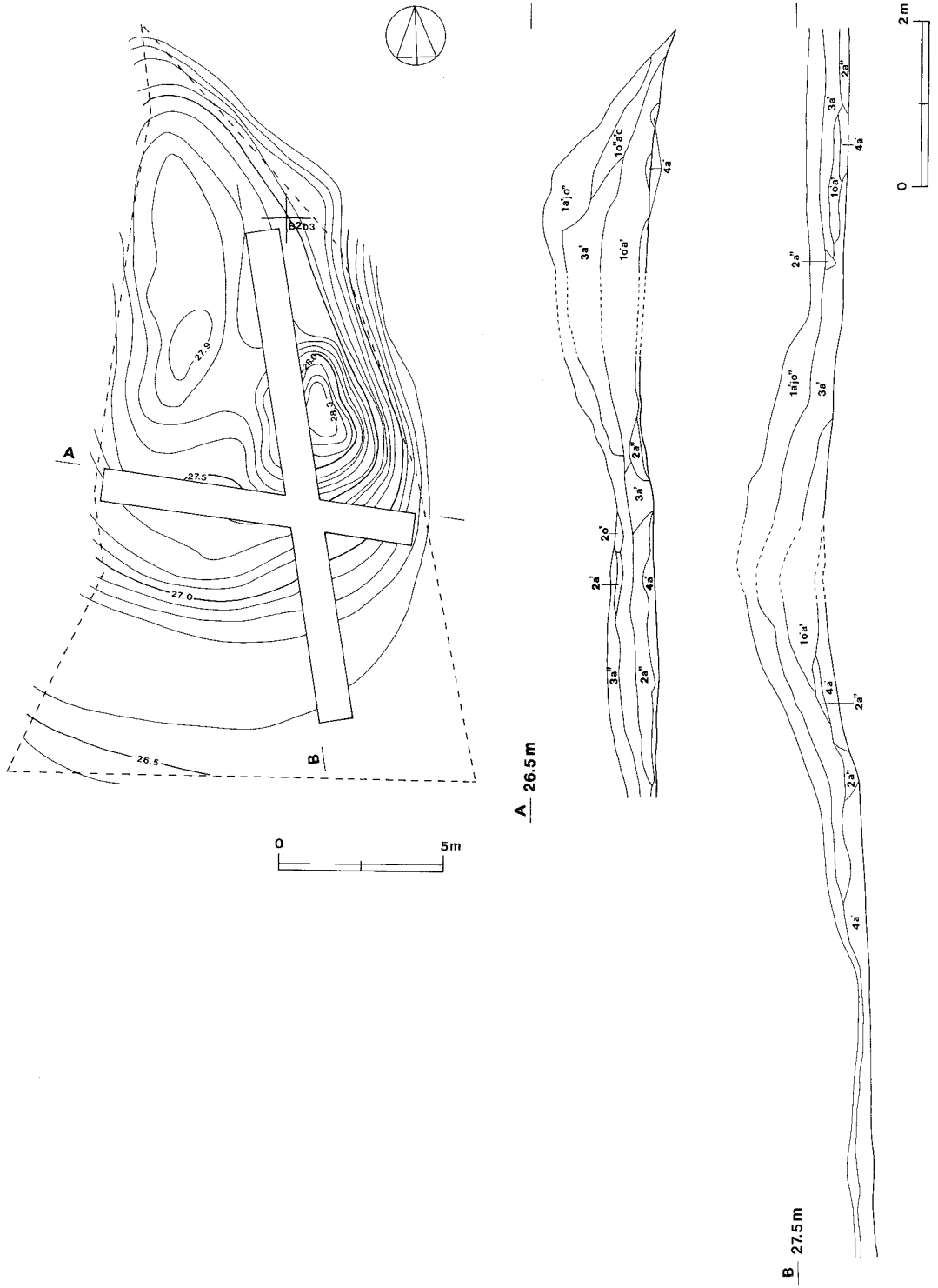
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 1	灯芯皿 陶器	A (7.5) B 2.5 C (5.4)	平底。体部は内彎し、口縁部との境に受部を有し、口縁部は直立する。	口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ。	砂粒・細礫 にふい赤褐色 普通	P-1 40% 南側覆土
2	皿 陶器	A (15.2) B 2.8 C (7.5)	体部は外傾して立ち上がり、口縁部で外反する。ケズリ出し高台。	ガラス釉施釉。	砂粒・細礫 灰白色、(釉)淡 黄色 普通	P-2 20% 南側覆土

土製品解説表

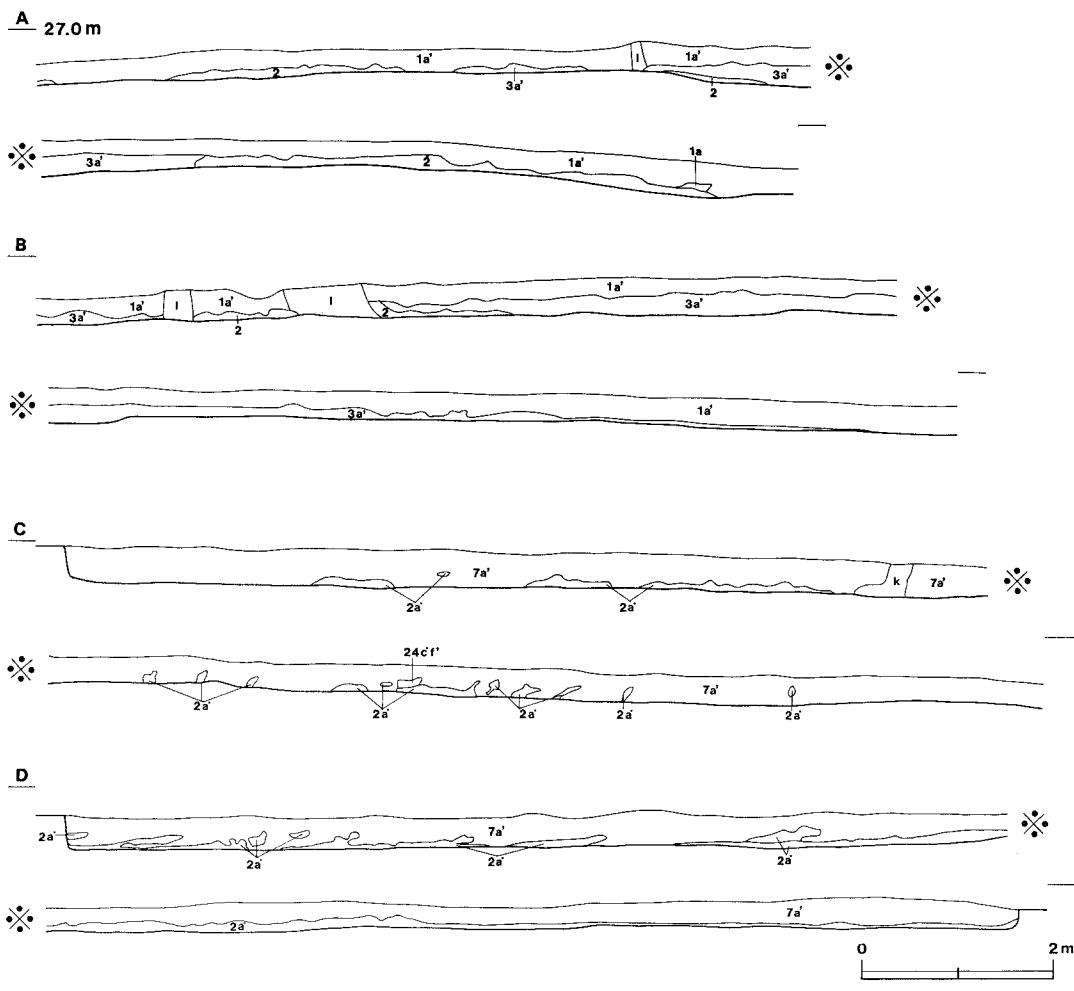
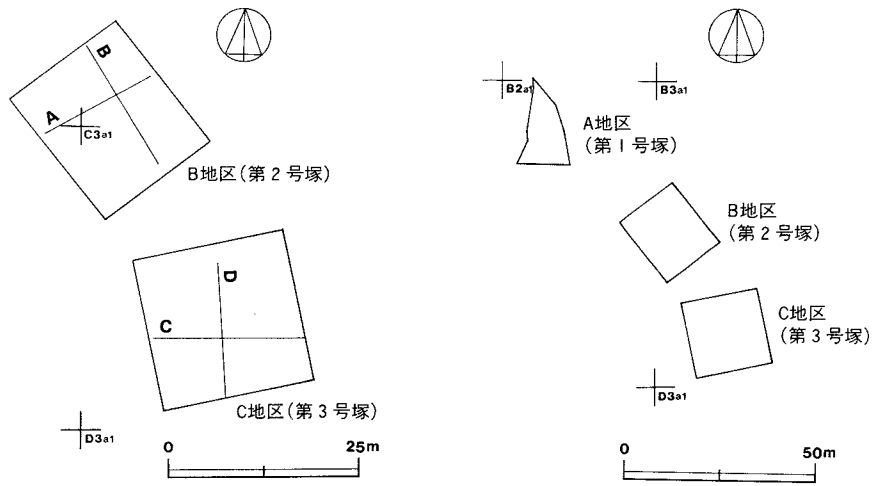
図版番号	名称	台帳番号	法量				出土地点	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第72図 3	管状土錘	DP1	[3.8]	1.8	0.6	8.7	C地区	

石器観察表

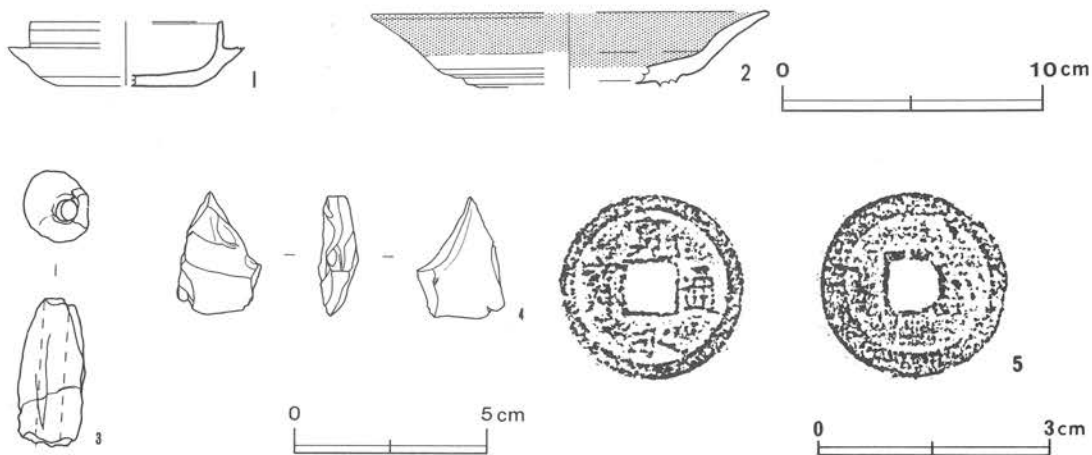
図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第72図 4	剝片	3.2	2.2	1.0	5.5	メノウ	B地区	



第70图 A地区(第1号塚)实测图・测量图



第71图 B地区・C地区実測図



第72図 出土遺物実測図・拓影図

3 まとめ

当遺跡は、当初3基の古墳が所在していることを想定して、調査を進めたが第2・3号墳については、墳丘が確認されず、トレンチ調査によっても周溝の存在も認められなかったため、古墳の存在を確認することができなかった。土地の古老の話では、昭和初期には墳丘が存在し、昭和20年前後に墳丘が開墾により削平されてしまったとの事である。墳丘を有する第1号塚については、古墳に伴う周溝や主体部が検出されないことから、本跡は、古墳ではなく塚と考えられ、当遺跡に所在したとされるほかの2基も、塚の可能性が大である。

出土遺物は、陶器片が極少量しか出土していないため、時期や性格を決めるには不十分であるが、当遺跡のほぼ南側300mに大聖寺が存在することや、これらの塚が街道（鎌倉街道）沿いに存在していることなどから、境界を示す塚、物見塚、寺院（宗教）との関係⁽¹⁾がある塚等が考えられる。

また、永国十三塚という小字の名称から民族信仰の塚ではないかということも考えられるが、隣接する十三塚B遺跡の2基の塚や十三塚A遺跡の1基の塚も13基の塚の一部ではないかと思われる。おそらく第1号塚が築造された時期には、13基の塚が街道沿いに存在していたとも考えられる。しかし、記録等も残っていないため、性格については不明確である。

時期については、道筋にある塚がほぼ同時期に築造されたと仮定するならば、十三塚B遺跡の第1号塚墳丘内から出土している五輪塔の一部が出土していることから中・近世にかけて構築されたものと思われる。

表11 塚一覧表

遺跡名	名称	位置	規模	塚高(m)	遺物	備考
			長径×短径(m)			
十三塚A遺跡	第1号塚	B1・B2	8.4 × 6.8	1.3		
十三塚B遺跡	第1号塚	B1	6.6 × 5.9	1.7	五輪塔の空・風輪	第1号墳と重複
〃	第2号塚	B1	7.9 × 7.3	1.3		
永国十三塚遺跡	第1号塚	B2	4.8 × 4.5	1.3	灯芯皿, 皿	

※ 引用・参考文献

- (1) 京葉II 千葉県東寺山戸張作遺跡 千葉県文化財センター 1977

(1)の報告書の中で鈴木道之助氏は塚のまとめの中で、塚は台地先端部には存在せず道路沿いに位置しており、寺院との関係を示唆している。

- (2) 茨城県教育財団文化財調査報告第39集「尾坪台・十三塚遺跡」茨城県教育財団 1986



第6節 旧鎌倉街道

開発エリア内を南北に旧鎌倉街道と指定（昭和46年7月13日、土浦市教育委員会指定）されている道路が延びている。この道路は幅5mほどで、任意の地点を北から5か所設定し、長さ2m、幅5m、深さ1mのトレンチを入れて調査した。

1 試掘結果

A地点（第73図）

Aトレンチの土層は13層からなり、1層は道路で碎石を含んでいる。2・3層は、少量のローム粒子を含む腐葉土混じりの黒褐色土、4層は中量のローム粒子、極少量の焼土粒子を含む暗褐色土が堆積している。5～10層にかけては、硬い層を呈し、厚さ20～30cm、幅4mほどである。5～7層は、厚さ5～10cmほどの砂混じりの褐色土、8層は、厚さ10cmほどで中量のローム粒子、極少量の焼土・炭化物を含む灰褐色土、9・10層は、厚さ10cmほどの少～中量のローム粒子、極少量の焼土粒子を含む褐色土、11層は、厚さ2～18cmほどの少量のローム粒子、極少量の焼土粒子・炭化物を含む褐色土で、深さ18cmほどの「∪」形した溝状の窪みを呈している。12・13層は、地山である。

B地点（第73図）

Bトレンチでは土層は12層からなり、1～3層は、道路で碎石を含んでいる。4層は厚さ2～20cmで、中量のローム粒子、極少量の焼土粒子を含む暗褐色土の軟らかい層である。5～7層にかけては硬い層を呈し、厚さ5～10cm、幅2.5mほどである。5層は中量のローム粒子、極少量の焼土粒子を含む褐色土、6層は少量のローム粒子、極少量の砂を含む褐色土である。7層は少量のローム粒子、極少量の砂を含むむい褐色土である。8～11層までは多量のローム粒子を含むローム層で、12層は、粘土層である。

C地点（第73図）

Cトレンチでは、土層は7層からなっているが、硬化層は検出されなかった。1層は、道路で碎石を含んでいる。2・3層は、多量のローム粒子を含むローム層で、4層は、中量のローム粒子、少量の白色粘土を含む粘土漸移層である。5～7層は、道路東側の山林の表土である。

D地点（第73図）

Dトレンチでは、土層は7層からなり、1層は道路で碎石を含んでいる。2～5層にかけては硬い層を呈し、厚さ10～40cm、幅2.5mほどである。2層は少量のローム粒子、極少量の焼土粒子・

炭化物を含む暗褐色土である。(2'層は2層と同一Rで硬化層を境にして硬さが区別される。)3層は、少量のローム粒子や極少量の砂・焼土粒子を含む暗褐色土、4層は、少量のローム粒子や極少量の砂・焼土粒子・炭化物を含む褐色土、5層は少量のロームブロックや極少量の焼土粒子・炭化物を含む極暗褐色土で、いずれも特に硬い層である。6層はローム層である。7層は、西側の表土である。

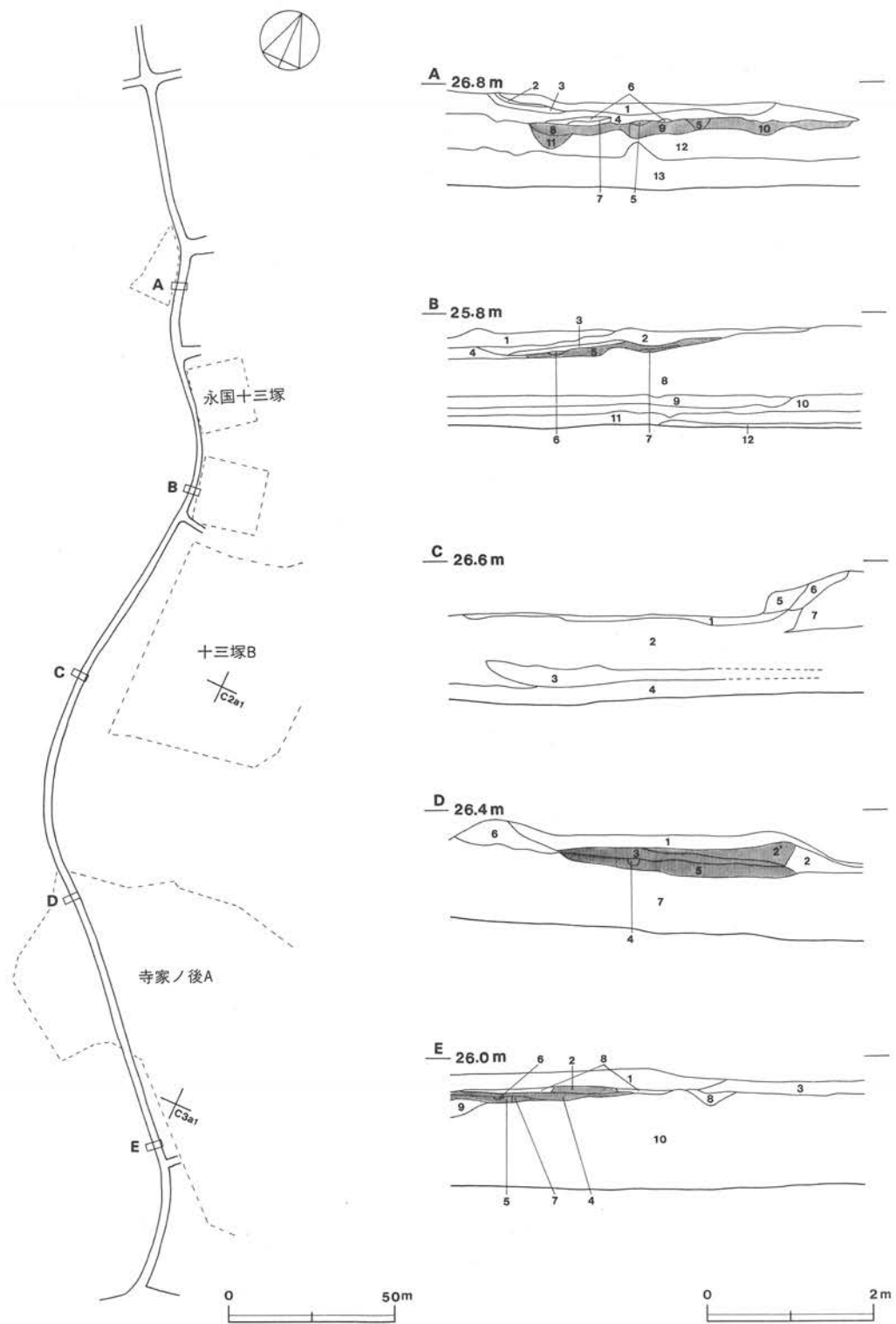
E地点 (第73図)

Eトレンチの土層は10層からなり、硬化層が2か所検出される。1層は道路で碎石を含んでいる。2層は硬い層を呈し、厚さ10cm、幅70cmほどである。2層は、中量のローム粒子、極少量の焼土粒子を含む暗褐色土である。3層は、道路面の舗装されていない表土である。4～7層にかけては、硬い層を呈し、厚さ5～20cm、幅2.2mほどである。4層は、少量のロームブロックや極少量の焼土粒子・炭化物を含む暗褐色土である。5層は中量のローム粒子や極少量の焼土粒子を含む褐色土、6層は中量のローム粒子や極少量の焼土粒子及び砂を含む灰褐色土、7層は中量のローム粒子や極少量の砂・焼土粒子を含む暗褐色土が堆積している。8層は中量のロームブロックを含む褐色土で、深さ16cmほどの「∪」形をした溝状の窪みを呈している。9層は少量のローム粒子や極少量の砂を含む灰褐色土である。10層は、地山である。

2 遺物

A～E地点から、遺物は出土していない。





第73図 旧鎌倉街道試掘実測図

3 まとめ

道路上面から約20cm下位に硬化層を検出した地点は、A、B、D、E地点である。硬化層からの遺物は出土していない。この硬化層はなんであるか明確に判断されないが、A地点は、幅4mの硬化面で各地点の中では幅が長い硬化層である。層の中には砂混じりの層がある。硬化層の東端に幅30cmほど、深さ10cmほどの断面U字状の窪みが観察される場所があるが、反対側の土層からは確認できなかった。B地点は、層の中に砂を含む層があることがあげられる。D地点は、碎石のすぐ下位にある硬化層で舗装時に固められた新しい時期の硬化層と考えられる。E地点は、硬化層が二面検出されている。上の硬化層は、厚さ10cm、幅70cmと狭いことや、道路の東側は、畑であることから、農道として利用されたとも考えられる。下の硬化層は、層の中に砂が混じること、断面「∪」形の窪みがあることから、A地点と共通する要素があり、同じ連続する硬化面の可能性が考えられる。その場合幅は、A地点の4mを基本に考えるとB、E地点では、調査区の西側に広がることも考えられる。

近年、本跡の南側に所在する大聖寺（平安中期創建）において墓地整理の際、古井戸が確認され、井戸中より鎌倉期の漆器の塊が出土していること⁽¹⁾から、この道筋に所在しているA、B及びE地点の硬化面が鎌倉街道の可能性があると考えられる。しかし、今回の調査では、この硬化面が鎌倉街道であるという明確な根拠を見いだせなかった。

※引用文献

- (1) 永山 正 「土浦の歴史」東洋書院 1985

終章 むすび

土浦市永国地区における住宅建設予定地内に所在する寺家ノ後A遺跡・寺家ノ後B遺跡・十三塚A遺跡・十三塚B遺跡・永国十三塚遺跡・旧鎌倉街道の発掘調査は、昭和63年度から当教育財団によって実施され、平成元年度の整理業務をもって、すべて終了することとなった。

寺家ノ後A遺跡は、台地の縁辺部や緩斜面に竪穴住居跡5軒が検出され古墳時代中期と後期とに区分される小集落であった。

寺家ノ後B遺跡は、台地の南側の緩斜面に竪穴住居跡4軒、古墳3基が検出され、古墳時代中期と後期には小集落が形成され、終末期になると墓域となったことが明らかにされた。終末期に位置づけられる方墳は、現在でも数が少なく貴重な調査例と考えられる。

十三塚B遺跡は、台地の南側の緩斜面に竪穴住居跡1軒、古墳1基、塚2基が検出された。竪穴住居跡や古墳は、寺家ノ後A・B遺跡とも関連をもつ鬼高期の住居跡や終末期の古墳で、特に第1号墳の墳丘は、後世に第1号塚に転用されていたものと考えられる。

十三塚A遺跡と永国十三塚遺跡で確認した塚は、十三塚B遺跡の2基の塚とともに所謂十三塚を構成していたものと推察される。

これら各遺跡から出土した遺跡は、古墳時代中期及び後期の様相を示す土師器類や古墳の周溝から出土した須恵器の長頸壺等の主体をなしている。

以上のように今回の調査は、寺家ノ後A遺跡ほか5遺跡の立地する台地をほぼ完掘し、注目される貴重な資料が得られたものと考えられる。本報告書が花室川流域の考古学上の資料として活用されれば幸いである。

なお、本報告書をまとめるにあたり、関係各位から御指導、御協力をいただいたことに対し、心から感謝の意を表したい。

写 真 図 版

寺家ノ後 A 遺跡

寺家ノ後 B 遺跡

十三塚 A 遺跡

十三塚 B 遺跡

永国十三塚遺跡

旧 鎌 倉 街 道



遺跡遠景（航空写真）

PL2

寺家ノ後A遺跡



調査前全景



調査前全景(伐開後)



斜面部試掘終了



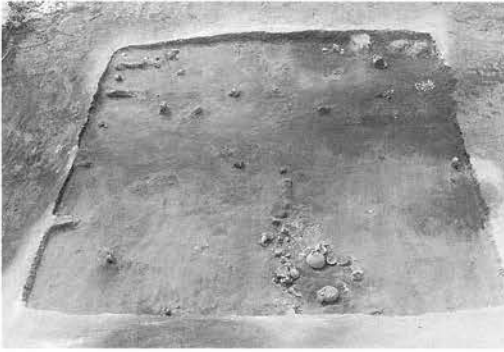
遺構確認状況



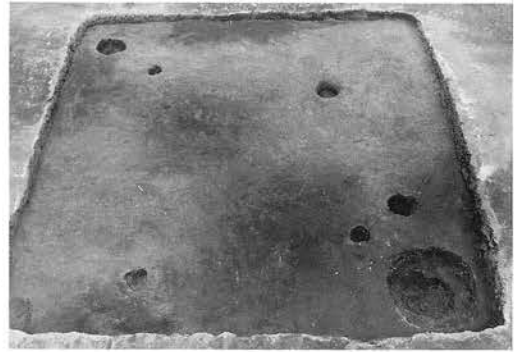
遺構確認状況



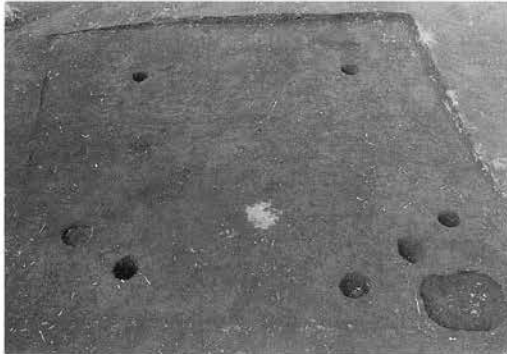
調査後全景



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡



第2号住居跡



第3号住居跡遺物出土状況



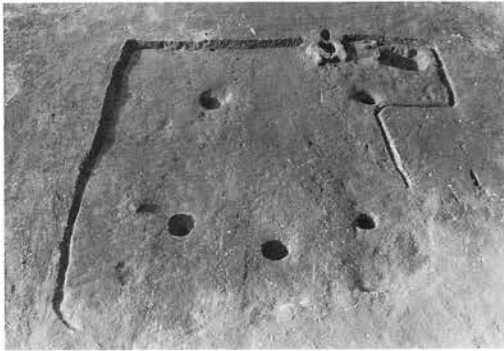
第3号住居跡



第4号住居跡

PL4

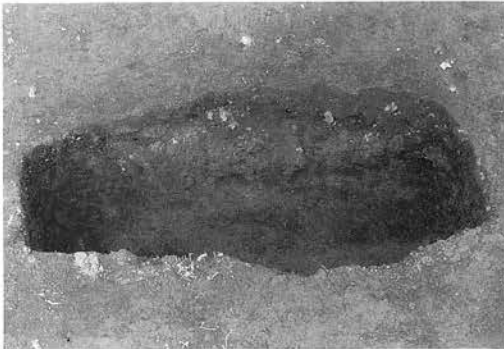
寺家ノ後A遺跡



第5号住居跡



第1・3号土坑



第2号土坑



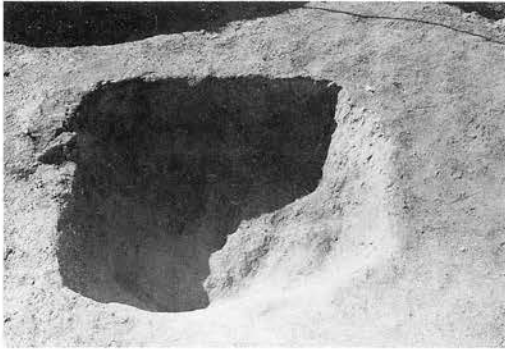
第4号土坑



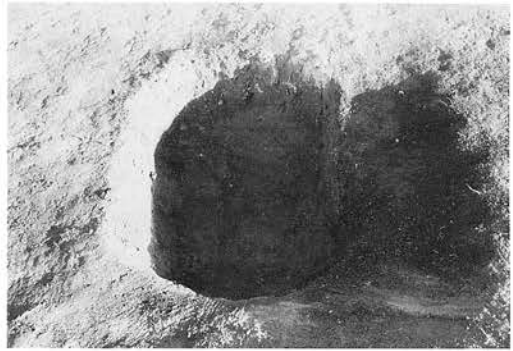
第5号土坑



第6号土坑



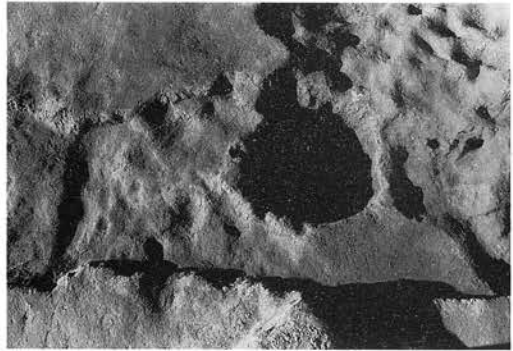
第8号土坑



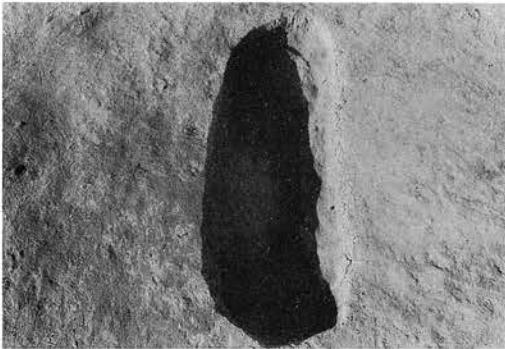
第9号土坑



第10号土坑



第11号土坑



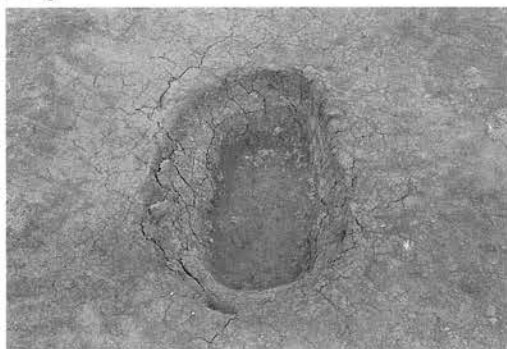
第12号土坑



第14号土坑

PL6

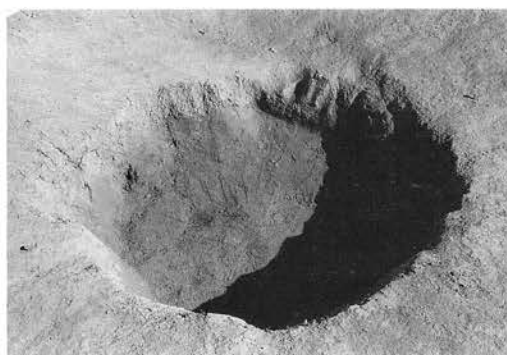
寺家ノ後A遺跡



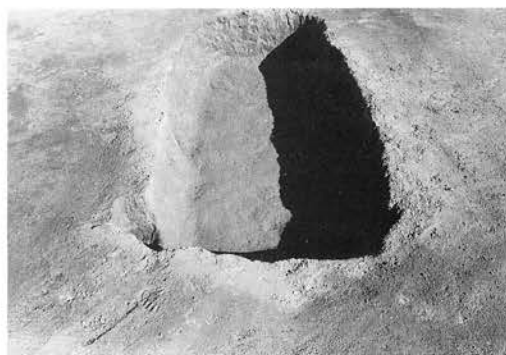
第17号土坑



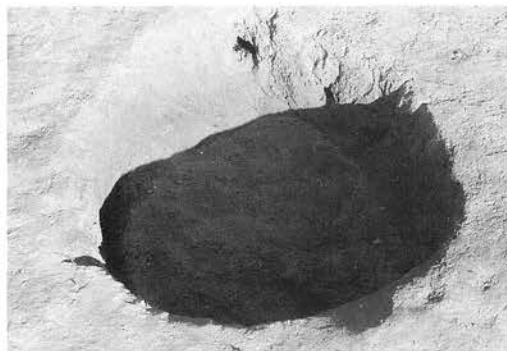
第18号土坑



第19号土坑



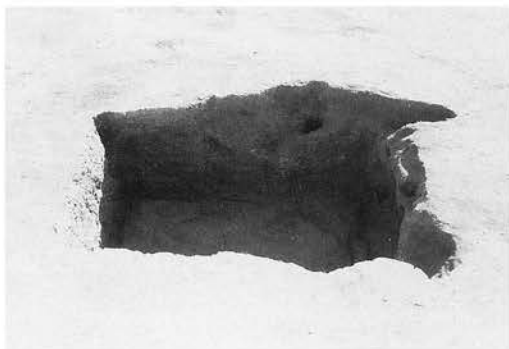
第20号土坑



第21号土坑



第1号溝



第1号墓壙(SK7)



第2号墓壙(SK13)



第2号墓壙(SK13)人骨出土状況



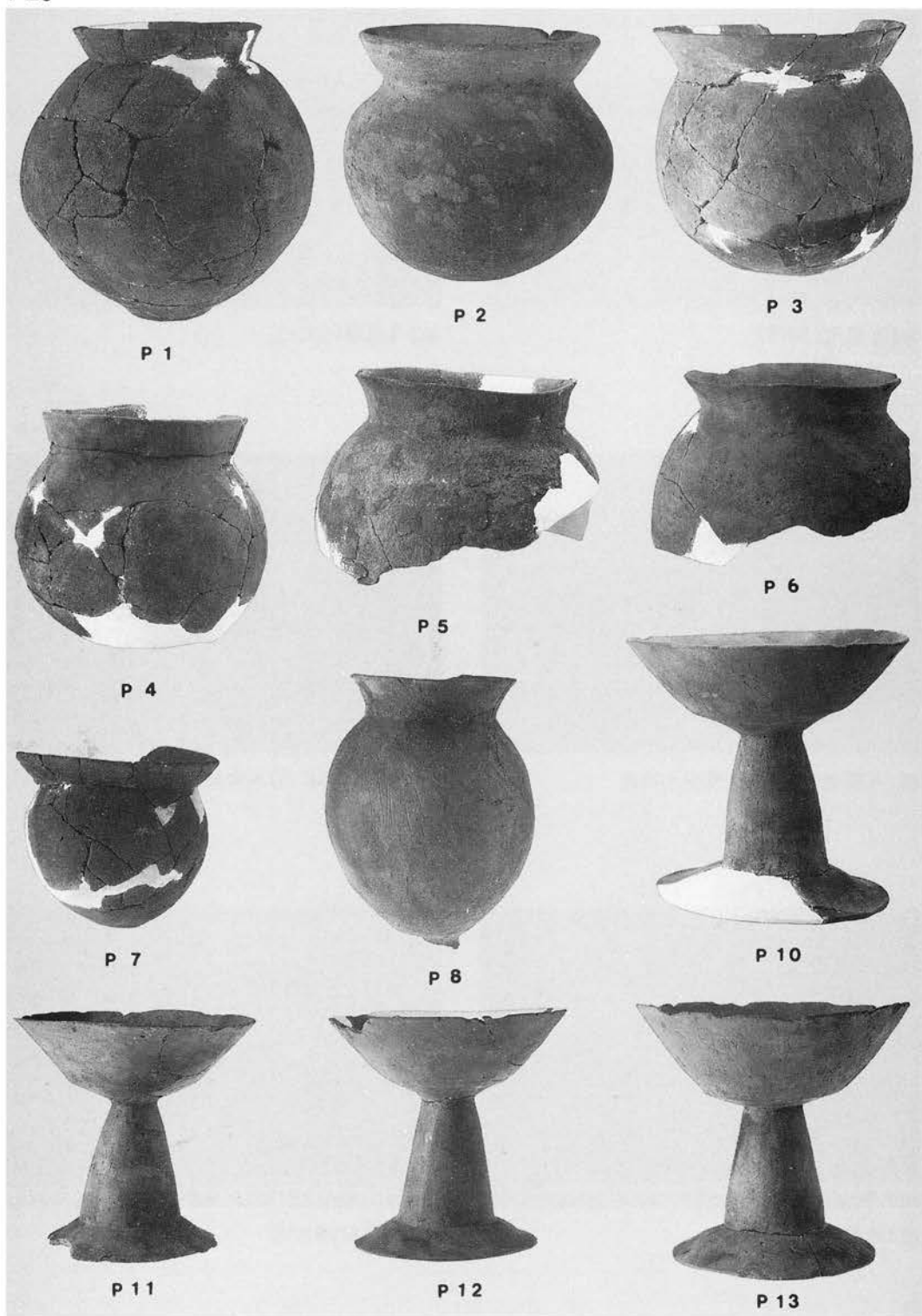
第3号墓壙(SK15)人骨出土状況



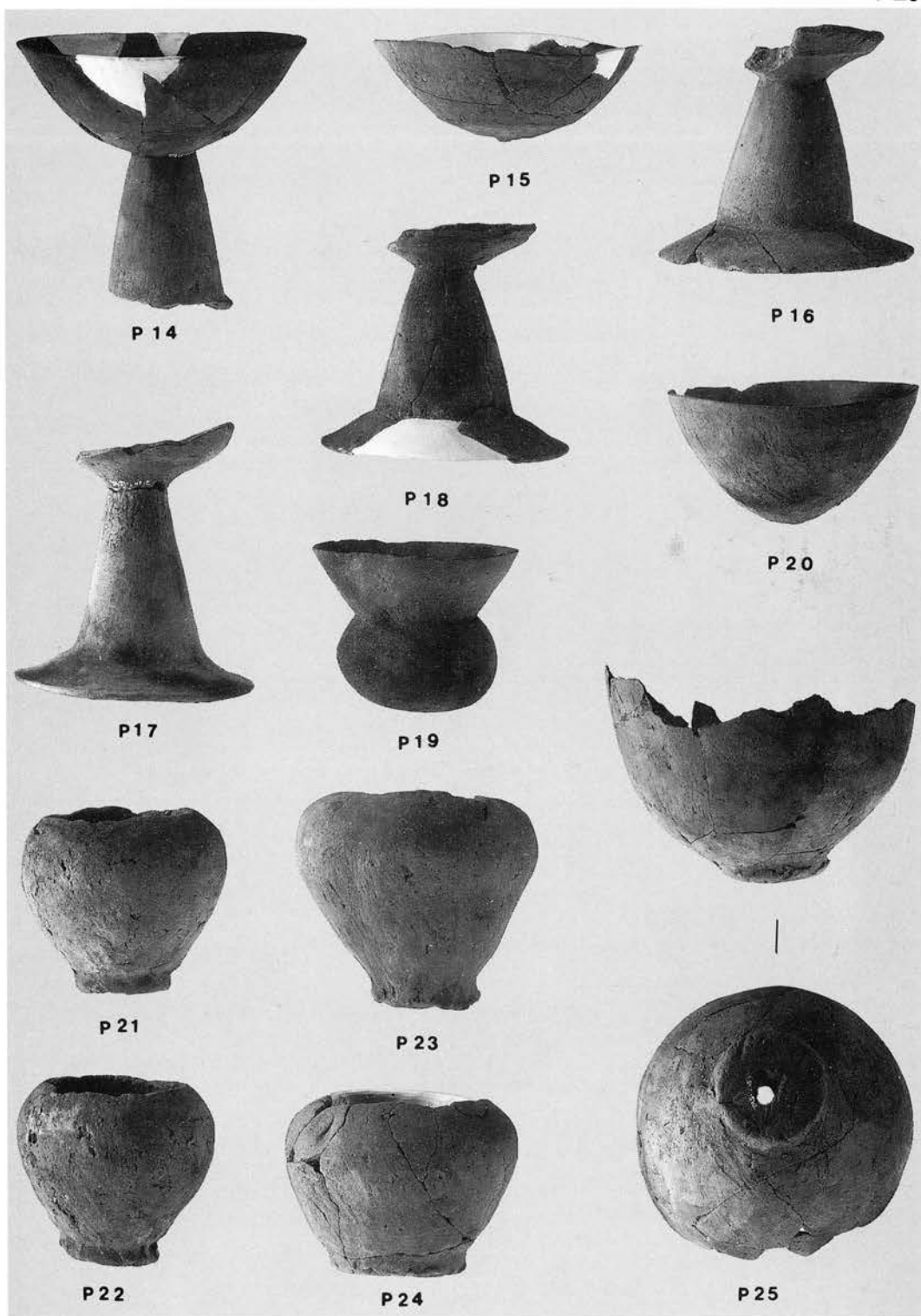
第3号墓壙(SK15)



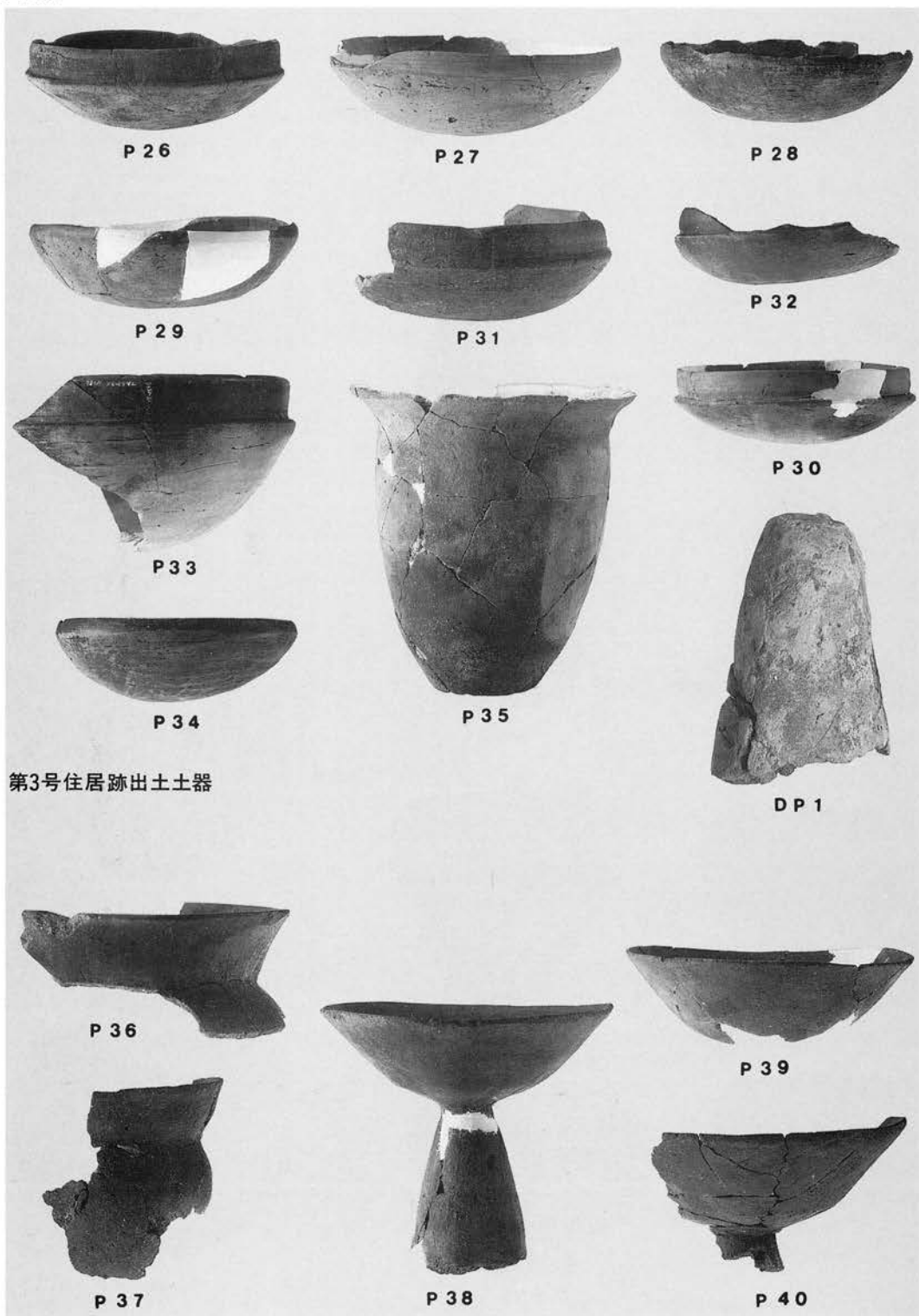
第4号墓壙(SK16)



第1号住居跡出土土器(1)



第1号住居跡出土土器(2)



第4号住居跡出土土器(1)



p 41



P 42



P 43

第4号住居跡出土土器(2)



p 44

第5号住居跡出土土器



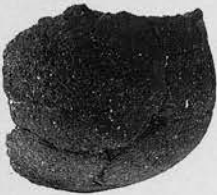
P 45



P 46



P 47



P 48



P 54

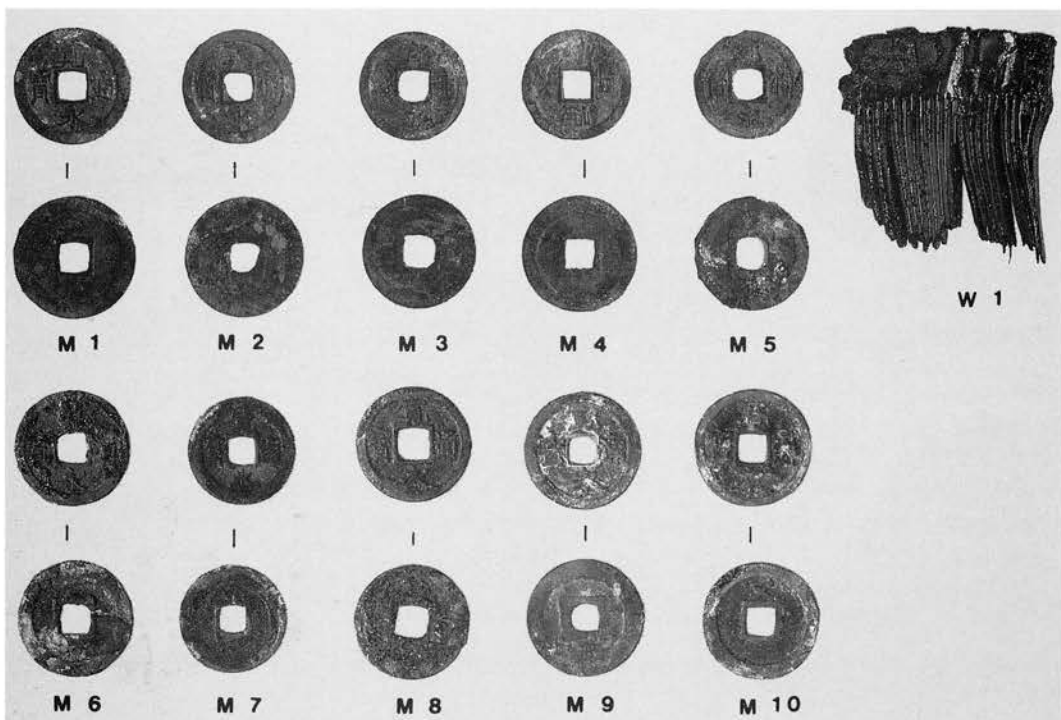


P 53

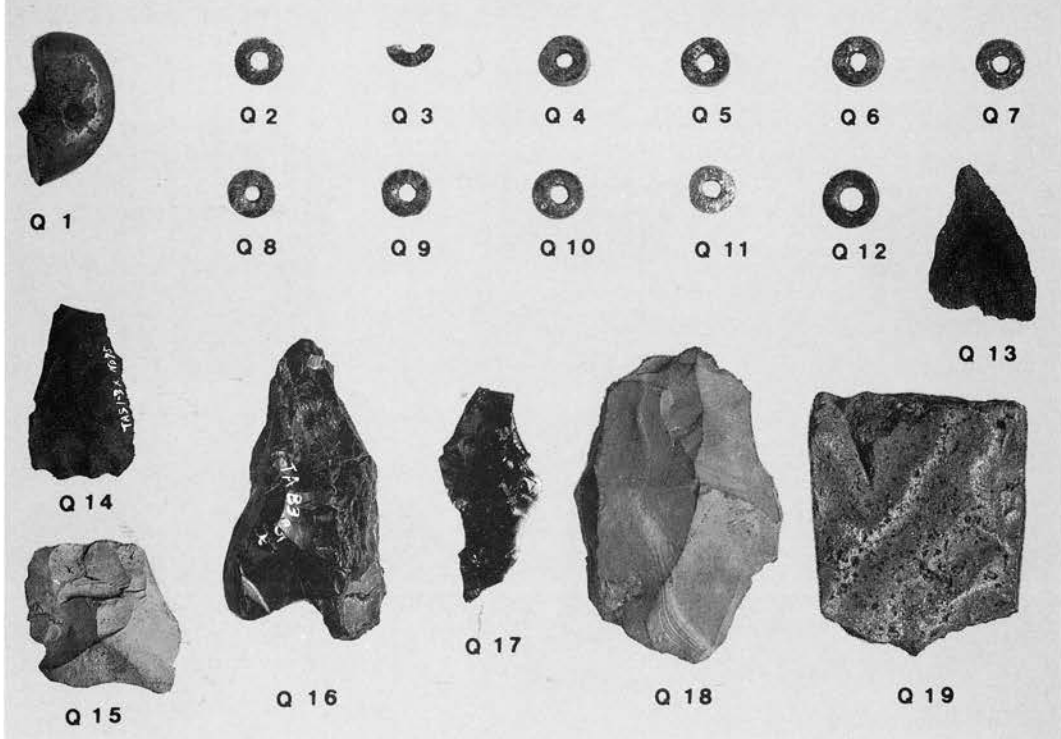


DP 2

土坑出土土器



墓壙出土古銭・櫛



第1・3号住居跡・グリッド・溝出土石器・石製品



調査前全景



試掘状況(1)



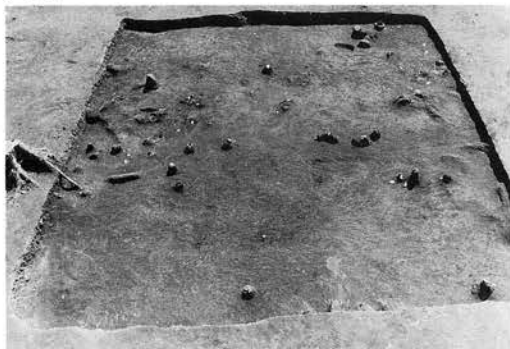
試掘状況(2)



遺構確認状況



遺構確認状況



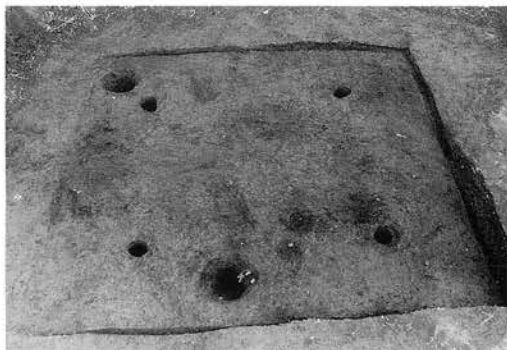
第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡



第2号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡



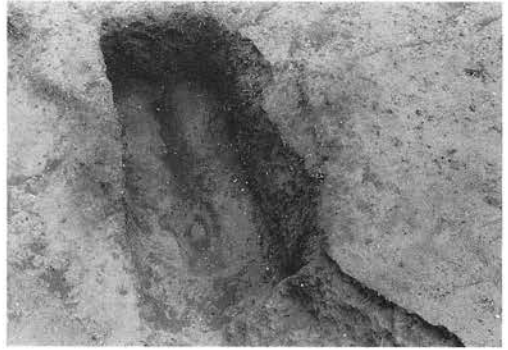
第4号住居跡



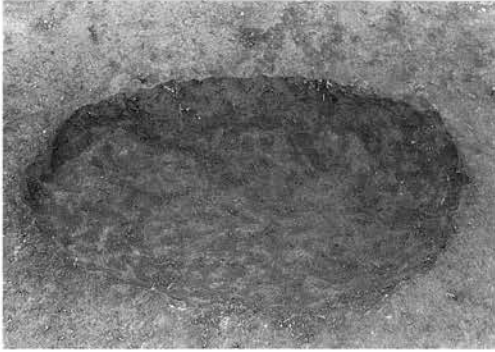
第1号土坑



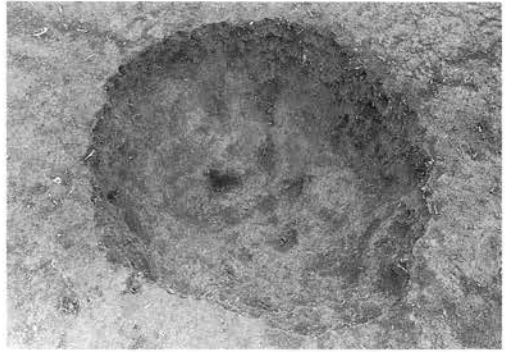
第3号土坑



第4号土坑



第5号土坑



第6号土坑



第7号土坑



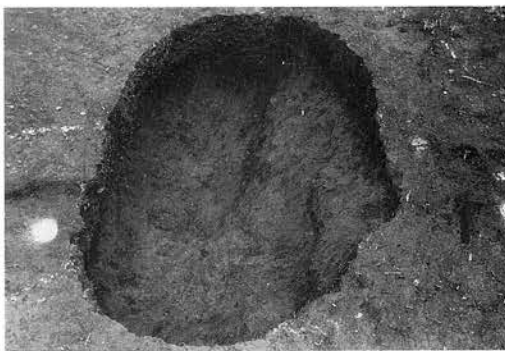
第8号土坑

PL16

寺家ノ後B遺跡



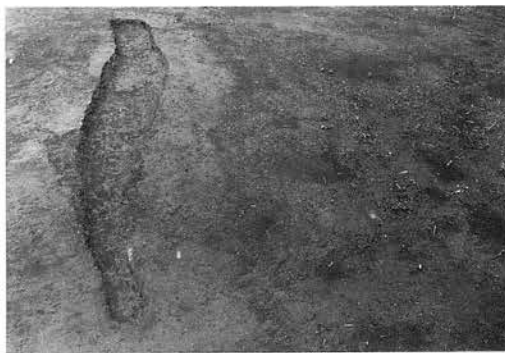
第9号土坑



第10号土坑



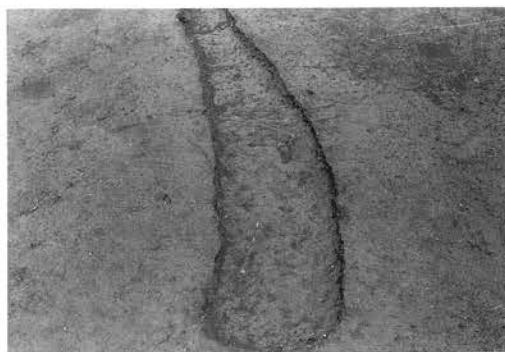
第11・12号土坑



第1号溝



第2号溝



第3号溝



第1号墳土層セクション



第1号墳土層セクション



第1号墳土層セクション



第1号墳玄室部敷石出土状況



第1号墳玄室部内框石出土状況



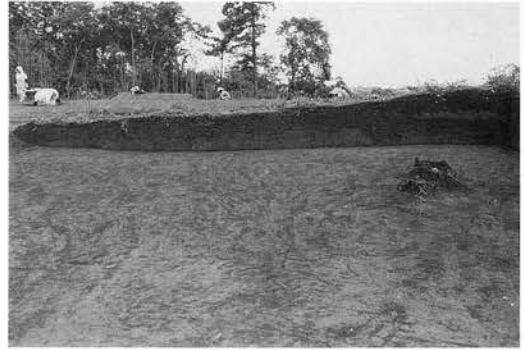
第1号墳玄室部

PL18

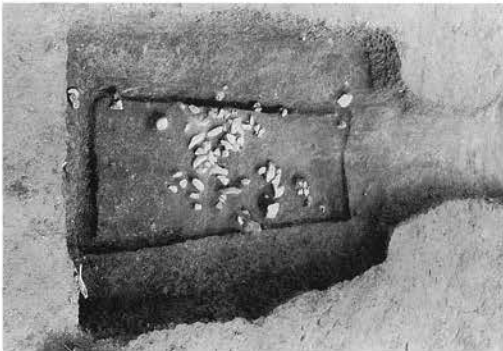
寺家ノ後B遺跡



第2号墳土層セクション



第2号墳土層セクション



第2号墳玄室部敷石出土状況



第2号墳玄室部



第2号墳土層セクション



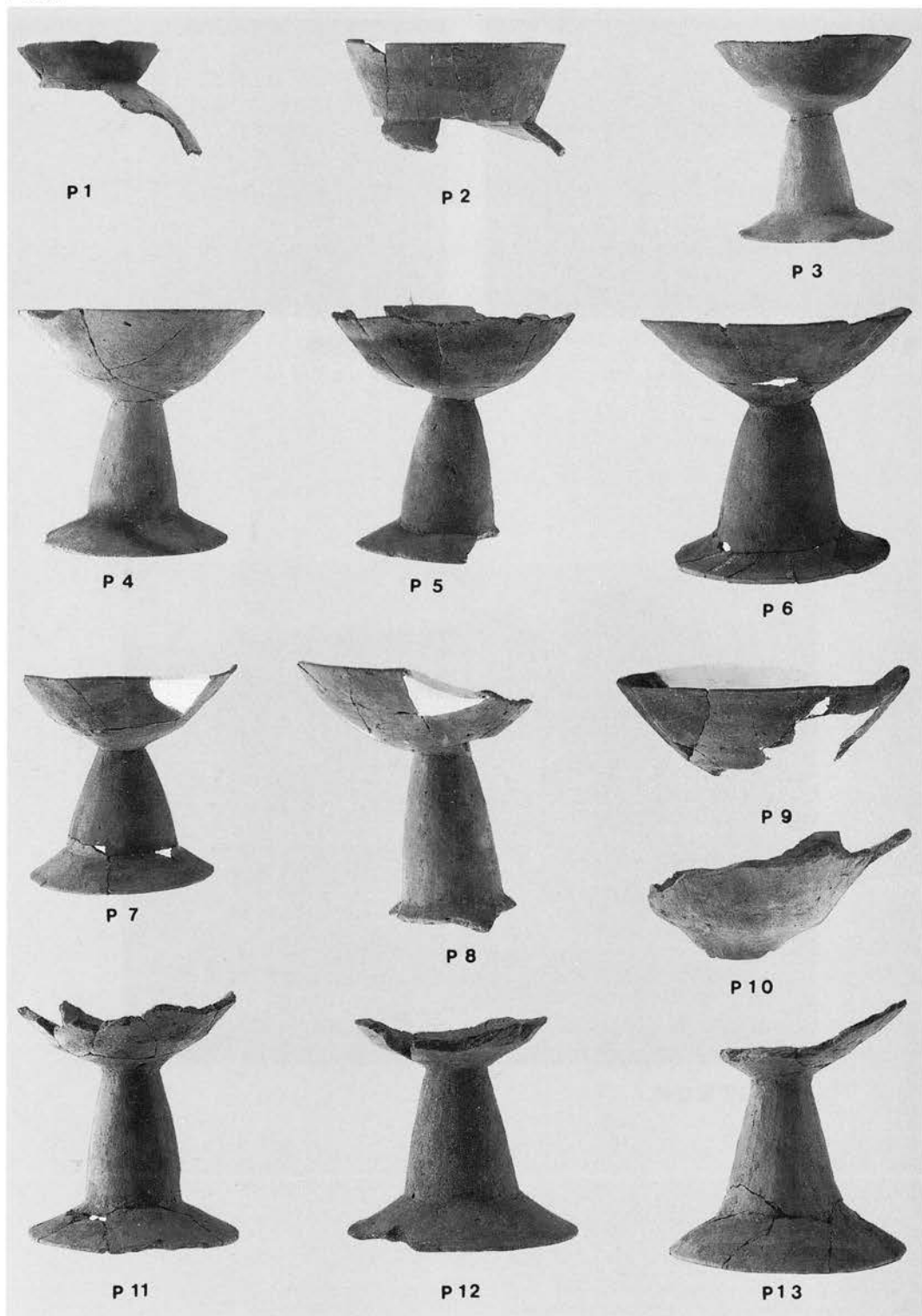
第3号墳玄室部



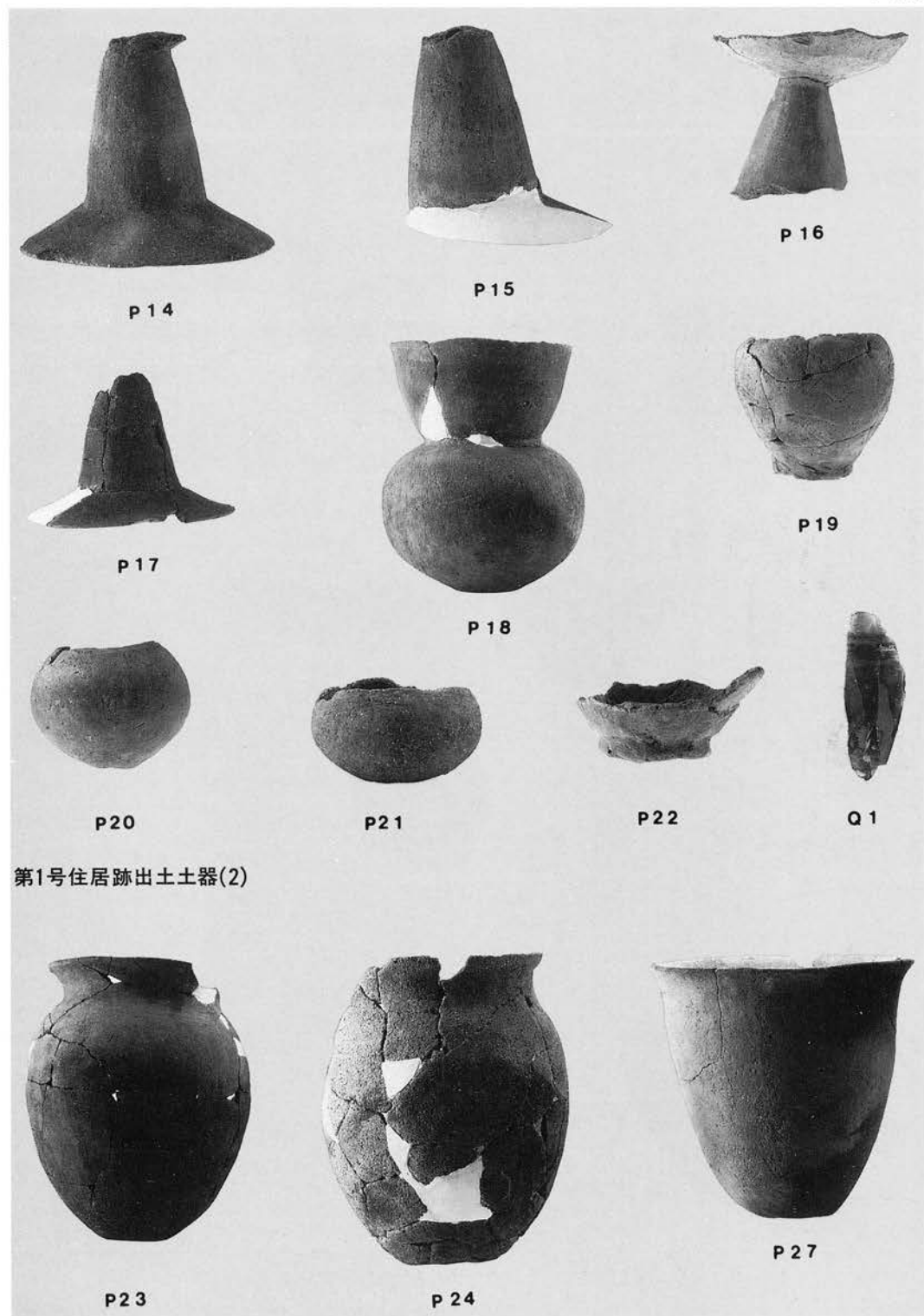
第3号墳玄室部



第1・2・3号墳完掘



第1号住居跡出土土器(1)



第1号住居跡出土土器(2)

第2号住居跡出土土器(1)



P 25

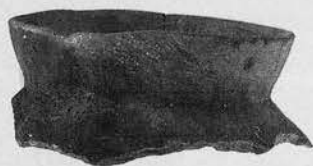


P 26

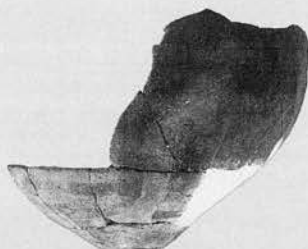


P 28

第2号住居跡出土土器(2)



P 30



P 29



P 31



P 32



P 47



P 48



P 49

第3号住居跡出土土器



DP 1



P 33



P 34



P 45

第4号住居跡出土土器



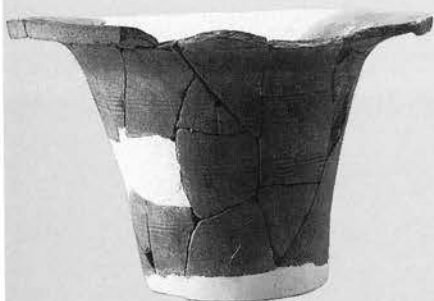
P 35



P 36



P 37



P 38



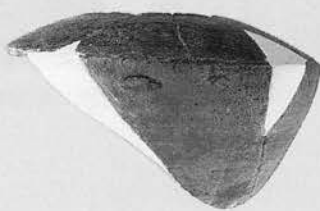
P 40



P 41



P 42



P 46



p 50

古墳出土土器



M 1



M 2



M 3



M 4



古銭

PL24

十三塚 A 遺跡



調査前全景



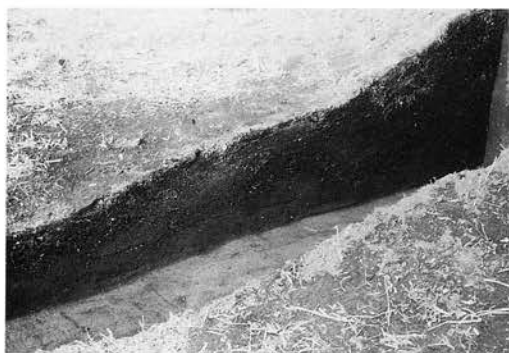
調査前全景(伐開後)



遺構確認状況



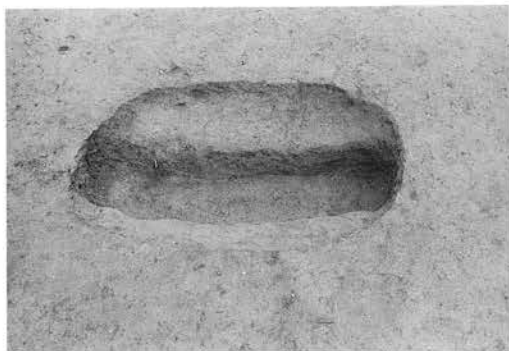
第1号塚東西トレンチ土層セクション



第1号塚南北トレンチ土層セクション



第1号土坑



第2号土坑



第3号土坑



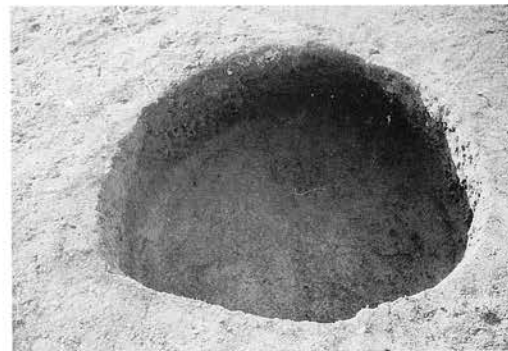
第4号土坑



第5号土坑



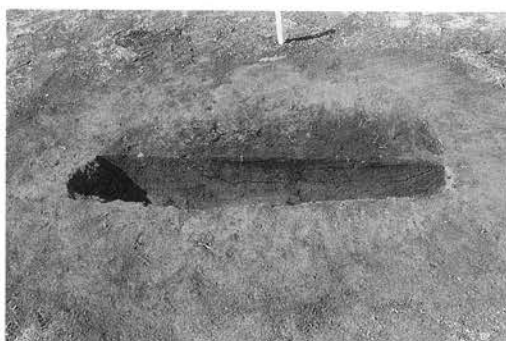
第6号土坑



第7号土坑



第8号土坑



第9号土坑



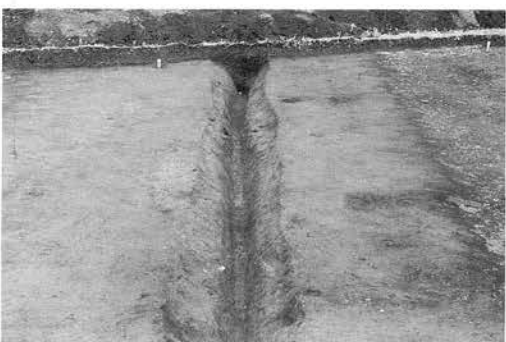
第1・2号溝



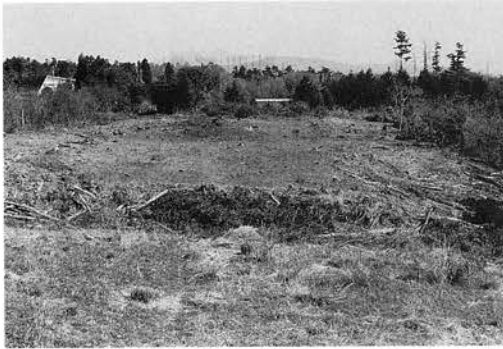
第3号溝



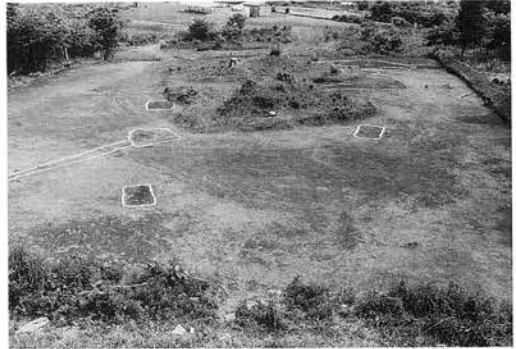
第4号溝



第5号溝



調査前全景



遺構確認状況



第1号墳



第2号塚



第1号墳・塚土層セクション



第1号墳・塚土層セクション



第1号墳玄室部遺物出土状況



第1号墳玄室部



第2号塚土層セクション



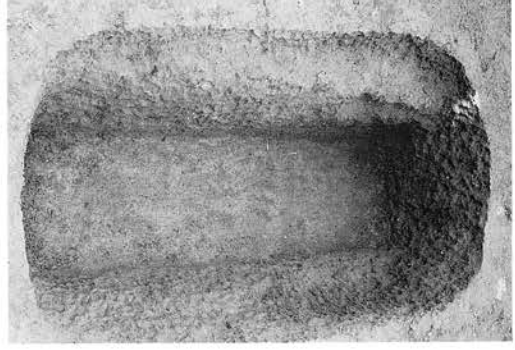
第2号塚土層セクション



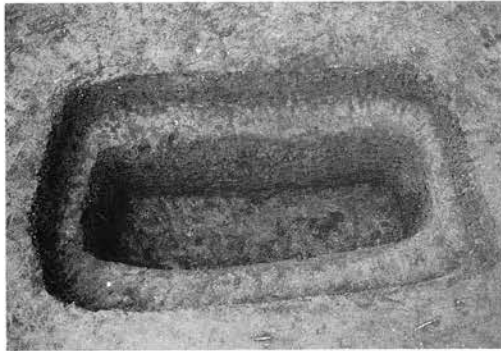
調査後全景



第1号住居跡



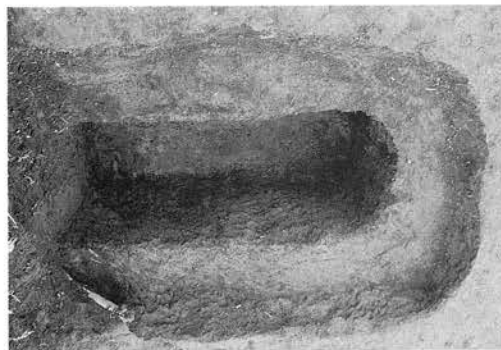
第1号土坑



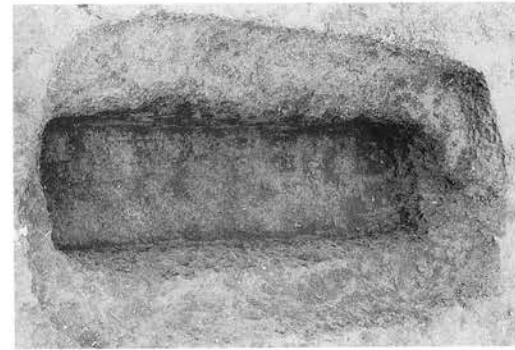
第2号土坑



第3号土坑



第4号土坑



第5号土坑

PL30

永国十三塚遺跡



調査前全景



調査前全景



調査前全景(伐開後)



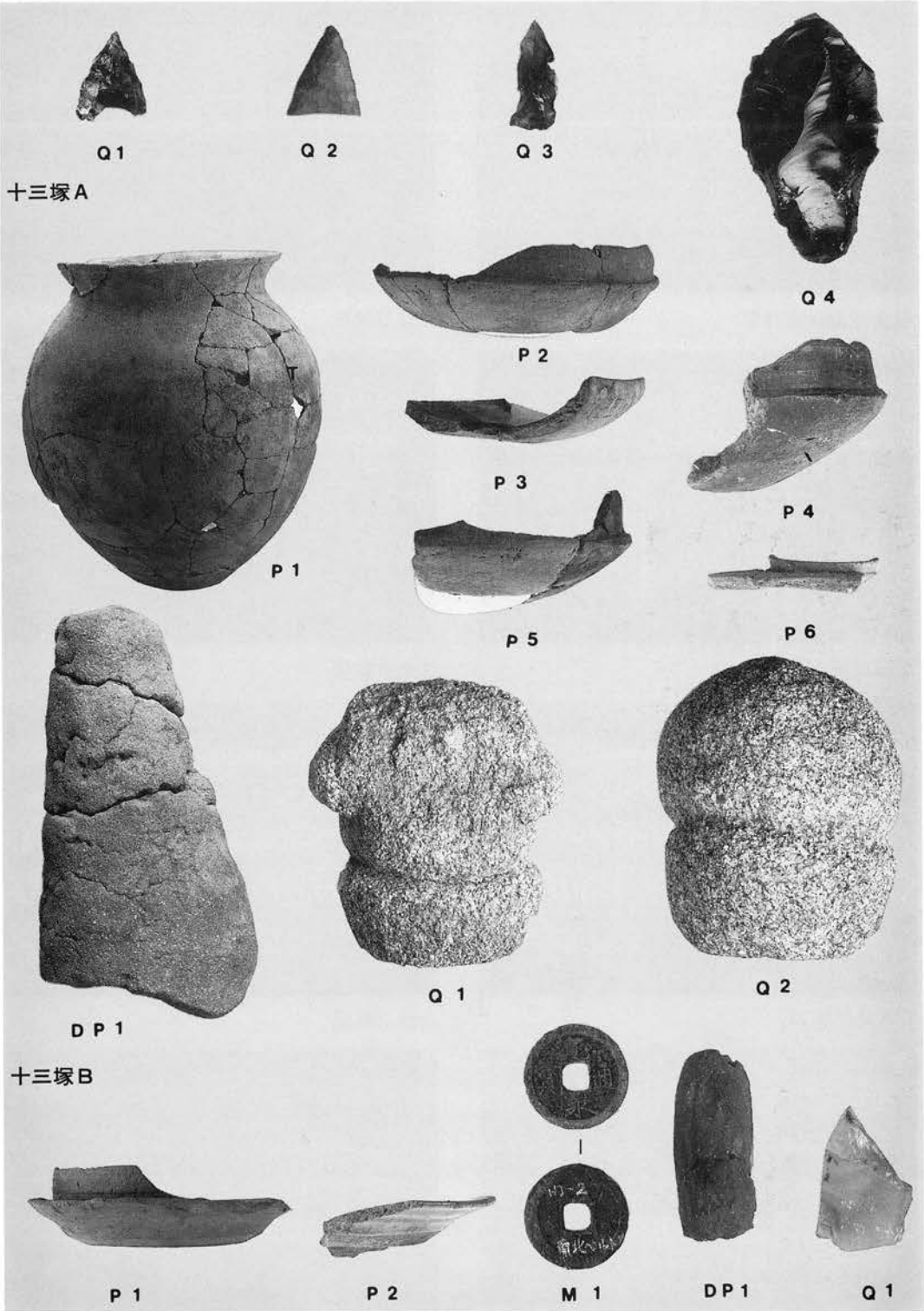
第1号塚土層セクション



B地区試掘状況



C地区試掘状況



永国十三塚



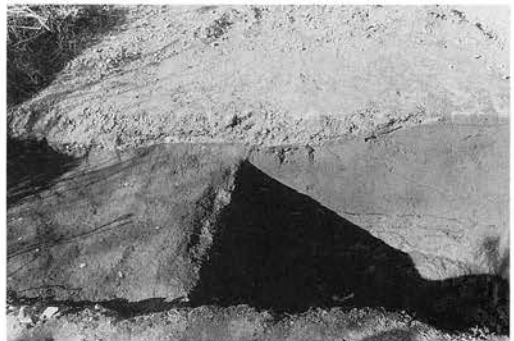
安全設備付設状況



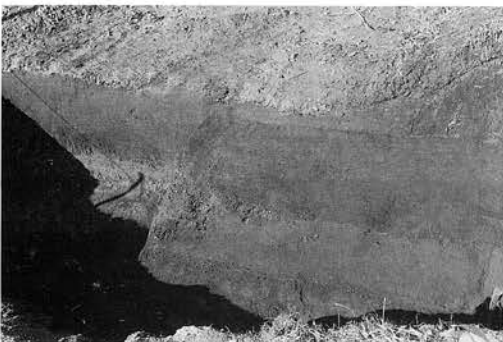
A 地点試掘



A 地点硬化面検出



B 地点試掘



C 地点試掘



D 地点試掘



E 地点試掘



E 地点硬化面検出

茨城県教育財団文化財調査報告第60集

永国地区住宅団地建設予定
地内埋蔵文化財調査報告書

寺家ノ後A遺跡 寺家ノ後B遺跡
十三塚A遺跡 十三塚B遺跡
永国十三塚遺跡 旧鎌倉街道

平成2年3月26日印刷

平成2年3月31日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団

水戸市南町3丁目4番57号

印刷 きど印刷所

水戸市見川町2558-21

☎ 0292-41-2525

